
侍の心得！

墨汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍の心得！

【Nコード】

N3563K

【作者名】

墨汁

【あらすじ】

これはテレビで見た時代劇の影響を受け、「私も侍になりたいっ！」と正義の味方を目指すいたいけでちっちゃな女の子の物語。えっ女の子も侍になれるのっ？ そんな疑問を軽く無視した学園コメディーですっ！

しばらくお休みします！

零、プロローグ

私が幼い頃に見た時代劇に、旅する侍が人を困らせる悪人を退治していくという、所謂勧善懲悪ものがあつた。私はそんな正義の味方に憧れを抱き、侍になりたいと思うようになったのだ。

夢を追い続け、そして気がつけば高校生になってしまった頃、時代劇俳優でもコスプレ好きの人でもない、正真正銘本物の侍に、私は出会つた。

入学式が終わり、同じ中学校出身の友達とはクラスが分かれてしまったことに落ち込んでいた時、私は二人のチンピラさんに絡まれた。

「おうおうちびっこい姉ちゃん、よくもワシにぶつかつてくれたのお」

「親分になんてことするんやお前は」

嗚呼、桜の花びらが舞い踊る背景に似合わない人たちに出会つてしまつた。

「あう、その、ごめんなさいっ」

とりあえず謝つてみたけど、きつと無駄だろう。テレビとかでよく見るパターンだと、このままことが進めば、きつと私はお金を取られるかちよつとえつちなことをされるかというひどい目に遭はず。

今日は入学式だからお財布なんて持つて来ていない。ということ、私はこの後ひと気のないところに連れ込まれて、買ったばかりでぶかぶかなセーラー服を素直に脱がされるしか許してもらえない方法はないのか。

私つてよく人から可愛いねつて言われるくらい可愛いから、間違

いなく襲われる。やだよお、私の初体験は侍様って決めてるんだからあ。

「さあ嬢ちゃん、ちゃんとワシに詫びてもらおうかのう。金か身体で」

親分っぽい人が素直かつ率直に要求を述べてきた。それから両手をわきわきさせて私に近づけてくる。

どうしよう、逃げないといけないのに足が竦んで動けない。そもそも私は運動神経がだめだから、走れたとしても逃げ切れなかったとは思っけど。

……うん、涙だけは流すまい。私はぎゅっとまぶたを固く閉じつつ、徐々に近づいてくる親分さんの手を前にそう決心した。

その時、

「こらこら君たち、相手はまだちっちゃな女の子じゃないか」
すぐ近くから若い男の人の声が聞こえてくる。

「ああん、何だお前は」

今度は子分っぽい人の声が聞こえた。私は何事かと思い、閉じていた瞳を徐々に開いていく。

するとそこには、袴姿にポニーテールのような髪型（ちょんまげかな）をしていて、腰に本格的な日本刀を携えている人が立っていた。

「拙者は名乗るほどのものじゃないよ」

彼の出で立ちには、まさに私の憧れた正義の味方だった。

「侍様っ！」

「そう、拙者はただの侍さ。君、大丈夫だったかい？」

彼は私の方に顔を振り向かせて、穏やかな瞳を細めて優しく微笑む。

「かっこいい。」

「はい、大丈夫です。侍様が来てくれたから……」

さっきはなんて不幸なのかしらと思ってしまったけど、今は違う。私って、なんて幸せ者なのかしら！

「ふざけてんじやねえよこの野郎！」

突き出された拳を難なく手の平一つで受け止め、仕返しにチンピラさんをどーんと突き飛ばした侍様の姿に私はもう惚れ惚れである。「あちゃあ、少し力が入り過ぎたかな」

ちなみに突き飛ばされたチンピラさんは、十メートルくらい先の電柱に頭をぶつけたせいで動かなくなっていた。

「ねえそこの君」

侍様がもう一人のチンピラさんに声を掛ける。

「へ、へいつ、何スか！」

早速侍様に敬語を使い始めたチンピラさんは、背筋をぴーんと伸ばして侍様に向き直った。

「倒れちゃったあの人と一緒にとっとと帰りなよ。あと、もう悪いことはしないようにね」

「へい、了解っス！」

少しの間を置いて、私は呆然とした頭を無理やり覚まさせる。

そして今、ほんの一瞬の間に起こった出来事を思い返し、私は改めて歓喜に打ち震えた。

ずっと憧れていた侍が、目の前にいるよお　　！

これは、私と彼が運命の出会いを果たした記念すべき日のことである。

● プロローグ（後書き）

皆さんはじめまして、私の名前は墨汁です！ このお話を読んでくださった方、ありがとうございますましたっ。後書きから読み始める派の皆さん、本文も読んでくだされば感謝感激でありますっ。

投稿ペースはあまり早くないかもですが、私は読み続けてくれるだけでも幸せですので、是非とも読んでやってくださいね！

一、なんとかマン

「侍様、私は桜田花実さくらだ はなみと申しますっ。失礼ですがあなたのお名前をお教えくださいーっ」

私は桜の花びら舞い散る道の上にて、袴姿の侍様に向けて深く深く頭を下げていた。

「あの、拙者帰りたいただけど……」

凜々しいお顔に似合わない口調で言いながら、前に立ち塞がっている私を避けて通り抜けようとする侍様。私は負けじと反復横跳びの要領で立ち塞がり直す。

「お願い、名前だけでもー！」

「拙者は名乗るほどの者でもないから……というより、正体は明かせないだよね」

相手は侍だ。名乗るほどの者じゃないと謙遜することは予想できている。

そこで私はあることを提案してみた。

「じゃあ呼び名だけでも決めさせてください！」

「へえ、君が名前付けてくれるんだ。例えばどんな？」

「それはですね」

実は彼にぴったり似合う呼び名を一目見た時から考えていたのだ。人呼んで

「侍マン！」

正義の味方で「なんとかマン」というネーミングはもはや王道的。そして武士道を貫く侍もまた正義の味方だ。

つまり、この侍マンという名は正義の味方を象徴するに相応しい名前なのだ！

「それはまた……すごい、名前だね……」

私と同じく素晴らしいネーミングに感動しているのか、彼の声がどことなく震えているように聞こえる。

「私、普段も人からよくすごいネーミングセンスだねって褒められるんですよー」

私が身体の浮き上がるような歓喜に酔いしれていると、やっぱり彼も私と同じ気持ちになっていようで、「はあ」と意味深な溜め息を吐いてから頭をこくりと頷かせた。

「じゃあそれでいいよ、侍マンで」

どうやら気に入ってくれたみたいだ。やったあつ。

「もう行っていいかな、拙者これでも忙しくて」

「あ、はい。お手数おかけしました！」

侍マン様はそよ風に袴の裾を翻しつつ、私のそばを横切ってこの場を後にする。私は彼の背中に向けて声を掛けた。

「あの、私も侍になりたいのですけど、どうしたらなれますかっ？」「弱きを助け悪をくじく。そのための心と力があれば誰だってなれるよ」

振り返らず歩みながら答えてくれる侍マン様の優しい声に、私の胸はきゅっと心地よく締めつけられて、日に干された羽毛布団に包まれるかのようなふわふわした気持ちになる。

「嗚呼、とても素敵なお侍マン様。私は再びあなたに見^まえる日を心より楽しみにしております……」

時代劇のヒロイン気分でそんな台詞を言ってみる私。今の気分は最高にノリノリである。

「うん、楽しみっ」

上機嫌になった私は笑みを絶やさなまま回れ右をして、肩をうきつき揺らしながらステップ気味に自宅を目指した。

帰ったら早速友達に電話しよう、さっきの出来事を自慢するために。

『入学式が終わって早々あなたの声が聞けて、私幸せよ』

玄関そばの靴箱の上に設置された電話の受話器から、幼稚園の頃からずっと親友である友香ちゃんの大人びた声が聞こえてくる。

「あのねあのね、今日は大事件があつたんだよー」

『大事件なんて知ったことじゃないわ。私はあなたの声を聞ければそれでいいの』

「あつ」

冷たいんだかそうでないんだか分からない返答に戸惑う私は、とにかく待マン様のことを話そうとがんばった。

「あのね、今日の帰り道、友香ちゃんとはいばいしてすぐにね」

『さて、あなたの声も聞けたことだしそろそろ切るわね』

「早いよつ。本当は鬱陶しがってるんでしょ！」

『そんなことないわ。好きよ、毎年懲りずに現れる蚊くらい』

「やっぱり鬱陶しがってるんだっ！」

友香ちゃんはいつともは優しいくせに、時々いじわるなことを言つて私を泣かせようとしてくる。もうそんな手に乗らないもん。

『あら、季節外れの蚊が飛んできたわ。殺虫剤撒かなきゃ』

「むしろ私嫌われてるっ！」

泣きそうになってきた。まさか親友だと思っていた友香ちゃんが私を嫌っていたなんて。

『もう、私があなただの嫌うはずがないじゃない。縛っていいめたいほど好きよ』

「その愛情表現すつごく歪んでるよ！」

『あんもう、話してたら会いたくなっちゃったじゃない。今すぐそっちに遊びに行くから、もう切るわね』

もう友香ちゃんが私のことをどう思ってるのかどうでもよくなるくらい分からなくなってきた。さっさと話を進めよう。

「じゃあこっちに來たらいっばい私のお話聞いてよね、約束だよ？」

『ばいばい、また数分後』

ブツツと通信の途絶える音が聞こえる。いきなり切られた。

「もーっ、勝手に切らないでっついても言ってるでしょお！」

怒ってみても受話器の向こうには既に誰もいない。私は友香ちゃんの性格に合わないせつかちさに溜め息を吐きながら受話器を所定

の位置に戻し、とぼとぼと自分の部屋に向かう。

早く自慢したいなあ、侍マン様との運命の出会いについて。だってだって、ひよっとしたら今日のことかきっかけて二人は急接近、そして私が侍マン様の生涯における伴侶として彼に認められたその時、侍マン様は真の名を私にだけ語り、さらに……私たちは、契りの口づけを　　なんてことになったりするかもしれないんだからあつ。

もし侍マン様のお嫁さんになったあかつきには、私は侍ウーマンとしていつも彼のおそばにいますからね……嗚呼、にやけた顔が戻らない。

私はにやにやしながら階段に足を一步踏み込ませたところでふと、侍マン様が去り際に仰っていたことを思い出す。

弱きを助け悪をくじく、かあ。それが侍への第一歩だと分かった以上、私も頑張らなければ。

侍マン様と運命の出会いを果たした翌日、登校途中の街路にて、私は友香ちゃんに昨日喋り切れなかったことを精一杯話した。

「でねでね、私を守ってくれた侍マン様は、それから　　」

「昨日から思ってたのだけど、侍マンって一体何なのかしら」

澄み切った川の水のように滑らかなロングストレートの黒髪を指ですくいながら、落ち着き払った様子で訊いてくる友香ちゃん。

「えっと、侍マン様はね、現代に現れた侍様だよ」

まるでテレビの中から飛び出して来たかのようにかっこいいんだよ。友香ちゃんも見たら一目惚れしちゃうかもなぐらい。

「そうじゃなくって、侍マンって名前が一体何なのかを訊いてるの」「名前は教えられないって言うから、私が付けてあげたの。侍で正義の味方だから、侍マン。彼、すごい名前だねって褒めてくれたんだ」

「ええ、とつてもすごいネーミングよ。よしよし」

そう言いながら私の頭に手の平を置いて優しく撫でてくる友香ちゃん。若干子ども扱いなのは気になるところだけど、彼女になでなでしてもらうのは大きなぬいぐるみを抱き枕に使うことよりも気持ちいいからついつい綻んでしまう。

「えへへ」

「まあ、可愛い笑顔」

友香ちゃんは本当に綺麗で優しく、侍の次に私が憧れる立派な大和撫子だ。侍マン様のようにもなりたいけど、友香ちゃんみたいにもなりたいなあ。

「どんな時でも私があなを守ってあげるから、侍マンなんて早く忘れなさい。もう会えないかもしれないだし」

もしも私に姉妹がいたとしたら、絶対に友香ちゃんみたいなお姉さんがいい。だってこんな優しい言葉を掛けてくれるんだもの、きっと一緒に暮らす毎日が楽しいに決まってる。

「侍マン様のことは忘れられないけど、ありがと。友香ちゃん大好き」

「友達に向かって大好きだなんて、とても高校生の発言とは思えないわね」

「友香ちゃんなんかしょっちゅうじゃないのよー」

そうやって笑い合いながら楽しくお喋りをしていると、私たちの歩く道の先に校舎が見えてきた。

これから二日目の高校生活が始まる。

校門をくぐって校舎の玄関に到着し、私が自分の下駄箱の蓋を開けた時。

「あれ、私の上履きがない……」

昨日ちゃんと入れておいたはずのそれが姿を消していた。

また誰かに隠されちゃったのかな。中学生の頃からよくいじめられるようになっていた私だけど、まさか高校生になってまでいじめ

が続くなんて思いもしなかった。

そういえばこの高等学校は私の出身中学から来る人が多いんだ
っけ。いじめっ子まで一緒に進学してきたのか。

「ついてないな」

もう何年も続いていることだからすっかり慣れちゃったとはいえ、
やっぱり少し傷つくなあ。いじめっ子は私に何の怨みがあつてこん
なことをするのだろう。言いたいことがあるなら直接言えばいいの
に。

とりあえず、今日のところは部外の訪問者用にたくさん用意され
ているスリッパでも借りて過ごそっか。隠された上履きはまた友香
ちゃんにも協力してもらつて探せばいいや。

私は靴下のままスリッパを求めて埃っぽい床の上を歩き始める。

人ごみを避けつつ探し回ること数分、倉庫になつている階段の裏
を見つけた私は、同時に段ボール箱いっぱいに収められた緑色のス
リッパ群を発見する。ホームルームまでに見つかつてよかった。

私は早速それらの一つを取ろうと手を伸ばした。

「あれ？」

「ひゃうっ」

そこへ突然背後から聞こえてきた声に思わずびくつと肩を跳ね上
げる私。

「わ、ごめん。びっくりした？」

声の主に視線を向けると、私の後ろに少し大きめの学らんを身に
つけた男の子が一人立っていた。

何となく気が弱そうな印象を持っている彼は少し申し訳なさそ
うな顔をしている。

「すっごくびっくりしちゃった」

「ごめん……」

顔を俯かせてしょんぼりする男の子。別に責めてるわけではない
のだからそんな反応をされると困ってしまう。

「謝らなくてもいいよ。あなたもスリッパ取りに来たの？」

「うん、上履きなくなっちゃって」

「私のもなくなっちゃったの。奇遇だね」

私はすぐそばまで歩み寄ってきた彼に言葉を掛けながら、スリッパを二足分取り出して一足を渡す。

「はい、あなたの分」

「ありがとう、桜田さん」

ところで最初は気づかなかったけど、近くで見るとこの子背が高いなあ……あれ、今の会話にちょっとした違和感が。

「どうして私の名前知ってるの？ 初対面でしょ」

「ええと、強いて言うなら僕と桜田さんは同じクラスで、昨日クラスメイトの皆で簡単に自己紹介し合ったからかな」

そういえばこんな男の子がいたようないなかったような。

「僕って地味だから、覚えてないよね」

「えっいやそのあのっ！」

しまった、ちょっと傷つけちゃったかもしれない。

「あう、ごめんなさい……」

「いいよいいよ。それよりも、早く教室に行こう」

スリッパを床に置いて足にはめつつ言う男の子。優しい人なんだなあと思いつつ、私はふと変なことを思い始めていた。

喋り方が侍マン様に似ている。身長も大体同じくらいだ。

「ところであなたのお名前は？」

「野田村春平だよ。よろしく」

「うん、よろしくね」

一瞬侍マン様の正体は彼かと思ったけど、そんなわけないか。野田村くんは優しそうな人ではあるけど、私の憧れる侍マン様と比べれば気迫が不足している。顔はそっくりなんだけだね。

「どうしたの桜田さん、早く行こう。時間がないよ」

考えごとをしてぼーっとなりかけていた頭が、彼の声によって覚まされる。私は急いで足に緑色のスリッパをはめると、歩き始めた野田村くんの後ろに慌ててついて行った。

侍マン様のことを思い出したら恋しくなっちゃった。また現れて
くれないかなあ。

一、なんとかマン（後書き）

花実ちゃんを可愛く書きたいのですが、書いてますか？
ご感想をお聞かせ願いたいです。

二、心と力

授業中、私はずっと考えごとをしていた。

弱きを助け悪をくじく、そのための心と力を持っていれば誰もが侍になれる。これは侍マン様から教わった侍の心得だ。

今の私には多分、その心も力もない。

数年前、たまたま通りがかったひと気のないところで、暴力を振るわれたりお金を奪われたりとかかなり酷いいじめを受けている人を見たことがある。当時の私は小学生で、いじめっ子といじめられっ子は高校生くらいの人だったので、その時の私は臆してしまっただけに出ることができなかつた。

それは仕方のないことだと友香ちゃんは言ってくれるけど、それでも私は弱虫な自分が腹立たしくて堪らなくて……あれほど悔しい思いをしたのは生まれて初めてだった気がする。

もしもあの時の私が侍だったなら、あのいじめられていた人を助けることができたはずだ。

もう二度とあんな思いはしたくない。だから何としてでも、侍に必要な心と力を手に入れるんだ。

「桜田さん、先生に当てられてるよ」

でもそのためには相当な努力をしなきゃいけない気がする。努力は苦手分野なんだけどなあ。

「ねえ桜田さん、僕と先生の声聞こえてる？」

でも侍にはなりたいし……。

「ひょっとしてどこの問題解くのか分からないの？ 五ページだよ五ページ」

「うん、やっぱ頑張らなきゃっ」

「そうだよ、僕も応援してるから頑張って」

「ありがとうっ」

たまたま隣の席だった野田村くんも応援するって言うてくれた。

こうなつたら私、本気になるよ！

「そうだと桜田、早速この問三を頑張つて解いてくれ」

「ふえ？」

先生がいきなり私のことを呼んできた。どうしたのだろう、何か私に用でもあるのかな。

「といさんつて何のことですかー？」

野田村くんが隣の席で大きな溜め息を吐いていた。

長い長い一時間目の授業が終わつて休み時間となつた現在、私はしょんぼりしていた。

「うー、先生に怒られちゃつた……」

「当然だよ、授業中にぼーつとしてたんだから」

結構言うことが厳しい野田村くんは、次の時間に使う教科書やノートを机の上に並べながら言葉を続ける。

「ところでさつきは何考えてたの？ 頑張らなきゃとか言つてただよ」

「え……えつと、それはねえ……」

こないだ友香ちゃんから「恥をかくだけだからあなたの将来の夢はなるべく伏せときなさい」つて言われたことがある。だから黙つておかないと。

「何でもないの。気にしないで」

それにしても、どうして侍になりたいと言えば恥をかくのだろう。日常に潜むミステリーだ。

「気になるなあ」

でもせっつかく野田村くんが気になつてくれていることだし、ちょっとだけなら教えたつていいよね。ていうか私が喋りたくてうずうずしてるくらいだし……友香ちゃん、私もう教えちゃうからね！

「じゃあ特別に教えてあげる。実はね」

「あ」

私が大事な打ち明け話をしている途中で、どうしたことか野田村

くんがいきなり立ち上がった。

「ごめんね桜田さん、急用ができたんだ。話の続きはまた後で」
なによ、自分から訊いといて行っちゃうの。

だけど急用ができたなら仕方がない。私は少しだけがつかりしつ
つ、笑顔で彼を見送った。

「うん、分かった。ばいばい」

それから彼はそそくさと教室を出て行く。

数分が経った。後二分くらいで授業が始まるというのに、野田村
くんは未だ教室に戻ってきていない。

まさか授業をサボるつもりではないだろうか。でもあの気弱そう
だけど真面目そうな野田村くんがそんなことするわけ……いや、人
の本性は見かけだけじゃ分からないというのはよく聞く話だ。彼の
人格を簡単に決めつけることはできない。

弱きを助け悪をくじく……今回の場合弱きはどこにも見当たらな
いけど、悪の存在（授業をサボろうとする子）は少しだけ窺えた。

野田村くんが不良少年になってしまっ前に、私が彼を止めて更生
させなきゃ。侍マン様だってそうするはず。

教室に飾られた時計の長針が一つ動いた時、私は立ち上がって教
室を飛び出した。それから扉を通り抜ける時すれ違った先生には「
お手洗に行ってください」とだけ伝えて、彼の去った方向へと急いで
駆けていく。

野田村くんの姿は思ったより早くに発見できた。私は「少人数」
のプレートが付けられている空き教室の中で立っていた彼に声を掛
けようとしたところで、

「春平風情が生意気なんだよ。中学の頃から相変わらずな」
思わず両手で口を塞ぐ。

今の台詞は何だろう。野田村くんの声や口調とは明らかに違った
けど。

私はスリッパのぺたぺたという足音をなるべく潜め、陰に身を隠

しゅつ空き教室の外側にびったり張りついた。話し声がさらによく聞こえてくる。

「死ね、カス」

物騒な言葉とともに、鈍い音が室内で響き渡った。

気になって窓ガラス越しに中を覗き見ると、そこには悪そうな顔を
をした三人組の男の子がいて、

「うっ、く……」

その中の一人にお腹を殴られている野田村くんの姿があった。

何これ、まさか喧嘩でもしてるの？

「ははは、こいつすんげえ気持ちわりい」

「もつとやれよ。もう調子乗れねーようにしてやろうぜ」

他の二人は喧嘩を止めもしないで野田村くんを殴った男の子にそんなことを言っている。

私はこの瞬間、目の前の光景に既視感を覚えた。

「もしかして……」

無抵抗な野田村くんに攻撃を続ける一人の暴力少年。

間違いない、野田村くんは三人の男子生徒からいじめを受けている。私が小学生の頃に見たいじめの現場と同じように。

「おら、とつとと死んじまえ」

それから野田村くんは何発もの拳をお腹に受け、ついには倒れて
呻くこともできなくなっていた。

早く、止めないと。

「忌々しい」

床に倒れてから野田村くんは何度も蹴りつけられ、その痛みを表
情をつらく歪めている。その光景を前にして、私の身体は金縛りを
受けたかのように動かなくなってしまった。

もう嫌だ。何もできずに苦しんでいる人をただ見ていただけなん
て耐えられない。

動け私の身体、早く野田村くんを助けに行くんだ。

「私、どうしたら……」

今の私に悪をくじくだけの力はないのだろうけど、だからって臆したままでいいわけは絶対ない。

分かっているのに、動けない。

いじめっ子たちが、怖い

「まったく、どこに行っただかと思えばこんなとこに来ていたのね」

背後から声が聞こえる。小さな頃から聞き慣れた、暖かで強かな声だ。

「もう、本当しようがない子なんだから」

「友香ちゃん、どうしてここに……」

振り向くと、私の大好きな親友がそこに立っていた。

「授業開始寸前に自分の教室とは反対の方向へ向かって突っ走ってる親友を見かけてね、心配になったから追いかけてきたのよ」

友香ちゃんは私の耳に顔を近づけて言葉を続ける。

「花実ちゃん、よく聞きなさい。こういう時は悲しむよりも怖がるよりも、怒ることが大事なの」

怒ること？

「怒りは人の力を極限まで引き出すわ。そうなれば、きっとあなたの弱虫な心も見違えるはずよ」

優しくて穏やかな笑顔を浮かべ、私の頭を撫でてくる友香ちゃん。

「さあ、あの最低な男子どもの姿を見て怒るのよ。侍になって彼を助けるんでしょ？」

私は言われた通りに、彼女の指し示す先、空き教室の中へと視線を向ける。

「くそつたれが」

無抵抗な野田村くんのお腹を蹴り続ける男の子一人。

「もっとやれもっとやれ」

自分は何もしないで煽るだけの男の子一人。

「野田村の奴泣いてやんの。気持ちわるい」

嫌味な男の子一人。

「くっ、くっ……」

涙し苦しみ悶える野田村くんが、一人。

「どう花実ちゃん、怒ってる？」

手も足も、私の全身が激しく震えている。

「怒ってるよ。もう許さないんだから」

今まであのいじめっ子三人組に恐れていた自分が馬鹿らしい。

思わず歯軋りしてしまうほどに胸の内が怒濤の炎で燃え滾り、沸々と力が湧いてくる。

これほど腹わたが煮え返ったのは小学生の頃以来だ。

「単純な花実ちゃん。だから好きよ」

ちよつと聞き捨てならない言葉が友香ちゃんの口から聞こえたが、そんなの気になっている場合じゃない。私は空き教室の扉の前に立って取っ手に指を掛け、少し深呼吸をすると同時に覚悟を決めた。

大丈夫、今の私なら心も力も十分のはず。幼かった頃の私とは違う。

それから私は手に力を込めて全力で扉を開き、室内に向けて大きな怒鳴り声を上げた。

「何をしてるのあなたたち、今すぐその下種な行為をお止めなさいっ！」

私はスリッパで床の上をずかずかと進み、いじめっ子に近づいてさらに言葉を続ける。

「どうしてそんなことするの。そんなことして何になるのよ!」

「うるせえチビが。お前には関係ないだろ」

「ひよつとして野田村くんの上履きがなくなつたのもあなたたちの仕業？ きつとそうなんでしょうね、あなたたちは無抵抗な人を相手に暴力振るえるような最低人間なんだから」

「はあ？ 何言ってるんだこいつ」

いじめっ子たちが揃って顔を険しくしかめさせた。真つ当なことを言っている私に怒るなんて、とんだ逆切れさんたちである。

「何よ、文句があるなら言ってみなさい。私はあなたたちみたいの下種なんか怖くな」

言いかけたその時、野田村くんに暴力を振るっていた男の子が、私の頬を手の平で叩いた。風船が割れたかのような音が室内で鳴り響くのと同時に、私は身体のバランスを失い床に尻餅をついてしま

う。

「きゃっ」

「俺が女に手を上げないでも思ったのか？ ばーか」
私はぶたれた頬に手を当て、ふと冷静さを取り戻した。怒りは一瞬で治まり、入れ替わりに湧いてきた恐怖が私の身体を再び支配する。

どうしよう、動けない。全身が寒気に覆われる。心も力も萎えてしまった。

「ったく、どいつもこいつも調子に乗りやがって……」

暴力少年が私のもとまで大きな足音を立てながら近づいてくる。

一歩一歩こちらに向けて踏み出してくる足が今にも私のことを攻撃しそうで、私は足音を聞くたびに身体をぎゅっと縮こまらせた。

「はははは、見てみるこいつ、すんげえびびってやんの　ぎああっ」

「もう少しナイスバディな奴だったら襲ってやったのになあ。顔は可愛いのに本当惜しい　げふあっ」

私は力いっぱいまぶたを閉じ真っ暗になった世界の中で、いじめっ子三人組のうち二人の歪な悲鳴を聞く。

「どうしたお前ら　なっ、何だお前は！」

どうしたことかうるたえ始める暴力少年の声。

「問われて名乗るもおこがましいけどね、まあ簡単に自己紹介するなら……」

私はそつとまぶたから力を抜き、ゆっくりと視界を広げていく。

そこには二人の男子生徒が床に倒れていて、立っていたのは暴力少年ともう一人の男性。

袴姿で腰に日本刀、頭にはポニーテールによく似たちよんまげ（総髪って言うらしいよ）を携えた一人の正義の味方で

「弱きを助け悪をくじく、それを目的に現代で蘇りし古の侍……侍マンとは、拙者のことさ」

その姿を瞳に捉えた瞬間、痛みの残る頬の上を暖かな滴が流れていく。

「桜田さん、君の侍ぶりはしっかり見させてもらったよ。後は拙者が何とかするからよく見てな」

「おいてめえ、随分かつこつけてんじゃねえか」

突然、暴力少年が叫びながら侍マン様に向けて握り拳を振りかざした。

ただど次の瞬間に倒れたのは少年の方で、侍マン様の方は宙に手を構えた状態でぴんぴんしている。どうやら暴力少年にチョップを決めたようだ。

「よし勝った」

「速い……」

侍マン様の圧倒的完全勝利である。

「君、大丈夫だった？」

最強な彼は尻餅をついている私のそばまで駆け寄り、指で軽く私の涙を拭いながら、優しく心配の念が滲んでいる声を掛けてくれた。

「はい、大丈夫です。侍マン様が来てくれたから」

私は差し伸べられた手につかまり、たくましい彼の腕によって立ち上がらせてもらう。

やっぱり侍マン様は私の憧れる立派な侍だ。ますます好きになつてしまう。

「そっか、それはよかった」

「あの侍マン様、一つお聞きしてよろしいでしょうか？」

私は彼の手を握ったまま、熱くなっていく頬を気にしつつ尋ねた。

「うん、何でも訊いてよ」

「さっき、私の侍ぶりがどうか言っていましたけど、その……私、侍でしたかっ？」

すると侍マン様はにっこり笑って答えてくれる。

「弱きを助け悪をくじく。そのために必要な心と力とは、言い換えれば優しさと勇気のことなんだ」

彼は穏やかな声で言葉を続けた。

「勢いに頼らないといけないって点ではまだまだ不完全だけど、君はちゃんとその二つを持っている。立派な侍さ」

「侍マン様……」

嗚呼、なんて素敵なお方なのだろう。

思わず彼に抱きつきそうになったところで、私はあることに気づく。

「……あれ、そういえば」

ラブシーンに身を投じている場合じゃなかった。

私は気絶したのか声もなく倒れている男子生徒三人に目をやる。

もう一人、倒れているはずの人の姿が消えていた。

「野田村くんはどこ行ったの？」

私はきよろきよろとさらに室内を見回して、再度殴られ蹴られと散々な目に遭っていた男の子を探してみる。しかしどれだけ見回したところで、彼の姿を見つけることはできなかった。

ひよつとして野田村くん、まさか……。

「あーええと野田村くんとやらはね、今ちよつとした用事で席を外して……」

「彼なら侍マンが現れた時に保健室へ行くよう私が指示したわ。結構怪我してたしね」

侍マン様の言葉に横入りして、友香ちゃんが消えたいじめられっ子の行方を教えてくれる。

ま、まあそうだよね、あれだけ酷い暴力を受けてたんだから急いで怪我の治療に行かなきゃね。一瞬でも「野田村くんは私を置いて逃げたんじゃ……」とか考えた私はなんておばかさんなのかしら。

「ごめんなさい花実ちゃん、私が近くについていながらあなたに痛い思いをさせてしまっ……」

私の頬に手の平でぴつたりと触れながら、友香ちゃんは心の底から申し訳ないと思っつていそうな顔で私に言っつてくる。

「何言っつてるの、友香ちゃんが謝ることは何も無いじゃん」

「それがあるのよ。だから本当に、ごめんなさい」

私の親友として、そこまで責任を持つているということだろうか。意外と責任感が強いよね。

一通り私のほっぺをなでなでした友香ちゃんは、しばらくすると顔を侍マン様に向け、

「ところで侍マン、ちょっとお話いいかしら？」

それからいきなり彼の腕を引いて部屋の隅につれて行き、二人でこそこそと何やら内緒のお話を始めた。

私は盗み聞きしようとしたけれど、そんなことをするのは卑怯なこととして武士道に反しないかどうか気になったので止めることにする。

何を話してるんだろう。ひよっとして友香ちゃんもかつこいい侍マン様に惚れて、ああやってさりげなくアプローチを仕掛けているのでは……うう、背が低くていろんなどころがぺったんこな私じゃ抜群のナイスバディを持つている友香ちゃんには勝てないかも……どうしよう。

私が頭を抱え始めると、しんと静まり返った室内で二人の会話が少しだけ聞こえてきた。

「友香さんとやら、どうかこのことは内密にお願いできないかな」

「分かっつてるわよ。その代わり、花実ちゃんに手を出したら許さないから」

「要らない心配だよ。拙者は決してそのようなことはしない」

「あと、花実ちゃんを泣かしているのは世界中で私だけだからね。

もう泣かさないでよ」

「何だいそれは。ひよっとして君は彼女の恋人か何かなのかい？」

「いやね、ただの親友よ。それにしても最近の花実ちゃん、上履き隠されたくらいじゃ全然泣かなくなったのよね。でもこれ以上のこ

とをすると冗談じゃ済まなくなりそうだし……花実ちゃんが私に泣きついてくることはもうないのかしら。寂しいわあ」

これは盗み聞きしたんじゃないかって、静かな部屋の中にいるもんだから自然と聞こえてきちゃったってだけなんだよ。何度も言うけど私は決して二人の会話を盗み聞きしたわけじゃないんだよ。本当だよ？

だから後ろめたいことは何もない。私は堂々と、友香ちゃんに怒ることができる。

「とーもーかちゃん、私の上履きどこに隠したのー？」

後で聞いた話では、野田村くんの上履きは隠されたわけではなく、本当にうつかりなくしてしまっていたらしい。記名をしていなかったせいもあって、落し物として生徒会に届けられていたようだ。

そうとは知らずに私はいじめっ子三人組を上履き窃盗犯として疑ってしまった。これは謝らないといけないのかな。

「謝つといた方がいいんじゃない？ 相手がどんなに悪い子だったとしても、あなたが無実の人を疑つことに変わりはないんだから」昔から私の上履きを隠しては自分が見つけた振りして返してくれていた友香ちゃんの見解からすると、どうやら謝らないといけないらしい。

「ただど気が重いなあ。またぶたれたらどうしよう。」

「ま、今すぐにじゃなくてもいいと思うわよ。いざこざがあった後だし、それなりに間を空けた方が安全ね」

「本当？」

というわけで、この件については保留ということで落ち着いた。でもいつかは謝りに行かなきゃいけないんだよね……はあ、やだなあ。

それにしても、どうしてあの三人組は野田村くんのことをいじめ

ていたのだろう。別に理由はないのかもしれないけど、今度謝るつもりで聞いてみよう。

二、心と力（後書き）

侍マン様って正体があの子なだけにどうもかっこよく書けないです。
頑張らなきゃですねっ。

三、婚約（前書き）

一部ガールズラブと取れなくもない描写が含まれております、苦手な方はお気をつけてくださいます。

三、婚約

ある日のお昼休み、私は友香ちゃんのいるクラスにお弁当箱を持って旅立った。

「とーもーかちゃん、一緒にご飯食べよー」

扉から大きな声で呼びかける私。窓際の席に座っている友香ちゃんはどうしてか「はあ……」と溜め息。

どうしたんだろう。何か悩みごとでもあるのだろうか。

「友香ちゃんどうしたの、溜め息したら幸せ飛んでっちゃうよ？」

私は彼女のもとに近づきつつ親切な言葉を掛けてあげる。すると友香ちゃんは指で私の頬を両側からむにゅーと引っ張り、どういうわけか私に攻撃を仕掛けてきた。

「あなたのあまりの可愛さに、思わず溜め息が漏れちゃったのよ」
うっとり笑顔の友香ちゃん。

「うあうあうーっ」

まともに喋れない私は「何するのよー」と一生懸命に抗議したのだけど、そのメッセージが友香ちゃんには通じなかつたらしく、その後しばらくはずっと頬を引っ張られっぱなしだった。

そしてようやく解放された時、待ちに待ったランチタイムが始まる。

「今日のおかずはなーにかなー」

空いている適当な席に座った私がつきつきしながらお弁当箱の包みの結びを解いていると、友香ちゃんは優しい笑顔で話し掛けてきた。

「花実ちゃんって本当に子供ねえ……」

「む」

また上から目線で子供扱いしてっ。中学生になった頃辺りで身長に差がついたからって自分だけ大人ぶらないでよ。

「友香ちゃんだって子供っぽいところいっぱいあるじゃん」

「私は決して子供っぽくなんかないわ。仮にそうだったとしても、あなたほどではないわね」

「ふん、何とでも言えば。私はお弁当食べるんだから」

「よく噛んで食べるのよ」

広げられた包みの上に鎮座するお弁当箱の蓋をぱかりと開ける私中にはおにぎりとたくあんと卵焼きと鶏肉の唐揚げと生野菜サラダとその他諸々が入っていた。

「唐揚げっ卵焼きっぶちトマト入りのサラダっ感動っ」

「毎日ほとんど変わらないメニューじゃない。それにいつも感動できるあなたが羨ましいわ」

ちゅちゅちゅ、友香ちゃんは分かってないなあ。実はこの唐揚げと卵焼き、味つけが毎日微妙に変わっているのだ。そしてこのサラダ、今日はぶちトマトが入ってるんだよ。私の大好物！

「あら、得意げな顔しちゃって。可愛い」

友香ちゃんがいきなり私の頭に手の平を乗せて優しく擦ってくる。「あつ」

また可愛いって言われた。彼女が毎日そんなことを言うてくるもんだから、最近の私は自分の顔にちよつとばかり自信がついてきちゃっている。近いうちナルシストになつてしまつかもしれない。

「と、友香ちゃんだって可愛いよっ！」

「ありがと。でも私は綺麗って言われる方が嬉しいわ」

そうだったの。知らなかった。

「えい、隙あり」

とそこで、突然口の中が幸せの味に満たされる。

友香ちゃんが自分のお弁当箱から一つの卵焼きをお箸でつまみ、私に食べさせていた。

「美味しい？ これ、私が作ったのよ」

私はよく噛んでからごくくと飲み込むと、頬辺りの筋肉が一気に緩んでいくのを感じる。

「美味しーっ」

「その穢れなき笑顔が私の幸せ……」

自分の料理が褒められてうれしいのか、友香ちゃんもちよっぴり頬を朱に染めつつにっこりと満面の笑みを浮かべている。

そういえば、友香ちゃんはどうして恋人とか作ったりしないのだろう。彼女は時々いじわるなこともしてくるけど、普段はこんなに優しく素敵な人なのだ。その気になればいくらでも可能性はあるはずなのに。

「ねえねえ友香ちゃん、どうして友香ちゃんは彼氏とか作らないの？」

「彼女がいるからよ」

「友香ちゃんは女の子でしょ」

すると友香ちゃんは目を細め、どことなく真剣な雰囲気醸し出す。

「花実ちゃん、好きよ」

私は思いつきりむせ返った。

「ごほっごほっ」

これは彼女なりのジョークだというのは分かっているのだけど、本気っぽい顔でそんなこと言われたら心臓が悪い。

「もー、またそうやって話をはぐらかすっ」

「はぐらかしてなんかないわ。四歳の夏、私とあなたで交わした契約のことを忘れたの？」

「四歳？」

そんな昔に何か約束したっけ。

「婚約したじゃない」

私は思いつきりむせ返った。

「ごほっごほっ」

はつきり言われたおかげで私の頭の中では段々と当時の記憶が蘇ってくる。確かにあの頃から私たちは仲が良くて、「おおきくなったらけっこんしよーね」とかいろいろ恥ずかしいこと言ってたっけ。「あ、あの時はまだ男女の分別がついてなくてっ」

「婚約破棄なんて許さないから」

友香ちゃんはさらに目を細めて、もともと切れ長だった瞳がナイフのように鋭くなる。怖いよお。

「えっと……冗談を、言ってるんだよね？」

「冗談だなんてとんでもない。私はあなたと結婚の約束をしたその日からずっとレスビアンよ」

「れずびあんって？」

「別に知らなくていいわ」

そして友香ちゃんは私の頭にぽんと手を乗せ、髪を乱さないように優しくなでなでしてきた。

「知ってる？ あなたの立派なお嫁さんになるために、私は苦勞の絶えない花嫁修業の毎日を送っているの」

とにかく本気ってことらしい。

困ったなあ、私には侍マン様という心に決めた人がいるのに。ここは何としてでも両者の合意を伴った婚約破棄を成立させねば。

「でもさでもさ、私たちは女の子同士だから法的に結婚できないし……」

「役所に婚姻届を出す必要はないじゃない。私はあなたと二人で幸せな生涯を送ればそれでいいの」

気がつくと、私のお弁当箱の中身は空になっていた。

「だ、だけどさ」

「花実ちゃんは、そんなに私と結婚するのが嫌なの？」

いきなりの厳しい声と瞳で私を弾圧する友香ちゃん。

私の肩がびくんと跳ねる。

「言ったわよね、婚約破棄は許さないって」

友香ちゃんが怒ってる。あの滅多に怒らない友香ちゃんが、私には絶対怒らなかつた友香ちゃんが、私に怒ってる……そのことをはつきり認識した瞬間、私の背筋から全身にかけて何か冷たいものが通り抜けていった。

いつも暖かで何年間も自分専用の陽だまりだと思っていた場所が、

自分の犯した過ちによって一瞬のうちに失われてしまったかのような、後悔に似た寂しい気持ちが私を襲う。

「その、あの……」

目の辺りがじんわりと何かに刺激されて、言葉が詰まってしまう。

「うっう……」

「……ぷっあっはははっ」

いきなり友香ちゃんが笑い出した。

「ははっ、くっくっく……あんもう花実ちゃんてば可愛過ぎ。私が本気で女の子と恋愛したいなんて思ってるわけないじゃない」

「ふえ？」

私の首はかくんと傾がれる。

「さっきまでの冗談よ、冗談。ちょっと演技しただけですぐに引つかかるんだから、あなたって子はいじって面白いのよね」

「騙してたの！」

してやられた。よくよく考えてみれば女の子が女の子を好きになるなんてことはあるはずがなかったんだ。

「簡単に騙されちゃって、やっぱり花実ちゃんは子供ね」

「むっーっ」

悔しい、いつもながらまんまと嵌められた。きいーっ。

「私にとつての花実ちゃんはね、恋人というよりも可愛い妹って感じなの」

それから友香ちゃんはまた私の頭にぽんと手を置き、髪を整えるかのように優しくなでなでしてくる。

「騙してごめんなさい。許してくれる？」

友香ちゃんは微笑みを浮かべ、小さく首を傾げながら訊いてきた。ずるい。そんな素直に謝られたらあまり怒れなくなってしまっじやないか。友香ちゃんはいつもそうやってまんまと私を……。

「っもっ、今回だけだからね！」

嗚呼、許してしまった。私ってば優しいのか単純なのか、自分でもよく分からない。

「ありがと。だから好きなのよね」

「好きつてのも冗談だったんでしょ」

「あなたのことが好きなのは嘘じゃないわ。だって親友じゃない」

「あう、そっちの、意味………だったら、私も………」

喋りながらお弁当箱を片づけていると、私は机の上にはたりと倒れてしまう。

いきなりだけど、なんだかすごく眠い。窓から射しこんでくる昼間の日光のせいかな、段々と意識が掠れていく。

「友香ちゃん、ねむいー」

「おやすみなさい。お昼休みが終わったら起こしてあげるから、それまで眠っててもいいわよ」

「ありがとお」

意識が完全に途切れてしまう寸前に、声が聞こえた。

「卵に混ぜて熱したうえに結構な時間が経っても効き目が消えないなんて………すごい睡眠薬ね、これ」

卵………そういえば友香ちゃんに………してもらった卵焼き、美味しかったなあ

そして目が覚めた時、至近距離に友香ちゃんの顔があった。

「ひゃあっ」

下手をすればキスしてしまいそうなほどに近づいていた友香ちゃんは「あら、起きたの」と残念そうな口調で言うと、私から顔を離してにっこり微笑んだ。

「おはよう花実ちゃん。起きるのが早いわね、まだ昼休みも終わってないのよ」

「私ね、普段は明るいとこだと眠れないの。今日はどうしてか寝ちゃったけど」

それにしても、いくらさつきより顔が離れたとはいえ、まだまだ近い位置に友香ちゃんがいるのはどうしてだろう。

よく身の周りを確認してみると、私は何故か友香ちゃんの膝の上に座っていた。彼女に抱きかかえられるような形で。

「友香ちゃん、どうして私のこと抱っこしてるの？」

「あなたがぬいぐるみのようにふわふわしてて、ぎゅってすると気持ちいいからよ」

言いながらぎゅーと私の背中に回している腕に力を入れてくる友香ちゃん。

「苦しいよー」

「嗚呼、なんでこんなに幸せなのかしら。このまま学校を飛び出してしまいたいわ」

「サボりはだめなんだよ」

「もう私以外の人に花実ちゃんを抱かせたくないわ」

「変な誤解招きそうなこと言わないでー」

次の瞬間、お昼休み終了を知らせる予鈴がこの教室内に鳴り響く。

「友香ちゃん、私もう自分のクラスに帰らなきゃ」

「だめ」

「だめって、五分後には授業始まっちゃうんだよ？」

「やだ」

「やだって、もお離してよー」

私は友香ちゃんから逃れようと一生懸命身をよじらせるも、さらに力を入れてくる彼女の腕からは脱出できなかった。

「私の大切な大切な花実ちゃん、もう離さないわ。離したくないわ」

「わがまま言わないの、子供じゃないんでしょっ？」

「童心に返ってるだけよ」

「今返らなくてもいいでしょーっ」

どうしよう、このままだと次の授業は遅刻してしまう。友香ちゃんを引き離すにはやっぱり友香ちゃんが離れたくなるような状況を作らなきゃ。

というわけで私は顔を上げ、背の高い彼女に語り掛けた。

「離してくれたら今日の放課後はずっと一緒にいてあげるよ。離してくれなきゃ明日からは野田村くんとお弁当食べる」

友香ちゃんの頭がびくつと揺れる。同時になびいた彼女の髪がさ

らさらしてて綺麗だった。

「ずつと一緒、つて？」

「今日の放課後だけはずつと私を抱っこしててもいいってことだよ」
あくまでも今日の放課後だけだ。

「そうね……今から夜中までずつと抱きかかえていたところだけ
ど、そうしてしまうと明日から一緒にお昼を過ごせなくなってしまう
って大惨事……仕方ないわね、離してあげるわ」

そう言うとき友香ちゃんは私を抱き締めていた腕から力を抜いて、
ものすごく名残惜しそうな顔をしながらも私を解放してくれた。ふ
う、これで先生に怒られずに もとい、授業に遅れなくて済む。

「じゃあね友香ちゃん、また放課後ね」

「うん、またね」

私たちはお互いにはいばいと手を振り合ってこの場はお別れをし
た。

放課後になれば友香ちゃんはまた私に抱きついてくるだろう。甘
えん坊な親友のことを思いながら自分の教室に向かう中、私は少し
だけ微笑ましく思った。

ほら、やっぱり友香ちゃんだって子供っぽい。

とそこへ、キンコーンと授業開始の時刻を知らせる本鈴が廊下中
に響き渡る。

私はまだ、自分の教室に到着していない。

三、婚約（後書き）

友香ちゃんとはたまに花実ちゃんを泣かせたりしていじめることで、
今まで親友としての仲を保ち続けてきたのですよー。これぞまさしく
くペろペろキャンディとおしりペンペンですねっ。

四、頑張らなきや

ある日、野田村くんが私にこんなことを言った。

「侍マンが君に用事だつて。次の日曜、学校の屋上へ来てほしいそ
うだよ」

どうして野田村くんが侍マン様と仲良さげなのか一瞬だけ気にな
ったけど、そんなことよりも私は侍マン様の申し出に心の底から嬉
しくなる。

また憧れの彼に会えるんだ。しかも今回はあつちから私に会いた
いということらしい。楽しみっ。

というわけで来る日曜日、午後の学校。運動部の人たちが校庭や
体育館で頑張つて練習している様子を視線の片隅に捉えつつ、私は
学校指定のセーラー服姿でいそいそと屋上へ向かった。

屋上に直接通じる扉の前、倉庫代わりとなつている部屋の中で、
私は制服を整えたり髪の毛が乱れていないかチェックしたりした後
に、緊張のあまり指を震えさせながらもドアノブに手を掛ける。

心の準備を一瞬で済ませ、ノブを捻つてゆっくり扉を押し開くと、
「こんにちは、花実」

快晴の空の下、屋上の中央に、侍マン様の姿があつた。

総髪や袴の裾をそよ風に靡かせつつ凜々しく直立する彼の姿に惚
れ惚れとして止まない私の心。嗚呼、私も早くこんな素敵過ぎる侍
になりたい。

「わざわざ拙者の呼び出しにに応じてくれてありがとう」

「わわわっ、い、いえいえどういたしまして……」

そういえば侍マン様、さっき私のことをしし下の名前で、しか
もよよ呼び捨てでお呼びにられませんでしたかっ？

感激と照れのあまり、私の頭からは機関車的な湯気がぼっぽーと
噴き上がる。そして危うく腰を抜かし掛けたその時、彼は続けて私
に言った。

「早速だけど本題に入るよ。君、侍を目指してるんだよね」

屋上の入り口近くで足を止めている私のもとに、ゆっくりと歩を進めて近づいてくる。

「こないだそれを聞いた時に少し考えたんだ。君を弟子として、拙者のもとに迎え入れようかなって」

「弟子、でありますか……っ?」

つい変な喋り方で言葉を返してしまう私。

「この時代には過去以上に多くの悪が蔓延っている。それらを退治、更正させるには拙者一人じゃ手に余るんだ。だから仲間が欲しい」

侍マン様は私から数十センチほどの距離を置いて立ち止まり、穏やかで優しい性格がにじみ出ているお顔を私に向けてきた。

「弱きを助け悪をくじく、その心と力を持った君なら、後世に影響を及ぼせる素晴らしい侍になれるはずだ」

私は激しくなり始めていた胸の鼓動をさらに高鳴らせつつ、彼の言葉に耳を傾ける。

「拙者と共に、武士道を歩む気はないかい?」

「よっ喜んで!」

幸運の星の下に生まれてきたのかな、私って。こんな美味しい展開に私はもう倒れそう。

「じゃ、わざわざこんな時間のこんなところに来てもらっというなんだけど、拙者もう行くね」

「もう帰っちゃうのでふかつ」

「啖んじやつた。」

「これから街に出て世直しして回るよ。君も頑張っつてね」

そう言い残すと侍マン様は背後に回り、それから一気に駆け出してしまわれると、一瞬のうちに私の目の前から消えてしまった。

頑張っつてね……私にそんな言葉を掛けるということは、私も世直しをして回れということだろうか。

「分かりました侍マン様、私も頑張ります!」

よし、まずは校内をパトロールだつ。

私は踵を返し、侍マン様が去って行った跡に続いて出入り口の扉を通り抜けていく。階段を下りようとしたところで、

「やあ桜田さん、侍マンと何の話をしてたの？」

「ひゃうっ」

いきなり背後から声を掛けられ、驚いたついでに足もとのバランスを崩して転びかける。

「危ない！」

声を掛けてきたその人は階段の下へ落ちかけた私の手首を素早く握り、力強くかつ勢いよく一気に引き上げてくれた。その反動で胸に抱かれる状態になった私は、声の正体を知るために顔を上げる。

「驚かせてごめんね、大丈夫だった？」

すると、制服姿の野田村くんが心配そうな顔で私のことを見下ろしていた。

「うん、大丈夫だよ。ありがとー」

私は彼の胸から離れて姿勢を整えながらお礼を言うと、頭の中に一つの疑問が浮かんできたので、とりあえずそれについて「ねえねえ」と尋ねてみる。

「野田村くん、今日は日曜日だよ。どうして学校に来てるの？」

「え？ あ、あーえーとそれはね、別に深いわけがあるわけじゃないわけなんだけれども……」

野田村くんがかなり不自然な反応を見せ始めた。それからしばらくこんな調子が続くと、彼は気を落ち着かせようとしているのか、ほんとーと咳払いをして、ゆっくりと私の質問に対する答えを語り始める。

「僕、今すごく暇なんだ」

「そうなんだー」

なるほど、暇潰しに来たんだね。

「じゃあさじゃあさ、私と一緒に校内をパトロールしようよ」

私は階段を下りながら野田村くんを誘ってみた。一人だとちょっとばかり寂しいしね。

「パトロール？」

続いて後ろについて来た彼の声に応じて私は話を続ける。

「そうだよ。非行に走っている生徒を見つけたら注意するの」

「それはいいことだね。じゃあ僕も手伝わせてもらおうよ」

「えへへ、一緒に頑張ろう」

野田村くんはちよつとばかり頼りないけど、それでも一人で世直しするよりは一緒にいてくれた方がずっと心強い。

屋上の一つ下、校舎の四階に辿り着いた私たちは一旦立ち止まる。

これから進行ルートを決めよう。

「まずはこの校舎からパトロールね。その次は隣の校舎で、その次は旧校舎」

「うん、了解。でも迷ったりしない？ ここに入学してからまだ日が浅いし、僕は迷子になりそうなんだけど」

「生徒手帳に簡略地図が描かれてあるから大丈夫。レッツゴー！」
出発してから約十五分後、私たちは靴箱が整然と並べられている校舎の玄関で立ち止まった。

「事件とか何もなかったね野田村くん。何もなさ過ぎて三つの校舎どころか庭園や教員用駐車場、ついでに体育館の裏を覗いたりと学校の敷地内を一周したけど、短い時間の中でスムーズに回る事ができたね」

「いいことじゃないか、平和で」

「むー」

「そんなつまらそうな顔しなくても」

しかしこのままでは終われない。侍マン様は私に「頑張ってるね」と言ったのだから、もっと頑張らねば。

「よーしもう一周しようっ」

「そうだね。何週もしてないと暇潰しにならないし」というわけで私たちは再び歩き始める。

それにしても、何もない廊下をてくてく歩いてたって面白いこと

なんて一つもない。野田村くんとは歩きながら雑談しててもいまいち盛り上がらないし。

「野田村くん、何か面白いこと言って」

「無茶振りだね……えーと、じゃあ学校と掛けまして、歩いている僕らと解く」

「うんうん、その心は？」

「『校舎』内だけに僕らは歩『行者』」

「……あう」

「何かなそのシャボン玉の液飲んじやった子みたいな顔は」

やっぱり盛り上がらなかった。むしろ不良品のコールドスリーブ装置に入れられたような気分になってしまふ。

おかしい。毎日教室で顔を会わせている時はどんな話題でもすごく楽しんでお話できたはずなのに、どうして今に限って私たちはこんなにも盛り上がり欠けるのだろうか。

ああそっか、話題があつたから楽しめたんだ。それに比べて今はお互い何の話題も持ち出さず、ひとり言や思いつきを口走ったりしているだけである。話が弾むわけがない。

何か話題はないだろうか。私はそれを求めて頭の中を必死に探りまくるが、しかし何も思いつかない。そうだ、ジャンケンの勝敗が運動神経によつて決まるという説をいかにして覆すのか相談するのはどうだろう。そんな話題で本当に話が弾むのかは甚だ疑問だけど。

「あ、裕樹ゆうじくんだ」

私がそうやってうんうん頭を悩ませていると、野田村くんが休日で誰もいないはずの教室内に視線を向けながらぼそり言った。

彼の視線を視線で追つと、私もその裕樹くんというらしい男子生徒の後ろ姿を見つめる。窓から校庭を眺めているようだ。

「どうしてこんなところにいるんだろうね」

「……ねえ野田村くん。あの人ってさ」

訊きながら、私の頭の中ではつい最近起こった恐怖の思い出がフラッシュバックされる。

「こないだ空き教室であなたをいじめてた人、だよね」

「そうだよ。彼の名前は海原裕樹くん」

随分けるつとした様子の野田村くん。どうしてそんなにもあっさりとしているの。

「裕樹くんとは小学生の頃からの友達だったんだ。でも中学の時にちよつと喧嘩しちゃって、それはからはすっかり不仲だけど」

「ふーん……」

ただの喧嘩にしては海原くんの暴力行為が凄まじかったけど、二人の間に一体何があったのかな。

「じゃあ仲直りしなきゃ。そしてまたお友達になるの」

「そう思っただ度も謝りに行ったんだけどさ、結局許してもらえなかったよ。まあ当然のことなんだけどね、もともと悪いのは僕なんだし」

「だからって暴力は許せないよ」

「仕方ないことなんだ。さあ、早く行こうよ桜田さん」

まるでぐらかすかのように、そしてこれ以上話の中に私を踏み込ませたくないかのように、野田村くんは私を置いてさっさと廊下の先に歩を進めてしまう。私は慌てて彼の隣に並ぶと、歩きながらこっそり背後を振り返った。

一年五組……教室の扉の上で固定されたプレートに記されているのクラス番号を、私はしかと頭の片隅に記憶する。

「結局何もなймаま夕方になつたわけだけど」

野田村くんが少し疲れた様子で微笑みを浮かべながら私に言う。

私たちは手ぶらで校門を通り抜けながら肩を落としていた。

うちの学校が優良校なのはいいことだけど、いいことなんだけどさ。

「侍マン様は世直し頑張つてつて言ったのに、私何もできなかった

「よおー」

きつとあのお方は私たちが学校の中を無駄に歩き回っている間も街に蔓延る悪を退治し懲らしめ更正させていたに違いない。それに比べて私ときたらなんと不甲斐なきことか。

「いやいや、侍マンは何も頑張って悪を見つけなさいって言ったわけじゃないと思うけど……」

落ち込む私にそんな言葉を掛けてくる野田村くん。彼の言うことも一理あるけど、私は一刻も早く私を弟子にしてくれた侍マン様に報いたいのだ。それに「もう君に教えることは何もない」とか言うてほしい。

「桜田さんって侍になりたいんだっけ？ そんなに焦らなくてもいいんじゃないかな。時間はたっぷりあるんだし」

「そうだよね、焦っても意味ないよね……」

しかし分かっていても先を急いでしまう、それが私。

「……あ、そうだ」

そんな私は突然いいことを思いついた。

「野田村くん、ついてきてっ」

善は急げの性分に身を任せ、私は自分でも素晴らしい思えるスタートダッシュを切って地面を駆ける。

「どうしたんだい急に走り出して。どこ行くの？」

先に走り出した私の隣まであっさり追いついてくる野田村くん。さすが男の子、私より足が速い。

「それはね、ひみつっ」

「着いてからのお楽しみってこと？」

「そゆことっ」

さあ、あの夕陽に向かって走るんだー！

数分後。

「ぜえ、ぜえ……」

私の肺からはほとんどの酸素が失せかけていた。

「はあ、疲れた」

「桜田さん、慣れないのに全力疾走なんてするから」

「だって、ふう、善は、はあ、急がないと」

切らした息を整えながら、私は目的地の街路沿いに建てられている小さなアクセサリーショップの前に立ち、腕に力を振り絞って扉を開けた。その拍子にどこからかランコロンと鈴の音が鳴る。

「こんなところに何の用があるの？」

後ろからついて来ながら野田村くんが訊いてきた。

「えーつとね……」

私は店内に設置された棚と棚の間を移動しつつ、わけが分からなといった様子で首を傾げている彼に答える。

「あつたあつた、これだよ」

棚から一つだけ、ピンク色の髪留めを取り出した私は、それをぱつと頭に結わえつけて野田村くんに見せつけた。

「じゃーん、ちょんまげ」

侍マン様とお揃いのポニーテールのなちょんまげである。形から入ることも重要ななと思ったので、まず髪型から侍になるうという結論に達したのだ。

「……総髪とちょんまげは違うよ」

「え、この髪型ってちょんまげの一種じゃないのっ？」

「違うと思うな」

知らなかったよお。

「そっか……まあ何でもいいや。どっちにしたって侍マン様とお揃いだし」

私は頭から髪留めを外して手の平に持ち、レジまで行って簡単にお会計を済ませる。店員さんから髪留めの入った包みを受け取ると、私たちは一緒にこのおしゃれな作りのアクセサリーショップから立ち去った。

お店を出ると、私は早速包みから髪留めを取り出し、さっきのように髪を結ってから野田村くんと向かい合う。

「どお、凛々しくなった？」

侍マン様はこの髪型のおかげもあってとても凛々しく見えるけど、私の場合はどうだろう。

「少しはね」

「少しだけかー」

やっぱり髪型を変えただけではあまり侍に近づけないらしい。残念。

私は踵を返して街路の上を歩き始めた。隣に並んでついてきている野田村くんは何故か優しく微笑んでいる。

「どうしたの野田村くん、嬉しそうな顔しちゃって」

「何でもない。ところで凛々しくなったかどうかは知らないけど、その髪型似合ってるよ」

褒められた。

「本当？ えへへ、ありがとう」

男の子から褒めてもらうのは初めてなので、友香ちゃんから褒めてもらう時よりも余計に照れてしまう私。

「じゃあ侍マン様にも早く見てもらいたいなあ」

憧れの彼からも褒められたらもっと嬉しい気持ちになるだろうな。楽しみっ。

そうこうしているうちに、私たちは赤信号の横断歩道に差し掛かる。目の前で次々と車が横切っていく中、私は野田村くんの顔を見上げて少しばかり思案した。

声といい顔といい、やっぱり野田村くんはどこか侍マン様と似ている。面影だったり性格だったり、同一人物だと言われたら疑えないところが多々あるのだ。

どうにかして確かめることはできないかな。

「ねえ野田村くん、侍マン様の正体って野田村くんなの？」

遠回しに探りを入れられるような器用さを持ち合わせていない私は直接訊いてみることにした。

「はは、そうだったら格好いいのにな」

ギクツとなるわけでもうろたえるわけでもなく、私の問いに対して平然と言葉を返してくる野田村くん。

「違うの？」

「そりゃ違うさ。僕は侍マンと直接顔を合わせたことがあるんだから」

車道側の信号機が黄色に変わり、すぐに赤へと切り替わった。

「そっかー」

野田村くんが微笑みを浮かべながら言っていることは嘘かもしれない。だけど私はこれ以上彼のことを詮索する気にはなれなかった。

「さ、青になった。行くよ」

先に歩いていく野田村くんの後ろを追いかけて、私も横断歩道に一步一步足を踏み入れていく。

「桜田さんって侍を目指してるんだよね」

「うん。いつか立派な侍になってね、困ってる人を助けるの」

「どうして？」

私に視線を合わせて訊いてくる野田村くん。私は自信満々に答えた。

「かっこいいから」

すると野田村くんは少しだけ目を見開いて驚いたような顔になる。

「……あつはは、そうだよな」

それからまたすぐに笑顔を見せると、彼は言った。

「僕も君みたく素直になろっかな」

野田村くんのこの爽快な笑みが、私には沈み行く夕陽のように煌めいて見えた。

どうしちゃったんだろう、野田村くん。何かをつかんだかのような、何かが吹っ切れたかのような表情になっている。

そんな彼が、少しだけかっこよく思えたりして。

「野田村くんは素直じゃなかったんだね」

「まあね。でも君に気づかされたよ、僕は頑張るべきなんだって。ありがとう」

野田村くんの心の中で何があったのかは分からなかった。でもどうやら私は彼にお礼を言われるようなことを知らないうちにやっていらしい。

学校で悪をくじくことができなかつたのは残念だけど、今日のところはこれで満足しよう。侍マン様の弟子として、人の役に立てたんだから。

四、頑張らなきゃ（後書き）

余談ですけど、花実ちゃんの髪型はこの日からずっとポニーテールです。

四点五、魔の黄金週間

とうとうやって来た私たちのゴールデンウィーク、五連休の初日の午前。

私は自室にて、リュックサックの中に入れた荷物の再確認を行っていた。

「パジャマよし、下着よし、歯磨きセットよし、宿題一式よし……うん、ちゃんと揃ってるね」

大きくてリュックに入らない安眠抱き枕は抱えていくことにしよう。

ちなみにどうして私がこんな大荷物を用意しているのかと言うと、今日から五日間、私は友香ちゃんのお家でお世話になるうとしていくからなのだ。

要するにパジャマパーティー。連休中は私と会えない日が続くことを嘆いた友香ちゃんが企画し、私が大喜びでそれに大賛成したのがことの始まりである。

さて、予定よりちよつと早いけどもう出発しようかな。楽しみー。私はリュックを背負い抱き枕を抱えて立ち上がると、友香ちゃんの家に向けて出発した。

「いらつしやい花実ちゃん。さ、適当なところに荷物置いてちょうだい」

「おじゃましまーす」

広い玄関で友香ちゃんに迎えられた私は、言われた通り重たい荷物を床に下ろしてほつと溜め息を吐く。

「はう、疲れたよお」

自転車で来ればよかった。どうして私ってばわざわざ歩いてきた

んだろ。

「お疲れさま。よく頑張ったわね」

すると友香ちゃんは私の頭に手を置き、微笑みながら優しくなでしてくる。

「えへへー」

心地よい頭の感触に、頑張った甲斐があつたと段々機嫌が良くなつていく私。友香ちゃんの手は陽だまりみたいだよー。

さて無事に友香ちゃんちへ辿り着いたのはいいのだけど、これから何をして過ごそうかな。一緒に楽しく遊ぶか、一緒に宿題を頑張るか、他にもいろんなことができる。

「ところで花実ちゃん、いい天気だしお出かけしましょうよ。デートしに」

今日の友香ちゃんはアウトドアな気分らしい。今から出かけるとなると、お昼は外食になるのかな。

楽しそうなので私は親友の申し出に大賛成した。

「いいよー。どこ行く?」

私が尋ねると、友香ちゃんは片手を頬に当てて瞳を細め、何かと大人っぽい雰囲気醸し出しつつ、しかしどこか恥じらいの見え隠れする表情を作つて答えてくれた。

「ホテル……とか」

「私この家に泊まりに来たのに!??」

どうしてわざわざ宿泊施設に向かわなければならぬの。それに一般的なホテルなんてこの近くにはほとんど存在しないし……い、一般的じゃないのならいくらでもあるけど。

「だってここよりあっちの方が色々揃ってるし……」

「私だつて色々揃えてきたもんっ! 歯ブラシとか枕とか他にもいっぱいっ」

「さ、早くデートに行きましょう」

「無視しないでよおっ」

それから友香ちゃんは小さめのバッグを持ち出すと、玄関に置か

れてあったブーツに足を入れ始める。

ちなみにお出かけすることを想定していなかった私は外出用のバッグなんて持ってきていないから、手元の寂しさを我慢して手ぶらで外を歩くしかない。あう。

「花実ちゃん、ほら」

いつの間にかブーツを履き終えた友香ちゃんは、どういつもりか私に片手の平を差し出してきた。

一瞬何がしたいのか分からなかったのだけど、すぐさまぴんと閃く私の天才的頭脳。

「うんっ」

私は差し出された手の平に自分の指を絡め、友香ちゃんに向けてにっこり笑顔を作ってみせた。

これで手ぶらではなくなった。元気を出して、お出かけにレッツゴーっ。

雑踏と排気ガスの多い賑やかな街までやって来た私たちは、当てもなくお喋りしながら歩き続けていき、しばらくして一軒の小さなアクセサリーショップに辿り着く。

ここは確か私が総髪のための髪留めを買ったお店だ。友香ちゃんに手を引かれてここまで来たはいいのだけど、何か買っていくつもりなのかな。

「友香ちゃん、ここ寄るの？」

「そうよ」

扉を開けばカランコロンと鈴の音色を鼓膜に感じつつ店内に突入した私たちは、きよろきよろと辺りを見回しながら中を歩き回っていく。

「花実ちゃんにはポニーテールより似合う髪形があると思うのよ」「どうやら私の侍マン様ヘアは友香ちゃんの気に召さないらしい。私はこの髪型で結構凛々しくなってると思うんだけどな。」

「だからさ、いろんな髪型にチャレンジしてみない？」

そう言いながら友香ちゃんは陳列されている商品の一つを手に取り、それを私に見せてくる。

「この赤いリボンで、おさげを二つにしてみたり」

「子供っぽくなっちゃうよー」

「カチューシャでおでこ広げたらもっと可愛いわよ」

「だから子供っぽくなっちゃうってー」

「この伊達眼鏡、花実ちゃんに似合うんじゃないかしら」

「髪型から離れちゃってるない？」

そんなこんなで様々な商品を物色していると、レジのところまで屈そうにあくびをしていた女の店員さんがこちらに向き直り、そしてずんずんと近づいてきた。

「お客さま、僭越ながらこの私がコーディネートして差し上げましょうか」

この人は多分暇潰しがほしいのだと思う。今は私たち以外にお客さんが来ていないからね。

すると彼女は私の肩を両手でがっしりつかみ、じろじろと私の顔を見つめ回してきた。

そんなに見られると恥ずかしいな。

「うーん……逸材ね」真顔になって言う店員さん。

「でしょう」何故か誇らしげに胸を張る友香ちゃん。

そういえば、侍マン様はどんな髪型の女の子がタイプなんだろう。古風に大きな鬘とか、清楚に三つ編みとか、裏をかいて金髪とかかな。色々考えられる。

「お客さまはどんな髪型にしてみたいですか？」

私だけでは侍マン様の好みが分からないので、後はこの店員さんに委ねてみよう。

「んとね、侍に好かれる髪型がいい」

「なんて難しい注文なのでしょう。まあとにかくあそこの椅子に座っててください、私腕を振るいますからっ」

それから私は言われた通り、指されたレジカウンター前の装飾溢

れる可愛い椅子に腰掛ける。座り心地抜群なふんわりクッション付きの椅子に仄かな幸せを感じていると、しばらくしてお店の様々な商品が詰められたバスケットを片手に店員さんが戻ってきた。

「まずはこの大きな薔薇付きの髪留めを使ってみましょう。お客さん可愛いからきつと似合いますよー」

「あら、私はこのティアラとかいいと思うんだけど」

店員さんと友香ちゃんは二人揃って次から次へとバスケットの中身を出しては私に付け、やっぱりこっちはいいかもと言い出しては付け替えて、途中から友香ちゃんが携帯のカメラを私に向けパシャパシャし始めて……。

二人は結構楽しんでるみたいだけど、ただされるがままになってる私と言えばすぐくつまんない。着せ替え人形もこんな気分なのかな。友香ちゃんも店員さんも私をいじるのに夢中で鏡とか全然見せてくれないし、今自分がどんな髪型にされてるのかもよく分からない。

「ねえねえ、髪型はもういいからさー」

というわけで私がそろそろ止めたいなという意思表示をすると、二人の瞳が一瞬きらりと光る。

「髪型以外にも、いろいろいじってみたい？」

友香ちゃんが新しい楽しみを見つけたかのような顔をした。

「メイクとかしてみちゃいます？」

ついでに店員さんにもやりと笑う。

「いや、花実ちゃんに口紅とかは似合わないわ。この店、洋服とか置いてないのかしら」

「今はありません。二階の空いている空間にお洋服コーナーを作ろうかなとオーナーがぼやいておりましたが」

「そうなの……でも指輪やネックレスじゃあんまりいじり甲斐ないし、困ったわね」

「ならばあちらの商品はいかがでしょう。マニアックな趣味の方に おすすめなのですけど」

こんな風に真剣な表情でお話しながら、いつしか二人は店の奥へと消えてしまった。

一人残された私は、やっぱり退屈な思いをさせられている。

「暇だなー」

私は床についていない足をぶらぶらさせながら、誰か知り合いでもやって来ないかとお店の出入り口に視線を向けた。

確かこのアクセサリーショップの存在を覚えてくれたのは中学時代のあるお友達だっけ。思えば高校生になってからというもの、その子とは最近全然会っていない。

今どうしてるのかな、ここではったり会えたら嬉しいな。

「ここなのよねー私のお気に入りのお店。いろいろ揃ってんのよね」

「へえ、なんかよさげなお店だねえ」

次の瞬間、カランコロンの鈴の音と共に聞こえてくる女の子同士の話し声。お客さんだ。

「……あ」

扉が完全に開かれた時、私は目に映った女の子を前に少しだけ驚いてしまう。

二人いる中の片方は、丁度心の中で噂していた中学時代のお友達だった。

「花びよんっ」

「キャシーっ」

感動の再会っ。私は立ち上がり、キャシーは駆け出し、お互いにひしりと抱き締め合う。

「もーすっごい久しぶりよね花びよん、何年ぶりだったっけ！」

「一ヶ月ぶりくらいだと思っよキャシー！」

会っていないのはたった一ヶ月くらいだけど、それでもこの再会を嬉しく思わずにはいられない。

ちなみに彼女の名前は和泉^{いずみ}鬼矢^{キャシー}死衣。金髪とこげ茶色な肌がよく似合う生粋の日本人だ。

「ねえキャシーちゃん、その可愛げで小さげな子は誰？」

先ほどキャシーと一緒にお店へ入ってきた知らない女の子が、私の顔を白縁の眼鏡越しに横からじーっと覗き込んでくる。

「この子は花びよん。私の親友なのよねー」

「ふーん」

どうやらこの眼鏡ちゃんはキャシーの新しいお友達のようなのだ。

「じゃあよろしくね、花びよんちゃん。私の名前は真紀まきよ」

「うんっ。よろしくね、真紀ちゃん」

よかった。この二人が来てくれたおかげで私の退屈も大分紛れそう。

「ねえ花びよん、あんたどうしてここにいるの？ 一人で来ても楽しくないのに」

私を抱き締める腕から力を抜きつつ尋ねてくるキャシーに、私は彼女から身体を離しつつ言葉を返した。

「友香ちゃんと来てるんだよ。友香ちゃん、店員さんと仲良くなっちゃってね、今は私を放ってお店の中をうろろろしてるの」

「へえ、友ぴーは花びよんラブでいつもくっついていたのにな。珍しい」

「キャシーちゃん、花びよんちゃん、友ぴーって誰？ ちょっと怪しげなんだけど」

それから私たちの談笑はしばらく続いた。

キャシーのおかしな名前についてとか友香ちゃんの変な性格とか、真紀ちゃんが学校でとても地味だとかそужじゃないとか……そんな感じでいろいろお話しているうちに、

「お待たせ花実ちゃん。いいもの見つけてきたわよ……あ」

「お客さんならきつとよく似合うと思います……あ、いらっしやいませー」

ようやくお店の奥から出てきた友香ちゃんと店員さん。随分長いことうろろろしてたみたいだけど、何してたのかな。

「あらキャシー、お久しぶりね」

「よっ、友ぴー」

「これが噂の友ぴーちゃん……」

友香ちゃんがキャシーを見つけ、キャシーは片手を挙げて気さくに挨拶し、真紀ちゃんは珍しい人を見る目つきで友香ちゃんに視線を注ぐ。

「あら、この眼鏡ちゃんはどこだ？」

「私は真紀。花びよんちゃんと友達になったの。友ぴーちゃんもよろしくね」

「ええよろしく。でも花実ちゃんの親友は私だけだから」

「へえ、本当に花びよんちゃんラブなの。危なげな関係ねえ」

一通り自己紹介を終えると、友香ちゃんは「むふふ」と怪しい笑みをこぼしつつ私に向き直った。

「さあ花実ちゃん、これを付けてみて」

そう言いつつ幼稚園以来の親友が私に差し出してきた物は……。

「えっと、これ本当に付けるの？」

「もちろんよ」

友香ちゃんも店員さんもわくわくした顔で私にそれを押しつけてくる。

えっと、これを私に付けろって言う友香ちゃんは、本当に私のことを親友だと思っているのかな。

「この首輪、どうしても付けなきゃだめ？」

赤色と艶を持ち、南京錠をぶら下げられ、しかもリードが繋がっているそれは、飼犬の首にぴったりな代物だった。

「どうしても付けなさい」

これを首に巻いたが最後、きっと私はいじめっ子モードになった友香ちゃんに散々犬扱いされるんだ。もしかしたらこれに繋がれた状態で外を歩かされることも覚悟しないといけないかもしれない。

「そんなの嫌だもんっ」

私は叫ぶと同時に駆け出して、友香ちゃんと店員さんの魔の手からの逃走を試みた。

この場はとにかく逃げよう。いくら友香ちゃんの頼みでも、飼

犬になるなんてまっぴらごめんだよおっ。

「まあまあ花びよん、いっちょ付けてみなって」

扉に手を掛ける寸前で、私はキャシーの力強い腕に右腕を絡め取られてしまう。

「あっっ」

しまった。そういえばキャシーは昔から友香ちゃんのやること成すことのほとんどを面白がって、それだけならまだしもすぐに便乗するような人だった！

「離してよキャシー、首輪なんて嫌なのっ」

「いいじゃん別に。私も可愛いと思うのよねー」

私が必死にキャシーの腕から脱出しようと頑張っているところへ、今度は左腕を誰かの腕によって絡め取られてしまう。

「小動物げな花びよんちゃんなら、その首輪とっても似合うと思うな」

「真紀ちゃんまで！」

最早この場に私の味方はいないことが判明。

一対四で勝ち目ゼロ。私にはもうこのいじめっ子たちに屈服する以外の道は残されていないのだろうか。

「僭越ながら私もあなたの身動きを封じさせてもらいます。お客さん、今のうちにその首輪を！」

今度は店員さんが私を背中から羽交い絞めにした。これではもう足しか動かせない。

「離して、嫌だよおっ」

「ふふふ……悶える花実ちゃん、私のツボよ」

そしてついに私は、いつの間にか正面に回ってきていた友香ちゃんに首輪を付けられてしまう。

赤いそれはそつと首に巻かれていき、苦しくなるかならないかの瀬戸際まで絞められ、最後には力チツと南京錠が掛けられて、

「はあ、はあ……ふふ、花実ちゃん、可愛い……」

リードの取っ手を握る変な息遣いの友香ちゃんを前に、私は絶望

する。

その瞬間、両腕と背中からの拘束が解かれていく。首元以外の自由は戻ると、私の手は真つ先に自分の首へと向かった。そして何とか外そうといじってみるも、南京錠が邪魔でどうしても外れない。友香ちゃんやキャシーからは今まで何度となくいじめられてきたけど、まさか犬にされてしまう日が来るなんて。

「お客さん、この犬耳を模したカチューシャもお似合いですよ？簡単に外せないよう首輪と連結できるタイプの代物ですふふふ」

店員さんの不気味な笑い声が聞こえるのと同時に、頭の上で何か装着される感触。

「花びよんちゃん、これ」

すると真紀ちゃんは持っていたポシエットからある物を取り出して私に向ける。

「いやあ、見せないでーっ」

鏡に映された私は、見事に犬のコスプレをしていた。

こんな格好の時に限って鏡を見せられるなんて。もう湧き上がる羞恥心で脳みそが沸騰してしまいそう。

「友ぴー、私にも紐持たせなよ」

「私のターンはまだ終わっていないわ」

「ちえー」

人が顔を赤くしてるというのに、この人たちときたらひたすら面白がっちゃって！

「もお、いい加減にしないと温厚な私だって怒っちゃうよっ！」

「怒ってみなさい、雌犬ちゃん」

私が大声を出した直後、友香ちゃんにリードをくいと引っ張られてしまう。

「あうっ」

「はあ、可愛過ぎるわ、ほんとにもう……」

それから友香ちゃんはポケットから携帯電話を取り出し、それを私にかざすと、またパシャパシャ写真を撮り始めた。

「写真撮ってるんだったら順番代わってっ」

その隙を見てキャシーが友香ちゃんの手からリードの先を奪い取る。

「花びよん、勘弁してね。っーか犬コス似合い過ぎてる花びよんが悪いんだから」

「むっっ」

そしてそれを引っ張りつつ店内を歩き始めるキャシー。

どうやら散歩とかさせるつもりだろうけど、私だっっていっまでもみんなの思い通りにはならないよっ。

「あら花びよん、抵抗する気？」

私は足元を思いつきり踏ん張らせ、引っ張られて堪るものかと必死に抗ってみせる。

「あんたごときの力じゃ、私に勝てっこないのよねー」

「あうっっ」

間もなくして、彼女の力強い手にあっさり引っ張られてしまう私。こうなるのは分かっていたことだけど、悔しい。

「ひどいよキャシー」

「花びよん本当可愛いよね」

「む」

ささやかな抗議も虚しく、「可愛い」という言葉でねじ伏せられてしまう私。

さっきから可愛い可愛いと言われまくっているせいか、段々この格好もいいかも思えてきた。恥ずかしいことに変わりはないのだけど、これはこれでおしゃれかもしれない。

「あ、そうだ友ぴー、後でその写メ私に送ってよ。私の携帯、今家に置いてきちゃってさー」

「一枚五百万円で手を打つわ」

「高っ」

二人の会話が耳に流れ込んでくる中、しばらく私は首輪のリードに歩かされ、とうとう店内を一周したところで、

「キャシーちゃん、次私に代わって」

「僭越ながら私も代わりたいです」

真紀ちゃんと店員さんが我先にとリードに手を伸ばしてきた。完全に私のことをおもちゃだと思ってる。

「うーん……じゃあ付き合いの長い店員一号ちゃんに交代するわ。」

「ごめんね真紀っち」

「ううん、別にいいよ。待ってる間、別のことで花びよんちゃんいじってるから」

すると真紀ちゃんは私の首元に手を伸ばし、複数の指を顎の内側へと潜り込ませ、

「ほら花びよんちゃん、鳴いてみて。ごろにゃーんって」

そしてあるうことかその指を蠢かせてきた。

「にゃうっ、それじゃあ猫っあはは、もうくすぐりたいよおっ」

まるで猫でもあやすかのようにくすぐられた私は、我慢できずに笑い声を漏らしてしまう。

くすぐりたい。

「ほらほら、ごろにゃん鳴いて」

耐えられないので、私は真紀ちゃんの手首をつかんで無理やり引き離そうと試みた。

だけど真紀ちゃんもキャシーみたいになかなか力が強くて、ちょっとそっとじゃ離れてくれる気配が全然しない。

「きやははっもおやめっふひっひゃっはははっ」

何だか、とてつもなく嫌な予感がする。早くこの手を引っこ抜かないと、私は何かとんでもないことになってしまいそう。

そしてその予感は、感じた直後見事に的中した。

「さあ花びよんちゃん、ごろにゃあんって鳴くのよ」

次の瞬間、私は全身に妙な刺激が広がるのを感じる。

「ひゃあんっ！」

その悲鳴がさっきまでの笑い声と比べて明らかに異質なのは、この場にいたみんなが気づいたみたいで、

「えっ花ぴよんちゃん?」

真紀ちゃんの指は止まり、

「どしましたお客さんっ!」

リードを引つ張ろうとしていた店員さんの止まり、

「花ぴよん、今の声すっごい色っぽかったよね。艶めかしいっつか」

友香ちゃんの携帯電話の画面を覗き込みつつキャシーが感想を漏らし、

「花実ちゃん……ひよっとして」

友香ちゃんと言えば、携帯電話のシャッターボタンに置いていた親指の動きを止め、

「喉の辺り、弱いのか?」

「いやあっと笑った。」

「いやっそじゃなくてね、友香ちゃんあのねっ」

「総員、直ちに花実ちゃんを拘束せよ!」

友香ちゃんが命令した直後、私は目にも留まらぬ速さで動く他三名により、右腕左腕を絡め取られ最後にはやっぱり羽交い絞めと、先ほどと全く同じように身動きを封じられてしまう。

「やん、離して止めて、お願いだからあつ」

「花実ちゃんの弱いところ、どこかしらあ」

動けなくされた私の首に指を絡めてくる友香ちゃん。

その手の一部が、首と頭の付け根の部分……つまり喉元に、触れた瞬間。

「みやああつ!」

足が痺れた時のような何とも言いがたい刺激が全身を駆け巡る。

「ひゃあう、やああ……」

侍マン様、助けてえ……。

「とうとう見つけたわよ、花実ちゃんの弱いところ……ふふふ、今夜が楽しみねえ」

こうしてゴールデンウィークの五連休、その初日、私は四人がかりでいじめられたのであった。多分私は、この日のことを生涯絶対に忘れないだろう。

店内に私の喘ぎ声がかたまり、喉元をいじめられている間、私は密かかつ情熱的に復讐心を燃やし始める。

いつか絶対、友香ちゃんのを弱いところを見つけて仕返ししてやるんだから。覚えてなさいっ！

四点五、魔の黄金週間（後書き）

そう言えば今ゴールデンウィークじゃん。そう思い立ってこの番外編を書き上げた今日この頃、皆さまはいかがお過ごしでしょうか！ 私はこうやってこっそりと投稿しております。

五、いとこ揃っていじめっ子

ゴールデンウィーク最終日の午前、友香ちゃんの家にお泊りしていた私は、荷物のリュックサックを背負って自宅に向かっていた。住宅街の中を歩いていくうちに、私はふとあることに気づく。

「いけない、歯ブラシ忘れちゃった」

確か友香ちゃんちの洗面台に一緒に置かせてもらってたんだっけ。取りに行かなきゃ。

私は踵を返して再び友香ちゃんの家に向かう。

しばらくてくてくと歩を進め、一つの角を曲がろうとしたところで、壁にぶつかった。

「きゃっ」

反動で尻餅をついてしまう私。

「……………てめえ」

私がぶつかったのは壁ではなく、いつ見ても険しい顔をしている海原くんだった。彼は登山帰りみたいに大きなリュックサックを背負って私を見下ろしている。

「う、うう海原くんっ、どうしてこんなところにつ！」

あと、どうして学生服を着ているの。

「奴はどこだ」

「きゃんっ」

立ち上がりかけていた時に海原くんが突然顔を近づけてきたせいで、私は再び地面に尻餅をついてしまった。あう、いたい。

「いたたた……あの、やつって誰のこと？」

「侍みたいなふざけた格好した馬鹿野郎だよ。あいつはどこに行っただんだ」

その台詞を聞いて、私の脳内ではある日の出来事が鮮明にフラッシュバックされる。

野田村くんをいじめていた海原くんが私をぶった後、こっせんと

姿を現した侍マン様からチョップを受けてはたりと倒れる様子……。
「そっか、海原くんは侍マン様にあっさりやられちゃって逆恨みしてるんだよね」

「人をイラつかせるのが得意なんだなてめえは」

言いながら手元でぽきぽき指を鳴らしながら近づいてくる海原くん。

「ひゃう、ぶつちやいやっ」

「……くそつたれ」

私があぶたを閉じて身をぎゅっと縮こまらせれば、どういうわけか海原くんはこないだみたいに手を上げることなく、私にたった一言毒づくだけだった。

それから、地べたに座り込む私のそばを彼の足音が通り過ぎていく。

「あつ」

まるで嵐が去ったかのよう。私は目を開いてほっと息を吐き、ズボンの臀部についた砂埃を払いつつよいしょと立ち上がった。

「びっくりした」

彼に謝らなければならないことがあったのだけど、それはまた今度でいいか。

友香ちゃんちに行こう。

数分後。

「あら花実ちゃん、もう一泊していくの？」

「違うよー。歯ブラシ忘れちゃったから取りに来たの」

この住宅街で一番大きな住宅の豪華な玄関先にて、私は友香ちゃんとお話していた。

「分かってるわよ。私もさつき気づいて、早速綺麗なりボンを括りつけておいたわ」

にっこり優しい笑みを浮かべながら、親友の彼女は薄赤色のリボンで蝶結びされた歯ブラシを私に差し出してくる。さすが友香ちゃ

ん、喜ばせ上手なんだから。

「ありがとー。友香ちゃん大好き」

「私も大好きよ。ふふふふ……」

友香ちゃんの笑顔に少しだけ邪悪が混じっていたけど、そんな日常の風景は気にせずには私は歯ブラシを受け取って専用のケースに仕舞う。

もう忘れ物はないよね。よし、今度こそちゃんと帰ろう。

「じゃあね友香ちゃん、明日学校でね」

「さようなら。明日を楽しみにしているわ」

私は開きっぱなしだった大きな扉を抜け、門に向けてぱたぱた駆けていく。道に出たところで、私は再度振り返り、友香ちゃんに向けて大きく手を振った。

扉のそばで彼女が手を振り返してくれる。

「あんなお姉ちゃん欲しいなあ」

なんてことを呟きながら、私は身体をくるりとターンさせて方向転換した。

その際、視界の隅に映った一つの長方形に心が留まる。

友香ちゃんの名字が記された、この家の表札。

「まさか……いや、まさかねー」

さすがにそれは考え過ぎだよ、そんな偶然あるはずないよね。

私は頭に浮かんだこと振り払い、さっさと自宅に向けて歩を進める。角を曲がるうとしたところで、壁にぶつかった。

「ひゃんっ」

反動で尻餅をついてしまう私。

「てめえ、一度ならず二度までも……」

私があぶつかったのは壁ではなく、いつ見ても怒った顔をしている海原くんだった。

「う、うう海原くんっ、また会ったね、すごい偶然だねっ！」

よく見れば学生服の第一ボタンを開けている。これが不良っぽい学らんファッションというものかしら。

「さつさと帰れ、鬱陶しい」

端が吊り上がった険しい瞳で私を一睨みすると、海原くんはさつさと私のそばを横切ってしまった。

私は自分が尻餅をついていることも忘れて、海原くんの去って行く方向に目を向ける。

彼は「海原」と記された友香ちゃんちの表札の前で、カメラ付きのインターホンに指を押し込んでいた。

翌朝、ちよつとばかり雲の多い空の下で、街路の上を歩きながら私のはかの大親友からあることについてお喋りしていた。

「びつくりしたよー、まさか海原くんと友香ちゃんが従兄妹同士だったなんて」

「驚いてくれて何より」

衝撃の事実に驚きを隠さない私の頭をなでなでしてくる友香ちゃん。

ちなみに誕生日の差で友香ちゃんの方が彼より年下だったりするらしい。

「でもさ、どうして兄妹ってわけじゃないのに一緒に暮らしてるの？」

私が訊くと、友香ちゃんは眉を若干下げてちよつとした困り顔になりながらも答えてくれた。

「私もよく知らないのだけど、家庭で何かしらのトラブルがあったらしくてね。彼は二年前からうちで預かってるの」

「ふーん」

そういうことなら、他人である私はこれ以上のことを詮索することはできないかな。そのトラブルとやらが少々気になったのはとりあえず忘れて、私は新たに浮かび上がった疑問を解消するため、再び友香ちゃんに質問した。

「私、昔からしょっちゅう友香ちゃんのお家に行ってたしお泊りもしてたけど、どうして一度も彼と会わなかったのかな」

「裕樹はね、私の友達が遊びに来る時はいつもどこかへ行ってしまうの。花実ちゃんがお泊りする時は彼も友達の家に行って泊まっているみたい」

なるほど、あの大きなリユックサックはお泊りセットだったのか。「ふーん。どうしてそんなことするんだろ」

「私の友達は騒がしいからなるべく避けたいらしいわよ。前にそんなこと言ってたわ」

その騒がしい友達って私のことじゃないでしょうね。確かにいつも友香ちゃんにくすぐられたりして大きな声出しちゃったりするけど、だからって避けられるのは心外だなあ。

「それにしても」

友香ちゃんは話題転換の台詞を口にする、突然その綺麗な顔を申し訳なさそうな感情で埋め尽くしてしまう。

「改めてごめんなさいね」

そして、私のほっぺに手を触れながらそんなことを言ってきた。

「うちの子があなたにあんな酷いことして」

酷いことって、それは先月私が彼から受けた暴力行為（軽いビンタ）のことだろうか。もう友香ちゃんたら、気にしなくていいのに

「私こそまだ泥棒の犯人だって疑ったこと海原くんに謝ってないんだから、お互いさまだよ？」

「確かにそれについてはあなたにも非があるのは確かだけど、嫌なら別に謝らなくてもいいのよ」

眉を下げた友香ちゃんのらしくない表情をこれ以上見ていられなくて、私はできる限りの笑みを顔に広げた。

そして、プライドを懸けた私の気持ちを親友に伝える。

「うっん、ちゃんと謝る。私だって侍の端くれなんだから、ちゃんと義理は通すよ」

これでも侍マン様の弟子なんだからね。

「花実ちゃんってば……ついこないだまで見栄っ張りなだけのお子
ちゃまだったのに、すっかり成長しちゃって……私、嬉しいわ」

そんなむっとなるようなことを感慨深げに言われても。

「もう大好き」

次の瞬間、私はいつの間にか身体の自由を少しだけ奪われていた。
「あうっ、公然と抱きついてくるのはやめてっついても言ってるで
しょおっ」

じたばたと親友の腕からの脱出を試みる。だけど身長とかが違い
過ぎるせいかな、どれだけ身をよじっても全然抜けられない。

「とーっても大好きよ、花実ちゃん」

「このシチュエーションだとライクじゃなくてラブな意味として誤
解されちゃうよー」

「何言ってるの、好きがライクで好きはラブよ」

相変わらず友香ちゃんの愛情表現は激しいというか度が過ぎてい
る。いつも私と一緒にいたいという彼女の願いは分かるのだけど、
もう少し慎んでくれないとこっちが恥ずかしい。ついでに言うと五
月にもなれば気温が上がってくるのでとても暑い。

こっとなつたら話を逸らして会話のどさくさ紛れに逃げ出そう。善
は急げと私は彼女に向けて言葉を並べる。

「そっいえばさ、友香ちゃんと海原くんは一緒に暮らしているのに、
どうして登校は別々なの？」

すると友香ちゃんは腕を緩める気配も見せないで「それはね」と
私の質問に答えてくれる。

「私がああなたのお家まであなたを迎えに行ってるから、自然と登校
時刻がずれちゃうのよ」

「あう」

分かったことだけど。でも少しだけ従兄妹同士で仲が悪いのか
なと思っちゃってたから、少し安心したかな。

ってそんなことより、早く彼女の腕から脱出しなきゃいい加減汗
臭くなってしまう。

「えいつ」

私は突然に駆け出し振り切ろうとした。だけど、

「逃がさないわよ」

「ひゃあっ」

友香ちゃんのとんでもなく素早い反応で、私はまんまと捕らえられてしまう。あう、だから運動は苦手だよ。

「もう、逃げるなんて花実ちゃんは悪い子ね。そんな子にはお仕置きしなきゃ」

何やら恐ろしいことを言い始める友香ちゃん。とてつもない嫌な予感が全身を襲い、私は必死になって身をよじらせた。

「あうっいやよ離れてーっ」

必死の抵抗もむなしく、私の友香ちゃんの指が私の首に向かってどんどん近づいてくる。

もう少しで触れそうだ、私の弱点に。

「いやっいやだよおっ」

そして、ついにつつかれた。

首と頭の付け根の部分、要するに私の喉元を。

「ひゃうっ」

「よしよし」

続いて複数の指により喉元をくすぐってくる友香ちゃん。自然と顔の向きが上がってしまう。

「やん、にゃうっみあっ」

「花実ちゃんはここが弱いよねえ。ふふ、猫みたい」

身体中が次々と痺れていくような感覚が私の動きを鈍らせる。だめだ、もう逃げられない。

ちなみにその喉元とは、ついこないだのお泊り会の時に判明した私の弱点である。自分で触る分には何ともないのだけど、人からつかれたりされると思わず変な声が出てしまうのだ。

「やめっ、やめてよおーっ」

「じゃあずっと私に抱かれてなさい」

抵抗する私に対し、つついてくる指に力を入れてくる友香ちゃん。足が痺れた時と似たような衝撃が、私の全身を瞬間的に駆け巡る。「ひあつ分かったからやめてえっ！」

それから校舎の玄関に到着するまでの間、私は友香ちゃんに抱きかかえられつつ喉元への攻撃を受け続けるのであった。

歩いている最中はずっと悲鳴を上げていたため、周囲の人からは変な注目を集めまくりである。

あんもう、どうして友香ちゃんは好き好き言ってくるくせしてそんなに私のこといじめるかなっ。

五、いとこ揃っていじめっ子（後書き）

侍マン様って結構出番が少なくて寂しいです、もっと活躍してほしいですーっ。

六、仲直り大作戦

「あー、喉元が変な感じだよお」

友香ちゃんのおかげで全身が痺れ気味になってしまった私は、足取りをふらふらさせながらも教室を指指して廊下を歩いていた。

まったくもう友香ちゃんってば、どうしてこう私の弱点を見つけるとすぐにそこ目掛けて攻撃してくるのかなっ。

いつか絶対この弱点を克服してやる。そして今度は友香ちゃんの弱点を見つけて、思いっきり仕返しするんだ。

死ぬまでは絶対に成し遂げてみせると決意を固めたところで、私の肩はふと壁にぶつかった。

「お前な、何度ぶつかれば気が済むんだ」

私がつぶつかったのは壁ではなく、何故かうんざりした顔の海原くんだった。

「わわ、ごめんなさいっ」

「ったく、気をつける」

それからさっさと私のそばを横切ろうとする海原くん。

「待って、海原くんっ」

私は咄嗟に彼を呼び止める。

眉間にしわを寄せ、不機嫌ムードをたっぷり醸し出しながら振り返ってくれた海原くんは、私は丁寧かつ勢いよく頭を下げた。

「こないだはごめんなさいっ」

私は以前、野田村くんの上履きがなくなったことを海原くんの仕業だと勝手に決めつけ、そのことで彼を責め立てたことがある。

今まで何度かすれ違いを繰り返し、そして今回、私はようやくそのことを謝ることができた。友香ちゃん、待マン様、私頑張ったよっ！

心の底で静かに湧き立つ達成感に陶酔しながら、私はゆっくりと頭を上げ、上目遣いで海原くんの表情を窺ってみる。

謝ることはできたけど、許してくれるかなー。

「……こっちこそ、ごめん」

「ふえ？」

視線を逸らしながらだけど、海原くんは突然彼に似合わない一言を放った。

私がそれはどういうことか訊こうとしたら、彼は身を翻して逃げるようにこの場を去っていく。

ひよっとして、海原くんも自分のしでかしたこと（私に平手打ちしたんだよあの子は！）について私みたいに申し訳なく思ってたのかな。

彼が意外と素直な一面を持っていることに驚いた私は、同時にもしかしたらという考えを頭に浮かばせた。

海原くんは悪いことをしたと思えばちゃんと謝ることができる人なんだ。だから彼と野田村くんがちゃんと話し合えば、きっと二人は仲直りしてくれるはず。

よし、そうと決まれば早速二人を仲良くさせるための作戦でも練ろうかな。授業中にもつ。

まずは二人が面と向かえる状況を作らなきゃいけない。というわけで私は本日の放課後、二人をあるところに呼び出してみました。これから実況モードに入ります、桜田花実をよろしくーっ。

待ち合わせの場所に私が選んだのは第一理科室。そして放課後の現在、最初にこの場へと到着したのは野田村春平くんであります。ちなみに私は大きな机の陰に隠れてこっそり彼らの様子を窺うつもりであります。

「桜田さん、まだ来てないのー？」

とりあえず室内に向けて声を掛けてみた様子の野田村くん。さて、彼はこれから現れるはずの海原裕樹くんを相手に一体どのような反応を見せるのでしょうか。

（解説の海原友香ちゃん、どう思いますか？）

私にべったりとくっついてる友香ちゃんにひそひそと訊いてみました。

(うーん、そうねえ、強いて言うなら私は幸せ)

本当に幸せそうな顔をして私の顔に頬擦りをする彼女。私はただ暑いだけです。

そうこうしているうちに、廊下の方から誰かの足音が聞こえてまいました。休み時間の間に誘っておいた海原くんでしょう、はてさてこれからどうなるのやらっ。

理科室の扉がガラリと開かれ、案の定そこから海原くんが現れました。

「あ」

「げ」

野田村くん、海原くんの順にお互いへの反応をひらがな一文字で示すお二人。ちなみにもしまた海原くんが暴力行為に走れば私たちは全力で止めに入る所存であります。

「裕樹くん、久しぶり」

「どうしてお前がここにいんだよ」

愛想よく挨拶する野田村くんに対し、敵意剥き出しの海原くんは大変不機嫌そうな顔しております。

「ちよっと呼び出されて」

「チビガキか」

「うん」

チビガキって誰のことでしょうね。確かに私は背が低くて顔から性格まで子供っぽいとよく言われますけどね、チビガキだなんて言われたことはありませんでした！

(ちびっこい花実ちゃん、可愛くて大好きよ)

(あっ)

可愛いと言われてしまえば、まあちびっこいを受け入れなくてはなけれど。

さて話を戻しましょう。

私が海原くんの発言にぶんすかしている間に、どうやらお二人は自分たちで会話を進めていたようです。

「知ったことか、俺はもう何とも思ってたねえ」

「そんなこと言わないでさ……どうしたら、許してもらえるの？」
途中の会話を聞き逃しただけに何のお話なのかさっぱり分かりません。許す許さないとは一体どういうことなのでしょう。二人の過去に、何か臭います。

「言ってる意味が分からんのか。これ以上癪に障ること言いやがったら殴るぞ」

きゃー大変ですつ、海原くんが握り拳を見せつけて脅してきました、一大事ですつ！

（大丈夫、今回は私があなただけのことを守ってあげるからね。あなたのぶにゅぶにゅほっぺた、もう誰にも触らせないから）

暑いので友香ちゃんは離れてください。

さて野田村くんですが、彼から脅しに屈する様子は一切見られません。むしろ海原くんのそばに一步近づいてしまいました。

そして、

「……殴ってくれても、構わない」

目をぎゅっと閉じ、歯を食いしばりつつ放たれた野田村くんの一言に、

「だからムカつくんだよてめえは」

海原くんは一瞬のうちに鬼の形相を作り、目の前の彼に向かって拳を掲げて振り下ろす。

顔に握り拳をぶつけられ、口から赤い何かを垂らしてよろける野田村くんの姿に、私は少しだけ焦りを覚えた。

もう実況なんてしている場合じゃない。海原くんを止めに行かないと！

（待ちなさい花実ちゃん、もう少し様子を見ましよう）

「あつっ」

だけど私が彼らの前に飛び出そうとした矢先、友香ちゃんが私の

両脇から胸にかけて腕を回してきたために少しだけ転びそうになる。背中に友香ちゃんの身体を感じつつ、私は彼女の顔を見上げて反論した。

（でもでも、野田村くんは先月つけられた怪我がまだ治ってないんだよ？ 早く止めないと大怪我しちゃうかもだよ）

（もしあなたがここで止めに入ったら、また裕樹にぶたれて侍マンが現れて、最終的にはこないだの二の舞になるだけよ。それじゃ進展がないわ）

（じゃあどうするのっ！）

すると友香ちゃんは私の顎に人差し指をぴたりと当て、

（ふふ、どうなるかしらね）

それを喉元に向けて、

（え？ やっ、友香ちゃんちょっと待っ

一気に引いた。

「ひゃうっ!？」

今朝もいじられたけど、彼女の指に触られたそこは私の身体で一番弱い部分である。あう、やな感じがする。

「可愛いわ、花実ちゃん」

「やん、もうやめっちゃめってっ!」

指先でぐりぐりいじられるあまり、思わず裏返った声を出してしまふ私。構わずぐりぐりしてくる友香ちゃん。

「花実ちゃんは知ってるかしら？ そーいう風に特別感じやすいところを性感帯って言うのよ」

命をものすごく大切にしそうなその生還隊ってのと私の喉元に一体どんな関係があるって言うの。

「こちよこちよー」

「んっみゃっにあんっ」

そろそろ足つま先までもが変な感じになってきた。友香ちゃんの魔の指から逃れようとしても、私の腕や脚はその変な感じに支配されて動こうとしない。

というより、ちょっとでも動かしてしまつたら……やん。

「何してるの、桜田さんたち」

「……あほか」

気がつくと、目の前には野田村さんと海原くんが立ってこちらを見下ろしていた。随分と冷めた目で。

「たつ、たしゆけて……」

私は救済を懇願しつつ彼らに向けて手を伸ばす。上手く舌が回らない。

「海原さん、止めてあげなよ。とてもつらそうだよ」

「いいの、この子はこれで嬉しがってるんだから」

「ひゅっひゅれひくりゃんかやいおお！」

嬉しくなんかないよーって言ったのだけど、伝わったかな。

「なるほど、嫌よ嫌よも好きのうちってことか」

野田村くんが納得げな顔をして言う。何がるほどよ、何も分かってないじゃないっ！

「友香、頼むから止めてやれ」

不機嫌そうな顔はそのままに、どういう風の吹き回しか海原くんが私を助けようとしてくれる。

「あら、あなたさつきまで怒ってたんじゃないの？」

「怒りはすっかり萎えた。今はただそいつの鳴き声がかましい」

あう、やかましいだなんて酷い。

「分かったわ、従兄のあなたに免じて今日はもう止めにしましょう」
その言葉を皮切りに、私の喉元から友香ちゃんの指がすつと離れていく。やった、ようやく解放されたっ。

しかし時既に遅しで、私の身体はもう自力で立つことが困難なほど大きなダメージを受けていた。指先にも力が入らない。

そんな私をそつと床に寝かせた友香ちゃんは、

「あ、そういえば今日は放課後に大切な用事があるんだっただわ。というわけで、花実ちゃんの介抱は二人に任せるわね」

わざとらしく忙しそうに振る舞い、さっさとこの理科室から立ち

去ってしまっ。

いつもは「男は皆けだものよ」とか言ってるくせに、動けない私の介抱を二人の男の子に任せるなんて、一体どういうつもりだろう。そりゃ野田村くんや海原くんを信頼しないわけじゃないけど、もし気の迷いでも起こされちゃったら私……あう、別にそれでもいいかも。

「心配しないで桜田さん、今から保健室の先生に来てもらうから」
野田村くんはそう言いながら安心できる優しい笑顔を見せてくれた。うん、分かったー。

私がそうやってほっとしていると、突然右手がちよつとした圧迫感を感じる。

「あう、海原くん、どうしたのっ？」

少し視線をずらせば、いつの間にか真剣そうな顔をした海原くんが私の手を握っていた。

どうしたんだろう、女の子の手を握ったことがないからこれを機に握ってみようかと思ったのかな。ちなみに私も男の子に手を握られたのは生まれて初めてだよ。

しばらくして私の手を離した海原くんは、

「ひゃ、うう海原くんっ？」

今度はほっぺやおでこへなど、私の顔を次から次にぺたぺた触ってくる。ちよつとだけ照れてしまう私。

「体温がかなり上がってる。熱でぶっ倒れたってことにしてあげば怪しまれることはないだろ」

やけに触ってくると思ったら体温を診てくれていたのね。ごめんね、てつきり下心があるのかとばかり思ってた。

「さすが裕樹くん、いつもながら言い訳はばっちりだよね」

「てめえ喧嘩売ってんのかこの野郎」

「じゃあ僕は先生呼んでくる」

一通り海原くんを怒らせてから立ち上がり、理科室の出入り口から廊下に向かって駆けていった野田村くん。私はそんな彼の後ろ姿

を倒れたまま見送りつつ、待っている間が暇なので海原くんとお話をすることにする。

「二人とも、息ぴったりだね」

「……そうでもねえよ」

「なんで喧嘩なんかしたの？」

「チビガキの知ったことじゃねえ」

「あう、ひどいー」

それから、私は海原くんに話し掛け続けた。

彼は野田村くんの名前を聞く度に、少しだけ寂しそうな顔をする。私から喧嘩した理由をしつこく訊かれる度に、やっぱり寂しそうな顔をする。

部屋の出入り口から野田村くと優しそうな顔をした養護教諭が現れるまで、私は海原くんの寂しそうな顔を打ち消すことができなかった。

六、仲直り大作戦（後書き）

もう学校が始まってしまいました。なので次回からは毎週日曜日の週一投稿で頑張っていきたいと思います！

七、お見舞いはとっても嬉しいんだよ

保健室に運ばれた私は、暖色カーテンに囲まれた純白のベッドへと丁寧に寝かされてしまった。保健室の先生が体温計を持って私に近づいてくる。

「しばらくこれを脇に挟んでね。あんまり体調が悪いようなら保護者に迎えに来てもらうから」

「はい」

私は渡された体温計を裾からセーラー服の中へ潜り込ませ、脇に挟んだ瞬間の体温計のひんやり感にびっくりしっつ、ゆっくりと枕に頭を置いて寝転んだ。その間に先生は「体温計鳴ったら教えてね」とだけ言っつてこの場からいなくなってしまう。

「桜田さん、大丈夫？」

シーツを肩まで被り、ふうと溜め息を漏らして落ち着くと、野田村くんがにっこり笑顔を私に向けて訊いてきた。あえて心配そうな顔を見せないのは彼の優しさなのか、それとも全く心配していないのか。

「大丈夫だよ。また全身が痺れ気味だけど」

「そっか、それはよかった」

野田村くんはベッドそばの椅子に腰掛け、椅子の脚に二つの通学鞆を立て掛ける。ちなみにその中の一つは私の鞆で、彼がわざわざ運んできてくれたんだよ。

ところで現在、カーテンに囲まれたこの空間内には私と野田村くんの二人だけしかない。海原くんはいつの間にか消えてしまっていたのだ。

「海原くん、帰っちゃったの？」

「うん、後は僕に任せるとか言っつてね」

「ふーん……」

海原くんもつとお話して、野田村くんと仲良くするように説得

したかったのだけど、残念。

「ねえ桜田さん。さつき理科室で裕樹くんと何話してた？」

野田村くんがふと尋ねてくる。私は何気なく答えた。

「あなたたちが喧嘩した理由を聞いてたの。でも何も教えてくれなかつたんだ」

すると目の前に座っている彼は表情を少しだけ曇らせて、ふと前髪に視線を隠してしまう。

「ねえ、あなたたちの間に何があったの？」

野田村くんの返事を待っていると、しばらくして脇に挟まれた体温計からアラーム音が鳴り響いた。それを聞きつけてカーテンの向こうから保健室の先生が姿を現す。

「体温計見せてちょうだい」

私は言われた通りに体温計を服の中から取り出して、ベッドに寝転んだまま先生に手渡した。それから先生は「まあ大変」と言って目を見開く。

「八度五分、すっかり風邪引いてるわね。親御さんには連絡して来てもらうから、それまであなたはここで寝てなさい」

「あう、分かりましたー」

そんなにも体温が上がっていたなんて、自分でも全然気づかなかった。私は体温計を取り出す際にずれてしまった掛け布団を再度肩まで被り、なるべく安静にしようと努めてみる。

野田村くんからも喧嘩の原因を聞けそうにないし、今日のところは諦めよう。

それにしても、体温をはっきり教えられたおかげで本当に風邪っぽい気がしてきた。あう、何だか頭がくらくらする。

やば、本格的に風邪だ。友香ちゃんにあそこをいじられまくったせいで身体が弱ったのかな。あうー。

「僕は、裕樹くんの家庭を崩壊させたんだ」

頭がぼーっとするうえに視界がかすんでいく中で、微かに野田村くんの声が聞こえた。

「あの時に僕が余計なことをしていなければ、裕樹くんは今だって……」
歯を食いしばらせて顔を伏せる彼は、心がとても弱っているように見える。

野田村くんが言っていることの意味が、のぼせているような意識の中では上手く理解できなかった。

「だけど、彼のためにできることが今の私にもあるような気がして、野田村くん」
彼に向けて、そっと腕を伸ばしてみる。

「侍マン様に似たその顔を、悲しそうに歪めてはだめ」
とにかく慰めて、元気になってもらわなきゃ。暗い雰囲気とか苦手なもの。

「私ね、侍マン様の弟子なの。だから、いつかきつと、あなたの顔に笑みを咲かせてあげる」

「……ありがとう」
もう一度野田村くんの声を聞く。私の意識は、そこで途切れた。

目が覚めると、至近距離に友香ちゃんの瞳があった。

「あら、起きたのね」
「はわっ」

何やら残念そうな顔で溜め息を漏らすセーラー服姿の友香ちゃん。
「……あう、びっくりしちゃった」
私は心を落ち着かせるように咳きながらゆっくり上体を起こし、きよろきよろと周囲を見回してみる。

幼稚園の頃から変わらないピンク色のカーテンや壁紙、ベッドのシーツや枕、目覚まし時計と一緒に並べてある動物のぬいぐるみの数々……どうやらここは私の部屋で間違いないようだ。

でもどうしてかな、さっきまでは保健室にいたはずなのに……ま、

まさかつ。

「友香ちゃん。私、瞬間移動を覚えたみたい」

「気を失っている間に運ばれただけよ。まだ熱が高いんだから、ちゃんと寝てなさい」

せつかく得たと思つた特技が幻であることを知らされてがっかりする私の気も知らないで、さつさと私をベッドに押し倒そうとする友香ちゃん。

枕に後頭部を押しつけたところで、私はふとあることを思い出した。

「あつ、そういえば野田村くんと何か大切なお話をしていたような気が……」

でも全てを思い出せるわけではないようで、なんだか大変もやもやする。

喉のところまで出掛かつてるんだけど。

「彼、あなたにお礼を言つてたわよ」

「お礼？」

ずれてしまった掛け布団を丁寧に整えてくれた友香ちゃんは、それから私の頭を優しくなでなですつつ言葉が続ける。

「そうよ。あなたに励まされたおかげで、頑張る気になれたつて」

「ふーん」

何のことやらさっぱりだけど、とにかく私は野田村くんの役に立てたようだ。

「……えへへ」

この調子で人のために頑張っていれば、いつかきつと侍マン様のように立派な人になれるはず。もっと頑張ろう。

「ところで友香ちゃん、どうしてあなたが私の部屋にいるの？」

訊くと、幼馴染はにっこり笑つて言う。

「ボランティアよ。今日は一晩中あなたの看病をしてあげるわ」

「わあ、ありがとう」

ということは、今日は友香ちゃん、うちにお泊りしていくのかな。

やったー。

「花実ちゃん、今からあなたのために愛情たっぷり込めて至高のおかゆを作ってきてあげるわ。待っててね」

すると友香ちゃんは立ち上がり、部屋の扉に向かって歩いていく。廊下に出る寸前で、彼女は私の方に振り返り、また口を開いた。

「……………」

何か言うのかなと思ったら、一言も声を出さずに部屋を出て行ってしまふ友香ちゃん。

ぱたりと閉じられた扉を見つめたまま、私は親友のおかしな行動に頭の上でハテナマークを浮かべる。

「どーしたのかな」

あの瞬間に自分が何を言おうとしたのか忘れてしまったのだろうか。それとも別に意図がさっきの行動に隠されて…………。

「……………まあいつか」

彼女の行動が何かと怪しいのはいつものことだったのを思い出す私。別に気にすることじゃないよね。

ところで今は何時頃かな。私は頭の上に腕を伸ばして目覚まし時計を手にとると、それを目の前に運んで時刻を確認する。

「八時半かあ」

もちろん午後である。どうやら私は随分と長い間眠ってしまったようだ。

うーん、突然風邪を引いたのはやっぱり友香ちゃんに弱点をいじられまくったからなのかな。思い返せば今日は朝やお昼休みや放課後とほぼ一日中いじられたっけ。おかげで身体がすごくだるい。

まあ、例え体調を崩した理由が友香ちゃんのせいだったとしても、私は彼女を怨んだりしないけどね。さっきだって友香ちゃん、まるで責任を取るかのように私の看病をしようとしてくれていたんだもの。そういう義理堅いところ、侍みたいで大好き。

それにしても、友香ちゃんがいなくなってしまうからというも

の、一人ぼっちで少し寂しく思えてくる。こんな時に侍マン様が窓の向こうからでも現れて、私の話し相手になってくれたらとても嬉しいのに。

私は身体のけだるさもお構いなしにふと上体を起こして、ベッドのすぐそばにあるピンク色のカーテンに手を伸ばし、それをざつと開けてみる。そうしたところで侍マン様が現れるわけではないのだけど、寂しいから。

「花実、びっくりするじゃないか」

しかし袴と総髪が大変よく似合う侍マン様はそこにいた。彼は屋根の上、窓の前で今まさにノックをしようとしていたらしく、手の甲を窓ガラスへと向けている。

「わわ、侍マン様っ」

私は急いでロックを外し、力任せに窓をがらりと開けた。その瞬間に部屋へと流れ込んできたあまり温度を感じない風を受けつつ、私は叫び気味に言う。

「いいいいいらっしやいませえっ」

「お邪魔します。君が風邪で寝込んだって聞いたからお見舞いに来たよ、手ぶらで申し訳ないけど」

「そんな、こちらこそ大したお構いもできませんでーっ！」

嗚呼、感激だよ。私の妄想通りに今、憧れの彼が目の前にいる。話し相手になってくれようとしている。あう、嬉し過ぎていろいろどうにかなっちゃいそう！

「……ひゃっ」

すると、私は思わずぱたりとベッドの上に倒れてしまった。身体中がさつきよりもだるい。ちょっとばかしはしゃぎ過ぎたみたい。

「だめじゃないか、安静にしていなきゃ。ほら、布団もちゃんと掛けて」

そう言いながら掛け布団を整えてくれる優しい侍マン様。あう、幸せ。

私が幸せの海にぶくぶく溺れてしまう。もう私の人生から悔いが

全て無くなった気分。

「あのあの、侍マン様」

早速お話ししようと思っただけに口を開く私。だけどそれを遮るかのように部屋の扉ががちゃりと開かれて、

「花実ちゃん、美味しいおかゆができたわよー」

どんぶりをお盆に乗せた友香ちゃんが現れた。バッドタイミング。「待たせちゃってごめんなさいね……あら、どうしてここに侍マンがいるのかしら。不法侵入？」

友香ちゃんがこちらに歩み寄りつつ侍マン様を犯罪者扱いしようとしている。私は慌てて、なおかつ幸せを隠しきれない笑顔で、彼女の誤解を解こうと努めてみた。

「侍マン様はね、私のお見舞いに来てくれたんだよお」

「……ふーん、そうなの」

どうやら侍マン様が不法侵入者ではないことをちゃんと分かってくれたみたい。

「花実ちゃん、おかゆ熱いから気をつけて食べてね。私はちょっと台所の片づけしてくるから」

「うん、ありがとー」

私は上半身を起き上がらせておかゆを受け取り、部屋を出て行く友香ちゃんに感謝の言葉を捧げた。

とてつもなく優しい親友が部屋からいなくなってしまうと、私はラーメン屋さんでよく出てくるあのでっかいスプーン（後で聞いた話だと、このスプーンは蓮華という名前らしい）を手にとって、おかゆを掬う。

「いただきまーす」

「じゃ、拙者はもう帰るよ。病人に気を遣わせちゃ悪いし」

侍マン様のその言葉に、私は思わず大きなスプーンをおかゆの中へと沈めて、

「もう行っちゃうのですかっ？ もう少しおそばにいてください、寂しいですーっ」

彼の袴をつかみ、駄々つ子みたいで恥ずかしいとは思いつつも必死に懇願した。

「はは、花実が寂しがり屋なんだね。分かった、もう少しだけここにいろよ」

「あう、嬉しいです」

今日の私はとてつもなくラッキーかもしれない。侍マン様がお家に来てくれたし、さっきも私のもうちょっとそばにいてというわがままにも耳を傾けてくれたし。

よし、こうなったら彼とたくさんお話しちゃうよ。

「侍マン様、どうして私のお家が分かったのですか？」

「拙者はこの町のことなら詳しいからね」

さすが侍マン様っ。

「あのあの、私この町で暮らしてるんですけど、まだまだ知らない道とかいっぱいあるんです。だから、その……」

「そうなんだ。じゃあ機会があれば道案内してあげるよ」

「あうっありがとうございますっ」

これって機会があればデートしてくれるってことにもなるよね。すごく楽しみ！

「ところでさ、花実はどうして侍になりたいと思ったのかな」

今度は彼の方から私に質問してきた。嬉しいな。

「テレビの時代劇を見て、それに出てたお侍さんが優しく強くてカッコよかったから、憧れちゃったんです。だからなんですっ」

あう、自分で話してて恥ずかしくなってきた。なんて幼稚な理由なんだろう。

「そっか。君らしくて可愛い理由だね」

わ、わわわ私らしく可愛いって！

「えへへ、きょーしゅくです」

思いつきり照れてしまったおかげで、普段は絶対使わないような難しい言葉がつい口から飛び出してしまった。ところで「きょーしゅく」ってどういう意味だろう。

私はそれからも様々な話題を次々と持ち出した。

「侍マン様、失礼ですが年齢はおいくつですか？」

「拙者、ここ最近日付を確認していないからね。生まれてから何年経ったのか、すっかり分からなくなっちゃったよ」

「あう、ひよつとして生まれつきお侍さんだったのですか？」

「物心ついた時から戦ってたから、それは言えてるかな」

「さっすが侍マン様、尊敬しますーっ」

「いやあそんな風に言われると照れるね」

あう、照れ臭そうに頭を掻いてみせる侍マン様も素敵。

「ところで花実、そろそろおかゆ食べないと冷めるんじゃないかな」

「いけない、忘れてたっ」

さすが侍マン様、細かいことによく気がつく。私は感心しながら早速大きなスプーンを手に取り、おかゆを掬って口に運ぶ。

「あうっ」

だけどそれは未だに熱く、実は猫舌な私はその温度に耐え切れず、ちよつとした悲鳴を上げてしまう。

「あうー、べろ焼いちゃったかも……」

「大変じゃないか。どれ、ちよつと診せてごらん」

私が大きなスプーンを再びおかゆに沈めていると、侍マン様が私の口元に焦点を合わせてじつとし始めた。え、何を見たいのですか？

「ほら、舌を出して」

言われるがままに、私はひりひりするべろを「んっ」と出して彼に向ける。

じつと見てくる侍マン様。あう、べろが汚れてたらやだなあ。

「うーん、綺麗な桃色をしてて一見健康的な舌のようだけど……」

それにしても、べろじつとを見つめられるのってなんだか恥ずかしい。早く終わらないかなあ。

「ひゃむらいみゃんひゃま、わふあひはいふまべこつひぺへばいい

ほへひよーは」

侍マン様、私はいつまでこうしてればいいのでしょうかと訊いて

みた。

「ん、もうちょっと。うーん……」

それから彼の診断が終わったのは、おかゆがちょうど食べやすいぐらいに冷めてしまった頃のことだった。

七、お見舞いはとっても嬉しいんだよ（後書き）

次からの投稿は毎週日曜日ですからねっ！

ところでお見舞いですけど、皆さんもお知り合いの方が体調を崩して寝込まれた場合は、ちょっとだけでもいいのでお顔を見せてあげてくださいね。病人は暇ですからっ。

八、えっ爆発オチとかって！

「うん、大丈夫。火傷はどこにもなかったよ」

ベッドの上でべろを差し出す私にそう言つと、侍マン様は顔を離してにっこり笑顔を作る。

「あひはほーごはいまひたつ（ありがとうございましたっ）」

「どういたしまして。もう舌を引っ込めてもいいよ」

「あっ」

ふう、恥ずかしかった。

それにしてもさすが侍マン様だね、べろが火傷したかどうかを見ただけで判断できるなんて。やっぱり戦いの絶えない日常だろうから、最低限の医療知識は持ってたりするのかな。

私も頑張ってお勉強しないと……お勉強は、まあ明日から頑張ればいいや。

「花実、拙者の見たところだとそのおかゆもそろそろいい具合に冷めてきたよ。早く食べな」

侍マン様は私の膝の上を指し、私をおかゆの入ったどんぶりに注目させる。

「はい、分かりましたあ」

おかゆの中に沈められていたでっかいスプーンを取り出し、念には念を入れてふーふーしてから口に運ぶ私。さすが友香ちゃん、美味しくてできる。

「美味しいかい？」

口に物を入れたまま喋るわけにはいかないの、私は満面の笑みを作り頭を縦に大きく振ることで「美味しいですー」という私の意思を伝えた。

「そっか」

それにしてもつくづく幸せだな。侍マン様がわざわざ私のお見舞いに来てくれただけでもものすごく嬉しいのに、こうやって笑顔で

私と会話してくれている。もうくどいくらい嬉しい。

「ところで花実、何か困ったことはない？」

私がおかゆと幸せを噛み締めていると、侍マン様が唐突にそんなことを訊いてくる。

「困ったこと、ですか」

「うん。風邪のせいではできないことかあったら言つてよ」

この瞬間、私の頭にとある男子二名の顔が思い浮かんだ。

何を考えているのか分からない野田村さんに、何かと喧嘩っ早い海原くん。顔を合わせるたびに険悪な雰囲気を作り出すこのコンビをどうにかしたい。

今日の放課後の理科室で、私は二人にちゃんと仲直りしてもらわずだった。二人きりで話し合いをする機会があればきっと分かり合えると思っ呼び出したのに、結局こないだの二の舞になってしまったのだ。

私の単純な作戦だと二人は仲直りできない。だったらこの際、侍マン様のお知恵を拝借するしか手はないだろう。

「喧嘩している二人の男の子のことで、ちょっと困りごとがありませんっ」

それから私はおかゆを食べるために動かしていた手を止め、野田村くんと海原くんの関係について丁寧な語り始める。

いや、語り始めようとしたところで、

「春平と裕樹のことかな」

侍マン様がその口を開かれた。

「あう、知っていたのですか」

お耳が広いです。

「拙者はこの町の事情なら細部まで大体把握しているからね」

さっすが侍マン様、本格的に地域密着型のお侍さんですねっ。

「あの二人のことなら心配要らないよ。拙者の勘だけと、そのうち何とかなるさ」

侍マン様は微笑みをこぼしつつ、本当に何の心配もしていないか

のような軽い態度で言う。そのあっけらかんとした彼の言葉に、私の中でほんのりと安心感が広がっていった。

「本当ですか？」

「もちろんだとも」

心配要らないと言われて心配しなくなるなんて、私ってばものすごく単純なのかもしれない。侍マン様が仰ったことでなければ信用しなかっただろうけど。

「よかったですー」

侍マン様の意図はよく分からないけど、何もしなくていいなら私は何もしない。今日のことと私が何かを企むと喧嘩が起るというのが分かったし、しばらくは安静にしていよう。

「ところで花実、他に困ったことはないかい？ なければ拙者はそろそろお暇するけど」

安心した矢先、侍マン様が私の中に不安を生むようなことを仰った。

どうしよう、他に困ったことを相談しなければ侍マン様が行ってしまうのか。何とかして引き留めないとな、うーん困った！

「ないようだし、もう帰るね」

「あっ」

久々に会えたというのにもうお別れだなんて、そんなの絶対に嫌だ。

このとてつもなく悲しい運命に逆らう術はないものだろうか。

「じゃ、さらば」

瞬間、侍マン様が屋根の上にジャンプしたかと思えば、まるでレポートをしたかのようにその姿を消してしまう。

「……あう、行ってしまわれちゃったあ」

私は開きっぱなしになった窓の向こうを眺めつつ、三度おかゆに手をつける。

今日は星が見えないなーと思ったら、突然小さな滴がぼたりと降ってきた。私がおかゆから手を離し、窓を閉めようとしたところで、

部屋の扉ががちりと開かれる。

「ただいま花実ちゃん、おかゆ食べた？」

その声に、私の中で何か温かいものがこみ上げてきた。

「友香ちゃんっ」

寂しかった気持ちが一転、私は嬉しくなつて友香ちゃんの方に勢いよく振り返る。

「会いたかったよーっ」

「あら、また随分と可愛いらしいことを言うのね」

待マン様相手には遠慮してできなかったけど、友香ちゃんが相手ならいくらでも甘えていられる。私は布団から立ち上がり、唯一無二の大親友に飛びついた。

「よしよし。もう、あまえんぼうなんだから」

私にお姉ちゃんがいたとしたら、やっぱり友香ちゃんみたいなのがいいな。

それから身体中にだるさが蘇つたのは、調子に乗つた友香ちゃんが私の喉元を触つた時だった。

保健室の先生が言うには一晩ぐっすり眠れば治るはずだった風邪が、友香ちゃんのせいで二日間も長引いてしまった。

三日ぶりに登校した私は、自分の教室に入るとすぐさま席に着く。

「おはよう桜田さん、風邪治った？」

私より先に来ていた野田村くんが挨拶してくれた。荷物を机の中に片づけつつ、私は無理やり笑顔を作つて言葉を返す。

「まだちよつとだるいかな。あう、しんどい」

頭が重い。

片づけ終わると、私は机の上にくてーと突っ伏してしまふ。

「耐えられなくなつたらいつでも言うんだよ、無理しちゃうだけだからね」

「はい」

もはやお返事するのもしんどくなってきた。早くお家に帰りたいな。

そして時間は過ぎていき、ホームルームが終わって束の間の休み時間に入った頃。

「桜田さん、次移動教室だよ。ほら立って」

「あー」

なんてついてないのだろう、わざわざ一時間目から長い長い廊下を歩いていかなければならないなんて。

……やがて約一時間が経過すると、私はまた地上の果てまで続いていそうに思える道の上を歩むはめになる。

「桜田さん、教室に戻るよ。ほら立って」

「あー」

……それからさらに約一時間後、私に新たな試練がっ。

「桜田さん、次は体育だよ。女子は更衣室に行かなきゃ」

「あー」

……またなんだかんだで約一時間後、今度は先生に叱られて。

「こつら桜田、俺の授業中に寝るとは何ごとだ」

「あつ、先生ごめんなさいー」

……もう何度目になるだろう、また約一時間が経過すると、

「長かったーっ」

私は午前中の間ずっと心待ちにしていたお昼休みの始まりに感動するあまり、身体中から一気に力を抜いて解放感に身を投じた。

机に突っ伏した私に向けて、野田村くんが声を掛けてくる。

「桜田さん、本当に大丈夫？ 風邪をぶり返すといけないから、今

日はもう保健室で休んだ方が……」

「大丈夫だよお。侍はねえ、これくらいじゃばてないんだよお」

「今にもばてそうな人間にそんなこと言われたって信用できないよ」
今の私ってそんなに弱って見えるのかな。

「ほら立って。君を保健室に連れて行くから」

「あう、大丈夫なのにい」

それから私は野田村くんの手首を引つ張られ、お弁当を持って泣く泣く保健室に向かわなければならなくなってしまった。

本当に大丈夫なのに、野田村くんってば心配性だなあ。あう、足がふらふらする。

「花実ちゃん、保健室に着いたらあーんしてあげるからね」

「自分で食べれるよお」

「君たち、本当に仲がいいんだね……はあ」

途中で合流した友香ちゃんも含めて保健室に向かう私たち。どういっわけか溜め息を吐く野田村くんの声を聞いて、私はふらふら歩きながら思わず彼に訊ねた。

「どうしたの野田村くん、私より元気なさそうだね」

「さりげなく自分は大丈夫アピールしなくていいからね」

「あうー」

それにしても、さつきから歩を進めるたびに足が段々と重くなっていっているような気がする。風邪、本当にぶり返しちゃったのかなあ。

「ところで花実ちゃん」

いきなり話し掛けてくる友香ちゃん。

「なーに？」

「さつきからガス臭くないかしら。理科室の方から臭うわね」

すると、私が答えるより先に野田村くんが口を開く。

「そういえばそうだね。もし密室の理科室でガスの元栓が開きつ放しになってたら大変だよ。あそこ結構な薬品あるから、ひよんなことで発火したら大惨事に……」

次の瞬間、どごごごーんという大きな音が私の耳をつんざくように校舎内で鳴り響く。

もう、うるさいなー。

「あら、滅多に聞かない大音量の轟音ね。どうしたのかしら」

落ち着き払っている友香ちゃんに、

「轟音というより爆発音だよこれ。ていうかさつきあっちの校舎明らかに爆発したってのに、何で二人はそんなにも落ち着いていられるのー！」

窓の方を指差して顔を青くしつつ慌て出す野田村くん。

「もー野田村くんたら、理科室からガス漏れしたうえに大爆発だなんて最近アニメでも滅多に見ない事件がこんな身近に起こるわけないじゃないー」

「それが起こったんだって今っ！ 海原さん、僕ちよつと見てくるから桜田さんをお願いっ」

あう、野田村くんては急に走り出しちゃって、一体どうしたのかしら。

「はいはい、さっさと行って私と花実ちゃんを二人きりにさせなさいこの野次馬小僧。さあ花実ちゃん、私たちは保健室でらぶらぶしまししょうね」

相変わらず落ち着き払っている友香ちゃんは、

『火災発生、火災発生。速やかに避難せよ』

「……ちっ」

どういっわけか、警報器がけたたましく鳴り響くのと同時にとてもなく不機嫌な顔になってしまった。あう、ちよっぴり怖い。

というわけで。

『点呼が完了しました。これから帰宅する際の注意事項を』

学校中の生徒は皆、先生たちによる指示のもと、昨日まで降っていた雨により若干ぬかるんでいる校庭へと集められた。

『えー生徒の皆さんは、本日は速やかに下校することになりましたので、帰りの際は十分気をつけて』

泥まみれな地面の上に腰掛けることを嫌がる私たちは、泥を制服につけないよう少しだけおしりを浮かせて、拡声器から鳴り響く校長先生の声に耳を傾けている。

「あう、しんどいよう……」

そしてこのしゃがんだ姿勢は身体への負担が果てしなく掛かってしまったため、ただでさえ意識が朦朧としている私はいつ倒れてもおかしくない危険な状態だ。

もしこのまま倒れてしまうと私は一瞬にして泥まみれになってしまふ。それだけはなんとしても避けたいのだけど、

『それと、そんな人はいないとは思いますが、消防署の方々の仕事を邪魔しないようくれぐれも気をつけて』

校長先生のお話がさつきから一向に終わらない。このままじゃ我慢し切れなくなって倒れちゃうよ あれ。

どういうわけか、身体中がいきなりひんやりと冷たくなってしまった。

「せんせい、桜田さんが倒れましたー」

クラスメイトの誰かさんの声を聞くのと共に、意識が段々と遠のいていくのを感じる。

あう、結局私は泥まみれになってしまったらしい。

何とか消火活動が終えられた後、どうやら私は保健室のベッドに運ばれたようだ。

目が覚めた瞬間、私のはっとなって上半身を跳ね上げると、

「あら花実ちゃん、ようやく起きた？」

そばにある椅子に腰掛けてにつこり微笑む親友の顔が目映り、

「おはよー、友香ちゃん」

ついでに体操服姿の自分の姿も目に映った。いつの間にか私は制服から着替えさせられている。

「大変だったわね。まさか理科室が爆発するなんて」
「あう」

そういえばそんなことがあったんだっけ。風邪で頭が朦朧としてたからいまいち危機感が湧かなかったけど。

「体調はどう？ 倒れてしまっぐらいだからかなりつらいのでしょうけど」

「ううん、ぐっすり寝たらすっかり治ったみたい」

ふと壁に掛けられた時計へ視線をやると、短針は間もなく五時を差そうとしていた。五時間も眠っていたらしい。

「そう、よかった」

ほっと安堵の溜め息を漏らす私の大親友。ひよっとして友香ちゃん、お昼に私が倒れてからずっと看病していてくれたのかな。

相変わらず、優しいんだから。

「ところで花実ちゃん、あなたが眠っている間に侍マンから伝言を預かったわ」

「でんごん？」

ていうか侍マン様、また学校に来てたんだ……だったら挨拶くらいしてくれてもいいのに。

すると友香ちゃんは唇の端をつり上げ、少しばかり不気味さを感じさせるような笑みを作って言う。

「理科室爆破によるテロ事件の犯人を突き止め、自首を勧めよってね」

「……あう」

犯人って？

八、えっ爆発オチとかって！（後書き）

侍マン様とらぶらぶ。い、いちゃいちゃしよーよっ！

……もう、何言ってるんだろ私ってば。でももし体調不良の時に想
い人が「お見舞いだよ」と現れてくれたらとても嬉しいですね。
立派な侍になれば人気者になって皆からちやほやされるかもしれま
せん。花実ちゃん、がんばれー。

九、許せない理由

友香ちゃんから聞いた話では、侍マン様は燃え盛る理科室の中である発火装置を見つけたらしい。さっすが侍マン様、炎の中もなんのそのだね。

「で、これがその証拠よ」

話しながら友香ちゃんが私に手渡したのは、すっかりローストされてしまった黒焦げのライター。

「爆発する寸前にガラスの割れる音を聞いた生徒がいたんだって。

きっと石か何かをくつつけて外から投げ込んだのね、ガスの充満した理科室の窓に向けて」

私は上半身の白い体操着と保健室の白いベッドに汚れをつけないよう注意して、焦げたライターを三百六十度からゆっくりと見回してみる。よく形が残ってるね。

「しかもご丁寧に、どれだけ速く投げてモライターに灯った火が消えないように細工されているわ。このことから、理科室を故意に爆発させた人物の存在が想定できるわけ。分かった？」

私の頭をなでながら優しく諭してくれる友香ちゃん。

なるほど、そんな悪い人がこの世にいるのか。

「分かったー。で、私とその犯人さんに自首するよう説得すればいいのね」

「そつよ。よくできました」

皆の学び舎に傷をつけるなんて許せない。侍マン様に代わってお仕置きしに行かなきゃ。

私は黒焦げライターをポケットの中に入れて、ベッドから出ようと床に足を落とす。とりあえず足元で発見した私の上履きに足を入れようとすると、友香ちゃんが両手で私の肩をつかみ、ベッドにふわりと優しく押し倒してきた。

「まだ寝てなさい。あなたは自分が思ってるよりもずっと病弱なの

よ、また風邪をぶり返したらどうするの」

「大丈夫だよおつ、それより犯人さん見つけなきゃ」

友香ちゃんは抵抗する私の手首をベッドに力強く押さえつけてくる。私の力じゃ友香ちゃんを押し返せない。

「そんなに焦らなくても大丈夫よ。第一、あなたにそんな手柄を期待してるわけじゃないじゃない」

拳げ句の果てにはぐさつとなるようなことを言われてしまった。

「ひどいつ、それ、ちよつと傷ついちゃうな！」

もつと期待されてるはずだもん。

「ここで派手に動いて、また風邪が悪化したらどうするの。だから元気になるまであんまり動いてはだめ。分かった？」

友香ちゃんは少しだけ眉間に少しだけしわを寄せてちよつぴり怒った顔になる。それに怯んでしまった私は、素直に屈服の音を上げてしまった。

「あうつ、分かったよお……」

久しぶりに怒られてしまったかもしれない。私って怒られ慣れてないから、ちよつとでも怖い顔されるとすぐに参ってしまう。

「分かればよろしい。素直ないい子ね」

それから寝転んでいる私になでなでしてくる友香ちゃん。彼女の怒った顔から笑みがこぼれた瞬間、身体中から力が抜けていくのを感じた。

やっぱり友香ちゃんには怒られたくないなあ。もう逆らわないようにしよう。

「あ……ごめんね花実ちゃん、ちよつとお手洗に行かせてもらうわ。あなたを一人にするのはとても心苦しいけど」

私の手首を押さえつけていた手が離れ、肩まで白いシーツを被された時、友香ちゃんはそんなことを言い出した。

お手洗……そうだ。友香ちゃんがいないうちに抜け出せば、怒られることもないんだ。

「大丈夫だよつ、私は大丈夫だから早く行っておいで！」

やった、早速チャンス到来っ。

それから友香ちゃんはベッド脇の椅子から立ち上がり、純白のカーテンに囲まれたこの空間からそそくさと姿を消す。しばらくして保健室の扉が開閉される音を聞くと、私はしめしめと言わんばかりにベッドから抜け出してこの部屋を出ようと出入り口に向かった。

てくてく歩き、扉の前に立つ。私が取っ手に手を掛けがらっと開いたところで、

「やっぱり抜け出そうとしたわね」

どういうわけかお手洗に行ったはずの親友が現れる。背の高い彼女は私を見下ろして、眉間に少しのしわを寄せていた。

「あうう……」

そしてまんまと捕まった私は、

「友香ちゃん、もうこそこそ出てったりしないから、これ外してよ
お」

ベッドの上にて、掛け布団であるシーツを身体中に巻きつけられ、身動きを大きく封じられてしまう。

「だめよ。よし、ついでに目隠ししておきましょう」

「あう」

すると友香ちゃんは理科室のどこかからタオルを持ってきて、動けない私の視界をまんまと塞いできた。

「周囲が全く確認できないままシーツから脱出しようとして暴れれば、下手すりゃベッドから落っこちて大怪我しちゃうかもしれないわね」

「ひどいよ友香ちゃん、それが大親友にする仕打ちなの？」

私は彼女の声がある方向へ顔を向け、必死の抗議を試みる。

「自業自得だと思いなさい」

一蹴されてしまった。今日の友香ちゃんは厳しいなあ。

「じゃ、今度こそお手洗に行ってくるわね。あなたが目を覚ますまで我慢してたんだから」

タオルの表面以外に見えるものがなくなった世界の中で、足音と

扉の開閉による音とが順番に聞こえてくる。

「うーん」

何とかしてベッドから落っこちずにこの拘束から脱け出る方法はないものだろうか。

普通ならこういう場合は身体を転がすだけでシーツがはらりと外れるのだけど、ここは狭いベッドの上。しかも目隠しされてるとなれば下手に動くことはできない。

「しょーがないか」

身をよじらせるだけじゃどうしたって脱けられないし、もう諦めよう。友香ちゃんの言う通り、大怪我をするかもしれない。

それにしても暇だなー。動けないし何も見えないし、できることといえばお喋りと歌唱くらい。

話し相手がないからお喋りはできない。というわけで私は歌うことにした。

一人ぼっちで寂しいから、なるべく大きな声で！

「ぽっぽっぽー、はとぽっぽー」

「歌うにしてももっとマシな選曲はできなかったのかてめーは」

「あつっ！」

突然、どこかで聞き慣れた男の人の声が聞こえた。私は驚いて思わずむせ返ってしまう。

「こほっこほっ、あつっこほっ」

「風邪引いてんのに歌うからそうなんだよ、あほめが」

ぶっきらぼうな口調といい乱暴な言葉遣いといい、さっきから私に話しかけているのはどうやら海原くんのようなのだ。

「海原くん、こんなところで何してるの？」

私が歌う寸前も歌っている最中も、保健室の扉が開いたような音は全く聞こえなかった。いつの間に近づいてきたのだろう。

「授業サボってここで寝てたら、いつの間にか隣のベッドに芋虫がいたってただだよ。お前こそ何やってんだ」

あつ、恥ずかしい格好を見られてしまった。芋虫……。

「あはは、私はちょっとした事情があつて……あ、そうだ」

そこで私は頭の上に電球を浮かべてあることを思いつく。私って結構頭いいかも。

「ねえ海原くん、このシート外して。これのせいで動けないの」

「知ったことか、俺は帰る」

「お願い、助けてーっ」

さっさとこの場を立ち去ろうとした海原くんの足音を聞いて慌てた私は、優しい従妹を持つてくるくせして全然優しくない彼を大声で呼び止める。もう彼しか私を解放してくれる人はいないのだ。

必死な私の呼び掛けに心を突き動かされたのか、海原くんは私の身体を巻きつけているシートに触れてきた。

「猿みたいにキーキーうるせーんだよ。分かったからもう黄色い声出すな」

やった、これで理科室に行ける。作戦大成功っ。

「というわけで理科室に来てみましたー」

「どうして俺まで来なきゃならんのだ」

真っ黒焦げになってしまっている理科室の中に足を踏み入れながら、海原くんが何やら私にぶつぶつ文句を言ってくる。そんなのはとりあえず無視して、私はざっとこの室内を見回した。

どうしたことだろう。事件からまだ五時間しか経ってないのに、警察とかが誰一人来ていない。事故つてことにしてさっさと捜査を終わらせちゃったのかな。

もう、誰かがやったって証拠はちゃんとここにあるのに、最近の警察はせっかちなんだから。私はぶんすか怒りつつズボンのポケットから黒焦げのライターを取り出す。

「あ」

そっか、これがここにあるから事故ということで済まされたんだね。いやあこれは一本取られちゃったな！。

「おい、ひょっとして放火犯はお前なのか」

海原くんが私の手元に視線を向けながら目を丸くして訊いてきた。どうやら誤解してるみたい。

否定しなきゃっ。

「違うよ、これは侍マン様がここで拾ったもので……」

「侍、だと?」

その瞬間、海原くんの眉がぴくっとつり上がる。

「あの野郎がここに来たのなら、また来るかもな」

眉間に尋常でないほどのしわを寄せ、心の中に滾るものを無理やり押さえ込んでいるかのような声で呟く海原くん。

「そ、そうだね……あう、怖い」

どうして海原くんは侍マン様に対してそれほど憎らしげな態度を取るのかな。それじゃあ逆恨みだよ、もともとは海原くんが悪いんだから。

「……あ」

以前に侍マン様が海原くんを倒した瞬間の映像を頭の中で再生していたら、連想してとある大事なことを思い出した。

早く野田村さんと海原くんを仲直りさせなきゃ。侍マン様は何もしなくたって大丈夫みたいなこと言ってたけど、やっぱり私は私にできる限りのことをしたい。

「ねえ海原くん、野田村さんと仲直りしてよ」

ということ、私は直接お願いしてみた。

「……………」

すると私に目を合わせて何やら思案し始めた海原くん。

やがて、彼はゆっくりと口を開いた。

「俺はもともと、あいつに対して怒りも憎しみも持っちゃいなかった」

顔を伏せ、目線を伸びた前髪に隠し、海原くんは言葉を繋げる。

「何とも思ってたねえってのに、春平は勝手に責任感じて、勝手に罰を受けようとして……そういうあいつの態度に、すげえ腹が立ってな」

『……殴つてくれても、構わない』

ふと頭に浮かぶ、つい最近に野田村くんが放ったその言葉。

「ちよつと昔までは、『殴るぞ』なんてのはお互い冗談で通じる言葉だったのに」

歯を食いしばる海原くんの口元。語りから呟きに変わる、彼の声量。

「だから俺は、あいつがあのだ加害者ぶつた態度を改めるまで絶対許さねえ。絶対だ」

どうして海原くんが急にそんなことを話してくれたのかは分からない。どうせ私があんまりしつこく仲直りを勧めてくるものだから、少し黙らせるつもりだったのだろうけど。

「そっか、そうなんだ……」

でも、やつとその重かつただらう口を開いてくれたことに、私は少しだけ嬉しくなった。

よっし、そうと分かれば明日辺り野田村くんにそのことを教えてあげよう。これで二人は仲直りしたも同然。

「おいチビ、一応言っとくけどな、このことを春平に喋りやがったら冗談抜きで容赦しねえぞ」

「あつっ」

釘を打たれた。

後でこっそり野田村くんに話したとして、もしばれたらどうなっちやうのだろう……怖いからやっぱり話さないでおこう。こればかりは野田村くんに自分で気づいてもらうしか、ないよね。

それから私たちはしばらく理科室の中をうろろした。だからって爆破事件の犯人の手掛かりがつかめるわけでもなく、ただただ体力を消耗していくだけになる。

私があつと溜め息を吐きなくなった頃、

「今日中に侍がここに戻って来ることはなさそうだな。俺はもう帰るぞ」

窓から暗くなり始めた空を見て言うと、私を置いてそそくさと理科室の出入り口へ歩いていく海原くん。

「あう、待ってよー」

私は慌てて彼の後を追いかけた。

捜査はもう完全に行き詰っちゃったし、私ももう帰ろう。

そうして、私たちが揃って黒焦げの空間から出ようとしたその時。

「こら花実ちゃん、勝手に保健室抜け出して、だめでしょう」

廊下にて友香ちゃんが現れた。

「げ」

まずい、とでも言いたげな顔を作る海原くん。一体どうしたのだろう、同居している従妹に向かって「げ」だなんて。

「あら裕樹、もう花実ちゃんに触れることは許さないと断ったはずよ。それなのにあなたは何してるのかしら」

「このチビが無理やり引つ張ってきただけだよ、俺にはやましいことなど一つもない」

「花実ちゃん、それ本当？」

「あう、そ、それはっ」

困ったことになった。ここで素直に頷けば私は友香ちゃんにお仕置きされるかもしれないし、首を横に振れば海原くんに何かしらの危機が訪れそうな予感。

「その、あの」

海原くんに犠牲になってもらうか、それとも侍らしく自分のしでかしたことについてちゃんと罰を受けるか……悩むまでもない二択だけど、それでも何とか逃げ道はないかと、私はとにかく辺りをきよろきよろ見回してみる。

「……友香ちゃん、ごめんなさい」

結局、私に逃げる術などなかった。

「素直でよろしい。じゃ、花実ちゃんはこれからお仕置きね」

「あうっ」

一瞬「もう、しょうがないんだから」という言葉だけで済まして

くれることを期待した私は、世の中と友香ちゃんは結構厳しいということを思い知らされてしまう。

「じゃ、俺は帰る」

それからさっさとこの場から立ち去ろうとする海原くんの背中を呼び止める間もなく、友香ちゃんが私のことを正面からぎゅっと抱き締めてきた。

私は親友の胸に埋められた顔を上げると、視線の先には友香ちゃんの邪悪な笑みが！

「さあて、どんなお仕置きしてあげようかしら……ふふ、ふふふふ」
「友香ちゃん、最近何だかとてもデンジャラスな感じがするよお……」

そしてこの後私は、友香ちゃんの容赦ないこちょこちょ攻撃を両脇に受け続けるのであった。明日から腹筋の筋肉痛に悩まされるかもしれない。

ちなみに後日、黒焦げの理科室には当然のように立ち入り禁止の貼り紙が出されたため、捜査は無事に行き詰まりましたとさ。がっかり。

九、許せない理由（後書き）

花実ちゃんはいじめ甲斐のあるちびっこです。ねー。

十、転校生を紹介します

その昔、とつてもとつても友達になりたかった女の子がいた。

昔と言つてもそれは幼稚園の頃。当時のその子はいつも何かにし
らけたような顔をしていて、つまらなそうにおもちやを触っては、
溜め息を吐くばかり。周りの子供たちに話しかけられても知らんぷ
りを決め込んで、一人ぼっちの毎日を送っていた。

やがて皆は彼女のことを「つまらないやつ」と呼び、遠ざけるよ
うになる。だけど私は、彼女の瞳にかつてないほど惹かれていた。

今思えば、彼女は外人さんとのハーフだったのかもしれない。

彼女はさらさらの黒い髪の毛に対し、澄み渡った大空を思わせる、
綺麗な青色を湛えた奥の深い瞳を持っているのだ。

とても素敵で、憧れて、羨ましさも感じて、私は思うようになる。

その瞳で私を見てもらいたい。

その瞳を皆に見てもらいたい。

だから私は、毎日毎日諦めずに彼女の名前を連呼し続けた。

頑張つて頑張つて、そのうちもし返事をしてくれるようになった
ら、私たちは友達になれるかもしれない。

だけど青い瞳の女の子は、

「嫌い」

綺麗なその瞳で私を睨み、とてつもなく辛辣なその一言を私に吐
き捨てる。

その時まで、私はいろんな人に愛されてきた。親はもちろん、お
兄ちゃんや友達、ご近所さんや保育士さんまでも、私が望めば絶対
一緒に遊んでくれて。

人に嫌われたのは、これが初めてだった。

確かあの後、私はシヨックのあまりトイレの個室にこもって泣き
じやくつたんだっけ。扉の向こうから心配そうに声を掛けてくる友
達の声も、悲しみの中へかき消してしまうほど盛大に。

思い出すなあ。あの時のことは、高校生になった今でもちゃんと覚えている。

ちなみにどうして私がこんな懐かしい回想に浸っているのかと言うと、

「彼女は転校生の山城椿^{やましろつばき}だ。親の急な事情で引越してくるようになったらしい。皆、しばらくはなるべくこいつを助けてやってくれ」このクラスの担任を務める中吉田^{なかよしだ}先生が、教卓の横に佇む女の子の名前を仰ったからだった。

山城ちゃんはぺこりと頭を下げながら新しいクラスメイトたちに挨拶をする。

「よろしくお願いします」

そして彼女が十年以上前から変わらない青空の瞳を上げた瞬間、「この髪についてはあまりお気遣いなさらぬようお願いします」真っ白に染まっていた髪の毛が、ふわっと揺れる。

恐怖や強いショックなどで精神に極度のストレスが掛かってしまうと、髪の毛は途端に色を失くしていき、生え際から毛先まですっかり白くなってしまいうらしい………というのはたった今お弁当をつつきながら友香ちゃんから聞いたことなのだけど、本当なのかな。

「そんなすぐに変わっちゃうものなの？」

「ええ、一ヶ月も経たないうちに真っ白になるわ」

さすが友香ちゃん物知りだなーと感心しつつ口をもぐもぐさせながら話を聞く私。

「あなたの言うその山城椿って子、髪の毛が隅から隅まで真っ白だったのよね。過去に何かつらいことがあったのかもしいわ」

「そうだね。気になるなあ」

もし本当にそうなのだとすると、立派な侍を志す私としては山城ちゃんの相談に乗ってみたい。でもまた「嫌い」って言われたらどうしよう。

実は今日、何度か山城ちゃんに声を掛けてみた。一応「はい」と

か「そうですか」なんて愛想ない言葉を返してくれはするけど、その細長い瞳はなんとなく私を遠ざけているような気がしていて居た堪れなくなる。

「……あう」

やっぱり嫌われてる。そんな気がして、彼女の前に立つのが少し怖かった。

ただ友達になりたいだけなのに、どうしてこんなにも避けられるんだらう。

「どうしたの花実ちゃん、そんな浮かない顔して」

友香ちゃんが食事を中断して私の表情を窺ってくる。心配させてしまったみたいだ。

「ううん、何でもないよ。お弁当美味しいね」

私はいつの間にか止まっていたお箸を動かそうと手に力を込めながら、お弁当箱に視線を落としてどのおかずをつまもうか思案する。そこにはまだ半分以上のおかずが残っているのに対し、気がつく

と、友香ちゃんのお弁当箱はそろそろ空になるうとしていた。

「いいえ、あなたは思い煩ったような顔をしているわ」

「あう」

友香ちゃんからすれば私の不安なんてとつくにお見通しらしい。

今度誰かにポーカーフェイスを教えてもらおう。

「悩みごとがあるなら何でも言ってみて。何だってするから」

あまりにも優しい親友の言葉に、私は少しだけ頭を寄り掛からせ

たくなった。

結局私は、またこんな感じで友香ちゃんに甘えることになる。

立派な侍になりたいのなら、私はもっと自立しなきゃいけないの

だけ、

「あのね友香ちゃん、あのね……」

一人で抱え込むことに慣れていない私は、差し伸ばされた手をつ

かまずにはいられない。

「私、山城ちゃんと友達になりたいの。でも私嫌われてて、友達に

なつてくれそうにないの」

「あなたの友達は私一人で十分よ」

差し伸ばされた手に振り払われたような気がした。

「相談に乗ってくれるんじゃないのっ」

というか、「私一人で十分」の意味がよく分からないのだけど。

「あなたの友達は唯一無二、私だけ。他なんて要らないわ」

「わ、私は野田村くんや海原くんとも友達なんだけど……」

いや、海原くんとの関係はまだあやふやかな。

「あなたの友達は私だけ。私の友達もあなただけ。だから花実ちゃんは今もう友達作りなんて血迷ったことは考えなくていいの。私がつとあなたのそばにいるから、ね？」

友達を百人くらい作りたい学年である私は血迷っているのだろうか。

「でもでも、友達はいっぱい作つとかないとっ」

今は友香ちゃんと野田村くんと海原くん（仮）しかいなくても、高校を卒業するまでにはたくさんの方に囲まれない。最近はずいぶん友達にもよく話す人が増えてきたし、この調子でどんどん友達作りに励みたいのだけど、どうして友香ちゃんはそれを許してくれないの。

「だってさ、大学への進学で友香ちゃんと離れ離れになっちゃうかもしれないじゃない。だから今のうちにいっぱい友達作つとかないと、後で寂しくなっちゃうかも……」

「私はあなたの希望する大学へ進むわ。そして卒業後もあなたと同じ職場に就いて、一つ屋根の下で一緒に暮らして、二人で養子を迎え入れたりとかして、老後も一緒に生活して、死んだら同じお墓に入って……」

「ちよつと待って、それって友達どころかもう結婚生活じゃん！」

私がつつこんだところで、暴走気味に語り出した友香ちゃんももう止まらなかった。

「一緒に天国行って、一緒に転生して、また幼馴染として生まれ変

わって、それでまた同じ進路を歩んで……」

目を閉じ手の平を胸の前に組んでおかしな妄想に陶酔する友香ちゃん。そんな彼女は夢見る少女な感じがしてとても可愛いんだけど、語る声が段々と大きくなっていくため徐々に周囲からの注目が集まり始めている。

早く止めないと、恥ずかしいっ。

「友香ちゃん、あのね、私は友香ちゃんのこと好きだけど結婚したいとまでは」

「私、花実ちゃんのお嫁さんになるからねッ！」

「あっっ」

怒鳴られた。思わず竦んでしまっびりな私。

「毎朝あなたのためだけにお味噌汁作るから！」

「友香ちゃん、声大きいっ」

「花実ちゃん大好き」

「そりゃ私も大好きだけどさ、あのね？」

「両思いね、じゃあもういつそのこと結婚しちゃいましょうか。あ、でもお互いまだ十五歳だからそれは無理ねえ……」

「私の話に聞く耳持っていないでしょ」

明日からこの教室でお昼休みを過ごせなくなりそうだ。いつしか教室中の皆さんが横目でこっちをちらちら見ながらこそそこそ喋っている。

ご飯を食べ終えた後、大声で奇天烈な将来設計を語り続ける友香ちゃんから猛ダッシュで逃げた私は、この身を隠すために慌てて理科室の中へと飛び込んだ。鍵が開いていたため、難なく侵入に成功する。

今のここには誰もいない。以前何者かによって爆破されたこの部屋は着々と修復作業が進められているようで、黒い焦げ目は一つも

なくなっている。

「ふう」

私は床にぺたりと座り込み、呼吸を整えるようにゆっくりと溜め息を吐いた。脳に酸素を送り込むと、次に私は急に暴走を始めた友香ちゃんのことと頭を悩ませる。

友香ちゃん、いきなり結婚結婚言い出して一体どうしちゃったんだろう。こないだも婚約がどうのって言ってたし、友香ちゃんって意外と幸せな結婚生活に憧れてたりするのかな。

「むー」

いくら幼稚園からの親友だと言っても、友香ちゃんのこととは未だに分からないことがたくさんある。だって謎が謎を呼び、呼ばれた謎がさらに謎を呼ぶ、それが友香ちゃんだもの。

「……ん？」

考える頭が段々眠気を覚え始めた頃、私はふと、この理科室内全体に視線を巡らせた。

なんか変な臭いがする。心なしかぶしゅーって音も聞こえるような。

「うーん」

何だろう。よし、ちよつと室内を探索してみよう。

私はまず新品の大きな机に歩み寄る。水道やガスも付いてて、いかにも理科室の机らしい机だ。試しに蛇口を回すと水が出てきたことから、どうやら水道はもう通っているようである。

それから理科室中の机上を見回してみた。どこにも異状はないと思っただけ、私は実験用のガスの栓が外れていることを見逃さない。きつと工事のおじさんが間違えて開けちゃったのだろう。

元栓をきつちり閉めると、次に私は窓の方へと視線を向ける。隅から隅までちゃんと閉め切られていて、何かと息苦しそう感じる。ガスが充満しているだろうし、少し換気しよう。

窓を全開にした後、私はすぐ隣の理科準備室へ向かった。そこに通じる扉が開けっ放しだったから、念のためにこの部屋の換気もし

ておかないと。

難なく理科準備室に侵入した私は、ざっと周囲を見回してみる。棚はぼちぼちあっても薬品や顕微鏡とかの実験道具は一切置かれていない。殺風景なだけで、特にこれといったものは何一つなかった。当然か、まだ工事中だものね。

この部屋の窓も全開にした私は、理科室に戻って「うーん」と考える。

爆破事件の時は犯人さんによってガスの元栓が開けられていたんだよね。ひよつとして今回もそうなのかもしれない。

それから私は、ちよつとした探偵気分理科室のあちこち捜査してみた。犯人の手掛かりがあるかもしれないと思ったけど、それらしきものは何一つ落ちていない。

ちよつと考えすぎだったかな。そうだよね、二度も同じ部屋を同じ手口で爆発させようなんて思わないよね。

もうすぐお昼休みが終わりそうだし、そろそろ教室に戻ろうか。

「……ん？」

ふと手元違和感を感じたので、私はぶら下げていた手の平を目の前に持ち上げる。

「あつ」

やけに細い白の糸が一本、指に絡みついていた。

ビニール紐の一部か何かかな。元栓とかいじってた時にくっついちゃったんだね。

私はその糸を「業務用」の紙が貼られてあるゴミ箱に捨てると、踵を返し、この綺麗になりつつある理科室を後にした。

十、転校生を紹介します（後書き）

うーん、理科室を黒焦げにしちゃったお茶目さんは一体誰なのでしょう。そしてそんなことをした理由とは何なのか……謎が謎を呼びますねっ。

十一、一緒に昼ご飯

私が月曜日のしんどい学校へ顔を出した時、どういうわけかクラスメイトたちがいつもよりも大分賑わっていた。皆楽しそうに喋っている。

「おはよう桜田さん、大変だよ」

野田村くんもこの雰囲気に乗って賑わいたいのか、自分の席に向かおうとする私のもとまで近寄り話し掛けてきた。やけに焦った顔をしているようだけど、どうしたのかな。

「おはよー」

とりあえず挨拶はしておく。

それにしても、野田村くんは一体何がどう大変だと言うのだろう。理科室爆破に続く大事件とか起こったのかな。かたつむりがいっぱい現れたとか……あう、もしそうなら死んじゃうかも。

私が嫌な想像に頭を重くしていると、野田村くんはやっぱり焦った様子で口を開いた

「今、学校中が侍マンの話題で持ち切りなんだ」

「あう?」

野田村くんが言うには昨日の日曜日、侍マン様が雑踏荒れる街の中で突然姿を現したらしい。何でも柄の悪い男の人たちに絡まれている女の子を助けたんだとか。

……なんかどこかで聞いたような話だね。

「どうしよう桜田さん。侍マン、自分のことが知れ渡るのを嫌がってるんだ。どうにかならないかな」

「私に訊かれても」

むしろ私は皆にも侍マン様のかっこよさを知ってもらいたいし、そしてそんなかっこいい侍マン様の弟子が私であることも主張したい。

「どうして知れ渡るのが嫌なの？ 別に何の問題もないじゃん」

私がふと思いついた疑問で訊き返すと、野田村くんはちよつとだけ視線をどこかへ逸らしつつ答えてくれる。

「えっと、それは……そう、侍マンはあ見えて恥ずかしがり屋なんだよ。だからあんまり目立ちたくないって、彼が」

「ふーん」

シャイな侍マン様、案外素敵かも。

それに理由はどうあれ、善い行いをしておいて自分は目立とうとしないなんてちよつとかつこいい。つくづく侍らしいとつか侍の鑑というか、私の侍マン様というか……。

「ぼ」

「いやいや、ぼって何さ」

「人知れず頑張りたがる侍マン様、私好きだな」

「う……」

素敵なお師匠様に惚れ惚れしながら私が言うと、どういうわけか顔を少しだけ赤くしながら言葉を詰まらせてしまう野田村くん。

どうしたのかなとそのクラスメイトの顔を下から覗き込もうとしたところで、突然私の両脇に異変が生じた。

「ひゃわっ！」

そして両脇に感じたそれは微妙に力を入れてきて、私にえも言われぬくすぐったさを感じさせる。

「あん、ちよつ誰、くすぐったっ」

多分人間の手であるそれは、私の両脇から身体をゆっくり持ち上げていき、とうとう足を床から離されてしまった。

うわ、すごい力持ち。

「先ほどの会話から、あなたの方がその侍との接点を持つ者と見ました」

目の前の野田村くんと視線が水平に合う高さまで持ち上げられた私は身体を必死に暴れさせ、しかしあまり動き過ぎると余計にくすぐったくなるためなるべく控え目に、そのパワフルな手から逃れよ

うと頑張ってみる。

「う……や、山城さん」

そんな私の背後に視線を向けながら、野田村くんが「げ」とでも言いたげな引きつった顔で、私の脇をくすぐっている犯人に應對した。

え、今山城ちゃんのこと呼んだ？

「教えてください。私に、その侍のこと」

すると彼女は、私の脇からぱつと手を離して野田村くんの目の前に立つ。ちなみにそうやって放り捨てられ私はというと、床に尻餅をついてしまって少し涙目。

「何するのよおっ」

私は涙に沈み始めた瞳で、白い髪をなびかせ立っている山城ちゃんのことを睨みつけた。

「野田村春平さん。その侍について、私に詳しく話してください」
「ただ無視されてちよつとばかり寂しい私。」

そして同時に、どうして彼女が侍マン様のことについて明らかに関心を示しているのかが引っかかり、私の首を傾げさせる。

侍マン様のことで山城ちゃんに尋ねられた野田村くんはといえば、何かと目を逸らしまくってさつきより慌てている様子。どうしたの野田村くん、いつもはどんなこと訊かれても快く答えるのに。

「さあ、教えてください」

「えーと」

「早く」

「いやだから、僕も皆の耳に入ってる程度の噂しか持ち合わせてなく……」

山城ちゃんがどんどん顔を迫らせながら尋ねてくるのに対し、ちよつとずつ背中をのけぞらせながら困った顔で受け答えする野田村くん。

いくら侍マン様に頼まれたからってそこまで隠すことはないんじゃないかな。私なら人から侍マン様のことを尋ねられると「私侍マ

ン様の弟子なんだよーっ」って言いふらしたくなるんだけど。

「……そうですか。私は一瞬だけあなたはその侍なのかと思っていたのですが、どうやら勘違いのようですね」

すると山城ちゃんは身を翻し、さっさと自分の席に向かって椅子に腰掛ける。

へえ、山城ちゃんも侍マン様の正体が野田村くんかもしれないって疑ったんだ。でもこの二人、顔は似てるけど凛々しさに決定的な差があると言うか何と言うかで、やっぱり別人なんだよね。

ところで、今日の山城ちゃんはどうもおかしい。

普段から周囲のことを気に留めていない彼女なら、その程度の疑問も自分には関係ないことだと心の中で切り捨てるはずだ。なのにどうして山城ちゃんは、侍マン様のことに限ってはこんなにも食いつきがいいのだろうか。

「ふう、なんとか誤魔化せた」

さっきまで青く冷たい瞳に見つめられていた野田村くんは、彼女が自分の席へ着いていくのを見るとほっと安堵の溜め息を漏らす。そして冷や汗が滲み出ている額を袖で拭いた。

ひよっとして山城ちゃん、たまたま見かけた侍マン様に一目惚れしてたりとかするのかな。あのお方はとてもかっこいい人だから、山城ちゃんが好きになっってしまうのも当然ことだ。

そうやって私が侍マン様のかっこよさを頭の中に思い浮かべては頬に温度を溜めていると、

「桜田さん、大丈夫？」

野田村くんが私に向けて自分の手の平を差し出してくる。そういえば私、さっき山城ちゃんに放り捨てられて尻餅をついてたんだっ

た。
私は野田村くんの手をつかもつと腕を持ち上げる。その時、私は野田村くんの様子がまた少しばかりおかしくなっていることに気がついた。

「どうしたの野田村くん、顔が赤くなってるよ」

「え、いやね、その……君のスカート、かなりめくれて……」
「あう？」

私はそれを聞いて瞬間的に視線を下半身へと向ける。

「あうっ!？」

ぎりぎり下着は見えていなかったものの、ふとももは危険なところまではつちりさらけ出されていた。

「見ちゃだめ、野田村くんのえっちっ！」

「僕は何もしてないんだけど何かごめん！」

「山城ちゃん」

「はい」

「私とお友達になってください」

「そうですか」

「あうー」

とある休み時間、私は読書中の山城ちゃんに突撃してみた結果見事にかわされた。

彼女は転校してきたその日から今日に掛けて、私に対してだけは「はい」か「そうですか」の二種類でしか言葉を返してくれない。

私以外にはちゃんと「分かりました」も言うのに。

「もー、どうしてそう社交性がないのっ」

「はい」

一体何を肯定したのだろう。

「私のどこが嫌いな」

「そうですか」

そして一体何に納得したのだろう。

「むっっ、後でまたお話しにくるからね。ばいばいっ」

「はい」

最後だけは会話が噛み合ったけど、今となってはそれがちゃんと

した返事じゃないということが判明しているので全然嬉しくない。

まあ、幼稚園の頃の完全無視の末に「嫌い」よりはまだいいけどさ。

「あつ……」

それにしても、一体どうすれば山城ちゃんと仲良くなれるのかな。食べ物で釣るにしても彼女の好み分からないし、色仕掛けしようにも相手は女の子だし（友香ちゃんには効果覿面！）、山城ちゃんの読んでいる本について語ろうにも私は普段読書なんて全然しないし。

私が自分の席に戻ってからもうんうん唸っていると、

「ねえ桜田さん。お昼休み、一緒にお弁当食べようって言って山城さんを誘ってみたら？」

野田村くんが私の悩みを察してナイスな提案をしてくれた。

「私もそろそろ強硬手段に出るしかないかなーって思ってたのー」
そうと決まれば、お昼休みになったら早速山城ちゃんの腕に抱きついて、友香ちゃんの教室まで一生懸命引っ張ってみよう。こういうところで私の必死な思いが伝わってくれば、そっけない彼女も少しくらいは心を開いてくれるはず。

……というわけで、午前の授業が全て終了し、ようやくお昼休みになった現在。

「山城ちゃん、ご飯美味しいね」

「はい」

「ちよつと山城さん、せつかく花実ちゃんが話し掛けてくれてるのにその態度はないんじゃないかしら」

「そうですか」

友香ちゃんの教室に集まった私たちは、わいわいと楽しい昼食のひと時を過ごしていた。

ちよつと手首を持って引っ張ると別に抵抗するでもなく案外素直について来た山城ちゃんは、十一秒飯としてテレビのコマーシャルタイムを賑わせているあの有名なゼリー飲料をちゅーちゅー吸いな

がらも、相変わらずそっけのない言葉をクールに返してくれる。

「別にいいんだよ友香ちゃん、強引に連れてきたのは私なんだし」
そしてぶんすか怒る友香ちゃんをなだめる私。

「でもね花実ちゃん、私は私の花実ちゃんに対する山城さんの態度
がとても気に食わないの。一言くらい言ってやらないと」

友香ちゃんがそれほどまでに怒る理由は全くもって分からないの
だけど、それはそれとして、とにかく私は山城ちゃんに気に入られ
ることだけを考えよう。

いつまでも嫌われたままなんて嫌だしね。

「山城ちゃん、私のお弁当のおかず食べてみる？ 美味しいよ」

「結構です」

やった、お返事の種類が「はい」「そうですか」の他に一つ増え
たっ。

「えへへー」

「ちよつと花実ちゃん、冷たくされたのにどうしてそんなに嬉し
そうな顔をしているの？」

友香ちゃんが信じられないとでも言いたげな表情を作って私に尋
ねてくる。

だってだって、この調子でどんどんお返事の種類を増やしてもら
えればいずれは仲良しになれるかもしれないと思うと、心の底から
とっても嬉しくなっちゃうんだもん。

よっし、これからも頑張っちゃうよっ！

十一、一緒に昼ご飯（後書き）

椿ちゃんはゼリー飲料をちゅーちゅー吸っておいました。彼女はゼリー飲料が大好きなのです。お弁当をわざと家に置いていくくらい、ゼリー飲料を飲みたくて堪らないのですっ。

十二、事件説明

今日は土曜日。自宅の自室にて、昼間からごろごろしている私はうんうん唸りながら頭を悩ませていた。

その原因は、小学校の頃から大事に使っている勉強机の上に置いた黒焦げのライター。

「犯人見つけて自首を勧める、かあ……」

侍マン様が私にこの任務を託してからもうどれだけ経っただろう。あと一週間もすれば夏休みに入るというのに、最近は山城ちゃんに構ってばかりで、事件については何も片づけられていない。

それに、手掛かりがこれだけだと犯人どこるか他の手掛かりすら見つからないんじゃないかな。

「あつ……うん、暑い」

とりあえず今は喉が渴いた。私はひとまずお水を飲もうと思い、椅子から立ち上がると自分の部屋からよろよろ出て行く。

どうしてこの家にはクーラーが一つもないのだろうと思いつながら廊下に出て階段まで渡り、一階に下り立ってキッチン付きのリビングに到着すると、電源を入れられているテレビから凄まじい騒音が聞こえてきた。

刑事物のドラマが放送されているみたいだけど、音量が普通じゃない。このまま聞き続けていれば鼓膜に悪影響を与えそうだ。

私は手で耳を塞ぎながら、テレビの音量について、ソファの上いだらしなく寝転がっている彼に向けて抗議を始める。

「お兄ちゃん、テレビの音大きいよっ」

「ああ？ 何か言ったか」

視線をこちらに向けようとしてもしないお兄ちゃんにむかむかした私は、テレビの騒音に負けじと大声を出す。

「テレビのっ、音っ、大きいよっ！」

「あーはいはい、気が向いたらどこへでも遊びに連れてってやるよ。」

兄ちゃん疲れてんだ、今日くらい休ませてくれ」

「何日曜日のパパみたいなこと言ってるの。ていうか私の言ってること全然聞こえてないでしょ！」

まったく、大学生になってからすっかりだらだらしちゃって。一応昔から今も変わらさず優しい人なんだけど、あんまりだらさなくされるとお兄ちゃんとして尊敬できなくなってしまう。

「もう、お兄ちゃんつたらっ」

私はこちらに一切視線を向けることのないたった一人の兄に対し、全力を込めてあっかんべーをする。今度特大のパフエを奢らせてやるんだから。

それにしても、暑いのに大声出したから喉の渇きがそろそろ限界に達しかけている。一刻も早く水を飲もうと、私がキッチンへ向かおうとしたその時、

『犯人は、必ず現場に戻ってくるッ！（ばばーん）』
テレビのスピーカーから、刑事さんの鋭い指摘が私に一つの閃きを生ませる。

そっか、犯人は現場に戻るのか。だったら理科室を爆発させた犯人さんだつて戻ってくるはず！

それから私はコップ一つにぎりぎりまで水を注ぎ、一気に喉へ流し込むと、自分の部屋に戻るため廊下をばたばた駆けていく。

自室に戻った私は急いで夏用制服への着替えを済ませ、黒焦げのライターをビニール袋に入れて、それをスカートのポケットに突っ込んだ。

これから私は休日登校します。はりこみ、頑張っちゃおうよっ！

というわけで理科室。そこはもうすっかり修復作業が完了されており、そしてつい最近に誰かがこの部屋を利用したらしく、鍵が開き放しになっていた。

やった、これで犯人さんを待ち伏せできる。

「今日の私、ついてるなー」

「はい」

「よし、犯人さんが来るまでこそこそ待機しよう」

「そうですか」

「……それで山城ちゃん、どうしてここにいるの」

気がつけば、いつからか私の隣に白い髪の女の子が整然と立ち尽くしていた。

彼女は青い瞳をぱちぱち瞬きさせながら私の目と合わせてくる。

私がいっぱい綺麗な瞳だなと見惚れていると、

「あなたには関係のないことです」

今までに聞いたことのない、山城ちゃんの長文発言が飛び出してきた。

「ふえ？」

彼女の神出鬼没にも驚いたけど、それ以上に私は彼女の言葉に面食らってしまう。

いつもは「はい」「そうですか」「結構です」の言葉しか口にしていなかった山城ちゃんが、

「いいい今、何て言ったのっ」

生まれて初めて、私にちゃんとした返事をしてくれた。

これって今まで私が頑張ってアプローチしてきた結果なのかな。

苦労が実ったってこのことかな。苦労が実ると、こんなに感激するものなのかな。

嬉しいいたらありゃしない！

「……何でもありません」

私が感激を押し隠せず笑顔でいると、彼女は理科室に向き直ってさっさと歩き始める。

私は慌てて山城ちゃんの背中を追い、また長文のお返事を期待して話し掛けた。

「椿ちゃん、理科室に何か用でもあるの？」

そしてすっかり気をよくした私は、彼女のことをいきなり下の名前で呼んでみる。ちよつと馴れ馴れし過ぎたかな。

「はい。少しだけ、用があります」

椿ちゃんは理科室の扉に手を掛けて動かしながら、本当にまた長い言葉を返してくれた。

あう、お返事を貰うたびに感激だなんて生まれて初めてだよ。

「どんな用？ 私はね、こないだ理科室を爆発させた犯人さんがまた戻ってこないかと思ってね、こうやって待ち伏せしに来たのー」

「私も似たようなものです」

「椿ちゃん、理科室爆破事件のこと知ってるの？ あの事件は椿ちゃんが転校する前に起こったんだよ？」

ひよつとして椿ちゃんは情報通だったりするのかな。何となくそれっぽいと理科室に足を踏み入れながら思う私。

「テレビでニュースになっていました。その時はただの事故だと語られていましたが、『犯人』とは一体どういうことなのですか？」

長いお返事だけに止まらず、今度は質問までされちゃった。マンモス級に嬉しい。

「あのねあのね、ここが爆発する寸前ね、ガスの臭いが辺りにも少しだけ臭ってたの。しかも爆発した後のここでライターが見つかって、それで」

私は理科室の中央に進んでいく椿ちゃんの質問に頑張つて答えようと、以前に友香ちゃんが言っていたことを必死に思い出しつつそれを次々と言葉にしていく。

「わざとガスを漏れさせて、そのうえライターを投げ込んで爆発させた人がいるかもしれないってことになったの」

「なるほど。それで、そのライターはどこにあるのですか」

椿ちゃんのさらなる質問にも、私は満面の笑顔で答えてみせた。

「えへへ、ここにあるよ」

私はスカートポケットから丸め込まれたビニール袋を取り出す。それを少しばかり広げてみると、中に入っている一つの黒焦げライ

ターが見えるようになった。

「そうですか……それは、困りましたね」

黒焦げライターに視線を向けながら、彼女はふとそんなことを言い出す。

「どうしたの。困ったことなら何でも私に相談してっ」

そして椿ちゃんは私に向き直って目と目を合わせると、

「これ一つでは犯人を確定する証拠になりませんが、その『犯人』からすれば不安な要素の一つです。早めに処分しないと」

「ふえ？」

不可解なことを言った瞬間に私の両手首をつかみ、それを私の背後に回して、私を身体ごとすぐ近くの机に押さえつけた。

まるで警察に取り押さえられてしまった犯人のごとく椿ちゃんに腕によって拘束されてしまった私は、この一瞬の出来事についていけなくて少しばかり混乱してしまふ。

「では、このライターは返してもらいましょう」

「あの、椿ちゃんっ？」

抑えつけられている手の中からそれを奪い取ると、椿ちゃんはその腕に力を入れたまま顔を近づけてきて、私の耳にそっと、囁くようにある一言を放つ。

「私が、あなたの言う『犯人』の正体です」

瞬間、息が詰まった。

彼女の言っていることが上手く呑み込めない。

「こちらに越してくる以前、下見のためにこの学校へ立ち寄りました。ここの爆破は挨拶の代わりです」

椿ちゃんが、理科室を爆発させた？

「そしてこちらに転校してきた当日も前回と同様にここの爆破を試みたのですが、どういうわけか換気が成されていて、計画は失敗となりました。あなたの仕業なんでしょうね」

「……どうして、そんなことしたの」

尋ねると、少しだけ低くなった声で答えてくれる椿ちゃん。

「抑えられない怒りが、あつたのです」

私の手首を握り締める彼女の手が、さらに力を込めてくる。

「離して、痛いよお」

「本当に、十年経つてもあなたは忌々しい」

十年前、それは確か私たちが幼稚園だった頃。

椿ちゃん、覚えてくれてたんだ。あの時のこと。

爆破事件のことはとりあえず置いて、私はずっと疑問に思っていたことについて尋ねてみる。

「椿ちゃん、どうして私のこと、そんなに嫌うの？」

「気安く名前で呼ばないでください」

後ろに回された腕はそのままに、今度は頭を強く押さえつけられる。頬が机の冷たい板にぴったり当たって、少しだけ痛い。

「私が人を嫌うのは、何もあなた相手に限ったことではありません」

全身を抑えつけられた苦しみを取り戻れつつも、私の耳にはどこか震えた声が聞こえてきた。

「あなたに限ったことでは、ないので……」

椿ちゃんはそれから先の言葉を詰まらせて、どういうわけかいきなり黙りこくってしまった。同時に彼女の手に入められた力が緩んできた。

この隙を逃すまいと、私は全力で跳ねるように椿ちゃんの拘束から脱出する。身体に変な力の入れ方をしたためにバランスを崩してしまい、手が床についてしまった。

「あー、痛かった」

そしてそんな私を追いかけてくることもなく、目の前では白髪青はくはつ眼の女の子がぼーっと立ち尽くしている。

何を考えているのだろう。理科室を爆発させたのは自分だなんてこと言ってたけど、まさかまたここを爆発させようだなんて思っていないよね。

どうしてそんなことをするのか全くもって分からないけど、もしそうならちゃんと阻止しなきゃ。そして自首を勧めるんだ。

「椿ちゃん」

でもその前に、まずはこないだの理科室爆破事件についてきつちりお仕置きしないと。

「何に怒ってたのかは知らないけど、いらいらしたからって悪いことしちゃだめでしょう」

私は彼女の白い頬を両側からつまみ、むにゅーっと引つ張ってみる。すごく柔らかい。

「うりゃー、むにゅむにゅー」

だけど椿ちゃんは痛がったりとか嫌がったりとか全然しなかった。これじゃお仕置きにならないので、私は新たな罰を考案する。

「あう……じゃあ、こちよこちよー」

今度は彼女の両脇に指を潜り込ませてくすぐってみるも、椿ちゃんは動じないどころか笑を堪える様子すら見せてくれない。これじゃあお仕置きにならないので、私はさらに新たな罰を考案する。

「これでどうだっ」

最終手段、喉元への攻撃っ。

私は指を彼女の顎の内側に潜り込ませ、椿ちゃんの喉元を思いっ切りくすぐってみる。

「……あれー？」

全然反応しない。私なんかちょっと触られただけでも変な声が出ちゃうのに、おかしいなあ。

こうなったらこの子の罰は友香ちゃんにお願いするしかない。かの大親友はお仕置きというかいたずらを考え出すプロフェッショナルなのだ。

でもその親友は今ここにはいないので、やっぱり私が自分で何とか考え出すしかないという孤独な戦い。

他力本願すら叶わないのなら仕方がない。

「ねえ椿ちゃん、椿ちゃんの弱いところってどこ？」

私は直接聞いてみることにした。

「……はあ」

すると椿ちゃんに溜め息を吐かれてしまう私。あれ、どうしちゃったのかな。

「あなたにはシリアスな雰囲気は全く通じないようですね。もういいです、帰ります」

それから私のそばを横切り、さっさとこの場から立ち去ろうとする椿ちゃん。

「あう、待ってよー」

「ついて来ないでください」

早歩きで進んでいく彼女を追いかけるために、私は頑張って小走り続ける。

「いいじゃん別に。でさー椿ちゃん、身体のどこが弱いのか?」

「そんなことを訊いてどうするつもりですか」

「お仕置きに使うに決まってるじゃない」

友香ちゃんなら間違いなくそうするよ。

「だったら余計言うわけにはいきません」

「へー、じゃあ一応弱いところはあるってことだね。どこどこ?」

「……もう知りません、一人で帰らせてください」

そう言っでいきなり駆け出した彼女を追いかけるために、私は全力疾走で彼女を追いかける。

「そうそう、自首を勧めなきゃいけないんだっつ」

思いつ切り走っている時に喋るのはすごく苦しいことを覚えつつ、それでもなお私は椿ちゃんに話し掛け続けた。

「罪を犯しちゃったらねっ、自首しなきゃっ、いけないんだからっ」

「知ったことではありません。第一、証拠不十分なら罪を問われることはありません。起訴さえできないのですから」

「あうっ、そうなのっ?」

知らなかった。

「でもっ、そのライターっ」

私は彼女の手元にある黒焦げライターを指して、これが証拠になるんじゃないかと問うてみる。

「指紋は使用前にきっちり拭き取りました。証拠にはなりませんが」ということは、自首を勧めること自体はまるで意味がないということなのか。

「じゃあじゃあつ、椿ちゃんっ、逮捕されちゃわないのっ?」

「そうですが何か」

階段を下り始めたところで、私は立ち止まり膝に手を当てて息を整える。

「よかったあ」

呟いた瞬間、椿ちゃんが急ぐ足をぴたりと止めた。

「……よかった、とは?」

白髪を揺らして振り向きつつ訊いてくる椿ちゃん。私は階下でこちらを見上げる彼女に向けて、息も途切れ途切れに答える。

「だってさ、椿ちゃんからの好感度、マイナスのままではいばいしなくなかったもん」

十年前から今日まで嫌われ続けて、悲しかったけど、それでも私は諦め切れない。

椿ちゃんが私のことを友達だと言ってくれるまでは、いつまでも頑張ってみせる。

「あなたとは、とことん仲良くなってやるんだから」

「……そうですか」

次の瞬間、椿ちゃんは階段の折り返し地点から姿を消してしまう。言いたいことを言えた私は、もう彼女の後を追う気にはなれなくなっていた。

今日は彼女とたくさんお話できたから、今のところは大満足。

「さてと」

私もそろそろ帰ろう。そう思い、息を整えつつ階段に足を下ろした時、

「ひゃわっ!?!」

上履きが、段に滑った。

十二、事件説明（後書き）

あ、男性陣の出番が少ない……。

十三、夢の世界（前書き）

（前回のあらすじ）

理科室を爆発させた犯人は転校生の山城椿ちゃんだった！ そんなことはさて置き、何だかさつきから頭がじんじん痛いです。どこかにぶつけてしまったのでしょうか。ところで私はそろそろ目が覚めそうです。

十三、夢の世界

「あー、よく寝たあ」

窓から射し込んでくる日の光に目を覚まされた私は、ベッドの上で寝転がっていた身体をよいしょと起こし、両腕を上げてうーんと背伸びをする。

もう朝かあ。何だかついさっきまで学校にいたような気がしたけど、夢でも見てたのかな。

「ん……あー」

それにしても、どういうわけかやけに頭が痛む。じんじんする。眠っている間に固いものをぶつけでもしたのだろうか。

痛む部分を手で押さえながら、私はとりあえず洗面所へ向かおうと思い、ベッドから足を下ろす。

「……あー？」

そこで私の裸足が踏んだのは、小学生の頃に買ってもらったお気に入りのふかふかカーペットではなく、寝ぼけ眼も瞬時に見開かされるほどひんやりしている固い床だった。そしてそれは、少なくとも私の家ではあり得ない感触。

「ここ、私の部屋じゃないの？」

「どこなの、かな」

ふと後ろを振り返ってみた私は、その瞬間一気に目を見開かされてしまう。

「でっかい」

さっきまで私が寝転がっていたこのベッドは、私の部屋に置けば面積の半分を占めそうなほどの大きさだった。今までに感じたことのないほどふわふわなベッドの弾力や、私なら抱き枕にもできそうなほどビッグサイズの枕。ベッドの四隅から伸びた柱からは、部屋の天井とは別に小さな屋根が備えられている。

次に冷たい床にも視線を向けてみた。どうやらこの部屋は土足ら

しい、ベッドから下ろした足の近くに私の靴が置かれている。

「うん？」

靴のついでに視界に入った私の服装は、いつの間にか可愛いピンク色の高価そうなネグリジエになっていた。いつも着ているような友香ちゃん手作りのパジャマではない。

「むー」

とりあえず靴を履いて立ち上がった私は、ぐるりとその部屋を見回してみた。

案の定、ものすごく広い空間が私の目に飛び込んでくる。私の推量では、ここの広さは学校の教室一つと同じくらいと見た。

窓は見上げるほど高く大きく、天井に吊り下げられたシャンデリアは太陽の光にキラキラ照らされていて、床は土足部屋にも関わらず鏡に劣らない光の反射力があり　はつきり言ってしまうと、まるでお金持ちの住むような洋館の一室だ。

小さな頃に憧れた、お姫様のお城のような、素敵な場所。

「あうーっ、感激！」

夢なら覚めないでほしい。いや、きつとここは夢の世界なのだ。私の幼い頃の願望が今、ようやく夢として叶ったのだ。

ようし、じゃあこの夢が覚めないうちにお城を探検だーっ。

「花実は朝からひとり言が多いですね」

「ひゃわあっ」

私がお部屋の大きな扉を開けようと取っ手に指を伸ばしかけたその時、ベッドの方から聞こえたいきなりの声に、私の肩がびくんと大きく跳ねる。

「あう、誰かいるの？」

私は恐る恐る顔をベッドの方へ向け、声の主を確認しようと試みた。

「山城椿ですが、何か」

ベッドの上には、髪の色と同化した純白のネグリジエに身を包む青い眼をした少女が、掛け布団で膝を隠したまま私に視線を向けて

いる。

「あ、椿ちゃんだ……えっ、どうして？」

ひよっとして、椿ちゃんも私の夢に絶賛出演中？

「私が私の寝室で眠っていることに、何か異議でもあるのですか」

椿ちゃんの寝室ということは、ここは私の夢ではないのか。つまり、この夢みたいな世界は現実ということに……いやいや、違うんだよ私。今は夢がどのよりももっと大変なことが起こっているじゃない。

「本当に椿ちゃんなの？」

「私が私であることに、何か異議でもあるのですか」

普段の彼女からは信じられないほど、冗談も入り混じった感情の起伏を感じる声が、私の耳に心地よく流れ込んでくる。

「……ほんとに？」

「くどいと嫌いますよ、花実」

椿ちゃんが私のことを名前と呼んだ。

私たち女の子が下の名前を呼び合うことは、お互いを友達だと心の底から認め合った証。

嫌いと言われて十年近く経った今、私はようやく、椿ちゃんと友達になれたんだ。

「えへへ」

あまりに信じられなくてついまた本当かどうかを訊き直しそうになったけど、私は何とかその「ほんと？」という疑問文を喉に押し留まらせる。今度同じことを尋ねたらまた嫌われてしまうかもしれない。

なのでもう質問はしない。代わりにあることを確認するため、私は今の気持ちを椿ちゃんに伝えた。

「嬉しいよ、椿ちゃん」

私の視線と彼女の瞳とが重なっていく。

「花実の発言はよく分かりません」

彼女の返事に、私の中から言葉に表し切れないほどの満足が溢れ

出した。

下の名前で呼び合うのは、お互いをお友達だと認め合った証拠だからね。

「もう、照れなくていいのに」

「照れてません」

「照れてる椿ちゃん可愛いー」

「……嫌いますよ」

「ごめんなさいっ」

寝ぼけていた頭を冷まして考えると、どうやらこの豪華なお屋敷は椿ちゃんのお家らしい。寝室でお着替えをすることになった私は、ベッドから立ち上がって辺りを物色し始める彼女にいろいろ質問してみた。

まず最初に、どうして私が椿ちゃんのお家で今朝を向かえたのかというと、

「昨日の学校で理科室から退室した後、花実は階段で足を滑らせて頭を強く打ち、情けなくも気絶しました」

意識を失った私はこの部屋まで運ばれ、ベッドの上に寝かされて看病されたらしい。ちなみに私を運んでくれたのは椿ちゃんおつきの執事さんだとか。

「その台に花実の制服が置いてあります。使用人に洗濯させておきましたので」

「ありがとう」

使用人さんを雇っているなんて驚きだ。どうやら椿ちゃんは本当にお金持ちのお嬢様らしい。

私は感心しながら着慣れないネグリジエを頑張つて脱ぐと、下着の上に夏用の薄生地なセーラー服を重ねていく。ちなみに椿ちゃんも私がネグリジエに手間取っている間に私服への着替えを終えてしまった。

「椿ちゃん、その服似合ってるね」

スカートのファスナーを上げつつ、私は椿ちゃんの服装へと目を光らせる。

白を基調として、着ている人に清楚なイメージを植えつけるその洋服からは、この服を選び出した使用人さんのセンスがよく窺い知れた。

「……そうでもないと思います」

椿ちゃんの照れた顔、本当に可愛い。本人は気づいていないのかもしれないけど、さっきからその白い頬にほんのりと赤みが差されていて、椿ちゃんが照れを感じているのは一目瞭然だ。

「着替えを終えたら朝食です」

はぐらかすかのような報告が椿ちゃんの口から飛んでくる。私は胃の辺りを擦りながら頷いた。

「あう、そういえばお腹がすごく空いてるよ」

身体に触れた瞬間、ぐーという空腹の音が振動として手の平に伝わってくる。大きな音が鳴らなくて本当によかった。

「花実は昨日ずっと眠っていましたから、晩の一食を抜いているのです」

「そっかー」

私は一度にたくさん食べられる方ではないけど、一食抜くとお腹が空いて空いて仕方なくなってしまうのだ。

「椿ちゃん、いっぱい食べていい？」

具体的には昨日の埋め合わせができるくらいの量を食べさせてほしい。

「たんと召し上がってください」

「わーいっ……あ」

喜びの声を上げる途中で、私は一つ大事なことを思い出す。

「私、無断外泊しちゃった。怒られちゃうよお」

パパやママは仕事関係で子供に家を任せっぱなしにしていることが多いけど、反対にお兄ちゃんは私に対してのみ決行過保護な人なのだ。だからちよっとでも門限を越えて帰ってくるとがみがみ言わ

れてしまう。

「あなたの生徒手帳に電話番号が記されていたので、家族の方にはちゃんと連絡を入れておきました。安心してください」

「けどその不安も彼女の言葉で一気に和らいでいく。これで思う存分にご飯を食べられそうだ。」

「そなの……何から何まで、本当にありがとっ」

「いえ、別に」

私がようやく制服に着替え終わると、それを確認した椿ちゃんが寝室の扉を開いてさっさとここから立ち去ろうとする。置いていかれそうになった私はピンクの髪留めを髪に巻きつけて総髪を作りながら慌てて彼女の後を追った。

縦にも横にも広大な廊下に出た私たちは、隣同士に並んで仲良く歩いてと歩き始める。

椿ちゃんからは話し掛けてきそうにないので、私は足を動かさず彼女の綺麗に整った顔を見上げて口を開いた。

「椿ちゃ」

「花実、一つだけ訊きたいことがあります」

「まず最初に彼女の名前を呼ぼうとしたところで、行き先を見つめたままの椿ちゃんに素早く言葉を遮られてしまう。」

「あう、な、何？」

椿ちゃんが私に訊きたがること……それは私の持ち掛けようとした話題がどうでもいいと思ってしまうほど、とてつもなく大きな関心を私に抱かせた。

「あなたは昨夜から、時々寝言で『侍マン様』がどうのと呟いておりました。もしかしてあなたは、以前街に現れた侍と知り合いなのですか？」

「まあ恥ずかしい、そんな寝言を聞かれてたなんて。」

「いやそんなことよりも、どうやら椿ちゃんは私と侍マン様が親密な関係であるということに気づき始めてしまっているようだ。こないだ野田村くんからくれぐれもばれないようにと念押しされまくっ

たばかりなのに、どうしよう。

「ふふふ。実は私ね、侍マン様の弟子なんだよ」

でもばれてしまったからにはもう隠す必要がないのではないかと思つた私は、私と侍マン様の関係を堂々と自慢することにした。

「侍の、弟子……」

「私ね、昔から立派な侍になることが夢だったの。そのことをたまたまお会いした侍マン様に話したら、私のこと弟子にしてくれたのよ」

学校の屋上で弟子にしてくれると言われた時は本当に嬉しかった。でもそれなのに、お師匠様は「弱きを助け悪をくじく」という立派な侍の心得しか教えてくれない。心得くらいたくさんあるだろうに、どうしてなかなか教えてくれないのだろう。

もっとこう、手取り足取りいろんなことを教えてほしいのになあ。「ところで椿ちゃんは、どうしてそんなに侍マン様のことが気になるの?」

私が尋ね返すと、椿ちゃんはぷいっとそっぽを向いて、

「花実には関係ありません」

そっけなく、だけど私の名前を呼んでくれつつ、答えてくれる。

ずるいな、自分だって私に質問してきたくせに。

「私、あのお方の弟子なのよ。関係なくないもん」

「朝食の前に顔を洗いに行きましょう」

「あう、待つてよ椿ちゃん、歩くの早いよっ」

「花実の歩幅が狭過ぎるのです」

「ひどーい」

仲良くお喋りしながら廊下を進んでいくと、やがて私たちはいくつかの曲がり角に差し掛かる。このお屋敷は意外と道が入り組んでいるようで、椿ちゃんにひつついていないとすぐ迷子になってしまふそう。

椿ちゃんを見失わないよう注意しながら歩いている途中で、ふと廊下の脇に飾られてある変な置物が私の目に留まる。大きくて高価

そんな壺だ。これ一つで私が住んでいる家と土地が買えるかもしれない。

あ、こつちには何だか凛々しいおじさまの肖像画が飾られている。青い瞳をしているから、この人は椿ちゃんのパパかもしれない。あれ、どういいうわけか同じ人の肖像画が何枚も……。

それにしても、こつちも壺やら肖像画やらが廊下に転がされていると、本当に椿ちゃんの家がお金持ちであることをはっきりと思い知らされてしまう。いいなあ。

おつと、こんな展示品に気を取られている場合ではない。早く洗面所に向かわなければ。

「……あれ」

気がつけば、椿ちゃんの姿が私の周囲から消え去っていた。

「置いてかれちゃった？」

足の早い椿ちゃんは常に私の前を歩いていたら、私が立ち止まってしまうていることに気づかなかつたのだろう。つまり完璧に置いてけぼりを喰らったわけだ。

「椿ちゃん、どこいったのー」

私は周囲に声を掛けながら歩み進んでいく。きつと今頃、椿ちゃんは私がいなくなっていることに気づいて引き返してくれているはずだ。ここを真っ直ぐ歩いていけばいずれ出会えるはず。

しばらくして、私は頭を傾けた。

「あれー」

直進していけば椿ちゃんに会えると思ったのだけど、いつまで経っても彼女の姿が見える気配はない。

私はふと背後を振り返ってみる。

「……あう、しまった」

ただ前に進むことばかり考えていたせいか、さつきは全く気がつかなかつた。

さつき通ってきた道の向こう、遠くの方で、別れ道が三、四つほど見えている。

椿ちゃんはその道のどこかで曲がったのだ。そして引き返してきた友香ちゃんとすれ違うとなれば、私が曲がり角を通過した後に限る。

「戻らなきゃっ」

私は焦りを感じつつ早歩きで引き返し、適当な曲がり角を選んで進んだ。

椿ちゃんの姿が見つからない。不安な気持ちがどんどん迫り上がってくる。

途中、道の角に差し掛かるたびに椿ちゃんがいるかもと後ろを振り返り、いないと分かればまた進み、道を間違えたような気になってまた戻り……そんなことを繰り返しているうちに、

「ここ、どこだっけ」

本格的に、迷子になってしまった。

目印に壺と肖像画を探しつつ歩いていたのだけど、何故かそれらも見つからずじまい。

そういえば昔、中学時代のお友達に方向音痴だとばかにされたことがある。まさかそれを認めざるを得ない状況に直面してしまうなんて。

「椿ちゃん、どこお」

それにしてもおかしい。お金持ちのお屋敷なら道中で使用人の一人や二人見かけたっていいだろうに、誰の姿も目に映らない。

ひょっとして、私が迷子になっている間、私という存在は元いた世界から隔離されてしまったのだろうか。昔そっとう世にも奇妙なドラマを見たことがある。

人間、不思議な現象とは常に隣り合わせの状況下で生きていると聞く……私は今、その世界と巡り会ってしまったのだろうか。

「椿ちゃん、出てきてよお」

そう思った瞬間、胸の奥底からは不安以上の寂しい気持ちがふつふつと湧き立ってきた。

ここは私以外に人間が存在しない空間……他者との関わりを持って

ない、孤独な世界……。

「あう、うう……んつく、椿ちゃん、どこなのお」

一人ぼっちを意識していくうちに涙が滲み始めた。

迷子になって泣くなんて何年ぶりだろう。しばらく孤独感というものをすっかり忘れていたらしい。

私が望めば、周囲の人はみんな近くに来てくれた。こんなに一人ぼっちがつらいのは、多分その反動かな。

「ひつく、んう、あうう……」

ついに足元から力が抜けていき、私は床にぺたりとおしりをついてしまう。それから手の甲で涙を拭うことだけに専念し、泣き続けた。

椿ちゃんはどうして今まで友達を作ろうとしなかったのだろう。

一人が寂しくなかったのかな。

それとも、高校生にもなって一人ぼっちを寂しがる私の方が変なのかな。

もうこの際誰でもいい。知らない人でもいい。動物だって構わない。

本当に誰でもいいから、そばにいてほしい。

「お嬢ちゃん、どうしたのかね。迷子にでもなったのかい？」

背後から私に向けて、どこか渋みと重みを思わせる男の人の声が掛けられる。

「……あうう？」

首だけを振り向かせ、声の主を確認したその時、

「泣いているじゃないか。ほら、このハンカチで涙を拭きなさい」

数々のしわと灰色の髪が紳士的な、優しくもしっかりとした貫禄を醸し出しているおじさまが目映った。

腰を屈め、優しさに満ちた青い瞳で私のことを見つめてくる彼の差し出したハンカチに、私はそつと手を添える。

「ありがとうございます」

「気にしなくていい。まずはその濡れた瞳と震えた声を何とかする

ことに専念したまえ」

私はハンカチを受け取ると、それを目の縁に当てて丁寧に涙を拭き取っていった。だけど絶対的な安堵感が余計に涙を呼び起こして、目を拭うのにも時間が掛かってしまう。

「君は椿の言っていた客人かね？ なるほど、実に純粹そうな子だ」「あの、どなたですか？」

私が尋ねると、紳士的なおじさまはふっと微笑み、自分のことを語り始める。

「私の名は山城蕪村^{ぶそん}、椿の父親だ」

それを聞いた瞬間、今日の前にいるおじさまと肖像画で見たおじさまの姿がぴったりと重なった。

この人が椿ちゃんのパパ……白い肌や青い瞳、しかしグレーな髪の色から、おそらく日本人と外国人のハーフ。

「娘が世話になっっているそうじゃないか」

徐々に平常心を取り戻していく私の頭の中で、ぴんと何かが閃いた。

そうだ、この人が椿ちゃんの父親なら訊き出せるかもしれない。

椿ちゃんが爆破事件を起したくなる理由　椿ちゃんの髪を白くさせた、その原因を。

十三、夢の世界（後書き）

学園ものにお金持ちキャラは欲しいです。

ところでお金持ちや勉強の出来る人が、庶民のしかも花実ちゃんが合格できちゃつような学校に入ってくるのには、何か重大な理由があると思うのですよ私はー。えへへ。

十四、かみんぐ……あじと？

おじさま　椿ちゃんのパパに手を引かれ、洗面所を目指して広く長い豪華な廊下の上を歩くこと数分。

「あの、おじさま」

「何だね？」

どこまでも穏やかなその声に、私は少しだけ心を落ち着けることができた。

緊張が多少緩んでいるこの隙を見て、慎重に口から言葉を紡ぐ。

「椿ちゃんの髪のことです。訊きたいことがあります……」

私は躊躇う気持ちを何とか振り払い、思い切っておじさまに質問した。

椿ちゃんの髪は若白髪と言うには度を越えた白髪はくはつになっている。

友香ちゃんが言うには、黒かった髪が白くなるのは普通じゃない。ストレスが原因である場合がほとんどらしい。

椿ちゃんの過去が、知りたい。

「ああ、君は椿のことを心配してくれているのかね」

「もちろんです。私は彼女のこと、友達だと思ってますから！それからおじさまはにこやかだった微笑みを少しだけ沈ませて、どこか落ち込んだような表情になってしまう。」

やっぱり椿ちゃんの過去には何か大変なことあったんだ。漆黒だった髪の色を真っ白に塗り替えてしまうような、もしかしたら猟奇的な、もしくは犯罪的な、さらにはえっちな、総じて言うとヤクザ的な恐ろしい出来事が……。

「椿には悪いことをしてしまったよ。昔の私はかなり怒りっぽくてね、何かあるとすぐあの子に八つ当たりした」

私が戦慄していると、予想とは遥かに違った答えが私の耳に返ってくる。

おじさまは懺悔のつもりか、他人であるはずの私にあっさり椿ち

やんの過去を語り始めた。てつきり踏み入ったことを訊くもんじゃないって言われると思つてたのだけど、少し拍子抜け。

そんな私の思いをよそに、おじさまは話を続ける。

「多分それでだろう、椿は物心つく前から多大なストレスを感じていたみたいだ。恥ずかしい話だが、あの子が小学生に上がった頃、徐々に白く染まっていく髪の毛を見せられた時、ようやくそれに気づいたよ」

自嘲気味な笑みを作るおじさまを見上げ、私は胸の奥にちくりと刺されるような痛みを感じた。

「椿は堪忍袋の緒を切ることもなく、私と違って誰に八つ当たりするでもなかった。それを思い返し、あの子が限界を超えてもおストレスを溜め続けていることを知って、初めて胸が痛んだ」

『抑えられない怒りが、あつたのです』

以前椿ちゃんが私に放つたその一言が、ふと頭に思い浮かぶ。

彼女が理科室を壊したのは、溜まりに溜まつたその怒りが原因だったのか。

「今では私も改心してあの子と仲良くすることに専念しているのだが、これがなかなか上手くいかないくてね。やはり私はかなり嫌われているみたいだ」

そして椿ちゃんは、その怒りにたつた一人で耐えてきた。他人と関わることを避けてきたのは、多分、誰にも八つ当たりしたくなかつたからで。

「はて、どうしたものかな」

そんな彼女が、ついに学校の理科室へと八つ当たりした。

今まで必死に我慢を積み重ねてきた友香ちゃんは、崖っぷちのところ立たされている。

「私は椿ちゃんの友達です」

引き戻さなければならぬ。誰かの力強い腕で、崖の端から安全な地上へと、思いつ切り。

「もう心配は要りません、椿ちゃんにはこれからどんどん友達がで

きますから」

彼女を引き戻せるのは、誰の腕か。

「そして椿ちゃんは笑顔になります」

椿ちゃんは侍マン様に少なからず興味を持っていたようだった。

侍マン様の腕なら、彼女を救えるかもしれない。

「そしたら、おじさまと椿ちゃんは仲直りできるかもですよ？」

でもあのお方は滅多に現れないから、侍マン様にその役割を任せるのはとても難しい。

だから、『代わりの人』が必要になる。

「私が」

私は侍マン様の弟子だ。

「彼女の顔に、満面の笑みを咲かせてみせますっ」

師匠の代わりは、弟子の務め…… たった今、私が独断かつ偏見をもって胸に刻んだ侍の心得。

私では役不足かもしれないけど、立派な侍を志す者として、絶対に務め上げてみせる。椿ちゃんに笑顔を取り戻すという大役を、足をふらふらさせてでも背負ってみせる！

…… えへへ、今の私ってちょっと侍らしくてかつこいいかも。

「ありがとう。椿を転校させて本当によかった」

すると、おじさまが私の頭にごしつと手を置いて雑になでなでしてくれる。友香ちゃんよりは手つきが荒いけど、でも何だかとても優しい感触。

「さあ、ここが洗面所だ」

おじさまは立ち止まり、相変わらず装飾品の溢れている大きな扉に人差し指を向けた。

「すまないね。使用人を手伝わせに来させたいところなのだが、あいにく人手が極端に少なくてな」

「大丈夫ですよー、顔くらい毎朝一人で洗えますもん」

「はは、それもそうだね。では私はこれで失礼するよ。椿と仲良くしてやってくれ」

そう言い残して、娘思いのおじさまは背筋を伸ばし、貫禄を放ちつつ堂々と歩き去っていく。うちのパパもあれくらい凜々しかったらしいのに……椿ちゃんが羨ましい。

私が遠くなっていくおじさまの背中をいつまでも見つめていると、ふいに洗面所の扉がちやりと開かれた。

「花実、遅いです。早く顔を洗ってください」

「あれ、椿ちゃんもう来てたんだ。てつきり私のこと探してると思ってたのに……」

「高校生にもなつて迷子になるだなんてことは考えにくいですからぎく。」

「……本当に迷子になったのですか？」

椿ちゃんが呆れたとでも言いたげな視線を私に向けてくる。

何よ、迷子になつちゃいけないのっ。

それから椿ちゃんちの豪華で美味しい朝ご飯（今日は和食）をたらふくごちそうになつた後、私はこの家の高級車で自宅まで送られる運びとなつた。

「ありがとー椿ちゃん、何から何までお世話になつちゃって」

「気にしなくて結構です」

お屋敷を出てから数分歩き、駐車場らしき場所に辿り着くと、どこからか紳士のスーツに身を包んだ執事さんらしきおじいさんが私たちの前に現れた。彼は黒光りした大きな車（リムジン）って言うんだっけ）の隣に立ち、扉を開けてくれる。

さすがお金持ちだ、これまた貫禄のある人を雇っていらつしやる。私は促されるままに車の中へと入り込み、ソファみたいにふかふかな席へと腰掛けた。

「うわあ、椿ちゃん、これすごくやわらかい」

ちよつとおしりに体重を掛ければトランポリンみたいによく弾む。

気持ちいい。

「花実、そのくらいのことでは年甲斐もなくはしゃがないでください」
そんなこと言われても。

「あうー、だってすぐ気持ちいいんだもんこの車。私、将来は椿ちゃんおつきの運転手になろうかな。侍と兼業で」

「もし立派な侍になれば、いずれボディーガードとして雇ってあげなくもありません」

「やったーっ」

でも、椿ちゃんのボディーガードか……そうなると並以上の鍛練が必要になるかもしれない。運動はちよつと苦手なのだけだ。

いや、侍になるのには鍛練も必要なんじゃないかな。私が愛視聴している時代劇の主人公、徳田新三郎様とくだしんさぶろうは毎週圧倒的な戦闘力で悪人をなぎ倒していることだし、きつとそうなのだろう。

いずれの道も険しいことを再認識して、少しブルーになる私。あう、でも頑張るからねっ。

「嵯峨さん、車を出してください」

「かしこまりました」

嵯峨さんというらしい執事さんが運転席に座るのを見ると、椿ちゃんが彼に向けてかつこよく命令を下す。年季の入った手つきで車をいじりながら返事をした嵯峨さんに、今度は私が声を掛けた。

「あの、私の住所はですね」

すると椿ちゃんが答えをくれる。

「昨日、花実の家に連絡を入れた時、家族の人からお聞きしました。心配不要です」

「さっすがー」

そしてリムジンがゆっくりと走り出した。車体の揺れは一切感じず、その中でただ流れていく景色を眺めるのはとても爽快。

しばらくしてこの家の門らしきものが見えてくる。この門、家から離れ過ぎじゃないのかな。

勝手に開いていくゲートを通り抜けると、今度は道以外が森とな

っているような道へと飛び出した。

「椿ちゃんのお屋敷って、ひょっとして山の上？」

「頂上です。たまに野生の動物が出てきて危険なので、一人で家出には向きません」

「ふーん」

それはすごい。

ところでここは一体どここの山なのだろう。道を覚えれば椿ちゃんの家まで気軽に遊びに来れると思うたのに、あんまり遠いようだとそれも難しそうだ。

「ん……ふわあう」

ふいに喉の置くからあくびがこみ上げてくる。

眠くなってきた。さっき起きたばかりなのに、おかしいな。

「花実、到着したら起こしますから眠っててもいいですよ？」

「あう、そお？ じゃあ遠慮なくう」

そっか、お腹がいつぱいになったから眠いんだ。そんなことを考えながら、私は身体を横に倒して椿ちゃんの膝へと頭を乗せていく。

「……花実？」

「おやすみなさあい」

この瞬間に、私の意識は夢の世界へと飛んでいった。

何となく目が覚めてきた頃に、

「到着しました、起きなさい」

何者かの手によって、頬をむにゅっと引っ張られた。

「あうっ！」

寝耳に水な気分で寝ぼけ眼を上げると、いつもながら涼しい視線を私に注いでいる椿ちゃんの姿が目映る。

「何するの椿ちゃんっ」

「あなたがどれだけ起こしても起きなかつたものですから、実力行

使を」

「ひどいよー」

指で涙の滲み出る目と痛む頬を擦りながらゆっくり上体を起こすと、車窓の向こうにふと私の家が見えた。どうやらもう着いてしまつたらしい。

せつかく椿ちゃんと仲良くなったのに、このままはいはいするのはちょっと寂しいな。と思った私は、隣に座っている彼女の袖を引っ張ってあることをお願いした。

「ねえ椿ちゃん、うちに寄ってかない？ ていうか来てほしいな」

その直後、椿ちゃんがお返事をくれるより先に、運転席から嵯峨さんの声が聞こえてくる。

「是非そうしてくださいませ椿お嬢様。日の暮れかけた頃にお迎えに上がりますから」

ナイス嵯峨さん、もっと勧めてあげてっ。

「ん……」

嵯峨さんの声を聞くと、次に視線を合わせてくる椿ちゃん。相変わらず澄んだ空や海を思わせる綺麗な瞳だ。その瞳ですっと見ててもらいたくなる。

「……花実、お邪魔します」

たっぷり時間を掛けてからぱつりと出された椿ちゃんのその言葉に、私はにっこり笑顔で頷いた。

「お兄ちゃん、ただいまー」

玄関先に立ちリビングの方へ声を掛けるも返事は来ず。しかし代わりに聞こえるは大音量のテレビ音声。

「もう、お兄ちゃんてばっ！」

私の叫び声も何のそのと言わんばかりに騒ぎまくるリビングのテレビ。思わず溜め息が出てしまう。

「うるさくてごめんね椿ちゃん。すぐに黙らせてくるから、二階に上がって待っててっ」

椿ちゃんがこくりと頭を頷かせるのを確認した私は、靴を脱いでからリビングに向かっずんずん足を前に進ませていき、やがて一つの扉の前に立った。

乱暴に取っ手を取り、扉を一気に押し開く。

「お兄ちゃんっ、テレビの音大き過ぎ……だ、よ……」

次の瞬間、ほんのさっきまで怒りに任され動かされていた私の身体からは力が一気に抜けていった。

テレビの脇にはソファがある。その上に座っていたのは、

「おお花実、おかえり」

もちろんお兄ちゃん。

そして今回は隣にもう一人、なんと女の人が座っている。お兄ちゃんの肩に頭をもたれかけさせている、まるで恋人のような、一人の女性が……

「は、花実ちゃんっ!？」

友香ちゃんだった。

「やだ私ったらっあのね花実ちゃんこれは違うの私は花実ちゃんー筋なんだけどっ!」

かなり慌てふためきつつお兄ちゃんの肩から頭をぱつと離れた友香ちゃんは、何かと言い訳がましい言葉を次々と息継ぎもなしに並べていく。

「友香ちゃん、お兄ちゃんと付き合ってたんだ……」

さっきのソファ上での構図は「お兄ちゃんに甘える友香ちゃんの図」としか言い様のない光景だった。どうやら私はとんでもないことを知ってしまったらしい。

「違っ、私は花実ちゃんにしか興味なくて、これはお兄さんが勝手にしたことだ!」

「あーあ、とうとうばれちまったなー友香」

お兄ちゃんがまるで観念した犯人さんみたいな態度で、テレビの音量をリモコンで落としてつつそんなことを言う。

やっぱりそうだったのか……よく見れば友香ちゃんの服装はなん

となくいつもよりおしゃれだ。きつとお兄ちゃんに会うため、特別
気に入った服を着てきたに違いない。

「だから違うのよっ！ お兄さん、誤解を招く言い方しないでくだ
さいっ」

「何が誤解だよ。正真正銘、俺たち付き合っでんじやん？」

そう言っで友香ちゃんの肩を抱き寄せるお兄ちゃん。

「友香ちゃん、お兄ちゃん、お幸せに。私お客さん連れてきてるか
ら、二階に上がってるね」

「おう、サンキューな。理解のある妹で助かるぜ」

「だーから、違っで言っでるでしようがっ！」

迂闊だった。まさか友香ちゃんがそこまで進んでいたなんて……
私もいつか、侍マン様の心を射抜くことができるかな。できたらいい
なあ。

『花実、拙者はどうしても君のことが忘れられない……』

『嗚呼、侍マン様……』

見つめ合う二人はお互いに顔を近づけていき、唇と唇の距離を徐
々に狭めていく。やがて二人は火照ったそれらを重ね合い、口元の
温かみと共に愛を確かめ合った。なんちゃってっ！

「花実、用事は済みましたか？」

「ああんもう侍マン様ったらあ……あ、椿ちゃん」

私が妄想に耽りながらリビングの扉を閉めたところで（向こう側
で友香ちゃんが絶えず叫んでいる）、後ろから椿ちゃんに声を掛け
られた。

「どうしたの。二階に行っでてよかったのに」

「侍があなたの部屋の窓からこちらを覗いていましたので、その報
告に」

「それ本当っ？」

妄想すれば影とはこのことだろうか。久々に侍マン様がうちに来
てくれたっ。

「椿ちゃん、急いで行こう。椿ちゃんも会いたかったんだよね、侍

マン様に！」

私は椿ちゃんの手首をがっちりつかみ、やや強引に引つ張って階段を駆け上がっていく。

「いえ、私は一度たりともそんなことを言った覚えがないのですが、早く行かないと待ち切れなくなった侍マン様が帰ってしまうかもしれない。逃げ急げっ。」

二階に辿り着き、「はなみのおへや」と書かれたプレートを下げて下っている扉の前に立った私たち。深呼吸を数回、緊張する心を落ち着けた私は、ゆっくりと部屋の扉を開いた。

「あう、お久しぶりですうっ」

窓ガラスの向こう側で、侍マン様がにっこり微笑んでいる。

十四、かみんぐ……あじと？（後書き）

前回のあらずじってとこ、もしかして不要なんでしょうか。私は書いていて楽しいので続けることにします。もし前回のお話をお忘れになってしまった場合はそこで思い出してみてくださいませ。

十五、実は理想のお姉さん像（前書き）

（前回のあらすじ）

椿ちゃんをお家に連れてきた私は、なんとリビングにてお兄ちゃんといちやつく友香ちゃんの姿を目撃してしまいました！ 二人はそんな関係だったのかー早く結婚しないかなーなんて思いを秘めつつ自室へ向かうと、今度は窓の向こうで優しい笑みを浮かべつつ立っている侍マン様を発見します。私は感激のあまり飛び跳ねて喜びました！

十五、実は理想のお姉さん像

急いで窓の鍵を外しガラリと開いて侍マン様をお迎えする私。どうして玄関からやって来ないのだろうと疑問を抱きつつ彼を部屋の中へ促すと、侍マン様は草履を屋根の上に置いて開かれた窓をくぐってきた。

「いつもこんなところからですまないね、花実」

「とんでもございません、どこからでもお入りになってっ」

「じゃあこれからもずっと窓から入るけど、いいかな」

「その方が嬉しいですー」

私のお部屋が彼専用の玄関口だと思うと、何となく悦に入ってしまった不思議なこの気持ち。

浮かれている私に対して微笑みを絶やさない侍マン様は、まず窓近くの布団の上に足を置き、その後には床へすくと着地する。その一挙一動が堪らなく素敵に思えて、私の心はどこまでも舞い上がり続けた。

少女漫画だったら今の私は間違いなく主人公の女の子よね。だって素敵な殿方がわざわざ向こうから会いに来てくださったんですもの。

「さて、花実の家にお邪魔しといてなんだけど、拙者は椿に会うために来たんだ」

次の瞬間、私の心にずしんと重いものがのしかかる。

「先日は、どうも」

まるで以前にも侍マン様と会ったことがあるかのような椿ちゃんの台詞に私のハートはちよっぴりブレイク、そして少しのジェラシーが密かに芽生えてしまった。

私の想いをよそに侍マン様は椿ちゃんのもとまで歩み寄り、優しい笑顔を彼女に向ける。

「椿、君は自分のしでかしたことについて責任を取らなければなら

ない。あの爆発は下手をすれば怪我人だって出たかもしれないんだよ?」

「……あなたにそれを審判する権利はありません」

「はは、まあそうだけどさ」

いいなあ椿ちゃん、侍マン様の笑顔を独り占めだなんて。よし、私も負けじと目立つちゃおう。

「侍マン様、私とお話しましょうよー」

「で、君はどうするつもりなのかな。椿は椿なりに、何か考えていたりするのかい?」

「あなたにそれを伝える義務はありません」

無視された。どうやら今の侍マン様は私よりも椿ちゃんに興味津々らしい。しょんぼり。

「どうしようか。反省の色を見せてくれないと拙者は君に天誅を下さねばならなくなるんだけどな。侍だから」

「斬るなり焼くなりしたければしてください。逃げも隠れもしませんで」

ところで二人はさっきから何の話をしているのだろう。ジェラシに気を取られて二人の話しを聞き流していたために上手く話題をつかめない。

確か侍マン様、椿ちゃんに対して「しでかした」がどうのと言っていたよね。さらに侍マン様は「天誅を下さねば」なんて言っていた。もしかして椿ちゃん、何か悪いことでもしたの?

「椿ちゃん椿ちゃん、いけないことをしたらね、ごめんなさいって言わなきゃだめなんだよ」

私は彼女の袖を引っ張ってこちらに注意を向けさせ、素直に謝罪することを勧めてみた。何をしたのかは知らないけど、例えわざとじゃなくても、悪いことをしたのなら頭を下げない限りは絶対に許されない。

「ね?」

返事が無い。椿ちゃんは私を見下ろしたまま、いつもながら笑っ

た姿が想像できない無表情を保っている。

「……花実」

すると、椿ちゃんが私の頭にぼんと手の平を置いた。そして優しくなでなでしてくれる。

「ふえ？」

「あの時は、本当にごめんなさい」

どの時のことを言っているのだろう。

「あなたを悲しませたこと、ずっと悔やんできました」

椿ちゃんに悲しまされたことと言えば、まさか十年前のことを言っているのかな。

私が椿ちゃんに「嫌い」と言われてショックを受け、お手洗の個室でしくしく泣いていたあの時の光景が頭に思い浮かぶ。

「花実……その、許してください」

あの時の「嫌い」は本心から言ってたわけじゃなかったんだね。

その考えに至った時、私の頭でぴーんと何かが閃く。

これはチャンスだ。

「私、あの時はすつごく悲しかったんだよ。だからタダじゃ許してあげられないな」

昔からずっと椿ちゃんに言わせたいと思っていた一言を、今ここで言わせてやる。

「だから、私のことを友達だって言わたないと許してあげないよ」
「え……」

椿ちゃんが少しばかり目を見開かせ、可愛くぱちぱちと瞬きをした。

「い、言わないと、だめなんですか？」

「うん。言わなきゃ絶対許してあげないもん」

すると椿ちゃんは徐々に白い頬をほんのりと赤くしていき、

「は、花実は、その……花実は、私の、とも、とも……」

視線を泳がせまくりながら、普段の冷静な態度からは信じられないほどのうるたえっぷりを見せてくれる椿ちゃん。まあ可愛い。

「私は椿ちゃんの、何？」

「……………」

とうとう彼女は目を伏せて真っ赤になってしまった。

きつとぶつつけ本番だから恥ずかしいのだろう。そう思った私は、少しでも彼女のお手本にでもなればと願いつつ口を開いた。

「椿ちゃんは私の、大事な大事なお友達だよ」

「んっ！」

私が言い終わると、椿ちゃんはさらに目を見開かせて驚愕の表情を作り上げる。まるで鳩が豆鉄砲を食ったよう。

「ほら、椿ちゃんも」

催促をする私の見上げる視線を受け、ようやく覚悟を決めたのか、彼女は瞳をきりつとさせて私に向き直った。

「花実は、私のっ」

どういっわけか心臓がときどきしてくる。もしこのシチュエーションで椿ちゃんが男の子だったら思わず目を閉じ唇を突き出していたかもしれないというくらいの緊張が、電気のように素早く全身を駆け巡った。

「私の、大切な、友達です……………はっ」

最後にはトマトのように赤くなり、だけどちゃんとその一言を声に出してくれた椿ちゃん。

特に求めたわけでもない「大切な」の部分が感動を呼び、胸の奥底から溢れ出す何かに後ろを押され、思わず吹き出る私の笑顔。

「じゃ、許してあげるね」

「ありがとうございます……………」

私は椿ちゃんを十分辱めたところで侍マン様に向き直った。

「侍マン様、私が天誅を下しましたっ」

だから椿ちゃんのことを許してあげてほしい。確かに彼女は十年前、私をすつごく泣かせるようなひどいことを言っただけ、それも当時彼女の抱えていたストレスを考えたら情状酌量する余地は十分にあると思う。

そんな私の考えを察してくれたのか、侍マン様は微笑みを絶やさずに頷いてくれた。

「よくやった。さすが拙者の弟子だよ」

「えへへー」

褒められて嬉しい私は幸せな気持ちに全身を覆われる。覆われた全身は天国まで浮いてしまっそう。

『よくやった。さすがだよ』

頭の中で彼の言葉がリピートされた。

『よくやった。さすがだよ』

延々と、

『よくやった。さすがは拙者の愛弟子だよ』

一部を捻じ曲げて。

「きゃっもう侍マン様ったらー」

「花実、少し拙者の話を聞いてくれないかな」

侍マン様に肩をぽんと叩かれて、私はつと我に返る。あう、今のでせっかくの幸せが少し逃げてったかも。

「私、侍マン様のお話なら何だって聞きますよっ!」

とりあえず言葉を返しておく。もっと幸せな気分に戻りたかったな!。

「ありがとう。今日ここに来たのは、この話をするためでもあったんだ」

次の瞬間、微笑みが少しだけ薄れ、侍マン様は緊張と真剣が混ざった表情になる。

「大事なお話、なんですか？」

きりつとした眼差しも素敵だなど思いつつ、私は聞く体勢を整えて彼と向かい合う。

「拙者は、仲間を集めて自警団を結成したいと思う」

自警団の意味を思い出そうと試みながらとりあえず頷くと、侍マン様はさらに言葉を続けた。

「あまり表立っていないだけで、この世は既にどうしようもないほ

ど悪が栄え、蔓延っている。それらを潰えさせるためには拙者一人じゃ手に余るんだ。だから、君のような同志の協力が欲しい」

地域密着の警備団体か何かだったかなと思いつきながらとりあえず頷くと、侍マン様は真剣な表情から一気にもとの笑顔を蘇らせる。

「ありがとう、君なら賛成してくれると思っただけだ！」

いきなり手をぎゅっと握られたためにびくつとなつて驚いてしまふ私。何だかものすごく感激されている。

私もその自警団というのに誘ってくれたことにはとても嬉しく思っているし、できればここで跳ね上がって喜びたい。

「ただど浮かび上がった不安がそれを邪魔してしまう。」

「あの、侍マン様、私なんかが役に立つのでしょうか……」

自警団を組んで活動するということは、世のため人のために頑張るということだ。私なんかがそれに参加して侍マン様の足を引っ張りでもしたらどうしよう。

「確かに君には少し力量が不足しているかもしれない。だが、自警団を組むことは君を育むことに繋がると拙者は思う」

笑みを絶やさず、しかし真剣な表情で言う侍マン様を前に、胸がきゅんと締めつけられるような気がした。

「じゃあ拙者、今日のところはもう帰るよ。近いうちにまた来るから」

そして次の瞬間には、侍マン様が窓からこの部屋を抜け出して一瞬のうちに消えてしまう。

彼の去った跡、そよ風の吹き込む窓の向こうをいつまでも見つめていると、やがて椿ちゃんにぼんと肩を叩かれた。

「花実がその気なら、私もその自警団とやらに入れてください」
椿ちゃんまでもが真剣な瞳を私に向けている。

私も、決心しないと。

「うん、頑張ろうねっ」

でもその前に、侍マン様は仲間を集めて結成したいと言っていたから、まずは協力者を募ることから始めよう。

それに適する人物として最初に思い浮かんだのは、一階でお兄ちゃんといちゃいちゃしていた私の大親友。

「というわけで、お義姉ちゃんにも自警団に協力してほしいなって思ってます……」

「誰がお義姉ちゃんなのかしらあ？」

あれ、何だか友香お義姉ちゃん、ちよつとばかりご機嫌斜めな雰囲気。どうしちゃったのかな。

ちなみに私はリビングにてお兄ちゃんを追い出してから、友香ちゃんに自警団への入団を勧誘していた。

「あう、友香ちゃん、怒らないでよお」

「怒ってないわ、ただ花実ちゃんの発言にちよつとした訂正をお願いしたいだけよ」

友香ちゃんの言っていることがよく分からなくて、私は少しだけ首を傾げてしまう。

「どうして私が、あなたのお義姉ちゃんなの？」

なんだ、そんなことが気になったのか。

「だって友香ちゃん、お兄ちゃんと結婚……」

「しないわよっ！」

その怒鳴り声に畏縮してしまう私。

「ひうつ」

「いい？ よく聞いて。確かに一瞬の場面だけを目撃したあなたからすれば、私とあなたのお兄さんがいちゃいちゃしてたように見えたかもしれないわ」

実際にそうなんじゃないのかな。

「でもあれはね、あなたのお兄さんが美人の私に無理やり言い寄ってきたっただけのことなの。私だって必死に抵抗を試みたのよ？」

「ただ卑怯にもあなたのお兄さんは『俺に甘えてくれたら花実の秘蔵写真をプレゼントする』なんて言い出して、それで仕方なく私は

」

「海原友香、言い訳は見苦しいです」

次々と早口で喋り続ける友香ちゃんを制した椿ちゃんは、そこそこ広いソファの上で私にぴったりくっつきつつ言葉を続ける。

「潔く事実を認めたらどうですか」

「黙りなさい。ていうかぽつと出が私の花実ちゃんにべたべたしないです！」

正面のソファに座っていた友香ちゃんは顔を怒らせつつ立ち上がってこちらに近づき、椿ちゃんの反対側に腰掛けて私の腕を絡め取った。

「花実ちゃんは私だけのものなのよ。あなたなんかに渡さないわ」

「私は花実と交友関係を持つようになりました。花実はあなただけのもんではありません」

対抗して椿ちゃんも私の腕に抱きつき引っ張ってきた。

恋愛漫画だったら今の私は間違いなく主人公の男の子よね。だって二人の女の子が私を取り合ってるんですもの。

「やめて二人とも、私のために争わないでっ」

とりあえず一度言ってみたかった台詞を口にする私。

それからというもの、口喧嘩を始めた友香ちゃんと椿ちゃんに手を焼いてしまって、この日は自警団の話がほとんどできなかった私でありました。

どうして二人は仲良くできないのかなーもー。

十五、実は理想のお姉さん像（後書き）

花実ちゃんは友香ちゃんのことをお姉さんみたいな存在として慕っています。対する友香ちゃんは花実ちゃんのことを（むにゅむにゅ）としか見ていません。そんな二人の関係に今回から椿ちゃんが乱入いたします。友情の三角関係ですね！

十六、頭悪い子は好きですか？（前書き）

（前回のあらすじ）

椿ちゃんと仲良しになれた私は侍マン様に「自警団をやらないか」と誘われました。嗚呼自警団、なんていい響き……そうと決まれば早速入団の勧誘です。片っ端からお友達を誘っていきましょっつ。

十六、頭悪い子は好きですか？

「やめとこうよ。危険な目に遭うかもしれないよ?」

朝っぱらの教室にて、私は野田村くん「自警団やってみない?」と突撃勧誘してみた。なのに返ってきたのはどうも消極的な言葉。野田村くんなら友香ちゃんみたく快い返事をしてくれるだろうと期待してたのに。

しかし私は負けじと自警団として活動することの素晴らしさを弱気な男の子に諭すため、一生懸命言葉を探して並べあげようと試みた。

「世のため人のため役立つていくには、時に危険を顧みないことも必要だよ」

「君の場合はもつと危険を顧みた方がいいんだ。普段から階段で転びそうになったり水の入ったバケツに足を引つ掛けて全身びしょ濡れになったりしてるじゃないか」

「だけどあつという間に説得の言葉は詰まり、私の反論は水の泡として消え入ってしまう。どうやら野田村くんは意外と強敵だったらしい……ちよろいと思つてたのに。」

それにしてもどうしよう。もしものためになるべく男手を集めておいた方がいいという椿ちゃん提案に賛成したはいいものの、高校に入つてから友達が激減した私たちには野田村くんと海原くんの二人しか頼れる男の子はいない。海原くんはあの性格からして絶対に断られるだろうから、実質当てにできるのは野田村くんしかいなかったのだけど、

「だから、自警団なんてやめときな。世直しは侍マン一人に任せてれば大丈夫だつて」

その彼からはこうもきつぱり断られてしまった。

全然納得できない!

「どうしてよ、別にいいじゃない付き合ってくれたつてっ」

むきになって思わず叫んでしまう私。もう仲間に入ってくれるまでわがままになってやる。

「お願いだから私と一緒にやろうよ、もうあなたしかいないのぉ！」
私が駄々をこねて叶わなかったお願いごとは今までの人生にほんどない。こつこつやって大きい声を出していれば、いずれ観念して野田村くんも自警団に参加してくれるはず。

「ちよつと桜田さん、声大きいよ。あと口にする言葉をもう少し考えた方が……」

「あなたのためなら大きい声くらいいくらでも出すよ、私頑張るかっ」

だけど結構頑固な野田村くんは私の説得も知らんぷりでちらちらよそ見をしている。何を見ているのかと思つて彼の視線を追えば、私の大声に反応してこそこそ話を始めているクラスメイトたちが目に映つた。

狙い通り。私に駄々をこねられた人はこつこつ注目されることに居た堪れなくなり、そして結局は観念してくれるのだ。

「お願いだから野田村くん、私と付き合つて。私にできることなら何だつてするから、あなたの望みなら何でも聞くから」

「ああもう分かつたよ、せいぜい頑張らせてもらうさ！」

とうとう白旗を揚げた彼の大声が教室中にこだました瞬間、クラスメイトたちが「おおー」と感心したような声を出す。きつと皆、私の努力を認めてくれたんだね。

「やったー。ねえ椿ちゃん、野田村くんが仲間に入ってくれたよ」

私はこの喜びを分かち合おうと、今の今まで黙っていた椿ちゃんの方へ顔を向ける。でもどういふわけか私に目を合わせてくれない白髪はくはつの彼女は、ぶいっと顔を逸らしてしまった。

「あれ、椿ちゃんどうしてそっぽ向いちやうの？」

どうやら顔を少し赤くしているようだ。一体彼女に何があつたのだらう。

「花実、次から人を説得する時はもう少し言葉を選んでください」

椿ちゃんの言いたいことが上手く理解できなかったので、私は次の海原くんを説得するという大仕事に向け、頭の中で一生懸命作戦を練ることにした。

ようし、この調子で頑張るよー。

「嫌に決まってるだろうが」

お昼休みが始まった直後、私はお昼ご飯そっちのけで海原くんに会うため、急いで一年五組へと足を運んだ。

大した作戦も思いつかず、教室から出て行きかけた彼に突撃勧誘した結果、予想通り見事に断られてしまう。

「どうしてよお」

一応理由を尋ねてみた。

「どうせその自警団つてのに春平のあほも入るんだろ？ やってられるか」

それを聞いて私は二人が仲違いしていたことを思い出す。いい加減仲直りしてくれないかな、最近じゃ犬と猿だって仲良しだったのに。

仕方がない、こうなったらまた例の駄々こね作戦を決行しよう。私に掛ければ海原くんだって見事説得できちゃうんだから。

「お願いだから海原くん、私と一緒に」

私は思いつ切り息を吸った後、彼を驚かせるつもりで大声を出そうとする。

しかしその時、

「けど、まあたまになら参加してやらなくもねーな」

「ふえ？」

海原くんは私を仰天させるような一言を放ち、こちらの出鼻を打撃系パイルドライバーのごとき破壊力でくじいてきた。

目を見開いてぼかんとする私をどうでもよさげに一瞥して、海原くんは言葉を続ける。

「たまになら、だぞ」

そして彼は足の向きを変え、どこへ向かうのかお昼休みの廊下を目指し、この場から立ち去ってしまった。
拍子抜け、つてのはまさにこのことなのかな。とりあえずラッキ
ーっ。

「ところで花実ちゃん、具体的にはどういった活動をするのかしら、私たち自警団は」

友香ちゃんの教室にてお弁当を広げていた私に話し掛けてきたのはもちろん友香ちゃん。

お箸を取り出しつつ彼女にお返事する。

「世界の平和を守るんだよ」

夢と希望を極限まで膨らませた我らが自警団の目的を聞き、ゼリ
ー飲料の蓋を開けることに苦戦していた椿ちゃんが私に言った。

「それなら自警団の前に地球防衛隊を結成するべきではないかと思
います」

「あう……世界はちよつと言い過ぎたかな」

とりあえずは桜花おつかの平和を守るくらいにしておこう。ちなみに「
桜花」というのは私たちが暮らしている市の名前である。桜花市ね。

「あら、花実ちゃんなら世界のーつや二つ簡単に守れるわよ。椿の
言うことなんて間に受けちゃだめ」

「そ、そお？」

私ならできる……そんな風に言われると本当にできそうな気がし
てしまうから不思議。えへへ。

「友香、人にはできることとできないことがあるのです。それを今
のうちからしっかりと花実おつかに教えないでどうするのですか」

「花実ちゃんに現実のシビアさなんて似合わないわ。この子はいつ
までも幸せであるべきなの」

友香ちゃんが私の頭に手を置いてくる。お弁当の小さなおにぎり

をお箸でつまみつつなでなでされる感触を気持ちよく思っていると、椿ちゃんまでが私の頭をなでなでてきた。

「それでは花実が現実に対して打たれ弱いまま社会に出ることになってしまいます。友香は花実を甘やかし過ぎなのです」

「花実ちゃんは何が起ころうと私が守ってみせるわ。だから心配することは何もないのよ」

二人の会話はつかみどころが分からなくて理解が追いつかない。

でも、二人のお姉ちゃんが私を育ててくれている、そんな感じがしてすごく心地いい。幸せ。

「私も早く子供作って育ててあげたいな」

ふと思いついたことを口にしてみれば、次の瞬間には友香ちゃんの身体がピクツと揺れた。

「は、ははは花実ちゃん……子供、作りたいの？」

「うんっ、子作りしたい」

さらに次の瞬間には、友香ちゃんが鼻にティッシュを当てて顔を赤くする。

ティッシュは見る見るうちに赤く染まっていく。

「友香ちゃん鼻血出てるよ、早く保健室に！」

私が友香ちゃんを保健室に連れて行こう立ち上がった時、彼女はそれを制して「大丈夫よ」と笑顔を見せて言った。

本当に大丈夫だろうか。急に何の前触れもなく鼻血が出るなんておかしいよ。

「嗚呼、ボイスレコーダー持ってくればよかったわ……っ」

謎の言葉を呟きながら流れ出る血を拭い取っていく友香ちゃん。本当に大丈夫かな、出血多量で死んじゃったらどうしよう。

「友香、変態です……」

気がつくと、椿ちゃんまでもが若干顔を赤くして鼻をきゅっつまんでいた。

「花実ちゃん、あなたはいつまでも子供でいてね。そしてまたレア発言を……」

「花実、今はまだいいですけど、そのうち知るべきことはちゃんと知ってください……友香、ティッシュ貸してください」
本当に二人ともどうしちゃったんだろう。

しばらくして、ようやく血を止めた友香ちゃんが改めて私に聞いてくる。

「花実ちゃん、早速今日の放課後から自警団の活動を始めない？」

夕暮れ時の校内を二人きりで

「友香、抜け駆けは許しません！」

私は侍マン様と椿ちゃんと野田村さんと海原くんも含めた六人で頑張りたいな。

「活動を始める前にさ、まずは部活動を結成したらどうかな」

また口喧嘩を始めた友香ちゃんと椿ちゃんを眺めていると、野田村くんが突然そんなことを提案してきた。どうということだろうと首を傾げれば、彼はさらに話を続ける。

「今は休部状態だけど、この学校にはボランティア部ってのがあるらしいよ。部室を手に入れたら自警団の活動もやりやすくなるんじゃないかな」

それを聞いた瞬間、私の頭の中ではぱあっと可能性が広がる気配を感じた。

確かに部室があれば我らが自警団に興味を持った同志が顔を見せに来やすくなるだろうし、目安箱の設置も部活動の一環としてとすればやりやすくなる。他にもいろいろといいこと尽くめだ。

「さっすが野田村くん、ナイスアイデアっ」

「いやあ照れちゃうな」

……あれ。

「ってわあ、野田村くんいつからそこにいたの!？」

「え、今さら？」

びっくりしたな〜もー。こっちの驚くタイミングも考えてほしい。
「まあそんなことはさて置き、野田村くん、どうやったらお休みし

ているボランティア部を復活させられるの？」

「ん、ああそれはね……」

彼の話では、まず入部希望者を五名以上集める必要があるらしい。メンバーが揃えば、次は代表者が全員分の入部届を持って顧問の先生に提出、受理されれば無事に部活動を復帰させられるらしい。

「なーんだ、思ったより簡単じゃん」

私がほっと安堵していると、野田村くんが「気を抜くのはまだ早いよ」と真面目な顔つきになる。

「顧問の森下先生もりしたはものすごく面倒くさがりな人なんだ。入部届を受け取ってくれても放つとかれる可能性が高いよ」

「そんな無責任な先生がいるわけじゃない。あー安心したらもつとお腹空いたー」

私は野田村くんの不安を軽く受け流し、唐揚げをお弁当箱からつまみ上げ、それを落とさないよう気をつけて口に運ぶ。もぐもぐとお肉を噛んでいく中で、ふと今日の日付を思い出した。

「そついえば、もうすぐ夏休みだね」

窓の向こうからはセミの鳴き声がよく響いてくる。

夏休みに入ったら、立派な侍を目指して今まで以上に頑張ろう。身体を鍛えたり、困ってる人を見つけたらとにかく助けたりして……。

「そついえば花実ちゃん、試験で全教科赤点取ったおかげで、夏休みには大量の補習が待ち受けることになったのよね」

「ぎく」

忘れようと思ってたのに。ちなみに補習の次には追試が待っている。

「全教科赤点つて桜田さん、それかなりやばいんじゃない……」

野田村くんまで不安を煽ってきた。段々私の心から余裕の二文字が消えていく。

「花実、山城家の特別英才教育プログラムを三ヶ月間休みなく受ければ、高校一年生にして東大も楽に狙える学力を得られますが」

気の遠くなる話は聞きたくないっ。

「あうー、勉強やだー」

泣き言を口にしたところで私はふと思う。侍マン様に私の頭の悪さが知れたらどう思われるだろう。

『頭の悪いおちびさんなんか、侍になる資格ないよ』

ぐさっ。そんなことを言う侍マン様の姿を想像したら心臓を先割れスプーンでえぐられるかのようなものすごいダメージがっ！

「勉強、頑張らなきゃ……」

自警団の話はその後になりそうだ。もっと真面目に勉強しななきゃね……あう。

十六、頭悪い子は好きですか？（後書き）

今回のお話は四コマ漫画をイメージに書いてみました。皆さんも、お勉強はちゃんと頑張ってくださいね。赤点なんて取ったら進学とか危ないですよー？

十七、噂は噂（前書き）

（前回のあらすじ）

頑張って自警団の団員を揃えた私がこれから世のため人のために精一杯頑張ろうと意気込んだ矢先、まさかの強敵が登場！ 私はこの東京タワーよりは低い絶壁を前に隠せず立ち向かえるのでしょうか！（強敵Ⅱ補習と追試）

十七、噂は噂

「ボランティア部だあ？　そういや俺、その顧問だったなあ」

職員室にて、私は五人分の入部届（海原くんのは無理やり書かせたよ）を手に持ち、面倒くさがりと噂の森下先生に会いに行ったところ、彼は見事に机の上でだるーんとしていた。

髪はぼさぼさ、着ているジャージはやけに汗臭い。本当にだらけ切っている。

「あの、入部届を受け取ってほしいんですけど……」

「やだねクソ面倒くせえ。他の奴に当たりな」

「ボランティア部の顧問は森下先生だけなんですけどっ」

「知ったことかよ。俺あ今だからならタイムなんだ、放つといってくれ」

野田村くんから常識外れに面倒くさがりな人だとは聞いていたけど、まさかここまでだとは思ってなかった。あまりの徹底しただらけっぷりに面食らってしまう。

「つか今夏休みだぞ。入部届なんか受理できるか」

「ふえ？」

その言葉に、私は首をかくんと傾げて頭にハテナを浮かべる。

確かに森下先生の言う通り、今はセミのミンミン大合唱がどこにでも響くような夏真っ盛りである。理由は分からないけど、何となく入部届を受け取ってもらえなさそうな時期だ。

「分かったらとつとと帰れ。俺あクソ面倒くせえ日直の仕事をこなさなきゃならんだ」

「あう、失礼しましたー……」

実に残念。私はとぼとぼと入部届の束を持ったまま冷房の利いた職員室から出て行き、暑い暑い廊下の床へと足を踏み出していく。扉を閉めたところで私は深い溜め息を吐いた。

今日は数少ない私の夏休み。今を逃せばしばらくは補習地獄だ。だから何としてでも今日中にボランティア部を復活させたい。

こつなつたら生徒会室へ行ってみよう。確かに今は夏休みだけど、うちの学校の生徒会長さんは超が付くほど真面目な人らしいから、今日だって学校に来て何かしらの仕事をしているはず。というわけで早速生徒会室にレッツゴー！

生徒会室、それは一般生徒からすれば立ち入りしにくい言わば学校の聖域。私は今、その扉をノックしようと手を構えていた。

「……………あうー」
ただどなかなか勇気が出ずもじもじする私。職員室は割と平気だったのに。

とりあえずは心を落ち着かせるために深呼吸を試みる。吸って吐いて吸って吐いてを繰り返して少し落ち着いたところで、私は再びノックのために手を上げた。

「……………あうー」
そして緊張が舞い戻ってくる。もう、私の弱虫つ。
せめてこんな時、友香ちゃんがそばにいてくれたら……………彼女のそとさりげない後押しがもらえたら頑張れるのにつ。

「どつしよつ……………」
「あら花実ちゃん、珍しいわね。生徒会室に何の用？」
「んとね、森下先生が入部届受け取ってくれなかったから、直接生徒会長さんに渡そうかなって思って」

「会長なら中にいるわよ。ほら、私も一緒についてってあげるから、中に入りましょう」
「うん、分かったつ……………つて、友香ちゃん！？」
何故か聞いているだけで安堵できる声の主へと顔を向けた瞬間、目に映った親友の姿に驚愕してしまう私。

今は夏休みのとある一日だから、友香ちゃんが学校に来る理由はなかったはずなんだけど。

「……………どうしてここにいるの？」
「一学期にサボりまくった生徒会の仕事が溜まっちゃってたの。だ

から夏休みのうちに一生懸命解消してるのよ」

ふーんと納得しかけたところで、私はさらに疑問点を見つけてしまふ。

「友香ちゃん、生徒会役員だったの？」

「……花実ちゃん、私、役員任命式の時に全校生徒の前で壇上に上がったはずだけど」

そういえば新学期が始まって間もない頃にそんな集会があったわけ。私は終始うたた寝してたから、そこで何があったのかは全然憶えていない。

「一年生で生徒会役員だなんて、友香ちゃんすごいねー」

「成績いいからなりなさいって言われたの。甚だ不本意だわ」

私はふと、ずっと昔に見せてもらった友香ちゃんの通信簿の数字を思い返す。確か友香ちゃん、昔はオールフアイブ海原なんて呼ばれてたっけ。

「まあとにかく」

友香ちゃんは一度この話題を打ち切ると、後ろから私の両肩へぽんと手を置き、ぐっと後押ししてきた。

「会長に会いに来たんでしょ？ ほら、行きましょう」

「あう、でも……うん、行こっ」

私はついに決心を固めると、ぎこちなく扉をコンコンと叩いてみる。

返事はない。中の人に聞こえなかったかもしれないので、もう一度ノックしてみた。

返事はない。中の人に聞こえなかったかもしれないので、もう一度ノックを……のループを五回ほど済ませた後で、私はとある結論に辿り着く。

「お留守？」

「いや、会長に限ってそれはあり得ないわ。先生に内緒でここに住んでるんだから」

「ふうん、すっごく真面目な人なんだねー」

この学校の生徒会長さんは日が昇ってから日が沈んでまた昇るまで、毎日ほぼ無休で学校の秩序を守っているらしい。私なんかじゃ及びもつかないほど侍な人だ。

「……まあ、表面だけなら真面目に見えるわね」

友香ちゃんがどこか気まずそうな顔をしている。どうしたのだから。

「とにかく入りましょう。鍵は開いてるから」

そう言うと、友香ちゃんはがちゃりと扉を開きつつ私の手をつかみ、室内へぐいっと引き入れてしまう。

「うわあ……」

私の口からは思わず感動の声が上がった。

部屋の中央にはテーブルやソファが置いてあり、また端には本棚や食器棚、そしてなんと簡易キッチンまでもが設けられている。お客さんをおもてなしする用意は十分だ。視線を少し上げればエアコンまでもが発見できてしまうところから、どうやらこの部屋には職員室並の設備が整えられているらしい。

そして最後に一番奥、でんつと大きな机が鎮座する上に目を向けると、一人の女の子がぐてーっと突っ伏しているのを見つけた。

「会計ちゃん、別にノックしなくても普通に入ってくればよいではないですかー」

綺麗な声がそこから響いてくる。何となく聞き覚えがあるなーと思いつつ、私は「会計ちゃん」らしき人へと視線をずらした。

「もう、会長つてばだらだらしてばかり……起きなさい、大事な用を持ってきたから」

友香ちゃんは多分上級生である会長さん相手にため口で応答し、会長さんと言えば机に突っ伏したまま言葉を返した。

「大事な用なんて丸めてばーいですわー。ワタクシは今、だらだらすることに命がけなんですのよー」

何だか、ついさっきまで抱いていた生徒会長さんのイメージと実物の生徒会長さんを混ぜたら危険物質が発生しそうなくらい違和感

を感じる。同時に強烈な既視感が……というか、会長さんの態度はまるであの人の。

「生徒会長さん、森下先生みたい」

机への突っ伏し方からして、だらけっぷりがまるでそっくり。

「森下の名字を持つ教師はワタクシの兄ですわー……って、一般生徒が何故ここにっ!？」

ようやく私に気づいたのか、いきなり上体をずばっと起こし、一本の大きな三つ編みを揺らしつつ驚愕に満ち満ちた瞳を私に向ける生徒会長さん。まるで水鉄砲を食った猫のよう。

「ど、どどどどうしまししょうワタクシったら！　いいえ、慌てる前にまず行動ですわ。こんな姿を見られたからには、とにかく口止めをしなければなりません！」

言い放つと、会長さんは机の引き出しから束ねられた縄とガムテープを取り出して両手に持ち、ぱつと立ち上がって私に迫ってきた。

「覚悟なさい一般生徒、ワタクシの秘密を知ったからには容赦いたしませんわーっ!」

「ひうっ」

血圧が高めな百獣の王がごし迫力で私に襲い掛かってくる彼女を前に、私は怖くなって身体をぎゅっと縮こまらせてしまう。その一瞬の後に、

「おやめなさい」

走っているところで友香ちゃんに足を引っかけられた会長さんは、綺麗に孤を描いて跳躍し、ソファの上にどさつと倒れ込んだ。

「はふっ、やはり学校の備品であるソファは実家のものより高級感溢れますわねえ……」

その拍子に私の足元で縄が散らばり、ガムテープがころころ転がっていく。

……何だっただらう。

「花実ちゃん、気をつけてね。会長は本性がばれると男子には拳、女子には緊縛をもって黙らせようとするから」

「あつ、デンジャラスだね」

「どうやら私は危うく縛られてしまつところだったらしい。まあそれはそれで楽しそうだけど……じゃなくって！」

「会長さん、ひよつとして猫かぶりですか？」

「ひよつとしなくても、よ」

友香ちゃんの訂正を聞き流して会長さんのもとまで歩み寄った私は、ソファの上で幸せそうにごろごろしている彼女を見て少し羨ましくなる。

「気持ちよさそう。」

「会長さん、お隣いいですか？」

「私もごろごろしたくなってきた。」

「いいですわよー」

もう口止めはしなくていいのかなと思いつつ、とりあえず入部屋の束をテーブルの上に置いて、僅かに隙間が残されているソファの上に寝転がってみる私。ふかふか感が素晴らしい。

「……捕まえましたわ」

「ふえ？」

私も幸せの世界へ飛び込みダイブしようとしていた次の瞬間、両の手首をぎゅうつと握られるような感覚が私の精神を現実に呼び戻す。

気がつけば、私は生徒会長さんの手によってソファに押し倒されたような状態になっていた。

「会長さん、痛いですよおっ」

「ワタクシの大事な秘密を知ったからにはただでは帰しませんわよ。万が一にも公言しないよう、ワタクシに対する恐怖をとことん植えつけてあげますわ……」

会長さんからは邪悪な気配をむんむんと感じる。もうこの時点での黒光りする昆虫並に怖いのだけど。

「あなたが陰でただらしてることくらい知られたって別にいいじゃないー」

大変な目に遭わされないよう、私はとりあえずの抵抗を試みる。

「ワタクシにはイメージというものがありますの！」

何とかして逃げようと身体をよじらせるも、非力な私では無駄なことだった。

「会長、いい加減にしなさいっ」

私が怖さのあまり涙目になりかけていると、友香ちゃんが会長さんに向けて大きな怒鳴り声を上げる。

「友香ちゃん、助けてーっ」

私は友香ちゃんに期待感で満ちた視線を向けた。

やっぱり友香ちゃんは親友だ。私が困った時は必ず助けてくれる

「花実ちゃんを縛っていいのは、全宇宙でも私だけなのよ？」

とは限らないんだけど。

友香ちゃんは言いながら床の縄を拾い上げてこちらに近づいてくる。見事に裏切られた。

「安心して花実ちゃん、私なら気持ちよくなるくらい優しくしてあげられるから……はあ、はあ」

優しくしてくれるなら縛られても……じゃなくってー！

しばらくして、生徒会長さんの本性は絶対に口外しないという誓約書を書かされ指紋を押した後、私はようやくボランティア部の復帰を認めてもらうことに成功しました。

私の補習は三週間後にようやく終わる。その時が来たら、本格的に活動を開始しよう。

ちなみに会長さんは、

「ところで生徒会長さん、面倒くさがりなのはどうして生徒会長になっただんですか？」

「生徒会室が豪華だからですわ。それに仕事は他の役員に押しつければ済みますもの」

噂と違ってすごく不真面目な人だった。

十八、シャドーボクサー姉御（前書き）

（前回のあらすじ！）

生徒会長さんにボランティア部復帰の願いをしました。前回はそれくらいしかしてませんっ。だから今回はちょっとだけお散歩に出かけたいと思いまーす！

十八、シャドーボクサー姉御

七月も終わりに近づいたこの時期、そろそろ夏休みの宿題に手をつける人が多くなると思う。だけど私にはそんなものに時間を割く余裕がなかった。

何故なら、私は補習用の宿題を毎日出されているからなのである！
「あうー」

自宅の自室、勉強机の上に広げられた宿題のプリントを前に、頭の中がどうにかなっちゃんいそうな気分の私。

毎日毎日こんなやらされてたら身体が持たないよー。

「えっと、これはたすき掛けだから、えっと、えっと……」

暑さのせいもあり、あまり頭が回ってくれないので一問一問にかなりの時間を掛けてしまう。

「……あうー」

いつもみたく友香ちゃんに助けてもらいたいところだけど、今回はある理由からその気が起こらない。

もし私が他人を頼ることばかり繰り返していれば、そのうち侍マシ様に見限られてしまう。そんな予感が私を今までにないほど頑張らせているのだ。

「よし、あとちょっと」

そしてようやく一枚目のプリントを終えた私は、それを机の端に除けて新しいプリントに挑む。

何だか、侍マン様のことを考えるとやる気が湧いてきた。

「頑張ろーっと」

私が小さく意気込んだその時、ふと目覚まし時計の針が目映る。短針は午後一時を過ぎようとしていた。

「……あ」

大変なことを思い出す私。

「いけない、暴れん坊侍の時間だっ」

私の愛視聴している時代劇、「突撃！ 暴れん坊侍」の再放送がそろそろ始まってしまふ。宿題なんか後回しにして、早くリビングに行くこう！

『問われて名乗るもおこがましいが』

女の人が襲われそうになった時、テレビ画面に堂々と新三郎様が登場した。

「きゃー新三郎様ーっ！」

彼はいつ見ても素敵過ぎる。

江戸時代頃に実在した侍である徳田新三郎様は、いかなるものも寄せつけないほどの力を持つ偉大な剣豪としても有名なのだ。その腕により、悪党を一瞬のうちにはたばったと斬り倒していった彼は、去り際に一言だけ捨てて台詞を置いていく。

『安心せい、峰打ちじゃ』

「かつこいーっ！」

この番組を見ているといつも思う。

本物の新三郎様に会ってみたい。タイムスリップさえできれば会えるのにつ。

「あつ……」

画面の向こうで動いている新三郎様の面影が、ふと侍マン様の姿と重なる。

もし、侍マン様の正体が江戸時代からタイムスリップしてきた本物の新三郎様だったら……なんて、さすがに妄想が過ぎるかな。

気がつけばテレビは既にスタッフロールを流していた。それから次回予告にわくわくすれば、私は立ち上がって自分の部屋に戻ろうと歩き始める。

侍マン様に会いたくなっちゃった。

「頑張らなきゃ」

さっさと宿題を終わらせたなら、今日は侍マン様を探しに街へ行く。

一日は長い。だから何もわざわざ暑い真っ昼間に勉強をする必要はないじゃないかという結論に辿り着いた私は、おしゃれな格好で一人、雑踏と車の行き来が激しい街の歩道をてくてくと歩いていて、確か椿ちゃんの話では、侍マン様は以前この近くに突然現れて、女の子を襲っていたチンピラさんを見事に退治し、そして忽然と消えてしまったらしい。

きつと侍マン様はこの街を中心に日夜パトロールを行っているはずだ。確証はないけど、そうと思わなければ探しようがないので、とにかく私はここら一帯をくまなく探すことにする。

「どこにいるのかなー」

それから私はいろんな建物の裏口や歩道橋、和服店やデパートの日本刀売り場を覗いてみたけど、結局侍マン様とお会いすることはできなかった。

私ははあと溜め息を吐いて休憩がてらに立ち止まる。近くに腰掛けられるところはないかと辺りを見回していると、

「親分、あん時のがきんちよ発見しましたぜ。どうします?」

背後からどこかで聞いた声が届いてきた。

「馬鹿野郎、あいつに関わったらまた例の化け物侍が出てくっかもしねえだろうが。ここは無視するに限る」

「せっかく親分好みのちび女なのに、もったいないっすねえ」

「人をロリコンみたいに言うな。ワシは性に関しちゃ実に合法的なんだよ」

聞き覚えのある声と声が少し離れた後ろでこそこそと会話している。気になって振り返ると、

「やばい、見つかりましたよ親分」

「馬鹿野郎、てめえがでけえ声だすからだ!」

声の主は、確か入学式の日私に絡んできた二人組のチンピラさ

んだった。

思い返せば、あの日は私と侍マン様が初めて出会えた運命的な日……もう三、四ヶ月前のことになるのか。懐かしいなあ。

私はそうやって思いを馳せながらてくてくとチンピラさんたちに近づいていく。

「親分、近づいてきましたよ」

「馬鹿野郎、逃げるに決まっつただろうが！」

どういうわけかうるたえる彼らに向けて、私は心を込めて頭を下げた。

「二人とも、こないだはどうもありがとー」

「……は？」

「……へ？」

私は頭を起こし、感謝の意味を一生懸命伝えようと試みる。

「もし二人が私に絡んでこなかったら、私は侍マン様に会えなかったかもしれないの。だから本当にありがとー」

するとチンピラさんたちはお互い顔を見合わせて少し呆けたような顔をした。やがて子分っぽい方のチンピラさんがやりと笑い、親分さんに言った。

「親分、チャンスつすよ。こいつを上手く騙して人質にすりゃあ、あの化け物侍をこてんぱんに……」

あう、また悪いこと考えてる。

「馬鹿野郎、人質なんて意味がないほど奴は強いんだ」

しかし親分さんの方はすっかり侍マン様に恐れを成してしまっているようだ。さすが侍マン様、その場しのぎの世直しとは訳が違う。「お嬢ちゃん、ワシたちはあの時のことを深く反省している。だから許してくれ、この通りだ」

今度は親分さんが深々と頭を下げ、私に許しを乞うてきた。

「馬鹿野郎、お前も頭を下げんか」

「へ、へいつ。ほんと、すみませんっしたー！」

そんな素直に謝られると逆にこっちが困ってしまう。でもチンピ

ラさんに頭を下げさせるのは偉くなつたみたいで少しだけいい気分。
「えっへん……じゃなくって、二人とも頭を上げてよ。私あの時のことは気にしてないから」

「嗚呼、なんて寛大なお方なんだ……」

それほどまでに侍マン様を恐れていたのか、親分さんがこれでもかというぐらいの涙顔になって顔いっぱい感動の笑みを広げた。まるで生け贄にならなくて済んだ村の無法者みたい。

「どういたしまして。もう悪いことしようなんて考えちゃだめだよ？」

「もちろんだとも！」

はい、とてもいいお返事だね。

「親分、悪事が駄目なら俺たちは明日から何を楽しみに生きていきやあいいんすか」

「馬鹿野郎、そんなだからお前は恋人に逃げられるんだ。楽しみなんて生きてりやどうにでもなるわい」

親分さんが子分さんをばかりと叩く。仲良しな二人に私はあることを提案してみた。

「ねえねえ、二人とも暇ならさ、私と一緒に自警団やってみない？ 言い合いを中止して視線を私に向けるチンピラさん。疑問系な表情を作る彼らに私は言葉を続けた。

「この街で一緒に世直ししようよ」

すると間もなくして、親分さんが満面の笑みを顔に咲かせて私の手を取り、痛みを感じさせるくらいぎゅっと握ってくる。

「ワシはあんたの海より広く深いその心に感動した。だから喜んで力添えさせてもらうぜ、姉御！」

「ふえ？」

呼ばれなれないその呼称に面食らってしまう私。

確か姉御というのは女親分って意味だ。どういうわけか私はいきなりこの人の親分に任命されてしまったらしい。

「親分が姉御と呼ぶお人は俺の姉御でもあります。だから俺にも協

力させてください、姉御！」

それにしても姉御だなんて……嗚呼、なんていい響き。

「えっへん。二人とも、私についてきなさいっ」

「押！忍！」

三人で街の中を歩くこと十数分、私は元親分さんに話し掛けた。

「ねえ西木、侍マン様が行きそうな場所ってどこかな」

「姉御、本当にあの侍と会うのか？ ワシらは何かと気が進まないんだが……」

「大丈夫だよ。私が西木と後藤は改心しましたーってちゃんと侍マン様に説明するから」

ちなみに西木と後藤というのは親分さんと子分さんの名前である。

西木が親分さんで、後藤が子分さんね。

「姉御、そりやありがてーっす。これで安心つすね親分」

「馬鹿野郎、そんな大雑把な礼の言い方があるか。もっとう、心の底から感謝の気持ちをだなあ」

それにしても、この二人の会話は聞いているだけで楽しくなってしまう。私はしばらく足が弾んでいく感触を味わいながら進んでいた。

街中を歩き回り、侍マン様に出会えないと嘆くこと十数回、溜め息を吐くのにも慣れてきてしまった頃、

「あ、海原くんだ」

私は数十メートル先の前方に、広場のベンチで退屈そうに座っている一人の男の子を発見する。散歩でもしてたのかな。

と、そこで私はあることを思いつく。海原くんにも侍マン探しを手伝ってもらおう。

「親分、あいつつてもしかして……」

「馬鹿野郎、皆まで言うな。なあ姉御、あいつと知り合いなのか？」

「うん。海原くんはね、自警団仲間なの」

次の瞬間、二人の顔が「げ」とでも言いたげにしょんぼりとなっ

てしまう。一体二人に何があつたというのだろう。

「親分、どうします？ 逃げまじょうよ」

「馬鹿野郎、姉御の前でそんな無様を晒すような真似ができるか。相手があの海原だろうと、臆しちやあ男が廢るぜ」

この二人はうるたえることしかしてない気がすると思いつつ、私は二人に尋ねてみた。

「ひよつとしてき、西木も後藤も海原くんと知り合いなの？」

次の瞬間、二人の視線が「うげ」とでも言いたげに逸らされてしまふ。まるで人には語りたくない過去があるかのよう。

「姉御は知らねえのか？ 海原は泣き疲れた赤ん坊も大号泣させるほどの恐ろしい喧嘩野郎なんだぞ」

「俺たちも何度あいつにやらかけたことか分かりませんぜ」

「ふーん」

海原くんはそれほどデンジャラスな人じゃないと思つてただけど。

でももし二人の言うことが本当なのなら、私は侍として彼に「そんなことしちやだめだよ」と優しく諭してあげなければならぬ。

喧嘩するほど仲が良くて、暴力はいけなからぬ。

「おい海原くつんううっ!？」

「待つてくれ姉御、ワシたちに心の準備をさせてくれえ!」

大声で海原くんを呼ぼうとした時、私は西木の大きな手により口を塞がれて喋れなくなる。ひどいことするなあ。

だけど西木が妨害したのにも関わらず、海原くんは私に気づいて視線をこちらに向けてきた。そして相変わらずのしかめっ面を顔に貼りつけて立ち上がった彼は徐々に私たちのもとへと近づいてくる。「親分、こりややべーんじゃねーすか？」

「馬鹿野郎、言うまでもなくやべえんだよ」

私の背中で身を隠し、ぶるぶると震え始める西木と後藤。情けのないなあ、私の舎弟になる気ならもつと侍らしくしてもらわないと困つちやうよ。

「よう、ちび。何してんだ？」

「こんにちは、海原くん。侍マン様を探してるの」

そしてとうとう海原くんが目の前までやって来た。

「あっそ。ところで西木と後藤、元気そうじゃねえか」

私の背後に向けて声を掛ける海原くんの顔は、どういいうわけかしかめっ面から邪悪な笑みに変化している。西木たちに会えて嬉しいのかな。

「海原くん、この二人とはどういう関係なの？」

尋ねてみると、海原くんは吐き捨てるように言った。

「ボクサーとサンドバッグの関係だよ」

「あう？」

よく分らない。

「じゃあな西木、後藤。また会おうぜ」

その言葉を最後に、海原くんは私たちの前からさっさと立ち去ってしまう。終始私の背後でぶるぶる震えていた二人は、しばらく海原くんの背中を見つめるとふうつと安心したような溜め息を漏らした。まるで百獣の王に目をつけられた人間のよう。野獣みたいな外見のくせに。

「さすが姉御だぜ。あの海原とも友好関係を築いているなんて……」

「すげーっす。姉御のこと、心の底から尊敬するっす！」

一通り安堵し終えた二人は光を宿した尊敬の眼差しを私に向けてくる。そんな率直に褒められると照れちゃうな！。

「えへへ……えっへん」

たくさん褒められた私は、この後も上機嫌で侍マン様探しに没頭した。

日が沈みかけ、空全体が橙色に染まり始めた頃、

「姉御、もう帰ろうぜ」

「帰りましようよ」

舎弟二人が帰りたがってきた。肩を少しだけ落として歩く彼らに

向け、私はきつぱりと断ってみせる。

「やだ。まだ侍マン様に会ってないもん」

「今日はもう会えねえって。日も沈みかけてるしよ」

「諦めたらそこで試合終了だよ」

「ワシには姉御がシャドーボクシングしてるようにしか見えねえんだがな」

西木、何気にひどいこと言うね。

まったく、侍マン様も侍マン様だ。近いうちに会いに来るみたいなこと言って、ちっとも現れてくれないじゃん。

「むっー」

私はこんなにも会いたいと懇願してるのに……もしかすると、侍マン様は私のことが嫌いになったのかもしれない。出会った頃から馴れ馴れしくし過ぎたせいで、そろそろ私に嫌気がさして……想いが空振りしている時、考えがどんどん悪い方向へと流れていってしまふのが私の悪い癖。無意味に落ち込んでしまふ。

「あっー……」

「あ、姉御？」

「どうするんすか親分、姉御泣きそうっすよ！」

「わあすまない姉御、ワシが言い過ぎた、だから泣かないでくれえ！」

だめだ、涙があふれ出て止めようにも止められない。そろそろ流れ出る。

「う、うっ……」

もう我慢の限界だった。

「うわああんっ」

私が大声で泣き始めた次の瞬間、

「ぐわあっ！」

「ぐへえっ！」

西木と後藤の歪な悲鳴が私の耳に届いてくる。

私のそばでばたりばたりと倒れていく舎弟二人組。私がどうした

ことかと後ろを振り向けば、

「まったく、この二人はまだ懲りてなかったのか」

会うたびに柄の変わる袴と腰に差した鞘入りの日本刀、一箇所に束ねられた黒い総髪がお似合いの男性が、呆れたとでも言いたげな表情でそこに立っていた。

「久しぶり、花実。元気だった？」

彼のにつこり優しい微笑みが私に注がれる。

「侍マン様あー！」

思わず私は彼の固い胸に跳んで抱きついた。涙が余計にあふれ出す。

「会いたかったですよおっ」

「よしよし、怖かったね。もう大丈夫だよ、悪者は僕が退治したから」

侍マン様の言っていることがよく分からなかったけど、今は再会できた感動が大きくてそれどころではなかった。

やっぱり私は嫌われたわけじゃなかったんだね。

「侍マン様、今までどこにいたんですかあ」

「ちよつと遠くにいたんだけど、風の噂で花実が探してるって聞いたから急いで来たんだ」

私の頭をなでなでしてくれる侍マン様。えへへ、感無量。

「じゃあ花実、君の家族が心配してるだろうから、もう帰ろうか。

拙者に用事があるなら、道中にでも話を聞くとよ」

そして侍マン様が私の右手を優しく包む。

「はいっ」

私たちは一緒に歩き始め、この場を後にした。

家に着くまでは侍マン様と一緒にというチャンスを活かし、私は彼が発足した自警団について進展したことをたくさん話した。野田村くんが乗り気じゃなかったこと、海原くんが意外と話に乗ってくれたこと。そして今日、新しく入団した二人の元チンピラさんのこと

もあ。

「やばい、かも……」

街から数百メートルくらい離れた頃、西木と後藤のことを思い出
す。

「どうした、花実？」

「侍マン様、さっきの場所に戻りましょうっ」

私は侍マン様の手を引つ張り、二人が倒れた位置を目指して走り
出した。西木と後藤は改心したんだよということは今さらながらに
語りつつ、なるべく猛ダツシユで、私たちは暗くなりかけた道を駆
けていく。

そして二人のもとに辿り着いた時、彼らは道端に眠りつつ寝言で
「姉御ー背え伸ばしちゃあいけねえよー」「飯食いに行きましょ
うよー」と呑気に呟いていた。

猛烈に知らんぷりをしたくなったのは内緒だよ？

十九、夏休みのある日（前編）（前書き）

（前回のあらすじっ！）

私にも舎弟ができました！ そのいかつい男性二人組は私のことを「姉御」と呼んで慕ってくれます。しかし今回のお話には全く絡みがないその二人、影が薄くならないことを祈るばかりだね！

十九、夏休みのある日（前編）

夏のある日　八月も中旬に差し掛かった頃、私はようやく補習
漬けの追試祭りから開放された。

地獄の日々が終わった喜びに胸を弾ませながら通る通学路。足取
りはつつきつつきるん。実は夏休みの宿題もほとんど終わらせ
ているから気楽なものである。

スキップで道を進んでいくと、やがて一つの曲がり角に差し掛か
った。私は勢いに乗ってくるんと佳麗なる方向転換を空気中の酸素
やら窒素やらに向けて披露する。

「ご機嫌だね、桜田さん」

すると、不意に後ろから誰かさんに声を掛けられた。振り返って
みると、そこにいたのは私服姿の野田村くん。こんな昼間から外に
いるなんて、一体どうしたんだろう。

「野田村くん、どっかお出かけ？」

私は何となく思ったことについて尋ねてみる。

「うん。ちよつとした小旅行にね」

「小旅行……」

それを聞いて私はいてもたってもいられなくなり、

「お願い、私も連れてって！」

思わず彼の腕に抱きついてしまっていた。

思えば夏休みは既に半分も終わってしまったている。それなのに私
が作った夏の思い出といえば、ボランティア部を復帰させようとし
たがために生徒会長さんを暴走させてしまったことぐらいだ。

一生に数十日しかない高一の夏休みなんだ、もっと楽しい思い出
をたくさん作っておきたい。

「私も行くっ」

「えー、ちよつとしたぶらり一人旅のつもりだったんだけど……」

渋い顔でしばらく思案する様子の野田村くんに、私はこれでもか

と懇願オーラを発動する。旅は道連れ世は情け、旅は道連れ世は情け。

「まあいいや。行き先は決まってるけど、それでもいい？」

「うんっ！」

やったー。

友達と小旅行なんて、夏休みじゃなきゃ到底できない大イベントだ。私はわくわくを抑えきれずに野田村くんの手首をつかみ、「一旦着替えに帰るからついて来て」と自宅まで連行した。

そんなこんなで適当におしゃれな桜色ワンピースへの着替えとポシエットの準備を済ませ、

「れっつー！」

野田村くんと一緒に、思い出作りの旅へと出発する。

二人分の切符を買って電車に乗り込む私たち。ちなみに私の切符代は太っ腹な野田村くんが奢ってくれた。

「本当にありがとう。感謝感激だよー」

「はは、どういたしまして」

家族でお出かける人たちが多い時期とはいえ平日の今日、ざっと見回しただけでも無人の車両がいくつも目に映る。なので私たちは気兼ねなく座席に腰掛けることができた。

「野田村くん、これからどこに行って何するの？」

「適当なところに降りてぶらぶら歩くだけだよ」

「じゃあさ、海行こうよ海ー」

夏といえば海、海といえば海水浴。こんなこともあるのかと、私はこっそり水着を持ってきていたのでした！

「別にいいけど……その得体の知れない笑顔からして、まさか泳ぐ気なの？」

「もっちろん」

野田村くんがはあと大きく息を吐く。どうして溜め息が出るのだろうか。

「まあ、君一人で遊んでなよ。僕は砂浜でぼーっとしてるから」
「うん」

一人きりで泳ぐのは少し寂しいけど、存分に遊べるなら別にいいや。私は心をうきうき弾ませつつ、首を振り向かせて視線を窓の外へ向けた。

早く着かないかな。確か海は五つくらい先の駅で降りれば到着するはず。

野田村くんとのお話もそこそこに、私たちは流れいく外の景色を眺め続ける。お互いに無言の時間が多くて少し困ったけど、この静かで落ち着いた雰囲気も心地よかった。

車体の緩やかな揺れによって段々と眠気が頭の中を支配し始めた頃、やがて電車の速度は徐々に落ちていき、とあるひと気の少ないプラットフォームの前でゆっくり停車する。

扉が開かれた時、白線の内側で待機していたおじいさんが杖をついて車内に足を踏み入れてきた。

「ふおつふおつふお」

おじいさんは私たちを見つけた矢先に落ち着いた笑い声で顔のしわを増やすと、ふらふらと危なっかしい足取りでこちらに近づいてくる。

「兄妹でお出かけかい。ええのお」

私の隣に腰掛けつつ話し掛けてくるおじいさんに、私はにっこり笑顔で対応する。

「違いますよー。私たち、ただのクラスメイトで部活の同志です」

同時に電車の扉が閉ざされ、車体は次の目的地へと進み始めた。そういえば、新学期までにボランティア部の活動を考えておかないとね。確か回覧板に町内清掃に参加してほしいそうなお知らせがあったような……うーん、侍マン様の指示を待った方がいいのかもしれないけど、あう……。

「ふおつふおつふお、なるほど恋人同士かい、ええのおええのお」

私が頭を悩ませる中、おじいさんはがたんごとの音にも負けな

い元気な声で言い、細い目をさらに細めて笑いつつ羨ましがってくる。その瞬間に私の悩みごとどこかへ飛んでいってしまった。

私たち、兄妹の可能性を除けばそんな風に見えちゃうのか！。

「なつちよっ違いますよおじいさん、僕たちは別にそんなんじゃない！
すると野田村くんが慌てて否定を始めた。そんなむきにならなく
たつていいじゃない、傷ついちゃうなあもっ。」

「そうですね違います。私は侍マン様一筋なんですっ」

仕返しにと思いつき「野田村くんなんか興味ありません」とア
ピールしてみると、おじいさんはますます目を細めてしまって、今
度はどこか懐かしがっている雰囲気を醸し出してきた。

「侍とな、よい響きの言葉じゃ」

遠くを見つめてほおと溜め息を吐いたおじいさんは、それからし
みじみと言葉を続ける。

「昔は侍の幽霊みたいなもんが見えた気がしたんじゃがお、今は
気配すら感じんわい。ふおっふおっふお」

「幽霊？」

尋ねると、おじいさんは私に視線をぴったり合わせて口を開いた。
「そう、幽霊じゃ。生きた人の心と一つになってこの世に蘇る、世
にも不思議な侍の幽霊じゃ」

何だろう、どこかのおとぎ話だろうか。

「その話、もっと聞かせてください」

おじいさんのお話に食いついたのは意外にも野田村くんで、それ
からというものは何が何だか分からずただ聞き流すだけとなっ
てしまう。

「ええぞええぞ、語ってやろう。確かあいつの名前は、とくだ……
なんじゃったかのう」

気づくと私の頭はゆっくりと舟を漕ぎ始めていた。近頃は補習や
補習の宿題や夏休みの宿題で頑張ってたから、思ったよりも疲れ
が溜まっているのかもしれない。

心地よい疲労感とおじいさんののんびりした子守唄のような声も

手伝って、私は次第に夢の世界へと足を踏み入れていく。

次にまぶたを開いた時、至近距離には野田村くんの顔があった。
「着いたよ桜田さん。早く降りよう」

どうやら私は彼の肩に頭をもたれかけていたようで、顔と顔が近い理由もそれにあるらしい。私は野田村くんの手に引っ張られていそいそと電車を降りた。

雲がほとんど見えない青空の下、プラットホームの上へ足を置いた瞬間、一斉に聞こえ始めるセミの鳴き声。

背後で電車の扉が閉ざされる。

「あう、おじいさんは？」

「途中で降りたよ。それにしても桜田さん、ぐっすり寝てたね。大丈夫？」

私は手の甲で軽く目をごしごし擦りつつ、寝起きのせいかおぼつかない足取りで適当に進んでいく。

「待って桜田さん、そっちは海から反対方向だよ。あっくら、そっち行くと線路に出ちゃうって。あーもう、危ないから手繋ぐよ？」

ぎゅっと、右手をそれなりに強く締めつけられた時の感覚が、私の頭を少しだけはつきりさせてくれる。

「うん」

私は野田村くんの左手に引っ張られ、徐々に眠気を覚ましつつゆっくりと歩いていった。

右手が温かくて、何だか安心する。

「……あ」

意識がはつきりしてきた私は、思わず彼の手を振り払ってしまった。

「ん、どうしたの桜田さん」

「あうっそのごめんさい、手を繋ぐの別に嫌じゃないんだよ？嫌じゃないんだけど、その、あのそのっ！」

暑さのせいか手に少しの汗を感じる。私の手汗、野田村くに気

持ち悪がられたりしなかつただろうか。

「気にしないでいいよ。ほら、海行くんでしょ？ 早くしないと日が暮れちゃうよ」

いつもながら優しく微笑んでくれた野田村くんは、そう言う道の間こう側へ方向転換して歩き始める。私も慌てて彼の後を追った。いろんなセミの合唱が辺りの木から鳴り響いてくる。私たちはしばらく夏の音に耳を傾けながら、それから何一つ会話を交わすことなく、澄み渡る青空の下を黙々と歩いていった。

やがて私たちの行く先に綺麗な砂浜が見えてきた。砂の上に立つと、私は思いつきり空気を吸い込んでお腹に力を入れる。

「うみだーっ」

ここに来ての叫び声はやっぱりこれに限るね。気分がすっきりするよ。

私は叫んだ後にもう一度大きく空気を吸い込み、ゆっくり吐いてから海に向かって駆け出した。途中で砂に足を取られそうになると約五回、苦難の末ようやく海の前に辿り着いた私は、ポシエットから大きな遠足シートを取り出して砂の上に敷く。

「野田村くんはここに座つて。私泳いでくるー」

のんびり歩いて追いついてきた野田村くんに言うと、彼は困り顔を作つて口を開いた。

「桜田さん、残念だけどここは海水浴場じゃないよ。監視員さんのいる安全なところに行かなきゃ」

ちなみにここはひと気が全く感じられない無人の砂浜で、海の家なんか一軒も見当たらない。

「ここがいいもん。せつかく誰もいないんだから、伸び伸びしようよ」

私はプライベートビーチ気分で服を脱ぎ捨て、それをシートの上に放り込む。実は服の下にピンク色のワンピース水着を着ていたのだ。

「行儀悪いよ。服はちゃんと畳まなきゃ」

パパみたいなことばかり言う野田村くんのは無視して、私は一生懸命に準備体操を始める。そして数分後、体力が無くならないうちに準備運動を終えると一直線に海へ向かった。

ひやりと冷たい海水にそっとつま先を浸け、ゆっくりと入水していく。

「あうっ」

この冷たさに段々慣れていく感じがとても気持ちいい。やっぱり夏休みは海に来なくちゃね！

「あんまり深いところに行っちゃだめだよ」

野田村くんの声が後ろから聞こえてくる。夢中で進んでいく私の身体はいつしか腰まで海に浸かっていた。そして胸、肩までひんやり感に包まれていく。

一通り海水の感触を楽しんだ私は、海の一番浅いところに身体をごろんと寝転がらせて大きく空を仰いだ。

遠くから入道雲がこちらに迫ってきている。このまさに夏と言わべきその光景はまさにシャッターチャンスなのだけど、あいにくカメラを持ってきていないので焼き増しは網膜に任せることにした。

次に海へ来る時は、友香ちゃんや椿ちゃん、ついでに海原くんも誘おう。知らない人にナンパされちゃわないよう西木と後藤もボディーガードとして連れてこよう。あわよくば待マン様も誘って……。

いろいろ想像するだけでも楽しいこの夏休み。今年は大体半分が補習で削れちゃったから、もう半分は自警団の活動や遊ぶことだけに専念して過ごしたい。

「みーん」

遠くから聞こえてくるセミの鳴き声を何となく真似して、ぼーっとなる。

やっぱり一人じゃ面白くない。野田村くんと砂でもいじって遊ぶことにしよう。

私は寝転がらせていた身体をよいしょと起こし、シートの上に座

っている野田村くんのもとまで駆けていった。

「野田村くん、砂に埋まりたい」

「ん……ああ桜田さん、いい天気だね」

どうやら私が自然と戯れている間に眠っていたようで、目を擦りつつ顔を上げた彼のまぶたはすっかり閉じかかっている。暑い中よく眠れるね。

「ねえねえ、私を埋めて」

「ああ、定番のあれね。いいよ、そこに寝転がって」

野田村くんに言われたとおり、私は何も無い砂の上にゆっくりと身体を寝かせた。すると彼が相変わらずの寝ぼけ眼で私を見下ろしつつ、手で砂を掬っては私の身体に掛けていく。ちよろちよると降ってくる砂がくすぐつたい。

「ねえねえ野田村くん、もっと早くやってよお」

「んー？」

首が座っていないかのように頭を垂らして眠たそうにする彼は、私の注文を聞き入れてくれたのか、ちよろちよるは止めて何やら思案を始めた。

大丈夫かな。

「じゃあ、こうしよつか」

そう呟いた野田村くんは、手の平に砂を掬い上げ、それを私に直接塗りたくってきた。

「ひゃわっ！」

続けて私の身体を砂で塗り替えていく彼の手の平はどさくさに紛れて胸とかも触ってくる。

「あんつちよつと待って、お願いだから待ってよおっ」

されど野田村くん、止まる気配なし。かなり寝ぼけているようだ。それからかなり長い時間を掛け、やがて私の全身は見事に埋め尽くされてしまう。砂はぎゅつと力強く敷き詰められていて、私一人の力では到底ここから抜け出せそうにない。

「桜田さん、僕は眠気が覚めないからちよつと散歩に行ってくるよ。」

太陽が眩しいだろうから顔にシート掛けとくね」

次の瞬間に野田村くんは立ち上がり、遠足シートで私の顔を隠してしまった。

それから砂を踏む彼の足音がどんどん遠ざかって聞こえなくなつた頃、とんでもない暑さが私を襲い始める。

シートの内側に熱が籠もっちゃって苦しいよー。海に入りたいたいけど、指先一つ動かせないこの状態ではどうにもならない。

「あうー」

何だか拷問されている気分。きつと野田村くんは暑さで私から正気を奪い元マカダミア共和国の機密を聞き出そうとしているに違いない……ああ何だか変なこと考え始めている自分がいる。

しばらくして、また遠くから砂を踏む足音が聞こえてきた。野田村くん、意外と早くに目が覚めたらしい。

足音は私の耳元で止まる。それと同時に彼の声が私の鼓膜を震わした。

「桜田さん、どこ行つたのー？」

どうやら私の顔をシートで隠したことなどすっかり忘れてしまったらしい野田村くん。仕方ないなあと思いつつ、私は大声を出して彼に居場所を伝えようと試みた。

「野田む」

しかしその瞬間、

「あうっ！？」

私の右頬にいきなり強い圧力が掛けられる。

「あれ？ シートの下に何かある……」

どうやらシート越しで野田村くんの足に顔を踏まれてしまったようだ。一瞬して彼の足と思われるものが頬から離れたかと思えば、今度はさつきより少し優しく私の頬を踏んでくる。

それから私は大声を出そうとするたびに何度も何度もぐいぐいと繰り返し踏まれ続けた。数分後に彼が足の裏の異物感の正体に気づくまでの間、私は何となく踏まれるのもいいかもなんて思い始める。

今度友香ちゃんに足踏みマッサージをお願いしてみよう。

やがて時は流れ、空全体が茜色に染まり始めた頃、そろそろ帰ろうかという話になった。

「あう、二人つきりでも結構遊べたね。楽しかった」

「そっか、そりゃよかった」

私は野田村くんが畳んでくれた桜色のワンピース（水着じゃない方）を受け取りつつ彼に言う。

「野田村くん、着替えるからこっち見ないですよ」

「はは、分かってるって」

彼が確かに背中を向けたことを確認すると、私はシートの上で水着を脱ぎ始めた。ポシェットが小さいためにバスタオルを持って来れなかったので、身体を隠せない私はお恥ずかしながら服を着るまでは全裸でいるしかない。急いで体についた海水を一通り拭き取った私は、下着を取り出すためにポシェットの中を探り始めた。

探せど探せど、我の下着見つからざり。

「やば、忘れちゃった……」

どうしよう、これでは裸に直接服を着るしかないのかな。でもそんなハレンチなことをすると侍マン様に嫌われちゃうかもしれない。「どうしたの桜田さん、何忘れたって？」

私の小声を耳ざとく察知した野田村くんが背を向けたまま話し掛けてきた。私はびくつとなつて彼に言う。

「せぜぜ絶対こっち見ないですよ、見たら絶交だかんね！」

「分かってるよ。なるべく早くしてね」

私の裸を見ていい男の人は侍マン様だけなんだから。とりあえず、はしたないけど裸の上に直接服を着ることにしよう。しかし夏用の薄い布で作られたこのワンピースでは、下着がないことに対してかなりの不安を覚えずにはいられない。

でも、でもさ、恥ずかしいことなんて別に何も無いよね。侍があちこちにいた時代なんか下着はただの薄い着物だったって言うし！

今の私とおんなじっ！

「お待たせ野田村くん、早く帰ろ」

桜色ワンピースに身を包んだ私は、スースーする下半身を気にしつつ所々に砂がついた素足を靴に入れ、野田村くんに先を急ぐよう促した。

「うん、行こうか」

どうか最悪の事態だけは起こりませんように。運悪く強風なんて吹いてスカートの部分が捲れ上がりませんようにっ。

十九、夏休みのある日（前編）（後書き）

つづく！

二十、夏休みのある日（後編）（前書き）

（前回のあらすじ！）

補習も追試も何のその、それらを簡単にこなしてみせた私は、帰りに野田村くんとはったり出会う。それから何だかんだで下着を忘れた私はさあ大変！ 果たして私はそのことを覚られないまま無事帰宅することができるのでしょうか！

二十、夏休みのある日（後編）

「最近、花実ちゃんがどんどん私から離れていくような気がして……やっぱり、女の私ではあの子と愛し合うことなんて無理なのでしようか」

「まあ常識的に考えればそうだろうな。なあ友香、その叶わぬ恋もそろそろ潔く諦めてみたらどうだ？」

「でも、私は今まであの子と添い遂げるためだけに生きてきたのです。今さら諦めることなんてできません」

「意地でもそうするというのなら俺は何も言わない。だが一つ覚えておけよ？　ここに一人、お前と添い遂げたいと考える男がいるっつことをな」

「お兄さん……」

「愚痴ならいくらでも聞いてやる。泣きたくなったら泣け。俺がしっかり受け止めてやるから」

「ありがとうございます……お兄さん、優しいんですね」

「そんなことねえって」

家に辿り着いて玄関に靴を置いた私たちは、扉が開きかけているリビングの前で岩のように硬直していた。

お兄ちゃんに「ただいまー」の挨拶しようと思ったのだけど、どういうわけか友香ちゃんとお兄ちゃんがいい雰囲気になっていて声を掛けづらい。具体的に言つと、今はソファの上で友香ちゃんがお兄ちゃんに寄り添ったところだ。

「野田村くん、とりあえず私の部屋に行こっか」

「そうさせてもらつよ……」

お客様に大変な光景を見せてしまった。ちなみに野田村くんは私が夕飯に誘いました。

やっぱり友香ちゃんはお兄ちゃんと付き合ってたんだね……祝福しないといけないのだろうけど、身内と親友がそんな関係になるな

なんて何だか複雑な気分。

階段の前に立った私たちは、私を先頭に一段一段それを上っている。自室の前に辿り着くと、私は野田村くんに先に入るよう促した。「お茶淹れてくるね」

「お構いなく」

この時、野田村くんの顔がやけに赤くなっていたのが気になったけど、とりあえず私は再び階下に向かう。

「友香ちゃんとお兄ちゃん、そろそろ抱き合ってるかなー」

一階に降り立った私は足音を潜め、そろりそろりとリビングへ近づいていく。やがて開きかけの扉の前に立ち、そつと覗いてみた。

そこにはなんと、お兄ちゃんの膝枕でまぶたを閉じかけている友香ちゃんの姿が！

「ふえー……」

友香ちゃんが頬を少しだけ紅潮させていて、何となく気持ちよさそうにしている。そしてお兄ちゃんは自分の膝に頭を乗せている女の子へと手を伸ばし、優しくゆっくり髪を梳き始めた。まさにならぶらぶらである。

そういえば、小学生の頃までは私もよくお兄ちゃんの膝枕にお世話になったっけ。

「……あう」

私もそろそろリビングに登場していいよね。野田村くんを待たせてるわけだし、早くお茶を淹れなきゃ。

「お兄ちゃんただいまー」

言いながら大きく扉を開いた時、

「は、はふあふあ花実ちゃんっ!？」

友香ちゃんがまぶたを大きく見開いて叫んだ。さらにお兄ちゃんの膝から勢いよく頭を起こし、私に言い訳を始める。

「これは違うのよ花実ちゃん、これはね、これはえっと、あなたのお兄さんが無理やりっ!」

「隠さなくてもいいよ。実は二人の会話、こっそり聞いてちゃったん

だ。二人で添い遂げるんだよね」

顔を真つ赤にして口をぱくぱくさせている彼女はまるで金魚さんみたい。面白いな！。

「はは、聞かれちまったか。そうだぞ、俺たちは添い遂げることになったんだ」

次の瞬間、友香ちゃんがお兄ちゃんの肩をずばーんと突き飛ばす。お兄ちゃんの「いでえっ」という悲鳴を聞く間もなく私のもとに近づいてきた彼女は、いつものようにひしりと強く抱き締めてきた。

「ごめんなさい花実ちゃん。私、あなたと結婚するって約束したのに……」

「あう、苦しいし婚約は破棄するよー」

背中に回された友香ちゃんの手の手が平がいろんなところをなで回してくる。やけにくすぐったくなって身をよじらせていると、彼女の手はいずれ私の臀部に到達した。

「……あら？」

それから今までにないほどなでしてくる友香ちゃんの手。中学生の頃に風邪を引いた時、病院へ行くために乗った朝の満員電車で痴漢に遭ったことを思い出す。

「やめてよお」

しかし次の瞬間には、友香ちゃん表情が少しだけ険しくなっていた。

「花実ちゃん、下着は？」

言われて目を見開く私。

「ひゃわっ」

私は慌てて友香ちゃんから飛び退くと、ワンピースの上から臀部をぺたぺた触って確かめた。

「あうう」

……ないですっ。

そういえば私が先頭になって野田村さんと階段を上った後、彼の顔が何となく赤くなっていた気がする。まさか見られちゃったなん

てことは……。

「やっぱり私はあなたのことが諦め切れないわ！」

私の肩をがしつとつかんでそんなことを言い出すのは、もちろんやたら私と結婚したがっている大親友。

「友香ちゃん、履いてくるから手を離して」

「こんな可愛い子猫ちゃんのことを一瞬でも諦めようと思ってしまうなんて、私つてばなんて愚かなのかしら。やっぱり私がいちいちやすべきは花実ちゃんなのよねっ」

「手を離して」

「花実ちゃん、これから一緒にお風呂入りましょう。そして将来について延々と語り合って」

「怒るよ？」

ちなみにきちんと下着を履いた私が家路につこうとする友香ちゃんを玄関で見送った後、しばらく野田村くん存在を忘れていたのは秘密である。

お料理上手なお兄ちゃんが野田村くんにご馳走を振舞ってくれた夜の八時頃、私たちが食器を片付けた後、野田村くんがそろそろ帰ると言い出した。

玄関先で笑みを向けてくれる彼に対し、私は少ししょんぼりとなってしまう。

せつかく遊びに来てくれたのに、晩ご飯をご馳走するくらいのことしかできなかつた。もう少し一緒に遊んだりできると思っていた分、ちよつと寂しい。

「じゃあね桜田さん。次に会うのは新学期かな」

「部活で皆を集めるかもしれないよっ」

「そっか。じゃあその時が来たら電話してね」

言いながらドアノブに手を置き、玄関の扉を押し開こうとする野田村くん。外に漆黒の空を垣間見た瞬間、私の口が開きかけ、何も言わないまま閉じてしまう。

扉がぱたりと音を立てた時、私は自室に戻ろうと後ろへ踵を返す。そして階段に一步を踏み出したところで、お兄ちゃんがリビングから頭を掻きながら出てきた。目が合うと、お兄ちゃんはふうと溜め息を吐いて話し掛けてくる。

「お前のそんな顔、久々に見たぞ」

「あう……どんな顔してる？」

「例えるなら八月三十一日の顔だな」

「何それー」

私はそれ以降、お兄ちゃんのことなんか軽く無視して自分の部屋を目指した。

部屋に入ると、私は真つ先にベッドへ向かって倒れこむ。遊びつかれた身体を寝かせていると、今年は夏祭りに行けなかったことを思い出した。

「あうー」

夏祭りも野田村くんと一緒に行けたらよかったのに。抱き枕を捕まえてぎゅっと抱き締めつると、やがてまぶたを持ち上げるのが難しくなってくる。

私はそうして床に就いた。

床に就こうとして、止めた。私はぱっちり目を開くと、部屋を飛び出て一気に階段を駆け下りる。

「こら花実、どこ行くんだ？」

「野田村くん送ってくのー!!」

お兄ちゃんの質問を適当に返しつつ乱暴に靴を履き、真夏の夜中、いつもより気温の低い道の上に突入した私は、闇の向こうに歩いているであろう野田村くんを急いで追いかけた。

外灯の光を眩しく思いながら駆け進んでいく中、息を荒げて考え込む。

「どうして私、こんなこと……っ」

それは私が一生懸命に走っている理由のことで、何となく分かっているような気がしつつも上手く捉え切れないこと。別に野田村くんを一人で帰らせるのが心配なわけではないし、だからといってただ放っておくこともできない。ただもやもやした気持ち私の中で渦巻いているのだ。

彼に会えば少しは気が晴れるかも、そんな思いで私は走っている。やがて外灯の下で歩く人影を見つけた私は、ご近所迷惑にならないようにと音量を抑えて彼に声を掛けた。

「あつっ、待ってえ！」

光に照らされている狭い空間にて立ち止まり、こちらを振り返ってくれる野田村くん。ようやく彼に追いついた私は、膝につき大きく肩を揺らして呼吸を整える。

「どうしたの桜田さん」

驚いている風に少し目を見開いてこちらに視線を向ける野田村くん、私はこのタイミングで口にするべき適当な言葉が思いつかなかった。しかもいきなりの激しい運動で頭の中がぐるぐるしている。なので、

「野田村くん、私のおしり見たでしょう！」

わざわざ恥ずかしいことを蒸し返してしまってもおかしくなかった。

「下着はちゃんと身に着けた方がいいと思うよ……」

「あつっ」

お互いに顔を赤くして視線を逸らし合う私たち。どうしよう、お見送りしに来たって言えばよかったのに私……。

しばらく向かい合ったまましていると、野田村くんが先にこの羞恥沈黙地獄を打ち破ってくれた。

「それで桜田さん、用はそれだけ？」

「ううん、途中まで送ってこうかなって思って」

にっこり微笑む野田村くんが軽く頷いたのを見て、私は立ち止ま

っている彼の隣に並ぶ。

「ありがとう。実は一人で歩いてるのに退屈してたんだ」

言いながら歩き出した野田村くんの歩調に合わせようと、私は頑張って歩幅を大きくする。

すると彼が少しずつ減速を始めた。私が歩きやすいように気を遣ってくれたのだろうか。野田村くんって優しいんだね。

「えへへ。ありがとう」

「ん、何が？」

「何でもないよ。夜は涼しいね」

とぼけて見せてるのか本当に無意識でやったのか、自分の親切な行動をそれとなく流した彼からは、どことなく侍マン様に似た気立てのよさを感じさせられる。

最近はまだ夜まで鳴くセミも今日は特別おとなしく、私たちの周りでは秋をも思わせる虫の音が鳴り響くばかり。しばらく黙ったまま歩いていて私たちは、視線が合うたびに微笑み合ったりして、夜の散歩を満喫した。

やがて一つの十字路に差し掛かると、野田村くんが立ち止まりつつ口を開く。

「ここからは一人で帰るよ。ありがとう、送ってくれて」

いつかは聞くことになるだろうと思っていてたその言葉に、私は心なしか落ち込んでしまう。

もうちょっと一緒に歩いてたかった。もっといろいろお喋りしたかった。

「あう……うん、分かった。ばいばい、野田村くん」

軽く手を振り、心優しい男の子が暗闇の中へ歩いていくのを一通り見送ると、私は回れ右をして自宅を目指す。

真っ暗な闇の世界。一人で歩く分には、とても心細い。

「あう、怖いよお……」

思わず小さく呟いてしまう情けない私。高校生にもなって夜道が怖いなんて、臆病が過ぎるよね。

「怖いなら言ってくればいいのに。手くらい繋ぐのにさ」

突然鼓膜を震わしたその声に「ふえ？」と振り返る間もなく、私の右手は何者かによって優しく握られた。

「今度は僕が送ってくよ。夜道で女の子を一人にするわけにはいかないしね」

隣、声がする方向へと視線を向ければ、そこにはさっきお別れしたはずの野田村くんが微笑んでくれていて、

「じゃ、行こうか」

私の手を引き、ゆっくりと歩き始める。

手を引かれた私は、慌てて彼に歩調を合わせた。

「えへへ、ありがとう」

「どういたしまして」

夏のある日、セミが一斉に静まる静寂の夜、私たちは共に歩き続ける。

涼しいそよ風のおかげか、胸の奥はこんなにも温かいのに、汗は一切出てこなかった。

二十一、結団式（前編）（前書き）

「花実の日記（前回のあらすじ）」
野田村くんと一日中過ごした夏のある日、とっても楽しかったんですよ。来年の夏休みこそはたくさん遊ぼうと心に誓う私でした！
それにしても、野田村くんって本当に優しいよね。また一緒に遊びたいな！。

二十一、結団式（前編）

ボランティア部の部室はどうやら既に他の部へと使用権が移っていたらしく、代わりにと私たちに与えられたのは、入学者の減少により数年前から使われなくなったという一階建ての木造校舎だった。ちなみに私たちボランティア部ことサムライ自警団（私が名付けました）は、夏休みもそろそろ終盤に差し掛かるうという今現在、台風近づくと薄暗い曇天の下で、噂のその校舎に集まっているのである。男子は全員遅刻だけど。

「花実ちゃん、まずはこれの掃除をしなきゃいけないわね」

「あう……せつかく洗った体操服、すごく汚れそう」

「花実、清掃員でも雇いましょうか」

「私たちはボランティア部だよ、掃除くらい自分たちでやらなきゃ」

そして友香ちゃんと椿ちゃんは私と同様に少しだけ肩を落とすつ、埃を被った木造校舎の玄関先にて屋内を眺め回している。ところで木造校舎と呼ぶのは少し味気ないから、この一階建て建築物の名称でも考えながら掃除を頑張ろう。

私が靴を脱いで床に足を置こうとした時、友香ちゃんが右手をぎゅっとつかんできた。

「床が抜けたりしないか心配だわ。花実ちゃん、私の手をしっかりと握ってなさい」

「大丈夫だよー」

そしてとりあえず掃除用具はないかと歩き出した時、今度は椿ちゃんが左手をぎゅっとつかんできた。

「野良犬などが住み着いている危険性もあります。花実、私の手をしっかりと握っていてください」

「心配性だなー」

私は両手に花を持ちつつぎしぎし鳴り響く廊下を進んでいく。や

がて奥の突き当たりには錆びれたロッカーを見つけた。

壊さないよう慎重に、ギギギと金属の擦れる音に耐えながら取っ手を引くと、すっかりボロボロになってしまっていた筈やモップを発見する。床を掃いている途中でボキリとなってしまいそう。

「あつ、これじゃお掃除できないね」

私が小さく溜め息を吐いていると、友香ちゃんが私の頭を優しくなでなでしてくれた。

「あっちの校舎から借りるしかないわ。もうすぐ裕樹が来るはずだから、あの子に運ばせましょう」

出口の方を指して言う友香ちゃん。

「海原くん、本当に来てくれるのっ?」

「ええ、本当よ……はあ、ライバルが多くて困っちゃうわ」

今度は友香ちゃんが溜め息を吐いたので、さっきのお返しに今度は私が彼女の頭をなでなでしてあげる。幸せそうな顔を作る友香ちゃんに和みながら、私はこのサムライ自警団にチームワークが生まれつつあることを実感し始めた。

そうだ、この部室をサムライハウスと名付けよう。

それから間もなくすると本当に海原くんがやって来たので、私は彼に七本の筈を運んでもらうことにした。

「おいこらちび、重いぞ。少しくらい持てよ」

七本全部の筈を片方の脇で軽そうに抱えている彼は、面倒ごとをお願いされたのが気に入らなかつたのかさつきからやけに威張ってくる。

「あー」

「何があーだ。いいから持て」

「私雑巾持つてるから……」

「たかが布きれ七枚だろうが。こっちは暑い思いしてわざわざ来てやってんだぞ」

次の瞬間、友香ちゃんの握り拳が海原くんの頭頂部を見事に殴打

した。

「いでえ！」

「花実ちゃんにそんな重いもの持たせたら要らない筋肉がついちゃうでしょう！ あなたはこのぶにつぶにな二の腕が硬くなってもいいって言っの！？」

鼓膜が張り裂けそうなくらいの大声で海原くんを叱り飛ばしながら、友香ちゃんが私の二の腕を指でぶにぶにつまんでくる。以前にも増して柔らかくなってるみたい……。

「知らねえよ知るかよ知ったことかよ。お前マジで気持ち悪い奴だな……」

海原くんは殴られた頭を痒そうに触りながら、畏怖の込められた視線を友香ちゃんに向ける。私も少しだけ友香ちゃんが怖い。

「……花実」

従兄妹同士で言い合いをしている二人を眺めていると、後ろから椿ちゃんがそつと声を掛けてくる。

「海原裕樹とは何者ですか。友香と同じ名字みたいですけど」

「二人のお父さんが兄弟なの」

「……なるほど」

そういえば椿ちゃんと海原くんは初めての顔合わせだった。よし、サムライハウスの掃除が終わったら自己紹介の場を設けよう。

掃除用具を全てサムライハウスに運んだ頃、ようやく野田村くんが到着した。

「皆、久しぶり」

「こら春平、俺より遅いとは何ごとだこの野郎」

「あはは、ごめん。掃除するんだね、頑張っつて遅れた分を取り戻すよ」

野田村くんと海原くんの二人が仲良くしているのを見て何となく違和感を覚える。二人とも、そんなに仲良しだったっけ。

まあいいや。とりあえず私は床の埃を掃こうと箒を手に取り、ま

ず廊下の掃除を始める。

「さっさ、さっさ」

床板を箒でなでた時、舞い上がる埃の量が半端じゃない。すぐさま咳き込んでしまった私は、換気をしようとして急いで窓を開いた。

「こほっこほっ……あうっ」

早くも掃除にうんざりし始めていると、私の肩にぽんと誰かの手を置かれる。

振り向くと、野田村くんが私の顔を覗き込みつつあるものを手渡そうとしてくれていた。

「桜田さん、掃除する前に布で鼻から下を覆った方がいいよ」

その手にあつたのは、茶色の大きなスカーフが一枚。

「貸してくれるの？」

「うん。僕は埃とか平気だから、君が使いなよ」

爽やかな笑顔でそれをこちらに渡した後、野田村くんはすぐさま自分の仕事に取り掛かっていく。野田村くん、相変わらず優しいなあ。

尊敬の眼差しを彼に送っていると、またもや私の肩にぽんと誰かの手を置かれる。

振り向くと、海原くんが私の顔を覗みつつあるものを手渡そうとしてくれていた。

「ちび、水を汲んでこい」

その手にあつたのは、水色の大きなバケツが一つ。

「この水道、水が通ってねえんだ。よろしくな」

「ふえ？」

邪悪な笑顔でそれを渡した後、海原くんはすぐさま自分の仕事に取り掛かっていく。海原くん、優しくくない。

しばらくじーつと海原くんを睨みつけてから、私は仕方なくバケツを持って外の水道に向かうことにした。野田村くんのスカーフは大事だから、体操スポンのポケットへ丁寧に住舞う。

さあ、早く行こう。

野球部さんやサッカー部さん、その他いろんな運動部さんたちの元気で大きな掛け声が校庭から響いてくる中、私は近くの屋外水道にバケツを置いて蛇口を捻っていた。それから水が溜まるまでの間、少しぼーっとしてみる。

視線を少し上げると、相変わらずの薄暗い曇天が目映った。

予報では台風が近いというらしい。今度やって来るそれは例年に比べてかなりの強風を巻き起こしているようで、南の方では既にたくさんの被害が出ているそうだ。

「台風かー、怖いなあ」

大した危機感も覚えていないのに、つい口からそんな一言が出てきてしまう。

「大丈夫だぜ。姉御はワシらが立派に守ってやるけんのお」

「安心してくださいえ、姉御は親分が守ってくれますからっ！」

台風の目はどの辺りだろうと空を眺め続けていると、突然いかつい声と調子のいいひょうきんな声とが順番に聞こえてくる。振り向くと、少し離れたところから硬そうな筋肉が強調されるようなタンクトップ姿の男性二人が真後ろに立っていた。

「もー西木と後藤ってば、遅刻だよお？」と私。

「すまねえな。後藤のアホが支度に時間掛けちまってよ」と西木。

「親分だって番犬の世話に明け暮れてたじゃないっすか」と後藤。

身体の大きな西木が力強く蛇口を捻って水を止めると、すっかり重そうになったバケツの取っ手に指を絡めてひょいと持ち上げた。

「姉御、ワシが持つぜ」

「ありがとー。それにしても、西木って力持ちだね」

「いやあ照れるぜー」

私なら両手で頑張ってもすごく大変なのに、西木は水の溜まったバケツを片手で軽く持ち上げている。私もあれぐらいの腕力がほしい。

「ワシはこれでも結構鍛えてるんだ。こんなバケツくらい、指一本

で持てるぜえ」

「さすが親分っすね！」

「馬鹿野郎、そんなに褒めんなよ。がっはっは」

言いながら西木はピンと人差し指を立て、手の平からその指先にバケツの取っ手を滑らせて力強さをアピールする。それを見た私が感心の声を上げていると、

「あ」

調子に乗ってバケツを弄んだ西木の指から、ふとバケツがこぼれ落ちた。

「ひゃううっ」

そしてそれはしっかりと半回転し、見事私の頭上に被さってしまっ。ずぶ濡れになってしまった。

「……にしきい」

「ひいっすまねえ姉御、この通りだ許してくれえ！」

私は持つてきていた予備の体操服に着替えると、早速サムライハウスの掃除を再開する。

そして侍マン様を除いてメンバー全員がこの場所に集結した時、思っていた以上のチームワークが発揮されたおかげで、私たちはわずか数時間で大体の仕事を終わることができたのであった。

「ふいー、終わったねー」

後片付けを終え、茶色のスカーフ畳んでポケットに入れると、私は綺麗になった木造校舎の一室に皆を集めてひとまず身体を休めることにする。ちなみに机や椅子とかは全くないので、私は床に直接腰掛けた。

「建物自体が劣化してるせいかしら、あまり綺麗にならなかったわね」

友香ちゃんが床のギシギシ鳴る部分を踏みつつせっかくの達成感

に水を差すようなことを言う。それを聞いた椿ちゃんが「リフォー
ムしましょうか」と今までの苦勞を水に流すような一言を呟いた。
私は苦笑している野田村くんのことを何となくぼーっと見つめて
いると、彼が私の視線に気づいてしまう。

「どうしたの桜田さん、僕の顔に何かついてる？」

「ううん、そうじゃないの。ぼんやりしてただけ」

「そっか」

ちなみに西木と後藤は皆の分のジュースを買いにコンビニへ出か
けていて今はいない。今日はここでサムライ自警団の結団式を行う
のだ。

喉が渴いたなーと心の中で呟きつつ、私はふと視線を上に向ける。
かろうじて電気が通っていたために点灯してはいるけど、古いから
か電力が弱いせいか、この電灯の光はとても薄暗い。今にもおぼけ
が出そうな感じで不気味だ。

次は窓の外に視線を向ける。分厚そうな雨雲のせいで、夏の夕方
にしては随分暗い。

ちよっぴり怖い、かな。

多分疲れているのだろう、皆が沈黙し始めた。しーんと静まり返
った雰囲気は室内を支配する。

「おいちび、俺はもう帰るぞ。天気やべえし」

沈黙をいち早く破ったのはまだまだ元気そうな海原くん。彼は立
ち上がって部屋を出て行くこうとする。

「あつ、お願いもうちよっつと待って、解散は皆で乾杯してからだよ
おっ」

私は立ち上がりつつ、海原くんに対してここに留まるよう説得を
試みるも、彼は立ち塞がる私を簡単に避けていってしまった。いじ
わる。

そうして私を無視した海原くんはやがて出入り口の前に立ち止ま
る。閉ざされていた扉を開こうと彼が手を伸ばしかけたその時、

「すまねえ姉御、遅くなっちまった」

西木と後藤が一足早く扉をガラリと開き、いかつい顔をひよっこりと見せてきた。ナイスタイミングっ。

「ねっ海原くん、まだ帰らないで」

「ちっ」

七人の顔が出揃ったところで、私は皆を中央に集めて円を描くように座らせる。

「さて、あとは待マン様だけだね」

あのお方が来てくれた時こそ、いよいよサムライ自警団の結団式が始まるのだ。待ち遠しいな！。

「……おいちび」

「なあに、海原くん？」

「まだ待たせるのか」

野田村くんが少しだけいらいらしているご様子。

「あっ」

とりあえず誤魔化した。

二十一、結団式（前編）（後書き）

後書き、最近はずっかりご無沙汰でしたね！
というわけで今回の
お話も次回に続きますっ。つづく！

二十二、結団式（後編）（前書き）

「花実の日記」

台風近づくよどんだ天候の下、我らがサムライ自警団は時と場所を同じくして、拠点であるサムライハウスの掃除に取り掛かるのでした。数時間一生懸命に頑張ったかいあって、思っていたよりも早く掃除を済ませられた私たち。そしてようやく我らがサムライ自警団の結団式が始まるのですけど、肝心の団長たる侍マン様がまだ到着しておりません。早く来てくれないかなー。

二十二、結団式（後編）

風が強くなってきたかな。さつきから窓がかたかたとやけに揺れていて、少しだけテレビで見られるような心霊現象を思い出させられる。

「侍マン様はまだかなー」

例え掃除したばかりでも長らく使われていなかったこの木造校舎は、あちこちでギシギシと恐怖心を煽るような音を立てていて、心細さをさらに際立たせていた。

「おいちび、いつまで待たせるんだ」

そんな中、海原くんが「これ以上待たせんなよ」オーラを出しながら胡坐をかいた状態で尋ねてくる。

「侍マン様が来て、乾杯して、ばいばいするまでだよ」

だって侍マン様はこの団体の団長さんなんだもの。彼が来てくれなきゃ始まらないっ。

「ねえ野田村くん、侍マン様はいつ頃いらっしゃるの？」

「……ん？」

聞いてみると、ぼーっと宙を眺めていた野田村くんが何のことを言っているのやらとも思っていていそうな顔で私に視線を向けてきた。

「野田村くん、自分で言ったよね。侍マン様を呼んでくれるって」

実は先週、一緒にボランティア部の部室を掃除しようと言ったためだけの電話をした時、野田村くんが「侍マンなら僕から声を掛けておくよ」と言ってくれたからお言葉に甘えていたのだ。

「ねえねえ野田村くん、侍マン様はいつ来てくれるのぉ？」

「えつとああ侍マンね、確かもうちょっと待ってれば来るんじゃないかな！」

よかった、もう少し待てば来てくれるんだね。

それを聞いて安心した私は、わくわくする心をさらに弾ませて侍マン様の到着を心待ちにする。しばらくうきうき気分を堪能してい

ると、ふと野田村くんが立ち上がった言った。

「ごめん、お手洗に行ってくるよ」

部屋から出て行く彼を全員で見送ると、また静かに侍マン様を待ち続ける。

どうやら皆はすっかり掃除の疲れが出てしまっているようで、誰一人として口を開こうとしない。友香ちゃんにいたっては正座する私の膝に頭を乗せてぐっすり眠り始めてしまっていた。

しばらくして、部屋の扉が再び開かれる。

「やあ皆、遅くなってすまないね」

その声に首を振り向かせた瞬間、私の中で得たいの知れないものが膨らんで破裂した。

扉の前に立っていたのは、言わずと知れた総髪に袴、腰の日本刀や草履などがとてもよく似合っているあのお方。

「侍マンしゃみゃー！」

感激のあまり噛んでしまった。

私は立ち上がって彼のもとまで駆け寄り、侍マン様のがっちりした手の平をつかんで部屋の中央まで引っ張っていく。私がさっきまでいたところに戻ってみると、友香ちゃんが手の平で頭を押さえて苦しがっていた。

せっかくなので侍マン様は私の隣に座ってもらうことにする。えへへ。

さて、侍マン様は来てくれた。後は野田村くんが戻ってきてくれれば全員揃うのだけだ。

「野田村くん、早く戻ってこないかなー」

「は、はは、そうだね……」

私のちよっとした呟きにも言葉を返してくれる侍マン様に嬉しくなって、私はますます笑顔になる。

「春平なら戻ってこないだろうよ」

せっかくの幸せに水を差してきたのは海原くん。

「いや、もう戻ってきてるって言った方が正しいな」

「あつ?」

そう言われて私は部屋の中を眺め回す。野田村さんの姿はどこにもない。

実はこっそり戻ってきていて、私たちを驚かせるためにどこかで隠れているってことなのかな。

「野田村くん、出ておいでー」

とりあえず呼んでみると、呼ばれてもいない友香ちゃんが私の肩に頭をもたれさせてきた。野田村くんは現れない。

「海原くん、うそつき」

「よく探してみろって。灯台下暗しだ」

再度周囲に視線を向ける。やっぱりいない。

「海原くん、狼少年」

「実は春平、天井に張り付いてんだ」

「えっうそ!？」

驚いた私は反射的に視線を頭上へと向けた。

……考えてみればいるわけがなかった。

「海原くんのうそそ星人ーっ!」

「あつはつは、騙されるちびが悪いんだよ」

悔しさのあまりじんわりと涙が出てくる。こうなったら私も嘘を吐いて海原くんを騙してみせるよ!

どんな嘘を吐いてしまおうか。あなたと私、実は兄妹だったのよ……実は私、男の子だったの……実は友香ちゃん、私のお兄ちゃんと結婚するの……いろいろ思い浮かぶもすぐに見抜かれてしまいそうなものばかり。おっと、最後のだけは本当のこと(予定)だった。「んーと、んーと」

嘘にいいネタはないかと室内を見回してみる。カーテンの幽霊、黒板の雄叫び、窓ガラスに映る知らない人の影……いろいろ考えた結果、こんなことをしている場合じゃないということを出した。「野田村くん、いくら何でも遅すぎない?」

かれこれ二十分くらいは経っただろうか。彼はお手洗に立って以

来一向に帰ってくる気配を見せない。

「私、ちよつと呼んでくる」

そう宣言すると、私は立ち上がって部屋の出入り口へ向かった。背後で友香ちゃんによる一瞬の悲鳴が聞こえたけど、気にしていられない。

「姉御、俺たちも行くぜ」

「お供しやすぜ」

西木と後藤も立ち上がる。私はそんな頼もしい二人を制して言った。

「大丈夫だよ、私一人で平気だもん」

一人で行きたかった。

もしかしたら野田村くんは、私のせいで体調を崩したのかもしれないのだから。

廊下に出て玄関まで駆け、ぼろぼろの靴箱に入れてあった自分の靴を取る。それを履いて木造の校舎を出れば、外から思っていた以上の強風と水滴が身体にぶつかってきた。

雨も降り始めている。急がないと戻ってこられなくなるかもしれない。

私は全力で走った。私たちの部室と違って背の高い校舎に向け、足に精一杯の力を込め、荒れる風に抵抗してぬかるんだ土を踏んでいく。

また体操服が濡れていった。ポケットの中のスカーフに意識が向く。

私がこんなものを借りたばかりに、野田村くんはたくさん埃を吸い込むはめになっていた。彼はきつとそのせいで体調を崩してしまったのだ。

もしかしたら吸った埃で身体にもすごい悪影響が出てしまって、廊下の上で一人倒れてしまっているのかもしれない。

早く行かなきゃ！

間もなくして、ぼろぼろなところがどこにも見当たらない、まだ新しい方の校舎へと辿り着く。私は自分の靴箱に脱いだ靴を置き、替わりに取り出した上履きを履いて、また勢いよく走り出した。

「……あう？」

走り出そうとして、ふと立ち止まる。気になるものが視界の端に映った。

野田村くんが普段靴箱で使っている場所、そこに彼の靴は存在しておらず、上履きもそこに置かれたままだった。

ひよっとしてもうこの校舎を出ちゃったのかな。それともいつも使っている靴箱を選べないほど切羽詰っていたのかも……考えがそこに至り、私は今度こそ思いっきり走り出す。

廊下をくまなく探しても倒れた野田村くんの姿は見つからない。

念のために保健室も覗いて野田村くんが来ていないか確認する。

いなかったことを知って、私はようやく安堵の溜め息を吐いた。

どこにも倒れていないということは、それほど大変なことにはなっていないということだろう。帰りが遅いのは、ただお腹を壊してお手洗が長引いたってだけのこと。

でも、私がスカーフを借りていなければ野田村くんはお腹を壊さなかったかもしれないのだ。後で会ったら丁寧に謝って、そしてちゃんとまたお礼を言おう。

「戻ろーっと」

廊下の上で回れ右、校舎の出入り口である玄関へと向かう。

「……あう？」

後ろを振り向いてすぐ、道の先に人影を見つけた。私は頭の上で総髪を揺らしているその影に向かって声を掛ける。

「侍マン様っ」

「やあ花実、春平は見つかったかい？」

私は彼を呼びつつ走って近寄った。

「いえ、見つかってないです。どこにいるのか分からなくて……」

答えると、侍マン様は「やっぱり」と呟いて微笑んでくれる。相

変わらず素敵な笑顔ですこと。

「彼なら玄関で会ったよ。花実のことを話したら、ここで待つて言ってた」

「あう、それならよかったですー」

どうやら野田村くんの身体の調子もよくなってきたようでさらにひと安心。

「じゃ、拙者は忙しいからそろそろ帰るよ。結団式は拙者抜きでいいから、花実が適当に仕切っとして」

安心したのも束の間、侍マン様はいきなりお別れを告げ始めた。

「花実、君を自警団の団長、そしてボランティア部とやらの部長に任ずる。全て君の判断に委ねるよ。分かったね？ じゃ、さらば！」

一通り早口で私に伝えた彼は目にも止まらぬ速さで走り出し、私の前から姿を消してしまう。

もう少し一緒にいたかったけど、忙しいのであれば仕方がない。

またゆっくりと会える日が来るだろうし、それまでは大人しくまつことにしよう。

「そんなことよりもっ」

今は玄関で野田村くんが私のことを待っている。早く行こうっ。

そして私が野田村くんと共にサムライハウスへ戻った時、

「あれ、どうして皆濡れてるの？」

どういうわけか、室内で待たせていた他のメンバーの服まで濡れていた。雨の中を走ってきた私と野田村くん同様に。

「花実ちゃん、抱っこしましょう」

友香ちゃんがにやにや笑いつつ「びしょびしょな花実ちゃん最高っ」とか言つて無意味に抱きついてくる。

「こんなに濡れてしまって、風邪を引いてしまってはいけません。

花実、私とも抱き合いましょっ」

椿ちゃんまでもが私に抱きついてきて身動きが取れなくなった。

両手に花でモテモテ気分の私。

「あほらし……」

「あはは」

海原くんが溜め息を吐き、野田村くんが微笑ましそうにこちらを見ている。

「親分、姉御はやっぱり人望あるんすね」

「馬鹿野郎、今さら気づいたのか」

舎弟二人組の声も視界の外から聞こえてきた。どうやら私を褒め称えているようでとても嬉しい。

一気に騒がしくなったサムライハウスの中で思う。

私は皆のリーダーになったんだ。これからは私が、この集団をもっと固く確かな結束へと導こう。そして世のため人のため弱きもののため、今まで以上に全力を尽くそう。

「ようし、私、頑張っちゃようっ」

二十三、幽霊少女アカネ1（前書き）

「花実の日記」

私はこの度、サムライ自警団の団長兼ボランティア部の部長となりました。皆様、今までこんな私のために応援してくださり誠にありがとうございました。皆様、今までこんな私には自警団やボランティア部で何をしなければいいのかわからないので、本格的に活動を開始するのはもう少し後になってしまいそうです。ていうか大事件がこれから起こるのであります。活動どころではなく（以下略）

二十三、幽霊少女アカネ1

それはとても悲しい夢だった。

高校の入学式を終えた彼女は、これから自分を待ち受けているであろう楽しい学園生活に胸を躍らせながら、ある場所へ向けてスキップしていった。

彼女が向かったのは、もうすぐ四歳になるという妹の通う幼稚園。その子とはとても仲が良く、姉妹はいつも一緒だった。

その日も彼女は、妹と手を繋いで家路を急いだ。入学祝いのためのごちそうが家で自分を待っているからだ。

幸せそうな姉妹だった。事件はその家路で起きた。

車道の信号を無視したバイクとの衝突事故。青信号を確認し行き急いだ妹が轢かれてしまいそうになったところへ、彼女は身を乗り出したのだ。

妹は一命を取り留めたが、もう歩けない身体になってしまった。

そして姉の方は、救急車が駆けつけた頃には息を引き取っていた。服を血で汚した妹の泣き叫ぶ声が、ふわふわ浮かぶ身体に直接響いてくる。

「おねえちゃんっ、おねえちゃんってばあっ！」

彼女は決意した。死んでもなお、必ず妹を幸せにしてみせる。見守ることしかできなくても、妹が安心して暮らせるように、ずっと彼女のそばにいよう。

そしてそれからもう三年が経とうとしていた。事故の日以来すっかり病弱になってしまっていた妹は、既に死んだ。あっけない自分たちの最期を振り返って悔しくなる。

彼女は成仏できないまま、この世を彷徨い続けた。そして偶然、彼女は自分と相性のいい身体を見つけた。

せめて少しの間だけでも、この身体を借りて、満喫できなかった青春を妹の分まで謳歌しよう。自分たちを不幸な目に遭わせた運命

の流れに一矢報いてやるんだ。
決意を感じる彼女の思考を最後に、夢は、そこで終わった。

八月三十一日、夏休み最後の夜に眠った私は、その翌日である九月一日、つまり今日という新学期始まりの日に、とても心地よい目覚めを感じていた。

何やら気分が重たくなるような夢を見ていた気がするけど、忘れちゃったので気にしないことにする。

私はやけに身体が軽いなあと思いつつ起き上がり、珍しく目覚まし時計より早起きしたことを誇らしく思いながらベッドから足を下ろしていった。

「むにゃ……もう食べねえってー」

すると変な寝言が背後から聞こえてくる。私はお兄ちゃんがベッドに潜り込んできたのかなと呆れつつ後ろを振り返った。

「えっへっへ……うまうま」

そこにいたのはお兄ちゃんではなく、抱き枕に抱きついて幸せそうな顔を浮かべている私自身だった。よだれを垂らしにやにやしている。

「私ってば、はしたないなあ」

そろそろ目を覚ましてくれないと遅刻をしてしまうので、私は私を起こそうと私に手を伸ばす。しかし私の手は眠っている私を透り抜け、何も無い空気をつかんでしまった。

「触れられない。一体どういうことだろう」

「あー……あー？」

そもそも、どうして私の目の前で、他でもない私自身が眠っているのだろう。

私は自分の手の平に目を向ける。

「……ひえっ!?!」

半透明だった。

これはもしかして、噂に聞く幽体離脱？

「むにゃむにゃ……そこまで言うんなら、仕方ないな」

でも本体の方はしっかり寝言を漏らしている。どういうことだろう。

「食ってやるよ……セミの唐揚げ」

「ひいっ!？」

どうやら私の本体には知らない人が入っているようだった。私はセミの唐揚げなんて仕方なくても食べたくない。

だけどそれが真実だという証拠は何もない。もしかしたら私が見ているこの光景は夢なのかもしれない。

確かめるためにも、今ベッドで幸せそうに眠っているもう一人の私を起こしてみよう。

「ねえねえ、起きて。朝だよ」

もしかしたら幽霊みたいになってしまった私の声は届かないのかもしれない。本当にそうだったらどうしよう。

「むにゃ……んん、もうちと寝かしてえ」

声は届いているようだ。何度も挑戦してみる。

「早く起きてくれたら、朝ご飯のサラダからぶちトマト分けてあげる」

「むにゃにゃ……トマト要らねえ」

もう一人の私は私と違ってぶちトマトが苦手らしい。

ていうか、言葉遣いとか乱暴すぎるよっ。

「きゃーっ」

叫んでみる。

「にゃむ……黙らねえとはらわたつかんで川に流すぞ」

「ひいっ」

寝言で恐ろしいほどに脅かしてしまった。我ながら可愛い寝顔の分、恐怖も十割り増しである。

「あうっ……起きてよお」

「へっ、実は起きてるよ」

いきなりがばつと上体を起こしてくるもう一人の私にびっくりして、私は思わず足を滑らせてしまう。尻餅をつくと思ったけど、幽霊だからか身体が宙に浮かぶだけで痛いことはなかった。

「お前、この身体の元主だろ。はじめまして」

「はじめまして……あう、『元』ってどういうこと？」

「桜田花実の身体をアタイが貰ってやるって言ったんだ。有効に使わせてもらうから、安心しな」

何を言っているのかいまいち理解できなくて、ただただ首を傾げるばかりの私。そんな私に溜め息を吐きつつ、もう一人の私は立ち上がってこちらに歩み寄ってきた。

「詳しく説明してやるうか？」

「もちろん私は大きく頷く。」

「やなこつた」

「がーん。」

私がシヨックを与えられていたその時、

「花実、朝飯できたぞー」

下の階　おそらくリビングから、私の名前を呼ぶ声がする。お兄ちゃんだ。

「朝飯か。美味しいのか、お前んちの朝飯は」

もう一人の私が尋ねてくる。私はとりあえず答えてあげた。

「うん、とつても美味しいよ。毎日飽きないの」

「ラッキー、そりや楽しみだ」

嬉しそうな顔を浮かべつつ、もう一人の私は私の部屋から出て行くこうと扉のドアノブに手を掛ける。廊下に出た瞬間、もう一人の私はややスキップ気味で階段に向かった。

「ねえねえ、もう一人の私」

私はそんなもう一人の私に向かって声を掛ける。

「アカネと呼べ、紛らわしいだろ」

「あう……ねえねえアカネ、私ってどうしちゃったの？」

訊いてみると、アカネは「へっ」と怪しい笑みを見せて答えてくれた。

「そんなに知りたいなら教えてやるよ。幽霊だったアタイがお前の身体を奪い取ったせいで、代わりにお前が幽霊となったんだ」

その言葉を聞いて、上手く理解が追いつかない。仕方ないので分かることから情報を整理していくことにする。

幽霊ってことは死んだ人のことだよな。そんな人が私の身体を奪い取ったでいで、私が幽霊になって……あれ、ということは

「お前は死んだんだ。アタイが殺した」

心の中で思ったこととアカネの一言が重なり、私は魂だけとなった全身に酷い衝撃を感じる。

「じゃあな、あばよ。早く成仏して次の人生をエンジョイするといさ」

死んでしまった？

先ほど自分の身体に触れられなかったことを思い出す。

ということは、私はもう友香ちゃんに抱き締めてなでなでしてもらえない。友香ちゃんだけじゃない、椿ちゃんや、海原くん、西木に後藤とも関わりあうことができない。

そして野田村くんや、侍マン様とも。

「……あう」

気がつくと、私の周りには誰もいなくなっていた。

一体私はどうすれば……アカネの言った通り、私はおとなしく成仏するしかないのだろうか。

「いや……」

諦めるのはまだ早かった。

幽霊だったアカネが私の身体を奪ったというのなら、幽霊になった私も、アカネから私の身体を奪い返すことができるはず。

私は生きて絶対待になるんだ。身体泥棒なんかを負けてたまるものですかっ！

「いつてきまーす」

階下から響いてきた、私の声によるお出かけの挨拶。
私は壁を透り抜け、すぐに彼女を追った。

半袖セーラー服を纏わせた私の身体をスキップらんらんな勢いで道路を突き進ませていくアカネ。私はそんな彼女に身体を返してもらうようお願いした。

「私の身体返してよ、人のもの盗っちゃいけないんだよー？」

「知ったことじゃないよ。アタイは今度こそ青春を満喫すんだっ」

「私は立派な侍になるために生きなきゃいけないの。だから返して！」

「くだらねえこと夢に見てんだな。アタイだって楽しい青春を送るために生きなきゃいけないんだ、返すもんか」

もう、私だって満喫したいのに、アカネは自己中心的なんだからっ。

でも、彼女の目的が青春を謳歌することだって言うのなら、しばらく好きにさせていれればいずれ気が済んで身体を返してくれるかもしれない。

「もー、しょうがないなー」

「おっ身体を寄越す気になっただか」

「しばらく貸してあげるだけだもんっ」

それにしても、他にシヨックなことがある。

傍から見ると、私の身体って本当に小さいんだなあと思っちゃって……周囲の通行人と比べれば一目瞭然だった。

「それにしても花実、お前の身体ってマジでガキっばいな」

人に言われるととてつもなくむかむかする。

「まだまだこれから大きくなるんだもん。高校を卒業する頃には友香ちゃんにも負けないナイスバディーになるんだから」

「胸も小っちゃいぞ」

「これから膨らむんだもんっ！」

まったくもう、勝手に人の身体を使ってるくせに好き勝手言っち

やって。むきーっ。

「ところで花実、友香って誰？」

私がぶんすか怒りに打ち震えているのもお構いなしに、アカネが何やら尋ねごとをしてくる。しぶしぶ答えてあげた。

「私の親友だよ。ほら、あそこにいる背の高い子がそうなの」

道の先、カーブミラーの下で待ち合わせしていた友香ちゃんのことを指差して教える。

「あーあ、どうせならあいつの身体がよかったのになー。何でこんながきんちよの身体とだけ相性抜群なんだ、不公平だ」

友香ちゃんのスタイルがいいというのは同感だけど、私の身体をそんなに貶さないでほしい。そろそろむかむかがしくしくになってきた。

「おーい友香ーっ」

アカネが突然大声を出したかと思えば、友香ちゃんの名前を呼びながら駆け寄っていつてしまふ。かなり気さくな性格らしい。

ところで私の声は友香ちゃんに届くだろうか。幽霊だから聞こえないんだろうなあ。

アカネが辿り着くより先回りして、試しに話しかけてみる。

「友香ちゃん、おはよー」

「あら、道の向こうから花実ちゃんが駆けてきているわ」

「とーもーかちゃん」

「あの子はまだ遠くにいるのに、あの子の気配をすぐ近くに感じるのは何故？」

「あう……しょうがないなー、今ならほっぺにちゅーしてくれてもいいよ？」

「もしかしたら、私と花実ちゃんは以心伝心し始めているということなのかしら!？」

キスを許してもこの無反応。私は本当に幽霊になってしまったよ
うだ。

「よっ、友香」

そうこうしているうちにアカネが友香ちゃんのもとまで追いついてきた。ぜえぜえ息を切らしながら。

「それにしてもこの身体、体力ないんだな……」
余計なお世話だよ。

「おはよう花実ちゃん、今日もいい天気ねっふふ」
にこにこ笑顔の友香ちゃん。何だか嬉しそう。

「ああ、太陽が眩しいぜ。さあ友香、学校に行こう」
「ふふふふふ、そうね」

ところでどうしてそんな明らかに口調が違う私と違和感なく会話ができるの友香ちゃんは。

二人は仲良く談笑しながらてくてくと通学路を歩き始める。幽霊な私はそんな二人の雑談に耳を傾げるくらいのことしかできなかった。

「ところで、花実ちゃんってそんな喋り方だったかしら。随分男勝りな感じになったわね」

五分も喋り続けてから経ってからようやくそこに気づいてくれる友香ちゃん。

「おう、そうなんだ。男勝りになったんだ。イメチェンってやつだな」

……大丈夫、友香ちゃんなら今の私の身体に入っている人物が全くの別人であるということに気づいてくれるはず。なんてったって親友なんだもの！

「男らしいあなたも素敵よ。ただ、あなたが本当に花実ちゃんなら、ね」

その瞬間、全身がどくんと心臓のように鼓動した。
やっぱり友香ちゃんは親友だった。ちゃんと気づいてくれてるっ

！ ほらね、私たち親友なんだものっ！
「実はアタイ、多重人格だったんだ。今まで友香が見てきたのは、このアタイとは別人格なのさ」

ふーんだ。そんな大胆な嘘が親友の友香ちゃんに通じるわけ

「あら、そうだったの」

目を丸くしてびっくりする友香ちゃん。納得しちゃった！

「今日からしばらくはこのアタイ、桜田花実二号が表に出てるからな。よろしくだっ」

「ええ、これからもよろしくね。もう一人の花実ちゃん」

アカネの頭をなでなでする友香ちゃん。私ははあと溜め息を吐いた。

友香ちゃん、多重人格なんて滅多にあることじゃないんだからもう少し疑ってよ。

「ああん今日の花実ちゃんは八重歯が輝いていてやけに可愛いわあ」私の身体に抱きついて頬を擦りつける友香ちゃん。私はもう一度大きく溜め息を吐いた。

どうやら友香ちゃんは私を可愛がることができれば性格はどうあつても構わないらしい。親友としてちょっと落ち込んでしまう。

「離せよ友香、暑いぞ」

「学校に着くまですーっと抱っこしてるわよー」

「はーなーせーっ」

二人とも、何だか楽しそう。

「……あ」

アカネと友香ちゃんがくっついて歩いているのを見届けていると、視界の先に椿ちゃんの姿を見つめる。周囲の生徒たちとは逆方向、つまりこちらに向かって歩いてきていた。

やがて椿ちゃんがアカネたちの前に辿り着くと、ペこりと一礼。

「おはようございます、花実。花実から離れてください、友香」

「あら、随分な挨拶ね。私たちがらぶらぶしているのがそんなに気に食わないかしら」

「花実が迷惑しているので言っただけです。あなたはもう少し花実の気持ちを考えてあげてください」

「今さらね。私と花実ちゃんはいつだってどこでだって、以心伝心気持ちと気持ちが通じ合っているのよ？」

うそつき。全然通じ合っていないじゃんつ。

そうだ、頭のいい椿ちゃんなら（一学期の成績は学年トップでした）アカネの正体を見破ってくれるかもしれない。

「言い合っけていても仕方ありませんね」

やがて二人の口喧嘩は椿ちゃんの一言によって一時的に鎮められた。

椿ちゃんは言葉を続ける。

「どちらの意見が正しいか、花実に審判を委ねましょう」

「あら、いいのかしらそんなこと言っつて。花実ちゃんは私の将来の旦那さんなのよ？」

「花実は友香のものじゃありませんっ」

そして二人の視線がアカネに向いた。友香ちゃんの腕に抱かれたままの彼女は、二人の顔を交互に見た後、にっつと笑っつて答えを振り絞る。

「さてはお前らレズだろ。きめえな」

気持ち悪いだなんて、なんて酷いことを言うのかしらねアカネは！　ところでレズっつて何だろう。レーズンの略称かな。

「な……な、な……」

アカネのその言葉に、椿ちゃんは茫然自失を体現するかのような危ない足取りで回れ右をすると、そのままふらふらと学校に向かっつて歩き去っつてしまった。今度身体を取り戻したらちゃんと謝っつておこつ。

「ああん花実ちゃんもつと私を罵っつてーっ」

それに対して、友香ちゃんのこの態度にはさすがの私も引かないではいられなかつた。

今度からは友香ちゃんに対する接し方をもう少し改めよう。これ以上、彼女に変人への道を歩ませないために……。

何だかんだでアカネの正体に気づかれなまま学校まで到着してしまつた。

アカネには十分に青春を満喫させて満足してもらわないと。

「花実、お前って恋人とかいんのか？」

人ごみの多い朝の廊下の上を歩きつつ、隣で歩いている友香ちゃんに聞こえないようアカネが尋ねてくる。

「いないよ？」

「しけてんなー」

むかつ。

しばらく歩いてから廊下で友香ちゃんとお別れすると、アカネはてくてくとどこかへ向かって進み始めた。私の教室とは全くの別方向である。

「アカネ、どこ行くの？」

尋ねてみると、彼女は何食わぬ顔で答えた。

「屋上だけど」

「どうして」

「サボりに決まってるんだろ」

いけない、アカネに私の身体を任せていては進級とかいろいろ危なくなる。ただでさえ成績があれなのに！

「あつそういえばアカネ、通学鞆持ってきてないじゃん！」

「今日は始業式だろ？ サボる気満々のアタイが、授業もない日にそんなもの持つてくるわけないじゃん」

「夏休みの宿題提出しとかないと怒られちゃうよーっ」

「先公なんざ無視しときゃいいんだって」

「だーめー教室に行くのーっ」

私が幽霊状態であるのをいいことにどんどん突き進んでいくアカネ。このままではサボられてしまう！

「桜田さん、教室はこっちだよ。もう自分の教室忘れちゃった？」

どこかで聞きなれた男の人の声がした瞬間、アカネは急に立ち止まった。声の主を手首をつかまれたらしい。

「あんだよ、別にいいだろ」

アカネがその手を振り払いながら背後へと振り返った瞬間、

「あつあつえおあおおつ？」

急に顔を赤くして文字に表しにくい声を出す。

「桜田さん、どうしたの？」

アカネを呼び止めた声の主はやっぱり野田村くん。その彼を前にしてアカネが顔を赤くするってことは……もしかして。

「アカネ、野田村くんに一目惚れした？」

「にあつ！？ そつそそそおんなわけねえ！」

分かりやすい人だった。

「さあ行くよ桜田さん、ホームルームに間に合わなくなっちゃうよ」

野田村くんがアカネの手首を引いて歩き始める。それに力負けするかのような状態で連れていかれるアカネの顔は、いつまで経っても真っ赤なままだった。

……むー、もしかしてこれは青春してるのではないだろうか。

「……あつ」

早く身体を返してほしい。どうしてかこの時、今まで以上に強くそう思った。

二十三、幽霊少女アカネ1（後書き）

長編に挑戦ですっ！ このアカネ編ではあのお方の秘密に迫っていきたいと思いますので、なにとぞよろしくお願いしますっ。
つづく！

二十四、幽霊少女アカネ2（前書き）

「花実の日記」

私は生まれて初めて幽霊さんと呼ばれている人にお会いしました。あまり怖くなかったです。でも身体を乗っ取られちゃったので、きつと怖い存在なのだと思います。私の身体、早く返してほしいなあ。

二十四、幽霊少女アカネ2

野田村くんの手首引っ張られて教室に戻っていくアカネ。その顔は未だにまっかつつかである。

「アカネ、もう私の身体の貸し出し期間は終わりだよ。早く返して！」

その道のりでどれだけお願いしようと、アカネは一切聞き入れようとしてくれない。むしろ無視され続けている気がする。

思えば、幽霊って生きている人には見えないんだっけ。私がお話することができるのは、私の身体を乗っ取ったアカネだけ……そのアカネは今、ちゃんと『生きている』状態だ。そのうち私の声が届かなくなってしまう可能性もある。

何とかして早めに身体を返してもらわないと、大変なことになるかもしれない。

私がそうやって気持ちを焦らせていると、やがて教室に辿り着き、アカネがふらふらと室内を歩き始める。教えていないのに自分の席へ着席できたのは、きつと身体が覚えていたからだね。さすが私の身体。

「花実、花実」

顔を伏せて周りの人に聞こえないようひそひそと私の名前を呼んでくるアカネ。

「なあに？」

「あの男の名前、何て言うんだ？」

私に尋ねながら、アカネはこっそりとその男の子に向けてピンと人差し指を立てる。親切な私はそんな身体泥棒の彼女にも優しく教えてあげた。

「野田村春平くんって言うんだよ。お友達なの」

「春平か……いい名前だなあ」

どうやらアカネは野田村くんのことがいதாகく気に入ったらしい。

本当に一目惚れしちゃったのかあ。

「アカネ、早く身体返して」

人の身体を乗っ取るほどの行動力があるアカネのことだから、告白なんて衝動的にさっさと済ませてしまってもいいかもしれない。急がなきゃ。

「返すもんか。アタイはこれからブルースプリングをエンジョイするんだ……あはあ」

私の言葉を軽く流してにやにやするアカネ。青春を英訳してもブルースプリングにはならないよ。

「早く放課後来ねえかなあ」

子供みたいに足をぶらぶらさせながら壁に設置された時計へと目を向けるアカネの顔はとんでもなくにやけていたため、周囲の通行人から奇怪なものを見る目で眺められていった。恥ずかしいなあもう。

しばらくして担任の中吉田先生が教壇に上がる。アカネは相変わらずにやにやにやして、それを見つけた中吉田先生がかなり引いていた。

「もうアカネってば、だらしない顔しないで。普段の私はもっとシヤキつとしてるんだから！」

「あはあ……」

全くもう、そんな無防備な状態でいると、私が身体を取り返しちやうよっ……その思考に至った瞬間、頭の中でピーンと真っ直ぐな閃光が走っていくのを感じた。

ひよっとしてこれは最大のチャンスなのではないだろうか。

アカネが野田村くんのことを考えて浮かれ無防備になっている今、私が私の身体に潜り込んでいけば、ひよっとするれば身体の主導権を取り返せるかもしれない。

「よーし……いざー！」

私は早速、自分の身体に向けて突進した。

ここはどこだろう。周りは今までにないほど真っ暗で、一センチ先も上手く見通せない。

どうして私はこんなところにいるのだろう。確か私はアカネの身体に突進して、それで手応えを感じたから「上手くいったっ」と喜んで……そこから先のことは全く思い出せない。

ひょっとして、これは夢の中？

「誰かいませんかー」

誰に向けてでもなく呼び声を上げる。誰からの返事もない。

やっぱり夢なのかなー。もしかしたらアカネが私の身体を乗っ取ったというのも全部が夢で、本当の私は今まさに夏休み最後の夜にぐーぐー眠っている真っ最中なのかもしれない。

それならとりあえず起きてみよう。私は意識を集中させ、起床することだけを考える。

突然、小さな女の子のことを思い出した。いや、思い出したと言うよりは思い浮かんだと言った方が正しいのかもしれない。その女の子は幼稚園児だろう、私の下半身ほどの身長もなかった。

女の子は私に抱きついて言った。「けーき、はやくたべたいなあ」と。

そういえば、もうすぐこの子の誕生日だった気がする……ってあれ、どうして私が急に思い浮かんだ女の子の誕生日を知っているのだろう。

疑問に溢れる夢の中での意識は、そこでぶつんと途切れた。

目を開くと、視線の先に真っ白い天井があった。

背中がやけにふかふかしてるなーと思いつつ上体を起こすと、胸の辺りから白い布がはらりと落ちていく。

これ、シート？

「おはよう桜田さん、よく眠れた？」

「あつ？」

野田村くんの声が聞こえたので顔を横に向けると、そこには椅子に腰掛けて本を手に持つ野田村くんがいた。

「……あうー？」

私が状況を飲み込めずに首を傾げていると、野田村くんが今の状況を優しく説明してくれる。

「君はホームルームが始まる直前、急に倒れちゃったんだよ。覚えてない？」

「うん、よく分かんない。どうしちゃったんだろうー」

よく見ればここは保健室で、私はと言えばベッドの上にいた。倒れた時に運ばれちゃったのだろう。

「あう、心配掛けちゃったかな。ごめんなさい……」

「気にしないでいいよ。無事で何よりなんだからさ」

ああ、野田村くんは本当に優しいな。アカネにも見習ってほしいくらいだ。

「ところで野田村くん、ずっと看病してくれてたの？」

ふと思いついた疑問について尋ねてみると、野田村くんはこくりと頷いて答えてくれた。

「海原さんと山城さんも看病してたよ。二人は今、僕らのお昼ご飯を見繕いに食堂に行ってくれてる」

「お昼ご飯？」

ふと壁に掛けられた時計へ目を向けると、短針は既に頂点を通り過ぎていた。そういえば今日は始業式とホームルームが終わったらずぐ放課後になるんだっけ。

「ところで桜田さん、もう具合はよくなった？」

「あうっ？」

野田村くんが突然そんなことを言い出したと思えば、

「ん、動かないですよ……」

そのおでこを私のおでこに直接触れさせてきた。

目を閉じている彼の顔が至近距離に……そして彼の吐息が顔に掛かって……あうう。

「微熱、あるかもしれないね。桜田さん、横になってなよ」

私がぼーっとなっていると、野田村くんは私の肩をそっとな押し倒して上体を寝かせてくれた。

枕にそーっと頭を置く。

「……あう？」

視線の先、天井近くで、ふわふわと幽霊みたいに浮いている半透明の人影を見つける。

それは赤みがあった長髪で、ひと昔前の女番長さん スケバンさんって言うんだっけ。そういう人が好きそうな足元も隠れてしまっいそうなほどの長いスカートのセーラー服を着用していた。そして八重歯をきらりと輝かせ、私のことをぎろっとな睨みつけてくる。

あの幽霊みたいな女の子の正体は、多分アカネだ。彼女のしかめっ面はやがて口を開かせる。

「おい花実、よくもアタイを追い出しやがったな
やっぱり。」

どうして私がそんなに怒られなくちゃいけないのかな。身体を盗んでいったのはそっちなのにっ。私はアカネに向けて、思いつきり舌を突き出し、あっかんべーをしてあげた。

「ムっカっつっくうっ」

アカネが眉間に驚くほどしわを寄せる。迫力満点で怖かったので、私は布団に潜り込むことにした。

「桜田さん、どうしたの？」

シーツを頭まで被った私を見て、野田村くんが心配そうに声を掛けてくれる。

「えへへ、かくれんぼ」

「はは、お茶目さんだね」

野田村くんとお話していると、とっても楽しいなあ……次の瞬間、

背筋に悪寒が走る。

「このアマあ、アタイの春平といちゃこらやってんじゃねえぞ……」
嫉妬に狂ったアカネの殺気が手に取るように分かる。油断しているとまた身体を奪われるかもしれないので、とりあえず私はぎゅつと全身に力を入れてみた。意味があるのかどうかは分からないけど、すると、ピリリリと何やら機械の音が保健室の中で鳴り響いた。もちろん驚いた私の肩はびくつと飛び跳ねる。

「ごめん桜田さん、ちよつと携帯にメールが来たんだ」

言いながら野田村くんはポケットから携帯電話を取り出して操作を始めた。私は布団からそつと頭を出して彼の様子を窺う。

野田村くん、携帯なんて持ってたんだ。私も欲しいなあ。

「誰から？」

「妹」

聞くと、彼は携帯電話の画面をこちらに向けてくれた。メールの文面は、「はやくかえって」のよく分からない一行のみ。

「冬美って名前で、もうすぐ四歳になるんだよ。たまに親の携帯を借りてこっやってメール送ってきたりするんだ」

嬉しそうに妹さんのことを語る野田村くん。きつと仲良しな兄妹なのだろう。

思えば三歳くらいの頃、私はいつもお兄ちゃんにべったりくっついて甘えてたっけ。わざわざメールを送ってきている辺り、多分冬美ちゃんも甘えんぼうなのだろう。

可愛いだろうなー。

「冬美ちゃんに会ってみたいな」

思いを馳せるあまり思わずぼつりと呟いてしまう。

「じゃあさ、今度僕の家に来てみる？ 歓迎するよ」

「えっいいの？ やったーっ」

そして思いもなかったほど快い彼の返事に、私は年甲斐もなくはしゃいでしまった。

ぞくり。

「絶対絶対、許さないからな……」

何やら悪寒を感じて視線を天井に向けると、アカネが私のことを睨みつつ瞳を涙で潤ませていた。可愛いところもあるんだな。

アカネ、焼き餅焼くのはいいけどあんまり呪わないでね。

「じゃあさ、これから行くとしたら迷惑かな？ 今日学校も早く終わったし、行きたいなあ」

「僕は別に構わないけど、君は安静にしてないといけないよ。ちょっとでも熱が出てるんだからさ」

ただでさえ心配させてしまっているだけに、そう言われてしまったのは強くお願いできない。

「また今度だよ」

「あー」

仕方ない、言われた通りに次の機会まで我慢しよう。

「……妹、か」

頭上でふわふわ浮いているアカネから、溜め息にも似た呟きが聞こえた気がした。

アカネに身体を乗っ取られた日から数日後、日曜日の午前、私は駅まで野田村さんと待ち合わせをしていた。今日こそは冬美ちゃんにご対面するのだ。

「ところでアカネ、どうしてついて来てるの」

「ちょっと気になることがあってな」

ちなみに私の背後では、先日「お前みたいな発育悪い身体なんかこっちから願い下げだー！」だなんて失礼なことを言い残し、今朝まで適当なところをふらふら彷徨っていたはずのアカネがぴったり憑いている。背後霊だね。

それにしても、予定より随分早く来てしまった。早く見積もっても野田村くんが来るまであと三十分は掛かるだろう。

暇なので、アカネとお話することにした。

「ねえねえアカネ、どうしてあなたは幽霊になったの？」

「死んだからだよ。んなこと訊いてどうすんだ」

「この世にどんな未練があるのかな」と思ってたさ」

それからアカネは無言になって、私の問いかけに何も答えてくれなくなった。怒らせちゃったかな。

数十分という時間を持て余すことになった私は、ただひたすら野田村さんの到着を待ち続ける。

「おーい」

やがて、待ち合わせの時間より二十分も早くに野田村くんが姿を現した。

「ごめん桜田さん、待たせちゃったかな」

「ううん、全然待つてないよ。今来たところ」

背後から「嘘吐け」というアカネの呟きが聞こえたけど気にしない。

さて、これから初めて野田村くんのお宅を訪問をするのだから、もう少し身だしなみを整えておいた方がいいかもしれない。

「行こう、桜田さん」

そう言って野田村くんは背を向けて歩き始める。この隙に私は髪や服装が乱れてないかちゃっちゃと整えた。背後から「無駄なことを」というアカネの呟きが聞こえたけど気にしない。

二十四、幽霊少女アカネ2（後書き）

ううくー！

二十五、幽霊少女アカネ3（前書き）

「花実の日記」

アカネのいじわるにも負けず、今日は野田村君のお宅訪問に向かいます。きっと彼のことだから、綺麗に掃除してるんだろっな！。妹さんにも早く会いたいですっ。

二十五、幽霊少女アカネ3

野田村くんに連れられて、私と幽霊少女のアカネは高層マンションの一室の前に到着した。野田村くんがポケットから鍵を取り出して扉の鍵穴に差すと、部屋の中からだろうか、どたばたと誰かが走るような音が聞こえてくる。

「親は仕事に出かけてるから、好きだけくつろいでもらって構わないよ」

言いながら彼はドアノブを捻って扉を引いた。すると、

「おかえりーっ！」

元気いっぱいな女の子の声が響いてくる。

「ただいま、冬美。昨日言ってた通り、友達を連れてきたよ」

どうやら冬美ちゃんはそこまで来ているらしい。野田村くんの背中で見えない彼女の姿を確認するために、私は身体を傾けて視点を変える。

「……うい？」

そこには、幼稚園児くらいの小さな女の子がこちらを見上げて立っていた。子供っぽい二つの髪留めがとても可愛い。

そして冬美ちゃんは私の顔を見た途端、

「ひゃわわっ」

廊下の突き当たりにある部屋まで逃げ出してしまっ。

「ははは……」

野田村くんが苦笑を浮かべた。

「今が僕の妹、冬美だよ。人見知りか激しいんだ」
仲良くなれるまで時間が掛かりそう。

「とりあえず上がってよ。お茶淹れるから、その間冬美と遊んでくれる？」

「うん、分かったー」

私は靴を脱いで野田村くんに用意されたスリッパに足をはめて廊

下を歩き出す。リビングに案内されソファに座った私は、目の前のテーブルの下からこちらを覗き込んでいる冬美ちゃんの姿を発見した。

「冬美ちゃん、おいで」

呼んでみると彼女は素早く頭を隠してしまふ。

これはどうしたものだろうか。

「おい花実」

私が途方に暮れているところへ、アカネが相変わらずぶっきらぼうな言い方で話し掛けてきた。

「アタイに身体を貸してみる。ガキの扱いには慣れてんだ」

そんなこと言って、あわよくばそのまま身体を持ち逃げする気じやないでしょうね。私は疑いのじとーっと眼差しを向ける。

「前にも言ったる、お前みたいな発育悪い身体なんか欲しかねえつて。奪ったりする気はないから安心しろ」

むかつときたので、私はそっぽ向いてアカネのことを無視した。私にだって小さい子のお世話くらいできるもん。

そしてそれから何度冬美ちゃんの名前を呼んだことか、彼女はテーブルの下で丸まったままぶるぶる震えるばかりで反応しようとしてくれない。でもそこが小動物チックで大変ぶりちー。

「アタイにやらせてみなって」

むむむ……。

「絶対に私の身体を持ち逃げしたりしない？」

私は小声でアカネに問いかけた。幽霊少女は「当たり前だ」の一言を自信満々に言い放ったので、とりあえず信用することにする。

「で、どうやったらあなたに身体を貸せるの？」

「身体の力を思いっきり抜け。眠っている時のように無防備になるんだ」

言われた通り、身体からできる限り力を抜いてみせた。すると、空気が抜けた風船のように、思わず上体をソファの上に倒してしまふ。

「上出来だ。いくぞ」

言うが早いか、彼女はその半透明な身体を私の胸に向かって突進させてきた。

瞬間、目の前が真っ暗になる。

もうすぐ誕生日だったのに。

あいつの喜ぶ顔が見たくて、半年も前から用意していたのに。

誰にも 親にすら内緒にして、頑張って貯めたお金で、あいつが一番欲しがりそうなプレゼントを買っておいたのに。

何より悔しいのは、アタイはあいつを守りきれなかったことだ。

アタイがもっと早く助けに動いていれば、あいつの足が動かなくなることもなかっただろうに。

死んでしまうこともなかっただろうに。

悔しい

心が重くなるような夢を見ていた気がする。

気がつくと、私はまた宙にふわふわ浮いていた。そして瞬間的に冬美ちゃんのことを思い出し、さっきまで座っていたはずのソファへ視線を走らせると、

「おねえちゃん、もっともっと。あーんっ」

「ったくしょうがねーな。ほら、もっと大きく口開ける。今度のはでかいぞー」

私……の身体を乗っ取ったアカネが、八重歯を光らせながら隣に座る冬美ちゃんの口目掛けてクッキーを放り込もうとしていた。そして向かい側のソファにはここにこと微笑ましそくに二人を見つめる野田村くん。

私が気を失っている間に、アカネと冬美ちゃんはすっかり仲良しになったようだ。アカネは子供の相手が苦手で、どうせむしゃくしやして怒鳴り散らしたりするようなタイプだろうと思ってたのに。

生前は冬美ちゃんみたいな妹さんでもいたのかな。

それはそうと、テーブルの中央にお皿ごと置かれたクッキーの群が私の視線を惹きつけて離さない。食べたい。

「ねえねえアカネ、そろそろ替わってよお。私も冬美ちゃんとクッキー食べたいの」

アカネに話し掛けるも、返事はない。指や視線での合図すら返ってこない。これは完全に無視されている判断せざるを得ませんな！

「ふうんだ。私は無理やり身体を取り返せるんだもんねー」

アカネが私の身体に入る際は私が思いつきり気を抜かないと難しいらしいけど、私の場合は違う。もともとこの身体は私のものなのだから、無理やり入り込もうとすれば身体の主導権くらい簡単に奪還できるのだ。

「えーいつ」

私はアカネが操る自分の身体目掛け、ふわふわしながらも突進した。

しようとしたその寸前、

「アカネさんって子供に好かれるタイプなんだね」

野田村くんの放った台詞に、とてつもない違和感を覚える。

桜田さんじゃなくて、アカネさん？

「ま、まあな。たまに公園のガキどもと遊んでやったりすると、明日も来てとうるさく言われるんだ」

アカネと言えば普通に素の性格を露にして対応している。

どういうこと？

「なあ、春平……今な、花実の奴が替わってうるさく言うんだよ。でもアタイはこのままでいたい。どうしたらいい？」

「うーん、そうだね……桜田さんは君と違っていつでうちに遊びに来れるんだから、我がまま言っちゃってもいいんじゃないかな」

「そっか。サンキューな、春平っ」

もしかしてアカネ、自分の正体を野田村くんに打ち明けちゃったの？ で、野田村くんはアカネの言うことに素直に納得したと？ まさかっ。

アカネが私の方に顔を向けて、にやりと笑ってみせる。

「花実、そういうわけだから、もう少し身体貸してくれ。頼むよ」
そして野田村くんも、アカネの視線から私の位置に大体の目星をつけて顔をこちらに向け、話し掛けてきた

「桜田さん、僕からも頼むよ。アカネさんに身体を貸してあげてくれないかな？」

謀られた……。

というわけではばらくの間、私は幽霊として三人の様子を見守ることしかできなかつたのである。あうー。

一時間くらい経って、冬美ちゃんがお外へ遊びに行きたいと言いつ出した。

「おそといこーよーっ」

野田村くんとアカネの袖をぐいぐい引っ張って連れて行こうとする冬美ちゃん。一生懸命な目つきが可愛い。

「アタイも外行きたい」

「分かった。僕は戸締りしてるから、先に外に出ててよ」

すると冬美ちゃんに手を繋がれて玄関まで走らされるアカネ。私は悔しいので、アカネが惚れた男の子と二人きりの時間を堪能することにする。

私はガスの元栓や各部屋の窓の鍵など、入念にチェックして回る野田村くんの後をふらふらとついていった。ストーカーみたいで少しどきどき。

「ところで桜田さん、二人きりだね」

「えへへ、そうだねー……ふえ？」

いきなり普通に話し掛けられたので思わず普通に返事しちゃった

けど、今、野田村くんは何て言いましたかでありんすか？

「野田村くん、ひよつとして私のこと、見えるの？」

確かアカネの話によると、今の私は肉体を失った魂で、つまりは幽霊の状態なのだ。だから相性抜群らしいアカネ以外の人とコンタクトをとることはできないはずなのに……。

「僕、靈感あるからさ」

「そーなんだー」

野田村くんは意外とすごい人だった。

「始業式の日もアカネさんに身体を貸してたよね。その時はボランティアかと思って気づかない振りしてたけど」

「違うよー、こないだはアカネが勝手に身体を持ってちゃったの。今回は貸してあげただけ」

「へえ、そうなんだ。桜田さんって優しいんだね」

そんな風に言われると照れちゃうなあ。

「よし、戸締りオーケー。外に行こう」

「うんっ」

野田村くんとうとうしてお話できたことが、現状での唯一の救いに思えた。

マンションを出てしばらく歩くと（私はふわふわ浮いて行きました）、近所の桜花公園という遊具の多い場所に辿り着いた。奥の芝で生い茂る広場では、小学生くらいの子供たちがサッカーや三角ベースなどを楽しんでいる。

「おねえちゃん、ぶらんこ」

「おっし、アタイが高いところまで押してやるぞ」

「わーっ」

アカネと冬美ちゃんは本当の姉妹みたいに仲良しだった。

「私も冬美ちゃんと遊びたいなー」

「また今度うちに来なよ。いつでも歓迎するからさ」

野田村くんが微笑み掛けてくれる。とても嬉しい。

思えば私は野田村くんの住所を知ってしまったのだ。男の子の家に上がらせてもらうのも今日が初めてだったし、考えれば考えるほど照れてしまう。えへへ。

アカネと冬美ちゃんがブランコや滑り台、その他いろんな遊具を梯子していく間、私と野田村くんは二人きりで雑談を楽しんでいると、そのうち遊んでいた二人が私たちのもとに駆け寄ってくる。すぐそばまで来て立ち止まると、アカネが私のことを睨みつけてきた。「おい、花実」

幽霊状態の私に顔を近づけてひそひそと話し掛けてくるアカネ。ちよっぴり怖い。

「な、何？」

「お前、さっきから春平と何を喋っていた」

どうやら野田村くんに靈感があることは知っているみたいだ。

「何って、ただの世間話だよ？」

「アタイのイメージダウンを狙っている悪口言ってたんじゃないだろうな」

「私そんなことしないもんっ」

失礼なアカネにはあつかんべーしてあげることにする。するとアカネまで舌を出して挑発してきた。

「べー」

「べー」

冬美ちゃんの前で子供みたいに睨み合う女子高生が二人。

「おにいちゃんもあそぼ」

「よーし、何して遊ぼうか」

「ぶらんこー」

「また？ 冬美はブランコが好きだね」

「えへー」

こうして私たちの一日が暮れていく……。

二十五、幽霊少女アカネ3（後書き）

冬美ちゃんみたいな妹がほしかったなー。
つづく！

二十六、幽霊少女アカネ4（前書き）

「花実の日記」

私も冬美ちゃんと公園で遊びたいのにアカネってば自分ばかり楽しんで！ もうアカネなんか放つといて野田村くんといちゃいちゃしてやるんだからー！

二十六、幽霊少女アカネ4

「アカネさん、お昼まだだよね。よかつたらうちで食べない？」

冬美ちゃんをジャングルジムに登らせていたアカネに向かって、野田村くんは相変わらずの微笑みを投げ掛けていた。

そういえばそろそろお腹が空き始めてもいい時間だ。幽霊状態の私は空腹を感じないわけだけど。

「いいのか？」

アカネが私のお腹を擦りつつ脱力気味に言う。どうやら結構お腹が空いているらしい。

「うん。どうせ作るのは僕だし、遠慮しないでよ」

「えっ春平の手作り？」

「悪いけど僕は先に帰って作ってるから、しばらくしたら冬美を連れて戻ってきてね」

何を考えているのかにやにやし始めるアカネを置いて、野田村くんは小走りで公園から離れていく。

さて私はどうしよう。アカネのいるこの公園に留まるか野田村くんについていくか……考えるまでもない。

私は駆けていく野田村くんの背中をふわふわ追った。

マンションの一室、キッチンにて、

「よし、頑張るぞー」

張り切る野田村くんが台所に材料を並べていた。

レタスにハムに卵にチーズにマヨネーズに耳なし食パンにその他いろいろ……むむ、読めてきたよお昼の献立が。

「サンドイッチ作るの？」

「そうだよ。ていうかおにぎりとかサンドイッチしか作れないんだけどね」

「ふーん」

料理を開始した野田村さんの周りをふわふわ飛び回る私。暇だった。

適当に考えごとでもして時間を潰そう。そう思った時、唐突にアカネの言っていたことを思い出す。

『アタイだって楽しい青春を送るために生きなきゃいけないんだ』

青春かあ。アカネは生前に楽しい青春時代を過ごせていなかったのかな。

その未練が解消できないから、死んでから今の今まで成仏できないでいたのだろうか。そうなのだとしたら少し可哀相に思えてくる。アカネが満足するまで、身体、貸してあげてもいいかな……。

「桜田さん、テレビでも見る？ 退屈でしょ」

いきなり声を掛けられて思考が中断される。私は慌てて答えた。

「ううん、野田村さんのこと見てるからいいよ」

「そっか」

今度は作業を続ける彼の手元をじーっと見つめる私。美味しそう。

「私も食べたいな」

思わず呟いてしまっていた。

アカネに身体を貸している間はどんな美味しそうなものも食べることができない。何度つかみ取ろうとしても手からすり抜けてしまっ

て。せめて私とアカネが同時に食事を楽しめれば、文句なく身体を貸してあげられるのだけど

「だったら君も自分の身体に入ってみたら？」

思った矢先に、野田村さんが気になることを提案してきた。

「私もって、そんなことできるの？」

「二人の心を一つにしなきゃできないけどね。仲がいいならできるはずだよ」

仲が悪い私たちには無理ということだね。

私が落胆の溜め息を吐いていると、野田村さんが料理の手を止め

て私に向き直る。

「サンドイツチ、思ったより早く完成しそうなんだ。悪いけど桜田さん、アカネさんたちを連れてきてくれないかな」

「うん、分かったよっ」

こくりと頷いて、私は壁を透り抜け外に飛び出した。

高いところを飛ぶのは怖かったけど、慣れればとても快適に進むことができた。道路なんて無視して一直線に公園へと向かう。

ふわふわ浮かんでいく中、視界の端に見覚えのある二人の女の子を発見。

「見つけ」

総髪の頭と二つの可愛らしい髪留めが特徴の、お互いに手を繋ぎ合う二人組。私はアカネに声を掛けようと近づいていく。

「おなかすいたーっ、はやくう！」

「待て待て、そんなに急ぐな。飯は逃げないから」

アカネは空腹に耐えられない冬美ちゃんに引っ張られて走らされているようだ。

私は視線を彼女たちの行く先へ先回りさせる。信号は青で、急げばギリギリ渡れそうだ。

ていうか、二人がマンションに向かっているなら私の役目はもう終わってるのではないだろうか。私はくるりと方向転換し、野田村くんのもとまで戻ることにする。

「あっおいこらっ！」

地上からアカネの叫び声が聞こえた。びっくりした私は思わず視線を彼女へと向ける。

さっきまで手を繋いでいたのに、冬美ちゃんはいつの間にかその手を離し、横断歩道に向かって走り出していた。

「おねえちゃんおそーいっ」

嫌な予感がする。背中に冷たいものが通り過ぎていくのを感じる。黒いもやもやとしたものが胸のうちから湧き上がって……例える

ならそう、死神に命を狙われているかのような不安な気持ちと恐ろしさをぐちゃぐちゃに混ぜ合わせたかのような

「待て冬美ッ」

「待って、冬美ちゃんっ！」

私は冬美ちゃんに向かって突進しながら思わず叫んでいた。アカネも私と同様に、冬美ちゃんのもとまで小さな身体を走らせている。目の前には、横断歩道の真ん中で立ち止まってこちらに手を振っている小さな女の子。瞬きした瞬間にまぶたの裏を過ぎるのは、車道の赤信号を無視して突進してくる明らかにスピード違反のオートバイ。

どうして私はこんなにも焦っているのだろう。左右を遠いところまで確認しても、そんな危険なバイクは走っていないというのに。

アカネが冬美ちゃんの手を取り、急いで向こう側の歩道まで駆けていく。

「速くっ！」

「ひゃわわっ」

無事に横断歩道を渡り切ったと同時に、青信号が点滅を始めた。

私とアカネはふうつと安堵の溜め息を吐いて、ぽかんと口を開けた冬美ちゃんのつぶらな瞳を見つめる。

「こら冬美、信号が青になってもちゃんと左右を確認しなきゃ駄目だろ」

「ういー？」

何のことが分かっていないみたいだ。でもまあ何にせよ、無事だったんだからよかったよかった。

「ういじゃない、確認しなきゃ駄目だったってんだ！」

アカネの突然の大声に、私も思わずびくつと肩を揺らしてしまう。周囲の人から注目が集まってくる。

何もそんなに怒らなくていいのに……。

「分かったか!？」

「……うい」

こくりと頷く涙目の冬美ちゃん。悲しそうな表情をしている。

「分かればいいんだ、分かれば」

アカネはそんな冬美ちゃんの頭をなでなでしたかと思うと、優しく全身を抱き締めてあげていた。

「アタイら人間はな、とつても弱い生き物なんだ。油断してると簡単に死んじゃまう」

震える声で言葉を続ける。

「死んだら何にもできなくなるんだ。大好きな奴と会話することもできないんだ」

私は頭を固いところに打ちつけてしまったような、全身がぐらぐらする感覚を覚えていた。

「見守ることしかできないんだぞ」

彼女が一つ一つ語る言葉には、どれにも悲しいものがあって、「それはな、地獄に行くことよりもつらいことなんだ」

私の心を、強く締めつけていった。

しばらく冬美ちゃんを抱き締めていたアカネはふと立ち上がり、「帰るか。昼ご飯が待ってるぞ」

冬美ちゃんの小さな手の平を握って、優しく引つ張ろうとする。「……うん、うんっ」

いつしかさつきまで涙を浮かべていた小さな二人の女の子は、まるで本当の姉妹のように、笑い合っていた。

夕方頃、アカネはマンション一室の玄関に立っていた。

「じゃあな冬美。また来るから、そんなに寂しそうな顔するな」
こくりと頷く冬美ちゃん。

「またな春平。その、またなっ」

野田村くん相手には、やけに照れ臭そうな顔をしていた。

野田村家の部屋の扉を閉じて、エレベーターに向かって歩き始め

るアカネ。私はその後をふらふらついていく。

「花実、そろそろ身体返すわ。中に入れ」

「分かった」

私は言われるがままに、自分の身体へ戻ろうとした。

自分の身体に手が触れようとしたその時、

「おっと、ちよつと待った」

どういうわけかそれを制止されてしまう。

「お前、入れ替わる時は決まって気絶するだろ」

そういえばそうだった。

「気持ちをすっかり持たねえからそんなことになるんだ。戻るなら十分気張ってから戻れ」

「うーん……分かった、やってみる」

でもどうやれば気持ちをすっかり保っていていられるのだろう。もしかしたら滝に打たれつつ精神修行を積まなくてはならないのかもしれない。

「……ところでお前、さっきからなんかやけに大人しいな。どうした」

「ん、ちよつとね」

アカネと冬美ちゃんがああ横断歩道を渡った辺りから、私は野田村くんの言っていたことがずっと気になっていた。

『だったら君も自分の身体に入ってみたら？』

『私もつて、そんなことできるの？』

『二人の心を一つにしなきゃできないけどね』

そして思った。今なら心を一つにすることができるのではないか。冬美ちゃんが車道に飛び出した時、確かに感じた。私とアカネの心が全く同調していたのを。

「アカネ、もしかしたらただけどね、二人で一つの身体に入っているかもしれない」

「は？」

アカネが不思議そうな顔をする。私はアカネに台所で野田村くん

と話したことを全て打ち明けた。それが可能になりえる根拠も含めて丁寧だ。

「できるのなら、やってみたいな」

頭を頷かせるアカネ。

「でもさ、心を一つにすることはもしかして」

「よーし、頑張ってるぞーっ」

私は先ほどアカネに言われた通り、気持ちをしっかりと落ち着けて気を張ってみる。

「おい、アタイの話を」

うぬぬぬ、準備オツケー。絶対気絶しない自信あり！

「いつきまーすっ！」

「こらあー！」

私は自分の手の平をぐっばぐっばさせてみる。ちゃんと動かせるので、どうやら身体の主導権を取り戻せたようだ。

「アカネー」

「何だ？」

さらに言えば、一つの身体に二人で入っちゃおう作戦は失敗に終わったようだった。目の前でしかめっ面をした長髪ロングスカート
のアカネが浮かんでいる。

「できなかつたね」

「心が思いつきりすれ違ってたのに気づいてたかお前」

気づいてなかった。

「でもでも、一緒にはいられなかったけど、気絶しないことには成功したよ！」

「はいはい、よかったな。じゃあアタイはまたそこから辺ぶらぶらしてくっから」

そう言い残して、アカネは私の目の前からふわふわとどこかへ飛

んでいってしまふ。帰り道で話し相手になつてもらいたかつたのに。それはそうと、どうやら私たちはまだ心を一つにし切れていないらしい。冬美ちゃんを助けようと思つた時に感じたあの一体感から大丈夫だと思つたんだけだなー。

「……また今度考えよつと」

私はふうと溜め息を吐いて歩き出す。考え込めば上手くいくようなタイプじゃないもんね、私は。

あーあ、野田村くんの作ったサンドイッチ食べたかつたなー。

二十六、幽霊少女アカネ4（後書き）

横断歩道は右見て左見てもう一度右見て公平さを保つためさらに左を見てから渡りましょう。

つづく！

二十七、幽霊少女アカネ5（前書き）

「花実の日記」

今まで誤解していました。アカネ様はとても偉大な人だったんです。私は彼女に平伏し、彼女の犬としてこれからの人生を歩んでいきたいと思います。

ってわーいつの間にかアカネが日記帳に落書きしてるー！

二十七、幽霊少女アカネ5

野田村くんのお家へ遊びに訪ねた日の翌日の学校にて、

「おい花実、アタイの調べによると次の日曜日が冬美の誕生日らしい」

ノートにシャープペンシルを走らせていた私の頭上で、アカネがそんなことを言い出した。

誕生日かー、そういえば小さな頃は家族が毎年パーティー開いてくれてたっけ。楽しかったなー。

「なあなあ、お前なら冬美にどんなプレゼント選ぶ？ 一、木刀。

二、ぬいぐるみ。三、お酒……さあ選ぶ」

「うーん、二かなー」

「違うぞ桜田。正解は五分の一だ」

そんな選択肢あつたっけ……そもそもどうして中吉田先生が私とアカネの会話に割り込んでいるのだろう。

「熱心なのはいいが、なるべく口に出さないようにな。あとちゃんと勉強しておけ、はっはっは」

中吉田先生の笑い声につられて、教室内のあちこちからクスクスと失笑のような囁きが漏れ始める。気がつけば授業開始時には何も書かれていなかった黒板に不可解な数式が……今は授業中だった。

「あー」

恥をかいてしまったよお。

休み時間、私はアカネと二人でひそひそと作戦会議を開いていた。名付けて「祝四歳！ 冬美ちゃんを祝っちゃおう大作戦っ！」である。

「私はぬいぐるみが喜ばれると思うの」

「アタイもあの選択肢じゃそれが一番妥当だと思う」

「よーし、じゃあ早速野田村くんに調査開始だよ。冬美ちゃんはどう

んなぬいぐるみが好きなのか訊かなくちゃ」

「おう、任せたぞ」

私は席を立ち、野田村くんのもとへ向かおうと足を運ぶ。彼は自分の席で次の授業の予習をしていた。偉い。

「ねえねえ野田村くん、訊きたいことがあるんだけど……」

「ああ、さつき問題間違えてたよね。いいよ、教えてあげる。あれはね、保守的かつ斬新に移行するのがコツで……」

言いながら机の中から数学の教科書を取り出す野田村くん。一応聞いておくことにした。

「で、ここはああしてこうして……」

「あつ、なるほどー」

とつても分かりやく教えてくれたおかげで、私はまた一つ、弱点の克服に成功する。

「野田村くん、ありがとうーっ」

「いやいや、これくらいならまたいつでも訊きにきてよ」

ああ、なんて優しいのかしら野田村くんは。えへへ、教えてもらっっちゃったーっ。

私は嬉しい気分を抑え切れず、思わずスキップをして自分の席に向かう。着席した瞬間、タイミングよく授業開始を知らせるチャイムが教室内に響き渡った。

よーし、次も頑張ってお勉強だー！

「おい花実、目的すり替わってないか」

「……あ、しまった」

「おいおい」

まあ、次の授業が終わればお昼休みだし、その時にゆっくり聞き出せばいいよね。

頑張るぞー、おーっ。

と授業時間は省略して、ただいまお昼休みに突入したところであります。

「今度こそちゃんと聞き出せよ」
「りょうかい」

私は教科書類を全て机の中に収めた後に急いで席を立つ。野田村くんのもとへ向かおうとしたところで、

「野田村く あうあう」

椅子の脚に足を引っ掛け、どんっと転んでしまった。

「あうー、いたい……」

「大丈夫ですか花実」

私が膝を擦っているところへ、椿ちゃんが野性の猛獣をも驚かせかねない速さで私の目の前に姿を現す。忍者さんみたい。

「擦り剥いています。至急保健室へ参りましょう」

「椿ちゃん、このくらい大丈夫 きゃっ」

そして私をお姫様のように抱えた彼女は、女の子とは思えないパワフルさで教室を飛び出した。

「あーれー」

人攫い遭った気分で行される私。それから午後の授業が始まるまでの間、椿ちゃんにより過保護全快な看病をされ続けることになってしまう私であった。

心配してくれるのは嬉しいんだけど、消毒液をまるまる一本使い切るまで擦り傷を治療してくれなくてもよかったと思う。むしろ毒になっちゃわないか心配だよ。

よーし、放課後こそは！

そして放課後、委員長の号令で今日一日の授業が全て終わる。私は早速行動に移った。

「よし、野田村く」

「花実ちゃん、一緒に帰りましょう」

ホームルームが終わって間もないというのにまさかの友香ちゃん登場。どうやら彼女のクラスはホームルームがいつもより早く終わったみたいだ。

私は背中から抱きついてくる友香ちゃん存在をもとからないものだと自分に言い聞かせ、重たい彼女を引きずりつつ野田村くんのもとへ向かおうとした。

「また明日ー」

野田村くんはクラスのお友達に別れを告げ、鞆を持って教室の外へ走り出す。思えば彼はいつもさっさと帰宅するのだけど、一体どうしてそんなに急いでいるのだろう。

私が彼を追いかけようと方向転換した瞬間、

「きゃっっ」

バランスがおかしくなってしまう思わず転んでしまう。友香ちゃんがクツションになってくれなかったら私はまた怪我をしていたかもしれない。

「ていうか、友香ちゃん離してよー」

倒れたというのに起き上がろうともせず私を抱き締めてくる彼女の表情はどういうわけかとても幸せそうだった。

「あうう、また訊き出せなかった……」

「今思っただけだよ、電話で訊けばいいんじゃない？」

アカネによる今さらな提案。そういえば野田村くんの電話番号はもう知ってるんだっけ。

とりあえず解決策が見つかってほっとした私は、しばらく友香ちゃんと戯れることに時間を費やすことにする。

「友香ちゃん、遊んであげるからとりあえず起きようよ」

「私はずっとごろごろしていたいわ」

「掃除当番の人の邪魔になるから、ね？」

「しょうがないわね。続きは私の部屋でやりましょう」

「もう、友香ちゃんは甘えんぼさんなんだからー」

「……お前ら、実は愛し合ってるだろ」

アカネが私たちの友情の深さを羨ましがっている。いいでしょう。気がつけば周囲の人からアカネのものと同じような視線が私たちに注がれている。みんな、そんなに私たちの確固たる友情が羨まし

いのかな。

えへへ、私たちの関係は永遠に枯れないよつ。

「花実ちゃん、好きよ」

友香ちゃんが改まって今さらなことを言ってくる。

「私も」

友達として、当然ねつ。

夜、具体的には午後八時頃、私は野田村くんの家に電話を掛けてみた。しばらくブルブルという機械音に耳を傾けた後、ガチャンの音を合図に「もしもし」と声を掛ける。

「野田む」

『おにーちゃんっ』

あれ、何だかとても幼い女の子のような声が聞こえてきた。野田村くんの声変わりしていても丸みを帯びた優しい声とは随分違う。

『あのね、いまね、ちゃんとおるすばんしてるのよお』

「えっと……もしかして、冬美ちゃん？」

『ひゃわわっ』

途端にガタンと物をぶつけるような音が鳴った後、ドタドタと床を走るような音が聞こえてくる。どうやら兄ではない人の声に突然名前を呼ばれてびっくりした冬美ちゃんが、受話器を落としてどこかへ隠れに行ったようだ。

「って冬美ちゃん、冬美ちゃん！」

どうやら電話越しでも人見知りか働くらいしい。このまま受話器をほったらかしにされたらどうしよう。

通話料金が掛かるのでとりあえず切ることにした。野田村くんはお留守のようなので、またしばらく時間を置いてから掛けてみよう。私が自室に戻ろうと踵を返したとき、背後から聞き慣れた電子音が鳴り響く。慌てて受話器を取った。

「もしもしっ」

『あのね、ふゆみね、ちゃんとりだいあるできたよお?』

なんと、逃げ出したはずの冬美ちゃんが掛け直してきてくれた!

『おねえちゃん、こんばんはー』

そして私が誰であるかも既に特定している! これはすごい成長だよ!

「冬美ちゃん、賢いねー」

『えへー』

今すぐいい子いい子って頭をなでなでしてあげたい気分だけど、受話器越しでは無理なのでぐっと堪えることにする。

せつかくなので、例のことについて冬美ちゃんから直接尋ねてみることにした。

「ねえ冬美ちゃん、どんなぬいぐるみが好き?」

『ぬいぐるみ? えっと、おっきーのー』

「大きいなの?」

『とーっても、おっきーのー』

大きければ形は問わないらしい。

「教えてくれてありがとう。じゃあもう切るね?」

そうと分かれば今すぐにも街へ行つて大きいぬいぐるみを探し回ろう。ああ、冬美ちゃんが自分より背の高いぬいぐるみに顔を埋める姿を早く見たい……。

『やー、もつとおはなしするーっ』

可愛い……。

「もつとお話しちゃう?」

『するーっ』

この日、野田村くんが帰ってくるまで、私たちの長電話は飽きなく続いた。

土曜日、私はお家に隠してあった全てのお小遣いをお財布に入れ、アカネとともに最寄りのおもちや屋さんまで来ていた。入口から見ただけで大量のおもちやが棚を賑わせている

「花実、金は大丈夫か。でかいぬいぐるみって意外と高いんだぞ」
幽霊少女を含めると二人である。

「どうしてアカネみたいなおもちやよりもバイクを愛してそうな人がぬいぐるみの値段知ってるの」

「どうでもいいだろ。ほら、ぬいぐるみのコーナーはあっちだつてさ」

店内の案内図を見てその方向を指差すアカネ。私はさっさと行ってしまふ彼女の後を追いかけていった。

ぬいぐるみコーナー。それはその名の通り、たくさんのぬいぐるみたちで埋め尽くされた世界を言う。私は今、棚に並ぶさまざまにぬいぐるみに魅了されていた。

可愛いのがいくつもあるよ、夢の国みたいだよ。

「さて、でかいやつでかいやつと……」

アカネが店内をどんどん突き進んでいく。私も大きいぬいぐるみを探さないと。

「えーっと、どこかなー」

「桜田さん、何探してるの？」

「大きなぬいぐるみだよー」

「奇遇だね、僕もそういうの探してたんだ」

「じゃあ一緒に探そうよ……っつわあ野田村くんだった！」

いつの間にか私の背後には野田村くんが立っていた。驚きの余りつい大声を出してしまう。まさかここに彼が現れるなんて思ってもみなかった。

「野田村くん、どうしてこんなところにいるの？」

「明日は冬美の誕生日なんだ。だから僕も大きなぬいぐるみを探してたんだけど、すごい偶然だね」

実はあまり偶然でなかったりするのだけど、サプライズのために

黙っておこう。

「ねえ野田村くん、せっかく会ったんだしさ、一緒に探して回ろうよ」

「僕もそうしたいと思ってたんだ。じゃあ、行く？」

「うんっ」

えへへ、なんか嬉しいや。

「……おい花実、あんまりいちゃいちゃしゃがると呪うぞこら」
背後からアカネの声。気にしないことにする。

しばらくの間、私たちは店内を歩き続けた。熊さんや、キリンさん、パンダさんやあざらしさんと、可愛いものがいくつもあって迷ってしまう。

「ところで野田村くん、冬美ちゃんはどんな動物が好きなの？」

「パンダだよ。模様が好きなんだってさ……あ、いいの見つけた」

喋っている途中で、野田村くんの視線があるものへと向けられる。私も彼の視線を追ってそれを見つけた。

「全長一メートルを超えるジャイアントパンダのぬいぐるみ、税込
みで四万円か……」

「あう、高いね……」

まさかビッグサイズなぬいぐるみがこんなに値の張るものだったなんて……私のお財布には全財産の一万二千五百円しか入っていないというのに。

「よし、買いだね」

「ただ野田村くんはそんなぬいぐるみを手に持って即決した。四万円をぽんと出すなんて少し信じられない。」

「お金大丈夫なの？」

「明日のためにバイトしてたからね。これくらい余裕だよ」

だから最近放課後になるとすぐに教室を飛び出してたんだね。

私はそれほど高い物には手が出ないので、隣に置いてあった半分くらいの大きさのぬいぐるみを買うことにする。こっちは僅か五千円だけど、大切なのは値段じゃないからね！

それから二人でレジに行き、ぬいぐるみをプレゼント用に包装してもらって、この日のお買い物は終了した。

お店を出てすぐ、大きな箱を抱えた野田村くんが小さな箱を抱える私に何か尋ねてくる。

「ひよっとして、桜田さんも誰かにプレゼント？」

「うんっ。えへへ、喜んでくれるかなあ」

「きつと喜んでくれるよ」

街路を進んでいく中、にっこり爽やかに笑い合う高校生男女。今思えば私はものすごく青春しているのではないだろうか。背後からどこかの幽霊さんが全力で殺気を放ちまくりたくなるくらいに。

「きやはははっ」

冬美ちゃんと同年くらい小さな女の子が走って私たちの近くを横切っていく。

その姿にある女の子の姿を重ね、ぴかんと閃いた。

「ねえねえ野田村くん、今日もお家に遊びに行ってもいい？ 今度こそ冬美ちゃんと遊びたいの」

前回はアカネがずっと私の身体を乗っ取っていたから冬美ちゃんを可愛がるのが一切できなかった。早くあの日のリベンジしたい。「来てくれると助かるよ。冬美、僕が家にいる時は遊んで遊んでつてせがむんだ」

ああん、私にもせがんでほしいっ。きつと冬美ちゃんが床に就くまで遊び続けちゃっよ！

「……おい、花実」

アカネが私に話しかけてくる。ふーんだ、今度は身体貸してあげないもんねっ。

「さつき走ってったあの女の子、ちょっと危ないんじゃないか？」

「あっ？」

言いながら彼女が指差す先、横断歩道に向かってぱたぱたと駆けていく女の子。

「いや、マジでやばいぞー！」

そしてどこからか、ブオンブオンと暴走族の人が好むバイクのよ
うなエンジン音が鳴り響いてくる。

やがて音の主は赤信号の車道から青信号の横断歩道へ向かって飛
び出してきた。猛スピードのオートバイ。

びっくりしたのか、女の子はそのバイクに視線を向けて立ち止ま
ってしまう。

「危ない」

横断歩道の、真ん中で。

瞬間、鈍器で打たれるような強い衝撃が私の頭を襲った。頭が割
れてしまうようなこの感じ、頭痛かな……いや、それとは別の、痺
れるような何か。心に直接響いてくるような、誰かの激しい訴え
みたいなものが、脳から電流のように全身を駆け巡っている。

どくん、と大きくひと鳴りした心臓の鼓動は徐々に速さを増して
いき、

「間に合えっ」

いつしかあたしは、駆け出していた。

二十七、幽霊少女アカネ5（後書き）

まだまだつづく！

二十八、幽霊少女アカネ6（前書き）

「花実の日記」

二十八、幽霊少女アカネ6

あたしは横断歩道の真ん中、今まさにバイクが突っ込んでこようとしているところへ立ち、構え、それを横一線に薙ぎ払った。

いつの間にか右手に持っていた木刀は見事に鉄の塊を粉碎し、破片と化したバイクとそれを運転していた人は綺麗に孤を描いて歩道へ放り出される。

横断歩道の青信号が、やがて点滅を始めた。

「やばっ」

あたしは急いでぼーっと立ち尽くしている女の子を脇に抱え、一気に向こう側の歩道目掛けて走り出す。

横断歩道を渡り切ったところで、あたしは一度大きく溜め息を吐いた。

「ふうー、これでひと安心」

気づけば、女の子はあたしのことをぼーっと見上げてぼかんと口を開けている。その可愛らしい女の子の頭にぼんと手を置いて、あたしは「めっ」と叱った。

「さつきみたいに信号無視をするバイクもいるからね。信号が青になっても、右と左をよく確認しなきゃ駄目だよ？」

すると女の子はにっこり笑顔を作り、大きく頷いてくれる。

「うんっ。ありがと、あかいかみのおねーちゃんっ」

そう言っただけ彼女はあたしにばいばいと手を振り、またさっきのように慌ただしく駆け出していく。本当に分かってくれたのかなー。

……あれ、あたし今、赤い髪のお姉ちゃんって呼ばれた？

「っつて、うわわわっ」

気づくと、あたしの髪は腰に掛かるほど長くなっていた。そして微妙に赤みがかっている。

おかしくなっているのは髪だけではなかった。服装も、どういうわけかどこかの学校のセーラー服になっていて、スカートは地面に

届きそうなほど長く伸びている。

髪型も服装も、まるでアカネみたいな感じになって

『だったら君も自分の身体に入ってみたら？ 合体できるよ』

『合体って、本当にそんなことできるの？』

『二人の心を一つにしなきゃできないけどね』

春平くんの言っていたことを思い出す。

どうやらあたしたちは無事に合体できてしまったようだ。女の子を助けたいという気持ちがいびいたり一つになったからできたのだらう。

それにしても、まさか合体ってのがこんな状態になることだとは夢にも思わなかった。

「あ、そうだ」

ふと、あたしは後頭部の上辺にぺたぺたと手を当ててみる。

「ふう、よかった」

総髪は解けていないようだ。右手には木刀があるし、腰に当ててみると本物の侍みたい。えへへ。

「桜田さん、大丈夫だったー？」

横断歩道の向こう側から大きな箱を抱えている春平くんの声。あたしは彼の方に視線を向けて叫んだ。

「大丈夫だよー」

しばらく待つと信号の色が赤から青へと変わる。あたしは白とアスファルトの縞々を渡って春平くんのもとへ行くと、彼は少しだけ目を見開いた。

「合体、成功したんだね」

「うんつ。残念なことに身長は変わってないみたいだけど」

相変わらず、顔を上げないと春平くんと目を合わせられない。アカネはもつと長身だったはずなのに。

「……ねえ春平くん」

一つだけ不安に思うことがあるので、あたしは目の前のいろいろ詳しくそうな彼に質問してみる。

「どつやったらもとに戻れるの？」

「合体に必要なのは利害の一致だけだから、目的が済めば勝手に戻るはずだけど……」

目的というと、あの暴走バイクから女の子を救い出すことだろうか。あたしはふと、視界の隅で粉々になっているバイクの欠片と気絶している運転手さんに目を向ける。

そういえばこれ、あたしが壊したんだっけ。すごいなー、合体するとこんな怪力が手に入るんだね。

それにこの木刀はアカネが握り締めていたものに似ている。バイクを粉々にしてもへし折れるどころか傷一つしていないところを見るとかなり頑丈らしい。

「ところで桜田さん」

春平くんが話し掛けてきた。

「なあに？」

「君が買ったぬいぐるみは、どこ行っただの？」

「……あ」

思えば、女の子を助けに行くのに夢中でどこかに放り捨てたような気がする。あたしはきよきよと辺りを見回し、そして、

「こんなところに……」

気絶している暴走バイクの運転手さんの背中に潰されているそれを見つけた。急いでぐしゃぐしゃになつた箱を引っっこ抜く。

しわくちゃにな包装紙を剥ぎ、中身を確認した。

「あちゃー」

ぬいぐるみは砂が付き、布が裂けて綿が飛び出し、目玉となっていた固いプラスチックは取れかかっている、見るも無残な姿へと変容していた。

「僕のと交換する？」

「だめ、そんな高価なもの貰えないよ」

春平くんの優しさには甚だ尊敬せすにはいられないけど、四万円もした巨大なぬいぐるみをただで受け取ることはさすがにできない。

「これくらい直せるから。あたし、実はお裁縫得意なんだよ?」

「本当? それならいいんだけど」

「任せてっ」

波縫いくらいなら余裕だもん。

「急いで直さなきゃだから、あたしはもう帰るね。冬美ちゃんに会えなくて残念だけど」

「明日は冬美の誕生パーティーやるから、よかつたら桜田さんも来てよ。プレゼントなんて用意しなくていいからさ」

用意していたそのプレゼントは、ただ今あたしの手の中で無残な姿となっているからね。

「うん、じゃあ楽しみにしてる。冬美ちゃんによろしく言っというて!」

「了解。気をつけて帰ってね」

あたしはパンダさんの残骸を抱えて春平くんを背を向け、軽い足取りかつ自動車に匹敵するかしないかくらいのあり得ないスピードで駆け出した。

しばらくして公園に辿り着いたあたしは、

「波縫いだけでぬいぐるみ直せたらミシンなんて発明されてないよーっ」

ベンチに腰掛けて思いつきり頭を抱えていた。ちなみにあたしは波縫いできても玉留めや玉結びなんてできません。

「どっしょー……あ」

悩みに悩んでいるところで、あたしは唐突に何かを思い出す。

今まさに頭の中を流れたこの映像は何だろう　自分に問い掛け、その答えはすぐさま返ってきた。

畳の部屋の隅っこにお仏壇がある。黒光りするその中心には二枚の写真が飾られていて、どことなく寂しい雰囲気漂っていた。そしてその二枚のうち一枚には、既に見知った女性の顔が収まっている。

きつと、アカネの遺影。

隣に飾られているもう一枚には、つぶらな瞳を輝かせる、冬美ちゃんくらいに小さな女の子の姿。

アカネの妹。

「……アカネは、その妹にあげるはずだった熊のぬいぐるみを、冬美ちゃんにあげてって言ってるんだね」

あたしは立ち上がり、ある場所を目指して歩き始めた。
アカネの家へ。

とりあえずパンダさんを自宅に置いたあたしがアカネの記憶を頼りに電車を乗り継ぎ、そして到着したのは三駅先の、あたしの地元より少し田舎なところ。道と田んぼばかりが見えている。

アカネからすれば懐かしい土地の上をまず一步だけ踏みしめる。総髪に揺れる長い髪が風になびいた。

十分ほど歩いてあたしの足はふと動きを止める。どうやらアカネの家の前に着いたらしく、そこには一軒の木造住宅があった。

何だか昔ながらって感じがする古い家。

「すー、はー、すー、はー」

あたしは十分に深呼吸を済ませ、意を決し、インターホンへと人差し指を伸ばす。

ピンポーンの音が聞こえた後、

『はい、どなたでしょう』

女性の声がスピーカーから聞こえてきた。あたしは慌てて答える。

「あの、あたし、アカネの友達の者ですが」

『少々お待ちください』

それから間もなくして玄関の扉がガラリと開かれ、見た目年齢が私のママと同じくらいの女性が中から現われた。彼女は間近まで歩み寄ってきたかと思えば、あたしの姿を見て少しだけ目を見開かせ

る。

「あらまあ」

何となくおっとりした感じの人。

「ひよっとして、アカネに憧れてそんな格好を？」

そういえば今、あたしはアカネと全く変わらない服装をしているんだっけ。違うのは髪形と身長くらいなものだろう。

説明するのも面倒くさいので、とりあえずあたしは頷いておくことにした。

「あたし、アカネに憧れてましたっ」

「あの子は頼りがあるから、そういう子がいても不思議じゃないわねえ」

嬉しそうに、そしてどこか懐かしがっているような目線。

「えっと、アカネのママさんですか？」

「そうよ。ところであなたのお名前は？」

名前……そういえば、今のあたしは花実でありアカネなのだ。合
体している場合どちらか一方を名乗るのはおかしい気がする。

なので、あたしは自分に名前をつけてみた。

「侍ウーマンです」

えへへ。

「あら、外人さんだったの。日本語お上手ねえ」

変な誤解をされてしまったけど、まあいっか。

「じゃあウーちゃん、早速お家に戻ってちょうだい。アカネと、
ついででいいから、あの子の妹のアイにもお線香を焚いてあげて」

仏壇の前に立って初めて、アカネは本当に死んだんだということ
を思い知らされる。今まではアカネの存在が生きている人と変わり
なくそばにあっただけに、何とも言えない不思議な感覚。

そこに飾られてあるのは二枚の写真。一枚はアカネで、もう一枚
はアイちゃんというらしい小さな女の子が写っている。

「アカネが亡くなったこと、知ったのは最近？」

アカネママは瞳を少しだけ滲ませていて、声も震えていた。

「そうだ、もう一つお願いしていいかしら」

そう言って立ち上がると、アカネママは近くにあったタンスからある物を取り出して、それをあたしに見せる。

「この熊のぬいぐるみ、アカネがアオイの誕生日プレゼントのために買ったものよ。これをあなたに受け取ってほしいの」

手渡されたそれは、持ち歩くにはかなり大きくて……春平くんが冬美ちゃんのために買ったパンダのぬいぐるみと、ほとんど同じくらいの大ささだった。

「どうしてかしら、あなたにはこれを受け取ってもらいたいの」

「でも、これって高価なものなんじゃ……」

確か春平くんが買った物でも四万円はした。同じサイズのこの熊のぬいぐるみも、きつと同じくらい値が張ったはず。

これを貰いたくてここに来たわけだけど、まさかこんなに大きな物だったなんて。

「お願い」

おっとりしながらも、アカネママは意外と強情だった。

結局一メートル以上はある熊のぬいぐるみを受け取り、あたしはアカネの家を出て行った。門の前に立ってあたしに手を振るアカネママの姿が見えなくなった頃、唐突に、持っていた木刀が消滅する。セーラー服もどんどん消えていき、その下からはもともと着ていたお洋服が顔を出した。

「あうっ」

「ぷはあっ」

合体が解けてしまったようだ。

「でかしたぞ花実。これで冬美の誕生日プレゼントはバッチリだな」
につこり爽やかに笑い掛けてくるアカネ。とても嬉しそうな笑みを向けてくる彼女に対して、どういっわけか胸の奥でもやもやを感じた。

「……やだ」

私の一言で、アカネの眉間に少しだけしわが集まってくる。

「これは私が貰ったんだもん。私の物なの」

「なっ、てめえ！」

これはアカネママがアカネやアオイのことを思って私に託したものの。勝手に他人に譲っていい物じゃない。

大切な物なんだ。

「お前、冬美が可愛くないのかよ！」

「可愛いよ。お誕生日プレゼントあげたいよ。でもこれは私が貰ったんだから、私の物なのっ」

私はぎゅっと胸にある熊さんを抱き締める。アカネの怒った顔が、怒鳴り声がいつも以上に怖くて、思わず泣いてしまいたいようになった。

「……見損なつたよ」

怒りや失望のようなものがたくさん詰まった声でその一言を吐き捨てて、アカネは上空へとふわふわ飛んでいき、私の前から姿を消してしまう。

「あっ」

これは私が貰ったんだ。

誰にも、あげちゃいけないんだ。

「……見損なつたよ」

その言葉が何度も頭の中でこだまする。

「分かんずや」

アカネなんか、もう知らないっ。

二十八、幽霊少女アカネ6（後書き）

つづく

二十九、幽霊少女アカネ7（前書き）

「花実の日記」

アカネとけんかしてしまいました。

アカネってば酷いんだよ、私に酷いこと言っただよ！
もう知らないんだからっ。

二十九、幽霊少女アカネ7

がたんごとの音とともに微かな揺れを感じる電車の中で、私は大きな熊のぬいぐるみを抱えて俯いていた。

アカネのことばかりが頭に思い浮かぶ。

「あつ……」

やっぱりの熊のぬいぐるみ、冬実ちゃんにあげた方がいいのかな……でもアカネママはそんなことのためにこれを託してくれたわけじゃない。

これは私が大事に持っていないといけないんだ。

ぬいぐるみを抱き締める腕にぎゅっと力を入れる。同時に電車が停車を始め、しばらくして出入り口の扉が開かれた。

「ふおつふおつふお」

外のプラットフォームから乗り込んでくるおじいさん。

「……あつ」

あのおじいさんは確か、夏休みに野田村くんとお出かけした時に偶然出会った人だ。しわくちゃんな笑顔がチャームポイントである。

「おや、こないだのお嬢ちゃんかえ」

「お久しぶりですー」

おじいさんは私の隣に「よいこらせ」と腰掛けて、笑顔を携え私に話し掛けてくれる。それから電車の扉が閉ざされ、やがて車体はガタンゴトンと音を立てて走り始めた。

「こないだの彼氏さんはどうした」

「えへへ、野田村くんは彼氏じゃないですよあ」

落ち込んでいた気分が、少しだけ紛れていく気がした。

今だけは、アカネのことを忘れていられそうだ。

「こんな可愛い女の子を手元に置いとかないなんて、奴もどうかしとるのう」

べた褒めだった。

「ところでお嬢ちゃんは」

途端におじいさんの声色が変わって、目つきにちよつとした真剣さが帯びてくる。変な緊張感が全身を駆け巡るような感覚。

「昔、この地方で流行った侍の伝説について、知っておるかの？」

「侍の……」

侍マン様の姿が頭を過ぎる。

「ワシがまだお嬢ちゃんくらい頃に、侍は突然現れたんじゃ。侍は困っている人のもとに現れて、人助けをしていったんじゃ」

「困っている人のもとに……」

今年の春、私が西木と後藤に絡まれてたところへ、侍マン様は颯爽と現れた。噂によればそれから幾度となく困っている人のもとに現れて、しっかりとした手の平を差し伸べている。

侍マン様はそんな昔にも現われたとでも言うの？

「私も、そんな人になりたい」

気がつけば私はそう呟いていた。

テレビの時代劇で活躍している徳田新三郎様、そして新三郎様のように現実で頑張っている侍マン様。私は心優しいその二人に憧れて侍を目指しているんだ。

人のために思える人になりたいのなら、そういう人でありたいのなら、私はこのぬいぐるみを手離すべきなのかもしれない。でもそんなことすれば、アカネのことを思ってこれを私に託したアカネママの気持ちを踏みにじることになってしまう。

どうすればいいのか分からない。

「私は、そんな人になれないのかな……」

「もうなってるんじゃないかの」

おじいさんの固い手が、私の頭にぼんと置かれる。

「何か迷っているようじゃがの、やれば何とかなるもんじゃよ」

わしゃわしゃと、毎朝頑張って綺麗に整えている私の髪がおじいさんによって乱されていく。ちよつと痛かったけど、なんとなく暖かくて、侍マン様になでられているような感覚。

「頑張れ」

いつしか電車は速度を抑え、やがて次の駅に停車する。

「またいつかの」

そう言っただけで席を離れていくおじいさんを眺めながら、何かをつかんだような気がしていた。

帰宅した私は自室にて、

「えっと、おさいほーどーぐはーっと」

それを探していた。

確か家庭科で使った後で引き出しに片づけたはず……なのだけどもなかなかお目当てのものが見つからない。

早くしないと。冬美ちゃんのお誕生日は明日なんだから。

「見つけ」

私は奥の方に放置されていたそれを取り出す。早速つぶれてしまったパンダさんの修理に取り掛かりましょう。

まずは玉結びのやり方を勉強しよう。確か小学生の頃の家庭科の教科書に載ってたっけ……教科書、どこに行ったのかな。

数十分後、私はようやく作業を始めることができた。小学生の頃はとっても難しいって思ってたけど、今やってみると大したことないね、玉結びなんて。

「さあ、オペを開始するーっ」

まずはすっかり裂けて中の綿が露となっている背中から。

「波縫いなみなみー」

しばらくして、背中を買った時と同様にとっても綺麗な姿へと大変身。きつとこのパンダさんも喜んでるに違いない。

さて、早いところ玉留めして千切れかかっている右腕の治療に努めなきゃ。

「えっと、玉留めのやり方はー……」

「お前、教科書なんか見なくなつてそれぐらい普通にできるだろ。女として」

「あう……だつてっ」

「だつてもへチマもない。ちょいとアタイに任せてみな」

「だめー、アカネの手なんか借りたくないもんっ……っつわあアカネだっ！」

「お前それわざとだろ」

私は正直に驚いたよ。

それにしてもアカネはどうして私のもとまで帰ってきたのだろう。ひよつとして悪口言うためだつたりして。

「もう、アカネが何の用？ 私のこと見損なつたんでしょっ」

悪口を言われるのは嫌なので、ツンツンした態度でアカネを追い返すことにする。アカネなんてべろべろばーだつ。

「あれはさ、ほら……お前がそんなことしようとしてたなんて夢にも思わなくつてさ」

そう言いながら私の手元を指差すアカネ。ピンと立てられた人差し指の先には、白と黒の二色を彩つたボロボロのパンダさん。

「その見るも無残なパンダの治療、アタイにもやらせてくれ」

真剣な眼差しを私に向けるアカネ。

「アカネ……」

危うく手懐けられそうになつたところで、私はアカネに言われたあの言葉を思い出した。

『……見損なつたよ』

むかつ。

「ぷい」

「おい、わざとらしく声に出してそっぽ向いてんじゃねえ」

アカネの手なんか絶対に借りたくない。

私は怒っているんだからね。

「アカネのせいで、どれだけ私が苦しんだと思ってるのっ」

「花実……」

あんなに苦しい思いをしたのは幼稚園の頃に椿ちゃんに嫌いと言われた時以来だ。

「なんかきもいぞ」

「あう？」

なんかアカネの反応が思ってたのと違う。予定では「どれだけ苦しんだと思ってるのっ」「花実……すまない。アタイはお前を見直したよ。あの時はあんなこと言ってごめん……こんなアタイを許してくれーっ」「もう、仕方ないなあ。じゃあ今回だけは許してあげるっ」「こんな感じで話がまとまるはずだったのに、まさか侮辱の言葉を投げつけられるとは。

「でもさ」

悪口魔人アカネが話を続ける。

「少し、いやものすごく見直したぞ」

途端に、心の奥底からもややもやしたものがふわあと消え去っていく、顔の神経や筋肉は一定の働きしか起こせなくなっていた。

「えへへー」

満面の笑みつて、今の私の表情を見事に表現した言葉だと思う。

「だが裁縫の腕はだめだめだな。大体何だそのパンダの背中に施した荒療治は。そんなんじや抱き締めた瞬間に傷がどばあと開いて出綿多量でご逝去しちまうだろうが。やっぱお前はばかでちびだな。さっきの『見直した』は却下で夜露死苦」

「あうーっ！」

今の私の表情を見事に表現できてしまうのはほっぺを膨らませたフグだと思う。

アカネの助けもあって、パンダさんの緊急手術は無事に成功した。……途中からアカネに身体を貸して半分以上やってもらったのだけだ。

「アカネ、お裁縫上手だね。習ってたりしたの？」

「いんや、アタイの妹もぬいぐるみが好きでな。よく壊れちまったそれをアタイが直してたんだ」

「へー」

おかげでぬいぐるみも自作できるようになったらしい。アカネのくせにすごいなあ。

「さて、後は綿と仕上げだけだな」

「あれ、完成したんじゃないの？」

私の身体に入っているアカネは今、その手にすっかり元通りとなつたパンダさんのぬいぐるみを持っている。

「こいつの綿がいくらなくなつててさ、新しい綿を買って詰め込まないとだめなんだよ」

「ふえー」

「あと、こいつところどころ砂ついてんだろ。洗ってやらねーとな」

「ふえー」

「お前冗談抜きでばかっばいぞ」

そして再び街中に参上！

ちなみに既に夕方な現在、急がないとお店が閉まってしまうというところで、あたしとアカネは再度合体していた。合体するとあらゆる身体能力が向上するらしく、あたしはオリンピックピク選手も顎を外してしまつほどの速さでここに到着できたのである。

「綿は確かいつものアクセサリーショップで売ってたっけ……あそこって結構何でもあるんだよねー」

ふと思つたけど、今この身体を動かしている精神は間違いなく花実だよ。だつてアカネはこんな子供っぽい思考しないもん。って誰が子供っぽいのよーっ！

そんな感じで自分をばかにする自分にぶんすか怒っていると、いつの間にかおしゃれな外装のアクセサリーショップの前に辿りつく。

そして扉をカランコロン。

「こんにちはー、綿くださーい」

「はいはーい、綿ですなー」

私がお願いとすると、話の分かる店員さんがさっさと目的のそれを持ってきてくれる。仕事が早いっ、さっすがー。

ちゃっちゃとお会計を済ませて再びカランコロン、お店を出ていくあたし。

「あれ、桜田アカネさん、奇遇だね」

その矢先にばったり出会うは、アカネが愛して止まない一人の男の子。

「春平くん、やつほ。また会ったねー」

彼の手には長ネギがはみ出した買物袋がある。おつかいの帰りかな。

「ねえねえ、あたしのことは侍ウーマンって呼んでよ。『桜田アカネさん』なんて呼び方めんどくさいでしょ」

「分かったよ。じゃあ略してウーさんって呼ぶね」

もしかしてその呼び方は流行していたりするのだろうか。

「じゃあウーさん、僕はもう行くよ」

「うん。あたしも急がなきゃ」

あたしたちはそれぞれ方向転換し、自分の帰路に就こうと歩き始める。

足を踏み出そうとしたところで、

「あ、そうだ」

春平くんの声に思わず立ち止まった。

「ウーさん、明日は無理しないでいいからね？」

壊れてしまったためいぐるみのことを心配してくれているのだろうか。

気遣ってくれた春平くんを前に、あたしは思わず微笑んでしまう。

「うん。ありがとー」

そうやって笑い合い、再び自分の家に向かってそれぞれ歩き出す。

あたしの中で息づくアカネの心が、ほんわりと暖かくなった気がした。

二十九、幽霊少女アカネ7（後書き）

次回は幽霊少女アカネ最終回！

三十、幽霊少女アカネ8（前書き）

「花実の日記」

アカネと仲直りできてよかったよー。仲違いしたままだったらいつかの野田村くんと海原くんみたいな関係になっちゃいますからね、よかったよかったです！

三十、幽霊少女アカネ 8

いよいよやって来た冬美ちゃんのお誕生日。いざ行かん野田村家へ！

意気込んで自宅から出発した私は、アカネと並んで街路をてくてくと突き進んでいく。私の胸には箱や包装紙が壊されてしまったために可愛いリボンを括りつけることでプレゼントっぽい雰囲気を出（誤魔化）したパンダのぬいぐるみが抱えられている。

「なあ花実、ちよつと図々しい頼みがあんだけど……」

アカネに話し掛けられたので、私は立ち止まって彼女の声に耳を傾けることにした。

たまに一心同体となっているから分かる。アカネがこのタイミングで私に一番望みそうなことくらい。

「その頼みつてのがな、その……」

言わなくても分かる。でも遠慮してなかなか言い出せなくてもじもじしているアカネの様子が可愛いので、私はしばらくそんな彼女を眺めていることにした。

「あのなら、頼みつてのはっ」

アカネの頼み……彼女はかつて、アオイという実妹への誕生日プレゼントを渡しそびれて亡くなった。アカネが幽霊としてこの世に留まっているということは、その未練を払拭したいがため。

つまり、私の身体を借り、自らの手で冬美ちゃんにぬいぐるみをプレゼントすることがアカネの頼みなのだ！

「お前の身体を借りて、春平に唇にキスさせてほしいんだっ！」

「あちゃー予想大外れだ！」

「ってそんなののために決まってるでしょおっ！」

アカネは未練より青春を選んでしまった！もしかしたら青春時代を過ごせなかったことが一番の未練なのかもしれない。

そんなことよりも、アカネのせいで大声を出す羽目になった私が

周囲の通行人から奇異なもの（アカネ）へ向けるべき眼差しで見つめられることになってしまった。

「なあ頼むよ、アタイは春平とたくさんいちゃいちゃした末にキスすりゃ成仏できるんだよー」

「どんなことがあってもアカネには身体を貸してはいけない気がしてきた。」

「もう、そんなこと言っただけなものはだめだよ」

「んだよ、ったく……」

アカネがふてくされてしまう。理不尽な怒り方だ。

べ、別に私は野田村くとちゅーしたくないってわけじゃないんだよ？ 野田村くんは優しいから、アカネが成仏するためにキスしたって言えば簡単にさせてくれるだろうけど、だからってその優しさにつけ込むのはよくないと思うの。

「きゃーひったくりよー！」

そう、そんな野田村くんの気持ちを無視してちゅーするなんて行為はまるでキスのひったくり……え、ひったくり？

「おい花実、合体するぞ」

合点だ！

次の瞬間、私の内側から全身にかけて力が漲り始める。左手にはパンダのぬいぐるみ、右手にはいつの間にか木刀を携え、髪は赤みがかったかと思うと一気に伸びていく。

そして服装はかの有名なスケバンファッション、『セーラー服にロングスカート』と様変わり。

あたしたち、合体完了。侍ウーマン見参！

「ひったくりはどこーっ」

あたしは被害者の声がした方向へと顔を向け、地べたに尻もちをついている女性を発見する。女子高生くらいの彼女は、おそらくひったくり犯が逃げて行ったであろう方向を指差して発狂気味に何か叫んでいた。

「あっちだね」

そうと分かれば早速追跡だ。あたしは足に思いつ切り踏ん張らせ、一瞬間ほど力を溜め込んだ後、

「待てーっ」

車道へ飛び出し、数々の車の脇を駆け抜けていく。

速い速い。新幹線から見える景色なんかよりもあたしは素早く流れていく。

「あははははは、あたしを抜けるものなら抜いてみるお！」

運動をしてテンションが上がったせいか、段々とアカネの性格が表出し始めた。侍ウーマンは興奮すると乱暴になるらしい。

しばらく走ってみれば少し先に明らかかなスピード違反をぶつかましている左ハンドルのオープンカーを発見。まずは堂々と盗んだ鞆を漁って下品な笑みをこぼしている助手席の野郎に正義の木刀をお見舞いしてやるう。

しかしいきなり乗り込んでいくと驚いた運転席の野郎が急ブレーキを踏んで事故を起こしてしまう可能性がある。ぶちのめす前に車ごとひと気のないところへ運ぶ必要があるな。

作戦は決まった。あたしはオープンカーの隣まで追いつくと、車の底に手の平を入れて一気に持ち上げる。ってうわ、マジで持ち上がった！

「ひいいっ」

運転席の奴が悲鳴を上げた。あたしはといえば片手で車を軽々と持ち上げることができちゃったことにかんりのショックを受けてしまっ。

やべえ、もしこんなところ春平くんに見つかりでもしたら怪力女として嫌われちゃうよ……。

「急いで片づけっか」

あたしは近くでそびえ立っていたビルの側面に向かって思いつ切りジャンプする。それから壁を走ること数秒間、何かと広い屋上まで辿り着いたあたしはそこに車を放り捨てた。

車と野郎どもはぐしゃっと音を立てて見るも無残な姿へと変形し

てしまう。こいつら根性が足りん。

「おいお前らあ」

ひっくり返った車からのそのそ逃げ出そうとするひったくり犯二人組に声を掛けると、奴らはびくつと肩を大きく震わせて驚きやがる。

「へっ、無様だな。さあ盗んだもん返せ」

威嚇の意味を込めて、言うことを言った直後に木刀で屋上の床を砕くあたし。

「ひいいっ」

恐れをなして腰抜かす大のクズ野郎二人組。かつはっは、野郎を圧倒するつてのは実に愉快だ。

いいな、悪党退治つて。もつともつと悪い奴懲らしめてえ。あたしは悪党の一人から盗まれた鞆を取り上げながら自分の力の強大さに酔いしれていく。

おっと、調子に乗っちゃいけねえな。侍は向上心つてのが大切なんだ。あたしはまだまだ、うん。

「じゃあな、クズども。あたしは心が広いから今回のところは許してやる。次やつたら……」

脅しの意味を込め、言うことを言いかけてから気合いだけでオーブンカーだった物の瓦礫を吹き飛ばすあたし。

「またぶっ転ばすからなっ」

「ひいいっ！」

最後にあたしはビルの屋上から身を乗り出し、雑踏荒れる地表へと飛び立った。

地上数十メートルから落下しつつ、興奮していたあたしの気持ちが段々と落ち着いていくのが分かる。

見事に着地した時、あたしはさっきまでの自分の乱暴な言葉遣いに絶望した。

こんな乱暴な女の子、女の子じゃない。野蛮人だ。あたしは侍でも侍ウーマンでもない、ただの野蛮人だったんだ！

「うあ、うああ……シヨックだよお」

あたしは思いつ切り肩を落としながら、鞆の持ち主である女の子のもとへとぼとぼと向かっていく。

「花実、お前アタイのこと野蛮人だと思ってたのか」

「侍マン様や新三郎様はもっと凜々しいもん。アカネみたいに乱暴じゃないもん」

「んだとこいつめーっ」

目的を達して合体が解けた私は、さっきの騒ぎでパンダのぬいぐるみに汚れが付かなかったかを丁寧に確認しながら、休憩がてら近くの公園のベンチで一休みしていた。

それにしても、さっきは実にいいことをしたな！。鞆を取られた女の子からかなりお礼を言われてしまった。

噂では侍マン様も日々こうやって人助けをして回っていると聞く。きつとさっきの私たちみたい頑張っているのだろう。

アカネと一緒にいれば立派な侍になれるかもしれない。

「ねえね、アカネ」

「あん？」

「ずっと私のそばにいてよ。あなたと一緒になら、私は立派な侍になれるの！」

目標が達成できる。そんな考えから私の声は少し興奮気味になってしまった。

「だけど、」

「やなこった。べー」

冷たい態度で私を突き放し、思いつ切り舌を出してあっかんべーしてくる。むかつときたっ。

「大体、他人の手がなきゃ立派になれねえのかよお前は」

「あうっ」

痛いところを突かれてしまい、私の怒りは途端にふにゃふにゃと意気消沈していく。

「侍だか何だか知らねえけどな、そんなんで立派になれると思うなよ！」

「あつごもつともです！」

まさかアカネなんかに一喝入れられるなんて思いもしなかった。まあ二つ返事で協力してくれるとも思っではいなかったけど。

「そろそろ行くぞ。冬美にサプライズプレゼントするんだろ」

「分かってるもん。れつごー」

私はベンチから立ち上がり、野田村くんたちの待つマンションへ向かって歩き出す。

遊具目掛けて走り抜けていく子供たちを一瞥しつつ、パンダを抱き締める腕に力を込めながら公園を抜け出たところで、

「おい、あっちの方で拳銃を持った銀行強盗が出たってよ。何でも人質がいて警察は手が出せない状態らしいぞ！」

「見に行こうぜ！」

どこかの銀行目掛けて走り抜けていく男の人たちが目に映った。銀行強盗、そしてどうやら膠着状態。

「花実」

「うん、私たちも見に行こ」

さっきこの道を通った時はこんなに騒がしくなかったはずだけど、いつの間にか桜花銀行の前にはいくつかのパトカーが散らかっていた。

「警部、犯人の一人は逃走用の車を出せと言っていますが」

「うーむ、とりあえず用意しろ。人質の安全が最優先だ、早まった行動は起こすなよ」

警部さんと刑事さんらしき人が話しているのをこっそりと聞く私とアカネ。

「アカネ、早まっちゃだめだよ」

「何だよ。合体すりゃ拳銃なんか怖くねえぞ」

「人質さんに当たったらどうするのっ」

さすがにこれだけの大事件、超絶パワーを誇る侍ウーマンにも出る幕はなさそうだ。

だけど高確率で事件を解決に導けるだけの力があることは事実。このまま指をくわえてことが収まるのを待つか、一か八か侍ウーマンになって突入するか。

「いいこと考えたぞ」

アカネがにやりと笑って私に言う。

「発砲させる前に倒せばいいんだよ。アタイらのスピードならできるさ」

「あっ……」

このまま手をこまねいていいわけではない。だって人質さんを助けられるかもしれない力を私たちは持っているんだから。

でも万が一発砲されて、私たちが防げたとしても、

「流れ弾が人質さんに当たっちゃったらどうするの。死んじゃうかもしれないんだよ」

そんなことになってしまったら一大事では済まない。私たちが早まらなければ全員無事だった……そんな後悔をすることになるかもしれない。

「そうだけどさ……」

私たち素人が手を出していいことじゃない。プロの人、刑事さんたちに任せた方がいいんだ。

「でもさ、悔しくないか？」

アカネに問われて、胸の内で微かに怒りの炎が燃えていることに気づく私。

どんな理由があるのかは知らないけど、人を脅したりものを無理やり奪ったりするようなことは絶対に許せない。

「どうしてアカネはそんなに行動的でいられるの」

気づけば私は幽霊少女にそう尋ねていた。

私は一体どんな答えを期待したのだろう。侍マン様のようにカッコいいこと、勇気が湧いてくるようなこと、自信がつくようなこと

アカネはそのどれらでもない答えを口にしていた。

「ああいう悪党を薙ぎ倒すのって、楽しいからな！」

この時、それは不謹慎だと叱ってやりたかった。

しかしそれ以上に、既に一心同体となり悪党を討つ快感を共有したことのある私たちの間には、並みならぬ強い共感が芽生えていた。

パンダのぬいぐるみを銀行の平らな屋根の上に隠し、あたしはどこから中へ突入しようかと建物のチェックを始める。二階の事務室つぽい場所から侵入できそうだ。

銀行員のみなさんごめんなさい、窓を割らせていただきますっ。あたしは屋根から飛び降り、空中での方向転換により窓へ向かって突進した。砕け散らばるガラスの音、床との摩擦によって勢いを殺しつつ着地する私の足。

「よし、行きますか」

窓だけでなく机やらパソコンやらいろいろ吹っ飛んでしまったけど気にしない。

「うーん、やっぱりここは奇襲が一番かな」

一階では銀行強盗が人質と警察の動きを見張るのに精一杯なはず。今からものすごい勢いで突入していけば無事に犯人たちを木刀で一掃できるかもしれない。

思うが早いかな、あたしは階段に向かって全力で駆け出した。

「誰だ」

一気に急ブレーキを掛け、何とかして足元の摩擦を抑え込む。

階下から、窓ガラスの割れる音を聞きつけたらしき銀行強盗のサングラスを掛けた犯人さんがあたしの額に銃口を突き付けていた。

こんな至近距離じゃ避けられないよお。

「キリキリ歩け」

「んんっ」

上半身を手慣れた緊縛術で拘束されたあたしは、縄尻を握る犯人

さんによって背中から銃口を押し込まれつつ歩かされていた。嚴重な猿轡によって抗議することもままならないあたしはとりあえず従っておくことにする。

早速失敗してしまうなんてとんだ想定外。侵入時の騒音を計算に入れてなかった……。

「兄貴、二階に隠れてたこのちび女を捕まえてきやした」

「ご苦労だったな。携帯とか通信できるものは全て奪っただろうな」「軽く検査を行ってみやしたが、やけに重たい木刀くらいしか持つてませんでしたぜ」

何が軽くよ、縛った直後にぺたぺたと身体を触ってきたくせして……こいつは後で生死の境というものを必要以上に拜ませてやるぜ。さて縛られたとは言っても、侍ウーマンのパワーがあればこれくらいの縄は簡単に引き千切ることができる。

問題は銃口を突き付けられているこの状態だ。少しでも怪しい動きをすれば撃たれてあの世行きなんてことも考えられる。半分は既に死んでるけど。

「木刀だと？ 変なガキだな。だが逃走用の人質としてはちっこくてぴったりだ、とりあえず隅に置いとけ」

「了解つす」

ということは、あたしはずっと銃口を向けられたままということ？ 冗談じゃない。

どうにかしなきゃいけないんだけど、あたしが動くより速く引き金を引かれては洒落にならないし……今のあたしには死に物狂いで虎視眈々とチャンスを待ち構えているしか手はないようだ。

「おら、こっちこい」

「んうっ！」

ぐいつと強引に縄尻を引っ張られたためにバランスを崩して転びかけてしまう。もう、乱暴なんだからっ。

文字通り隅っこに座らされた私は、キッと私を縛った犯人さんを睨みつける。

一瞬の隙さえあればいい。銃口が向けられていたとしても、奴が視線をほんの少し別の方へと向ければあたしの勝ちだ。あたしに恥をかかせたこと、たっぷり後悔させてやるっ。

「……んう？」

じつと犯人さんを睨み続けてみたはいいものの、彼もあたしのこととをじつと見つめ続けていてなかなか隙を見せてくれない。ひよつとしてあたしの狙いに気づかれた？

それからいつまでもいつまでもあたしの見張りを続ける犯人さん。段々恥ずかしくなってきた。

「んんっ」

思わず顔を背けてしまう。

どうしよう、これでは隙を見つけることなんてできないじゃないか。

「ふひひ、これが終わったらたっぷり襲ってやる。楽しみにしておけ」

次の瞬間、あたしは『怒りを超えた怒り』というものを生まれて初めて体験し、気がつけば足元に転がる犯人二人組を軽く蹴りつけていた。

あたしすげえ、本当に発砲させる間も与えず素手だけで犯人どもをぶっ倒せた。

『車は用意した、さあ人質を解放しろっ！』

外からさっきの警部の声が聞こえてくる。

さて、悪は倒したし、あたしはこれでずらかるとするかな。

「人質諸君、後は勝手に逃げたりしてくれていたまえ。はっはっは」
彼らにそれだけを告げ、あたしは颯爽とこの場から立ち去っていく。

さて、今度こそ屋根の上にあるぬいぐるみを冬美ちゃんにお届けするぜ！

事件は重なる時は重なるものである。

銀行強盗どもをぶっ倒した侍ウーマンであるあたしは、あれから下着泥棒退治に誘拐されそうになっていた子供の救出、女の子をいじめていた男の子たちへのお説教やスピード違反の車を大破させるなど、事件という事件の全てをことごとく解決していった。

友達のマンションへ行くだけでこれだけの事件に巻き込まれるなんて……。

「もう事件は起きないよね……」

よし、今度こそ冬美ちゃんにプレゼントを渡すんだ！

日はとつくに沈み、現在は多分夜の八時頃。

「やつと、着いたあ……」

あたしは春平くんの住むマンションの部屋の前に立っていた。

あれからまたどれだけ事件に巻き込まれただろう。無視するわけにはいかないし腕力で解決するしかなかったからもうヘトヘトだよ。お。

あたしは疲れに支配された肩をぐったり落としたまま無我夢中でインターホンを押そうと……おっとその前に、よいしょつ。

「んっ」

「うおっ」

侍ウーマンと冬美ちゃんに面識はない。人見知りの彼女が逃げしまわれないよう、ちゃんと桜田花実の姿になっておかないと。

「……アカネ、疲れたね」

「だな。でも合体を解いた瞬間身体が一気に楽になったぜ」

そっちは霊体だもんね。こっちはどつと疲れたよ。

私は手元のパンダに目を落とす。ようやくこれを冬美ちゃんに渡す時が来たんだ。

「アカネ」

「あん？」

「自分の手で冬美ちゃんにプレゼントを渡したいって言うなら、身体貸してあげるよ」

パンダさんのぬいぐるみを突きつけながら言うと、アカネはふうと溜め息を吐く。

「三年間も幽霊してきたけど、ここらが辞め時かな」

そして彼女は、

「頼む」

今まで見たことがないくらいの真剣な目つきで、私のことを見つめていた。

やっぱり、未練は青春よりも妹さんにあつたみたい。

今回も無事、気絶することなく魂の交換に成功した私たち。私の身体に入っているアカネは、こちらに目を向けてにっくと微笑んでいる。

「ありがとな」

「どういたしまして」

「プレゼント渡し終えたら、少し散歩に付き合ってくれるか」

「いいけど、どうしたの急に」

「秘密だ。さあ行くぞ！」

意気込んだアカネは、「野田村」と印刷された標識の下にあるインターホンのボタンへと人差し指を近づけていく。

ピン、ポーンの音が扉の向こうで鳴り響く。今気づいたけど、インターホンは押した時にピン、離れた時にポーンとなるらしい。

しばらくしてドアノブががちゃりと回され、中から小さい影がひよこつと顔を出す。

「ういー？」

「よし」

「おねーちゃんだーっ」

今回の主役、ハッピーバースデー冬美ちゃんの登場。アカネが早速彼女の頭をわしゃわしゃ乱暴になでてあげると、冬美ちゃんは目

をぎゅっつつむって嬉しそうに「んーっ」と可愛く唸った。

「おねえちゃん、あのね、ふゆみきょうねっ」

「お誕生日なんだろ？ おめでとうな」

「えへー、よんさいなのよお」

可愛いなあ、私もなでなでしたいなあ。

「よーし、四歳な冬美にはお誕生日プレゼントを授けよう」

次の瞬間、もともと眩しい冬美ちゃんの笑顔からさらに後光のよ
うなものがぱあっ射し始めた。まるで夜中に降臨された太陽の子供！

「ほれ、パンダのパン吉くん」

そう言って手に持っていたぬいぐるみを冬美ちゃんに手渡すアカ
ネ。冬美ちゃんは自分の手元にあるそれをじっと見つめた後、力い
っぱい両腕でぎゅっとなぎしめる。

「ばんきちっ」

もつとまともなネーミングはできなかったのかな。私だったら迷
わずパンダマンって命名するけど。

「桜田さんにアカネさん、本当にありがとう」

冬美ちゃんの眩しい笑顔に隠れて見えてなかったけど、いつの間
にか野田村くんがすぐそこに立っていた。

「冬美、ちゃんとお礼言わなきゃ」

「うんっ。おねえちゃん、ほんっとおに、ありがとうー」

瞳をキラキラ輝かせる幼い女の子に向けて、

「どういたしまして」

アカネの顔は、少しだけ浮かない表情をしていた。

アカネは誘われていたパーティーには参加しなかった。その代わ
りに約束通り、私たちは静かな夜道を二人で並んでお散歩している。

「アカネ、満足？」

「どうだかな。だけど……」

突然遠くで遠吠えをする犬の声。それが消え、また暗闇が静寂を取り戻した時、アカネは言葉を続けた。

「アタイは今、ものすごく青春してる気がするんだ」

「あう？」

思わず視線を隣に向けるも、暗がりのせいでアカネの表情はほとんど確認できない。

アカネの顔が見えにくいのは、暗がりだけが原因ではないみたいだけ。

「お前と出会ってから今日まで、短い間なのにいろんなことがあった」

「そうだね……最初は身体を取られちゃいそうになったっけ」

「アタイは学校で恋をした」

「その隙に私は身体を取り返した」

「保健室で焼き餅焼かされた」

「二人で野田村くんのお家に行った」

「冬美と仲良くなった」

「昨日、冬美ちゃんのプレゼントを買いに行った」

「その日、アタイらは初めて合体した」

「壊れたぬいぐるみで喧嘩して」

「仲直りして、二人で壊れたパンダを直した」

「今日、この町のいろんなところで事件が起きた」

「プレゼントを運んでる最中だったのに、次々とそれに巻き込まれた」

「銃を向けられた時、実は銀行強盗の事件現場に突入したことをすごく後悔した」

「また春平の家に行った」

「ようやくプレゼントを渡せたね」

「そして今」

街灯の下、急に真剣さを帯びるアカネの声。私は思わず立ち止まり、アカネの方に視線を向ける。

泣きそうな顔をしていた。

「今、アタイはこうして、最高の友達と一緒に散歩している」
声が微妙に震えている。

「花実つて言う、大事で大切な、友達と」

私は声が出せなくなっていた。

今何かを言えばきっと我慢できなくなる。アカネがせつかく必死に笑みを作っているのに、それを壊しちゃいけない。

「アカネえ……」

我慢していたはずなのに、思わず口から漏れ出る友達の名前。

「最高の青春を過ごしたアタイには、もう思い残すことはなくなつた」

「いつちやだよお……」

胸が絞めつけられるような思いというのがこんなに苦しいものだったなんて。

「冬美みたいなわがまま言うな。もう高校一年生のお姉ちゃんなんだろ」

「だってっ」

アカネが既に死んでしまっている以上、いつかお別れの時が来ることは分かっていた。

どうしてかな。最初は身体を取られたりして嫌いだったのに、いつの間にか大好きになつて、

「まだばいばいしたくないって、思うようになってっ」

こんなに胸が絞めつけられるなんて、おかしいよ。

「ありがとな。でももう遅いんだ」

呟くように言つて、アカネは私に自分の手の平を見せてくる。

「ほら、ただでさえ半透明だったこの身体、もうほとんど見えなくなつてる。視界もすっごいぼやけててさ」

「待つてっ、まだお話したいよ！」

「泣くな、アタイもそうしたいが無理なんだ。だからな、最後に一
つ」

アカネは声が出せなくなったらしく、その先から何を言っているのか全く分からない。口の動きを読もうにも、彼女の消滅が進んでいるせいで視覚では捉えられない。

「最後に一つ何なのっ、言いたいことがあるならばつきり言ってお！」

私の絶叫がこだまする夜の道の上、街灯に照らされたそこで、私は地面にがくりと膝をつく。

気づかないうちに流れ出していた涙を拭うのも忘れて、私は疲れた身体をごろんと横に倒した。

「アカネえ」

もう、会えないんだよね。

目を閉じれば、先ほど語り合った二人だけの思い出が光景として蘇る。

眠い……。

「おやすみ、アカネ」

そうして私は、眠気に支配されて意識を失った。

「花実、こんなところで眠っては風邪を引いてしまうぞ」

失いかけたところで、若い男の声で名前を呼ばれる。

聞いたこともないはずなのに、不思議と今の悲しい気持ちを落ち着かせてくれる声。

「アカネは花実の悲しみなど望んではないはずだ。立って、天の彼女に笑顔を見せんか」

誰？

「お前は、立派な侍になるのだらう」

私は目を開いて頭をずらし、声の主を確認しようとして必死に上を向く。

草履に袴、腰差さされた刀の鞘。組まれた腕に、私を見下ろす総髪（おんがみ）の男性。

見慣れた格好なのに、見慣れない顔だった。

「侍マン様……ですか？」

「半分違う。拙者はただの通りすがりの侍だ」

この町で侍マン様以外のお侍様はいないはずだ。今日の前にいる彼が侍マン様でないとすれば、一体誰なのだろう。

アカネみたいに幽霊で、江戸時代からこの世を彷徨い続けてるお侍様とか……そんなわけないか。

「通りすがりのお侍様、私を起こしてください。力が出ないの」

「残念だけど拙者にそれはできない。だから花実、自分の力で立つんだ。そして天を仰ぎ、お前の友に笑みをを見せてやれ」

どくんと胸と頭を打つ彼の言葉。

笑みを、アカネに……。

「うん……分かりましたっ」

私は立つことだけを考えながら、ぐったりと地面に倒れる腕や脚に力を込めた。

全身がぶるぶる震えている。まるで生まれたての小鹿見たい。

地面から手を話、二本の脚に重心を置く。倒れそうになったので近くの電柱に手を置き、不完全ながらも一応立つことができた。

涙はいつの間にか枯れていてもう泣いてしまう心配はない。だから一生懸命、最高の笑顔で彼女をお見送りするんだ。

「ばいばい、アカネ……もし生まれ変わったら、また会いに来てね

私のかろうじて保たれていた意識は、その瞬間にぷつりと途切れ
た。

アカネの声が私の胸に届いてくる。

『最後に一つだけ言わせてくれ』

消え去る寸前、私に伝えようとしていたアカネの思い。
『立派な侍になるんだぞ』

三十一、抱っこ(前書き)

「ボランティア部活動日誌」

手始めに私たちボランティア部は町内清掃活動に参加してみました。海原くんは参加してくれなかったけど、彼の代わりに他校から西木くんと後藤くんが手伝ってくれました。きれいになった町は気持ちよかったです。

三十一、抱っこ

「野田村くん、あなたに恋をしたみたいなの……好きです」

「ごめん。好きって思ってもらえて嬉しいのは確かだけど、僕ではその気持ちに応えられそうもないんだ」

「じゃあさ野田村くん、せめて抱っこして……えへへ」

あれ、どうして私はこんなにも青春とした場面に出くわしているのだろう。

確かことの始まりは昨日ぱちくりと目が覚めた時

「あう！」

ふと目が覚めた私はがばつと身体を起こし、きよるきよると辺りを見回して自分のいる場所を確認する。

確か私はアカネが消えてしまったことで、失意のあまり道端で眠っちゃったんだっけ。

「……あれ？」

では、今私を包んでくれているこのお布団は一体何なのだろう。

ふと窓の向こうに視線を向けると、どこまでも青の澄み渡る快晴の空があった。

冬美ちゃんの誕生日である日曜日はおそらく昨日。その翌日である今日が月曜日。

「学校、さぼっちゃった……」

いやそんなことよりも、まずはこの部屋がどこで誰のものなのか突き止めなきゃ。私は立ち上がり、とりあえず室内をもう一度よく眺め回してみる。

あまり広くない和室だ。いち、に、さん……六畳一間かな。ほとんど物が置かれていない中で、中央に私を包む布団だけが敷かれて

いる。

「おはよーございませう」

大声で朝のご挨拶。誰の声も返ってこない。

勝手に部屋を出ても怒られないかな。私は布団から抜け出すと出入り口と思しき襖にこそそこそ近づいていく。

「あの一」

襖を開きつつそーっと顔を出せば、

「ういー？」

目の前では幼稚園の制服らしき格好をした冬美ちゃんがこちらを見上げていた。ぶかぶかの黄色い帽子が大変ぶりちー。

「桜田さんおはよう。そろそろ夕方だけど」

そして彼女の背後には学生靴と買物袋を両手に持った野田村くんの姿。

どうやらここは野田村くんのお家らしい。

「野田村くん、私はどうしてここにいるの？」

「昨夜はお見送りしようと思って君を追いかけたんだ。そしたら君が地べたに倒れてたからうちまで運んできたんだよ」

そうだったんだ……私はてっきり、倒れる私に話しかけてきた通りすがりのお侍さんの家かと思っていた。

思えばあの人は一体誰だったんだろう。

「おねえちゃん、げんきでた？」

私はお兄さんに似てとても優しい冬美ちゃんの頭をなでなでしながら、野田村くんは何とお礼を言っていていやらという気持ちを込めた視線で感謝の念を表現する。

「ありがとう野田村くん、冬美ちゃん。ご迷惑をお掛けしちゃって……」

「気にしないでいいよ。可愛い寝顔も見れたしさ」

「か、かわつ！？」

野田村くんにはそんなつもりなど欠片もなかったのだろうけど、男の人に口説かれ慣れていない私はその一言で顔を赤くせずにはい

られない。

「かわわわわ……わ、私なんかそんな可愛くなんかっ」

でも友香ちゃんやパパやママに言われるより、野田村くんが言ってくれた『可愛い』は何だか特別な感じがする。

すごく、嬉しい。

「えへへ」

もっと可愛いって言われたい。野田村くん可愛いって言われたい！

「桜田さん、お風呂沸かすから待っててね。冬美、このお姉ちゃんと仲良くお風呂できる？」

「できるっ」

どうすればもっと可愛いって言うてもらえるのかな。まず可愛く振舞わないとだめだろう。

拳を握り両手首を口元に近づけつつ右足を膝で曲げてぶりっ子ポーズすればいいんだねっ

「野田村くん野田村くん」

必殺、ぶりっ子ポーズ！

「……ん？」

本気で首を傾げられた。途端に正気を取り戻した私は全く別の感情から顔が赤くなる。

「あう、なんでもないよ！」

やっぱり可愛いなんて言葉は狙って得られるものではない。それに自然体で可愛いって言われてこそ、私が本当に可愛いという証拠なのだっ。

ちなみにこの後、私は野田村家で冬美ちゃんとお風呂に入り、夕ご飯とデザートのおイスをご馳走になってからようやく帰宅した。

もっと野田村くんの家にいたい。野田村くんと一緒にいたい。

真っ暗な夜道に手、子供のわがままみたいな気持ち胸の奥で疼き出す。

翌日、目が覚めてから最初に思い浮かんだのは野田村くんの優しい微笑みだった。

顔を洗ったり朝ご飯を食べたり歯磨きをしたり制服に着替えたり髪を整えたりしている間もずっと、野田村くんの笑みが頭から離れない。

早く野田村くに会いたいなあ。

「行ってきまーすっ」

お家を出た私はダッシュで学校に向かう。

「花実ちゃん、おは」

誰かが私に挨拶をくれた気がしたけど、今は一刻も早く野田村くに会いに行くことが先決っ。

「花実、おはようご」

また誰かが私に挨拶をくれた気がしたけど、とにかく野田村くに会いたい私は走り続ける。

「桜田さん、おはよ」

またまた誰かが私に挨拶をくれた気がしたけど、ってさっきのは野田村くんだった！

「おはよう野田村くん会えて嬉しいっ！」

私は急いで逆走し、野田村くんの前に気をつけの姿勢でびしっと背筋を伸ばす。

「僕も嬉しいよ」

あう、その一言で全身がとろけてしまいそう……途端に胸の鼓動が激しくなり、眠っていた時の夢心地のような気持ち蘇ってきた。

「せっかくだし、一緒に学校行こうよ」

「喜んで！」

幸せだなあ。

教室にて、私は野田村くんに対して抱く不思議な感情の正体に気

づき始めていた。

私はこれが何かを知っている。アカネと合体していた時に感じていたものとともによく似ているから。

「これは……恋？」

「今はそうだった思春期の問題より目の前の数式を解いてくれ」

中吉田先生が教科書のお腹で私の頭をぼんと叩いてくる。

「じゃあ先生には解けるといいますか、数式よりも複雑難解なこの問題を」

「目の前の数式も解けない奴が挑める問題じゃないってのは確かだ」
そんなこんなで恋とは何なのかについて思いを馳せた数学の授業も終わり、休み時間に突入した現在、

「椿ちゃん、私は恋というものについて少しばかり思うところがあるの」

「花実には友情より恋を取るのですね……」

どういうわけか相談相手に選んだ椿ちゃんの身体がぶるぶると震えていた。通学路で無視したことをかなり怒っているらしく、朝から何度謝っても全然許してくれない。

「ゆ、友情と恋は天秤にかけられるものじゃないっていつかつ」とりあえず取り繕う私。椿ちゃんは意外とナイーブで、ちよつとしたことでも私たちの友情にぐらつきを感じるみたいだ。よく見れば目の端に涙を浮かべているくらいだから、恋に傾いていく友人のことを思うと不安で仕方ないのだろう。

「花実は私と恋が崖から落ちそうになっでいてどちらか片方しか助けられない時、一体どちらを助けるんですか」
「えっと」

唐突な質問に一瞬戸惑ってしまったけど、選ぶならもちろん私の失恋なんかよりも断然椿ちゃんだ。私がそう答えようとした時、

「即答で私を選べない……」

既に彼女は悲しんでいた。

「それは私が花実にとって暇潰しのお話し相手でしかない存在だから」

ら……こないだも悪口言われましたし、どうせ私なんて……」

「あう、泣かないでえ」

私は白い頭をなでなでしてなんとか慰めようと試みる。するとぼろぼろこぼれ落ちる涙を拭おうともしない椿ちゃんはいきなり私の胸に抱きついてきた。

その時、掠れた声で彼女は呟く。

「私にはあなたと、と、とと友香くらいしか友達がいらないのです。私を放って恋にうつつを抜かすなんて許しません」

「大丈夫だよ。たとえ恋に溺れまくろうとも、私は椿ちゃんの大親友だから」

今度椿ちゃんにたくさん友達ができるようにいろいろ手伝ってあげようと心に誓う私であった。

「今は私の相談に乗ってほしいな。大親友でなきゃ話せないことなの」

「……分かりました」

椿ちゃんはこくりと頷き、手の甲で涙を拭いつつ私の胸から顔を離してくれる。

いつも無表情だった椿ちゃんの感情的な一面が見れて、不謹慎ながらも少し嬉しかった。

「というわけで本題だよ。私は恋というものについて少しばかり思うところがあるの」

「そうなのですか」

「恋とは一体何だろうね」

「意味としては『切なくなるほど人に思いを寄せる感情』のことらしいです」

切なくなるほど、かあ。

私は自分の胸に手の平を当てて考えてみる。

この気持ち……彼のことを思う度に心臓の鼓動が少しだけ速くなる。今朝に至っては隣同士に並んで歩くだけでもものすごくドキドキした。そして彼とばいばいした後は決まってちよっとした喪失感

に苛まれる。

私は、野田村くんに恋をしているんだ。

「椿ちゃん、落ち着いて聞いて。私、恋を」

「聞こえませんが聞こえませんが聞こえませんが聞こえませんが」

「落ち着いて聞いてっ。私ね、恋をしちゃ」

「ああもうこんな時間です早く次の授業の準備をした方がよさそうですね」

「本当だ。急がなきゃっ」

仕方ない、相談の続きは海原くんをお願いしよう。あの人からいい意見が出てくるとは全く思わないけど、藁にもすがりたい気持ちだしこの際相談相手は選ばないことにする。

お昼休み、ひとまずお昼ご飯を我慢して教室を飛び出した私はどこへ向かおうとしていたのか一人廊下を歩いていて彼に突撃してみた。

「ねえ海原くん、私は恋というものについて思いを馳せているの」

「食堂でカツサンド買ってこい。お釣りで好きなもん一つ買わせてやるから」

「わーい！」

「やっぱり海原くんじゃだめだね、話にならないよっ」

「裕樹くんと何かあったの？」

海原くんから任務の報酬として得た紙パックのコーヒー牛乳をちゅーちゅー吸いながら、自分の教室にて私は野田村くんに愚痴をこぼしていた。

「私が相談してるのに急におつかいさせるんだよっ。酷いよねー」

「はは、相談なら僕が乗るから機嫌直しなよ」

野田村くんは優しい微笑みをたたえたままお弁当の卵焼きに手をつけていく。私も自分のお弁当からサンドイッチを抜き出し怒りとともに喉へ押し込んだ。

この際だから野田村くんに相談するのもいいかもしれない。こころはストレートに

「野田村くん、あなたに恋をしたみたいなの」

と告白染みたことを言ってみたり、いつそのこと

「好きです」

と告白してみたりするのもいいなあ。

考え込んでも喉が渴いて仕方ない。私はまたコーヒー牛乳のストローに口をつけてちゅーちゅー飲み始める。

「さ、桜田さん、それって……」

私が次はハムのサンドイッチを食べようかなとお弁当箱を見下ろしていたところで、野田村くんが変に上ずった声を出してくる。気がつくのと、彼は顔をトマトみたいに赤くして私のことを見ていた。

「あう？」

「ささささささ桜田さんあのそのえつとえええ？」

あはは、野田村くん真つ赤で可愛いー。

「君の気持ちは嬉しいけど、僕はまだ恋愛とかに興味持てないから……ごめん」

頬を赤く染めながらもどこことなく苦痛を伴っているその表情からは、告白してきた女の子に心苦しいながらもお断りしようとしている優しい男の子みたいな雰囲気を感じた。

そして断られてる……。

「野田村くん、あの」

「ごめん。好きって思ってもらえて嬉しいのは確かだけど、僕はその気持ちに応えられそうもないんだ」

どうやら私は「恋してみたみたい」「好きです」という心の中の咳きを思わず声に出してしまっていたらしい。どうりで喉が渴くはずだね！

「あははは……断られちゃったよー」

そして不思議なことに、あまりショックではない。むしろ別に何ともなさ過ぎて驚きなくらいだ。

ということとは、野田村くんに対する恋に似たこの気持ちは本当に何なのだろう。

「じゃあさ野田村くん」

それを確かめるために、私は一つだけあることを頼んでみた。

「せめて抱っこして……えへへ」

というわけで、今現在私は野田村くんの膝に腰掛けてお弁当のサンドイッチを黙々と食べているのでした。

お尻に感じる彼の膝は暖かくて、私の心を妙に落ち着かせてくれる。気持ちいい。

そっか……私は野田村くんのことを恋愛の対象としてではなく、純粹に「優しいお兄ちゃん」として求めていたんだ。

今は照れ臭いからお願ひしないけど、小学生までの頃はよくお兄ちゃんの膝に座ってたっけ。

「えへへー」

「桜田さん、楽しそうだね」

「うんっ。また今度もお願いしていい？」

「いつでもどうぞ」

注目するクラスメイトの視線に気づいたのは、お昼休み終了の時刻を知らせるチャイムが鳴り響くのを聞いて正気を取り戻した時だった。

三十二、体育祭の優しい彼（前書き）

「ボランティア部活動日誌」

今日は日曜日なので朝から校舎のお掃除を頑張りました。友香ちゃん
んと椿ちゃんも野田村くんと海原くんは都合が合わなくて一緒にで
きなかったけど、代わりに西木と後藤がわざわざやって来てくれま
した。校舎はどこもかしこもピカピカです！

三十二、体育祭の優しい彼

連なる純白のパイプテント、いつになく人で盛んな校庭、そしていくつかの打ち上げ花火が青空を舞う。

私は赤色のはちまきを額に巻いて気合いを入れた。

今日は待ちに待った体育祭だよ！

「というわけで友香ちゃん、一緒に頑張って赤組優勝だよ」

「残念だけど私は白組なの。しかも実況係と実行委員の掛け持ちやつてるから競技には出られないわ」

私の苦手な体育祭、何とかして楽しもうと勢いに乗ろうとした結果、親友によるまさかの告白に出鼻をくじかれてしまった。

ただ一言「ごめんね」と言い残し、私の前から忙しそうに走り去っていく友香ちゃん。私はパイプテントの下でぼーっと立ちつくす。

「毎年一緒に頑張ってきたのに……」

「今年は私がいいます。気を落とさないでください」

私の肩にぽんと手を置いて慰めてくれる椿ちゃん。同じクラスの彼女はもちろんチームメイトだ。

「うん……そうだね、落ち込んでても仕方ないよね」

大切な友達の言葉によって気概を取り戻した私は、宿敵の去っていた方向へ人差し指を向けて宣言する。

「友香ちゃんを倒すぞー、おーっ！」

「おーっ！」

「お願いだから倒すのは白組にしてね二人とも」

野田村くんが水を差してきたけど気にしない。

開会式を終えて赤組の席に戻ろうとした時、一般客用のパイプテントの方から野太い声が聞こえてきた。

「姉御！絶対勝ってくれよおー！」

「姉御の底力見せてやれっすー！」

西木と後藤だ。わざわざ私のために駆けつけてくれたらしい。

「うんっ、私頑張るーっ」

私はそんな二人に向けて片腕を上げて手を振りつつ燃え上がるフアイトを伝えるために大声でお返事した。

「フレイフレイあーねーごっ」

「頑張れ頑張れあーねーごっ」

どこで調達したのか私の写真がプリントされた大きな旗を振り回す西木と隣でメガホン片手に声援を送ってくれる後藤。いい舎弟を持って私は幸せだよ！

力強い二人の声援を背に受けつつパイプテントに引き返した私はのんびり椅子に座ろうとしたところで、

「桜田ちゃん」

あまり呼ばれ慣れない呼ばれ方で呼ばれ、思わず立ち直してしまふ。

「あう？」

声のした方向へ顔を向けると、そこにはあのとでも面倒臭がりな森下生徒会長が立っていた。人前では本当にしゃきつとしているらしく、目つきが以前会った時と比べるとかなり凛々しい。

「生徒会長さん、どうしたんですか」

「あなたの応援に駆けつけたあの敵つい男性二人組をどうにかしてくださいませんか？ 他の人の迷惑になるのですが……」

「面目ないです。」

「いつ今すぐ注意しに行つてきますっ」

もう、西木と後藤は迷惑ばかり掛けて！

私は運動が苦手なものもお構いなしにたくさん競技にエントリーしているの、今日一日は大活躍すること間違いなしだ。

『パン食い競争に出場する生徒は入場門前に集合してください』

実況係と言っている割にはアナウンスの仕事が多いらしく、友香ちゃんの声は開会式の時から校庭の隅々に響き渡っている。

「じゃあ椿ちゃん、私パン食い競争行ってくるね」

「頑張つて応援します」

「野田村くん、私頑張るねっ」

「うん、応援してるよ」

「西木に後藤、一般客席に戻っててね」

「ばれちまった」

「ばれたっすね」

心強い仲間たちに一言ずつ声を掛け、私はいざ行かんと入場門へ向かう。

はつきり言つてパン食い競争は苦手中の苦手どころか過去にあるトラウマが生まれてしまったほど嫌いな種目なのだけど、だからと言つて逃げていては侍の名折れだ。

私はこの体育祭を制覇して赤組を優勝させて見せる！

と意気込んでいられたのは数分前のまでのこと。

『花実ちゃん、ジャンプで届かないなら手を使つてもいいのよ』

「やだっ」

『兔みたいで可愛いから私はいいいのだけど、プログラムが押してるの。早くしてね』

つり下げられたアンパンを手に入れる際に手を使つてはいけないというルールの下、私は頭上十センチメートルくらい先にあるアンパン目掛け、足りない脚力を酷使しびよんびよん飛び跳ねていた。

それと同時にかつて私を苦しめたトラウマが蘇る……あれは確か中学生の頃、あの時もアナウンスをやっていた友香ちゃんにマイクで兎みたいと褒められて、翌日から「花びよん」というあだ名が浸透したんだっけ。

『手を使つてもいいのよー』

「やだーっ」

そんなの屈辱以外の何ものでもない。時代が時代なら切腹してたよっ。

「あーっ……」

でもわがままを通して他のみんなに迷惑を掛けるわけにもいかない。ここはおとなしくアンパンを手で持って帰った方が……

「うわああんっ」

私はアンパンをひつつかみ、ゴール目掛けて全力で駆け出した。涙溢れる瞳をアンパンで必死に隠しながら。

次は男女混合リレー。走ることは他の運動と比べて得意な方だから、さっきのパン食い競争みたいな結果にはならないはず。

「よう、ちび」

私が緊張のあまり手の平に「人」の字を五回ほど書いてしまったところで、後ろから聞いたことのある声を掛けられる。

振り向くと、そこには白色なはちまきを額に巻いて邪悪な笑みをたたえる海原くんの姿が。

「さっきのパン食い競争は爆笑もんだっただぜぶぶぶ」

「むきーっ」

絶対絶対絶対の絶対に、海原くんを倒す！

しばらくしてスタート地点に整列する赤組と白組各二名ずつ合計四名。

ちなみにこの男女混合リレーではトラック反週ごとに待ち構える選手の間でバトンが渡されていき、最後を走るアンカーの人だけは丸々一周走ることになっているのだ。私はどういっわけか赤組の総意でアンカーに決定されたため、アンカーの人だけが身につけることを許されたゼッケンを着用している。

「……海原くんも、アンカーなの？」

どうやら白色のゼッケンを身に包む彼も私と同じ順番のようだ。

「また面白いことになりそうだな、派手に転べよぶぶぶ」

「むきーっ！」

私のことを高みから嘲笑いつつ目の前から去っていく海原くん。

「桜田さん、気にしないであげてよ。裕樹くんも悪気があって言うてるわけじゃ……えっと」

明らかに悪気百パーセントな海原くんを前にさすがの親友である野田村くんもフォロワーし切れないらしい。

ちなみに野田村くんもこの男女混合リレーに参加するメンバーである。順番で言うところアンカーである私の直前だ。

「野田村くん、海原くんにはだけは何としても勝つよ！」

「ははは……」

そして始まった男女混合リレー。第一走者は位置につき、ピストルによるよーいどんの合図で走り始める。

赤組が優勢だった。しかも今一番前を走っている彼のバトンは最終的に私の手元へ渡ってくる物……つまり海原くん率いる白組とは大差をつけた状態で私の順番が回ってくることになる。

えへへ、海原くん破れたりい！

そして第二走者の誰かさんに第三走者の野田村くんと変わらず赤組は白組を突き放し続け、とうとう私に渡ってくる赤いバトン！

「桜田さん、後は頼んだよ！」

「お任せあれっ」

私は走り出しつつバトンを受け取り、持てる限りの力を振り絞って地面を蹴りつけていく。

確かに私は走るのが苦手だけど、これだけ白組と差が空いていれば余裕のよっちゃんだ。

「はあっはあっ」

半周したところで、アンカーのスタート地点でバトンを受け取る海原くんの姿が見える。ふふふ、海原くんの悔しがる顔が目には浮かぶ。

鈍り始めた足に再度気合いを入れて、私は追いつかれないよう全力疾走を心掛けた。

ゴールまで残り十数メートルまで走ったところで、

「ようちび、お前は本当に足が遅いな」

隣には何故か海原くんがいて、突然現われた彼を前にとてつもなく驚いた私は思わず足を滑らせてしまう。

「ひゃうあっ」

地面の上で大きく転ぶ私。その際に膝を強く打ちつけてしまい、立ち上がれなくなってしまった。

私は無意識のうちに頭を上げ、いつしかゴールの方を見つめていた。用意されたゴールテープを切っていく別の走者の姿が目に映る。

「あうう」

後少いでゴールだったのに。

直前で追いつかれちゃったけど、頑張れば勝てたかもしれないのにつ！

「つたくしょうがねえな」

悔しさと膝の痛みで涙が出そうになった時、私の目の前にかつちりとした男の人の手が差し出される。

「ほら、ゆっくりでいいから立ってみろ」

海原くんが私のことを見下ろしていた。

「海原くん……」

言われるがままに彼の手を取り、私は膝の怪我に気を遣いつつのろろと立ち上がった。

「とりあえずゴールするぞ。じゃなきゃ終わらねーからな」

彼の腕にしがみつき、倒れてしまわないようにゆっくりと足を運んでいく。

結局このリレーは私と海原くんは同着ゴールということで、二人揃って三位として処理された。

保健室にて怪我の手当てをしてもらった私は、先生の言いつけによつてベッドの上に寝かされていた。少しだけ酷いらしく、後で病院に行って診てもらわないといけないらしい。

「つたくお前のせいで俺まで負けちまっただろうが。このカメちび」

「あう……ごめんなさい」

グラウンドでは優しいなって思ってたけど、海原くんはやっぱり優しくなかった。さっきから怪我で苦しむ私を蔑んでばかりだ。

でも悪いのは確かに私なので、こっちは謝ることしかできない。後で頑張ってくれた第一第二走者の人、そして野田村くんにも謝っておかないといけないなあ。

「じゃ、俺はもう行くからな。養生しろよ」

そう言っただけで彼は保健室の出入り口へ向かってしまった。

扉がぴしゃりと閉められた瞬間、静寂だけが真つ白な室内を包み込む。

「海原くん……」

そして一人きりになった私は、さっきまで私に怒っていた彼の名前をぼつりと呟いてしまっていた。

こうして私の高校生活初の体育祭は幕を閉じていく。

窓の向こうで閉会式が始まる頃には、

「来年こそは頑張るよっ」

と意気込んだ。

三十二、体育祭の優しい彼（後書き）

次回は侍マン様の正体が明らかに！

三十三、うつつを抜かしてちゃいけない(前書き)

「ボランティア部活動日誌」

しばらく家を空けるクラスメイトの人に頼まれて、休日是一日子犬の面倒を見ました。わがままな子で大変だったけど、可愛かったので勘弁してあげますっ。

三十三、うつつを抜かしてちゃいけない

うららかなとある日曜日、ママが作ってくれた美味しいお昼ご飯をお腹にいっぱい詰め込んだ後で自室に戻ると、

「暇だから来たぞ」

部屋を中心に置かれてあるテーブルのそばで、胡坐をかいたお侍様の姿を見た。

彼は確かアカネが成仏した直後、突然私の目の前に現れたお方だ。侍マン様とは違うお侍様。

「あの……」

彼はゆっくり立ち上がると私のもとまでてくてく歩いてくる。

「問われる前に名乗っておこう。私の名は徳田新三郎だ」

「ふえ？」

徳田新三郎って……

「突然押し掛けて申し訳ない。花実が靈感を手に入れたということ、暇潰しの話し相手になってもらおうと思っただけ」

その名前を私はとっくの昔から知っている。何せ愛視聴している時代劇の番組に主人公として登場しているお侍様がまさに徳田新三郎様なのだから。

ちなみにその番組はかつて実在した有名な世直し侍、新三郎様を題材に時代劇として製作されたものである。私は再放送としてお茶の間を賑わせているそれを毎週楽しみに見ていて、いつかタイムスリップでもして彼と会えないかなーなんてことも思っていた。

そんな叶わないはずの夢がこないきなり叶うなんて……。

「あうっ……あうっ」

「何故混乱する。私がおかしかったか？」

「違うんです、嬉しさのあまりびっくりし過ぎただけなんですっあうっ」

それからしばらくの間、私はおかしな人にもなったかのように

奇声を上げ続けていた。

ようやく平常心を取り戻した頃、私は新三郎様と向き合うようにして床に座った。

「会えて嬉しいです」

まだ混乱しているせいか声が震えてしまう。

「私もだ。少し前までは会話もできなかったからな、嬉しいぞ」

新三郎様は優しくそつと微笑んで言ってくれた。感激だよ。

この際だからいろいろ質問してみよう。これほど有名なお侍様のお言葉ほどありがたいものはないからね。

「あの、新三郎様は幽霊さんでいらっしゃるのですか？」

「ああ」

やっぱり。江戸時代の人だから生きていないし、生きていたら半透明なわけがない。

「新三郎様はどうしてわざわざ私なんかに会いに……」

こ、これは一番聞いておかないといけないことだよ。だって彼は江戸時代に大活躍した偉大なお方なのだ。仮に新三郎様が生きていたとしても、本来ならば彼が私の目の前に現れてくださること自体が超常現象。どうしても理由を知りたい！

「師が弟子に会わなくてどうする。花実が靈感をものにした以上、これからみっちり修業させるからな。覚悟しておけ」

「……ふえ？」

いつから私は新三郎様の弟子になったのだろう。私は侍マン様の弟子であって、新三郎様では

『侍マン様……ですか？』

『半分違う。拙者はただの通りすがりの侍だ』

唐突にかつて交わした会話の一部が思い出される。

半分違うということは、半分は侍マン様で合っているということ。

「もしかして新三郎様は、誰かと合体して侍マン様に……」

私もアカネと合体することで侍ウーマンになることができた。き

つと彼も同じはず。

「気づくのが遅過ぎる。生き抜くことは戦いだ。戦いにおいて、勘の鈍い者は真つ先に斬られるぞ！」

「はうっごめんなさいっ」

怒られてしまった。侍マン様とは比べものにならないくらい厳しいよお。

「……なんてな。現代において斬る斬られるなど最早非常識な話だ、気にしないでくれ」

と思つたら、また先ほどのような優しい微笑みを浮かべる新三郎様。

「昔は非を是正しようとするれば不穏分子として悪が消しにかかってくるのが常だった。だが今は今だ、昔とは違うんだよな」

視線の先はどこか遠くを見つめ、少しだけ哀愁を感じられる彼の顔。

私は新三郎様が寂しそうな表情をしていることに耐えられなくて、空気を変えようととりあえず立ち上がり、言った。

「お散歩に行きましょうっ」

ぶらぶらと道を歩いていく中で、私は新三郎様といろいろなお話をした。

新三郎様と合体して侍マン様になっていたのはやっぱり野田村くんだったということや、新三郎様が旅をしていた頃の仲間が既に成仏してしまっていて寂しいということ。

いくら平和となったとは言え悪が絶えないことに嘆いたり、進化を続ける文明の利器に心躍らせていたり。

「ところで新三郎様、野田村くんとはいつ知り合つたのですか？」
私の質問すると、彼は大抵のことには答えてくれる。

「あいつが物ごころつく前の幼い頃だ。たまたま春平の前を通り掛

かった時、無邪気な瞳で私と目を合わせてきたあいつが気になってしばらく様子を見ていたら、私の姿も声も感知しているらしいことが分かってな」

合体ができるようになったのは今年の春、私が西木と後藤に絡まれていた時らしい。見ず知らずの女の子が襲われていたところを見て「助けたい」という思いが一つになったことがきっかけとか。

どうりで野田村くんが合体について詳しくははずだ。

しばらく歩いて、よく冬美ちゃんと遊びに来ている公園へと辿り着く私たち。休憩にとベンチに腰掛けた私は、同じく隣に腰掛ける新三郎様との会話を続けた。

「野田村くんってば、どうして自分が侍マン様だってこと隠してたのかなー」

「あいつが言うには、憧れの侍の正体が自分では花実の夢を壊しかねないとか何とか」

「子供扱いされてたんだね……」
夢を壊しかねないって心配は冬美ちゃんくらい小さい子にするべきだよ。

「今も正体を明かすのは止められているのだが、私は一刻も早くお前と会話を交わしたいと思ってな、今回は私の独断でお前に会いにきたんだ」

新三郎様、そんなに私のことを気に掛けてくれてたんだ。嬉しいなっ。

「私も新三郎様とお話したいと思ってました！」

「ん……そ、そうか。それはよかったな」

視線を私から逸らして少しだけ頬を染め、どことなく照れ臭そうに言う新三郎様。

時代劇で見ていた時はとても偉大な人だという印象だったけど、案外私みたいな一般人と共通するところがあるのかも知れない。

そうして話し込んでいるうちにすっかり夕方になってしまった。公園を出てからの別れ際、「また会えますか」という私の質問に、

新三郎様は一言「いつでもな」とだけ答えてくれる。

明日は学校だ。彼が野田村くんと一緒にいるのならすぐに会えるだろう。

「楽しみだなーっ」

私は腕をぶんぶん振って、大きくスキップしながら家路に就いた。

翌日の教室にて、野田村くんを見つけた私は大きな声で「おはよー」と挨拶しながら彼のもとに近寄った。

「おはよう桜田さん、今日も元気だね」

「えへへー」

新三郎様はついてきていないみたいだ。思えば靈感を身につけてからも彼のことを学校で見ることがなかったし、街の中をぶらぶらとお散歩しているのかもしれない。

「あのね野田村くん、昨日ね」

私は早速新三郎様のことを話題に出そうと野田村くんに話し掛けた時、

「……えっと」

どういうわけか、途中で言葉が詰まってしまふ。

侍マン様の正体については、野田村くんが自分から話してくれるまで待ちたくなった。これが世に聞く複雑な乙女心というものかしら。

「昨日ね、晩ご飯がビーフシチューだったの。美味しかったよお」

「はは、それはよかったね」

こうなったら誘導尋問だよ。

「ところで最近侍マン様のこと見ないなー」

「そうだね。どうしたんだろ」

「会いたいなー」

「そうだね」

「……えつと」

「ん？」

誘導尋問のやり方が分からないっ！

「えつとねっ、その、あうー」

「とりあえず鞆を置いたらどうかな」

「やっぱりただ待つしかないのだろうか。早く野田村くんと同じ秘密を共有したいのにいっ。」

誘導尋問の他にも方法はあるはずだ。例えば私は侍マン様の正体が野田村くんだったからって夢を壊されてしまうような脆い女の子ではないということを知らしめるとか。

ひとまず荷物を片づけた私は再び彼に話題を振った。

「あのね野田村くん、私ね、サンタさんの正体がパパとママだったからって全然悲しくなかったよ」

「僕もだよ」

「……じー」

「ん？」

思い通りの展開にならない。私の計画では「悲しくなかったよ」

「さすが桜田さん、大人だね。そんな君には僕の正体を明かさねばならないだろう」「憧れの侍マン様の正体が野田村くんだったなんて……素敵な運命！」「はっはっは！」となるはずだったのにいっ。

もう少し頑張ってみよう。他にももつといい手があるはずだ。

「野田村くんはどんな秘密を持つてるの？」

「秘密？」

考えつかなかったのでストレートに尋ねてみたところ、野田村くんは「うーん」と唸って考え込んでしまう。その姿がどことなく凜々しく思えて、彼から侍マン様の面影がちらつき始めた。

そういえば、本当に野田村くんが侍マン様なんだよね……チンピラさん二人に絡まれた時も、海原くんに酷いことされた時も、私を助けてくれた人。

「あるにはあるけど、秘密だから教えられないや。はは」

やっぱり振られたのは痛かったなあ。

「ねえ野田村くん、お膝に座ってもいい？」

「……あれやるの結構恥ずかしいんだけど」

「お願い！ だめなら秘密をばらしなさいっ」

「ええっ」

そうやってしばらく口論しているうちに、やがて授業開始を知らせるチャイムが教室内を響き渡っていた。

「もーっ、次の休み時間こそお願いだよ！」

私は大声で言い捨てて渋々自分の席に戻っていく。

お膝くらい別にいいじゃん……今はとっても甘えたい気分なのに。

「また恋、しちゃったのかなー」

だとしたら、私は野田村くんと侍マン様のどっちを好きなのだろう。

……うつん、私は立派な侍になるんだ。恋なんかにつつつを抜かしてちゃいけないんだ。

だからもう恋のことは忘れよう。新三郎様みたいな立派な侍になるためにも、日々精進していかなきゃ。

三十四、友香ちゃん決着！（前書き）

「ボランティア部活動日誌」

私と友香ちゃんと椿ちゃんて公園のお掃除をしていると、ベンチで座っている無口な小学生の女の子と会いました。彼女は自ら進んで黙々とごみ拾いを手伝ってくれました。とってもいい子ですっ！

三十四、友香ちゃん決着！

段々肌寒くなってきた十月の土曜日の午後、中間考査でいい点を取ったからと言って油断しない私は侍になるべく勉強に勤しんでいた。

新三郎様は今日も私の部屋に遊びにきていた。一生懸命に宿題と格闘している私の手元を見て、ふむふむと何かに頷くお師匠様。

「花実。問二の方程式、二段目から計算間違えてるぞ」

「あつ？ あつ本当だ！」

さすが現代にもその名を知らしめているだけあつて数学もお手の物らしい。私は消しゴムを手にとって間違いの訂正を始める。

「新三郎様すごいですっ」

「大したことはない。死んでからというものの学校へ通い詰めていたからな、嫌でも身についた」

私ならお勉強よりお友達探しを優先しちやいそうなのに、やっぱり偉大な人は違うなあ。

それから私は黙々と宿題を進める。

ここ最近、新三郎様が今日みたいに私の部屋までやって来る事が多くなった。彼は何も言わないけど、もしかしたら師匠として弟子の様子を見に来ているのかもしれない。

しばらくして宿題を終わらせた私は、シャープペンシルをノートに転がしてうーんと背筋を伸ばした。ついでに机に置いていた目覚まし時計へ目を向ける。

「そろそろ来るかなー」

「来客か？」

私の独り言にこちらを覗き込みつつ訊いてくる新三郎様。

「今日は友香ちゃんがお泊りに来るんですっ」

「お前によく纏わりついてる女のことか。あいつからは何やら不穏な気配を感じているのだが、大丈夫か？」

新三郎様は友香ちゃんのことを苦手らしい。あんなに優しい友香ちゃんのどこが不穏だと言っただろう。時々怖いなあと思うことはあるけど、基本的にはとつても素敵な人なのに。

私がノートや教科書を勉強機の棚に戻していると、階下からピンポーンというインターホン音が鳴り響いてくる。

「来たっ」

急いで玄関へ駆け出した。

「おじゃまします」

「友香ちゃんいらっしゃーい。ささ、上がって上がって。私の部屋に行こうよー」

私は友香ちゃんと手を繋ぎ、二人で仲良く階段を上って私の部屋に向かう。今日はたくさん遊ぼう。

「ちよつと待つて花実ちゃん、私にとてもいい案があるの。聞いてくれる？」

階段を上ろうと足を置きかけた時、握り合う手をぐいと引っ張つて私を制止する友香ちゃん。

「なになに？」

「これから学校に行きましょう。早く制服に着替えてちようだい」
「えーっ」

せつかくのお休みなのにどうして登校しなくちゃいけないの。視線で不安を訴える私に対し、友香ちゃんはにこりと笑みを浮かべての一言。

「ちよつと、ね」

学校に到着。私の手を引いて廊下を突き進む友香ちゃんは一体どこへ向かおうとしているのだろう。

「友香ちゃん、楽しいことって何なの？」

「うふふふふ」

さつきから彼女は私の質問を笑って誤魔化すだけである。おかげで何を考えているのか全く想像できない。

しばらくして見たことのない部屋の前で立ち止まる幼馴染。他の教室の扉ならスライド式であるところが、その部屋に限ってはドアノブを捻るタイプの扉だった。

「ここは体育祭や文化祭のために一時的に物を置いておく部屋よ。ていうかそれくらいの用途しかないわ、所詮余った部屋だもの」

私はふーんと聞き流し、ここで何をするのだろうという疑問ばかりで頭の中を埋め尽くす。

今から二人でこっそり文化祭の準備でもするのかな。それで他のみんなをびっくりさせるとか。

友香ちゃんはドアノブを捻って部屋に入り、電灯のスイッチを入れると中からおいでおいでと手招きしてくる。私も後に続いて入室した。

「ほえー」

ほとんど使われていないみたいだから埃っぽいんだろうなと思っていたのに反し別にそんなことはなく、所々がピカピカに磨かれているところからやけに清潔さを感じる。

私が部屋の中央で室内を見回していると、出入り口の方からガチャヤリという音が聞こえてきた。

「……友香ちゃん、鍵なんて閉めてどうするの？」

窓のない部屋だから息苦しくなると思っただけだ。

「うふふふふ」

彼女はただ目を細めて笑うだけで何も答えてくれない。新三郎様の言っただけ通り、こういう時の友香ちゃんはどことなく不穏かもしれない。

「花実ちゃん、最近野田村さんと仲がいいわよね」

「ふえ？」

いきなりの質問に首を傾げてしまう私。野田村さんと仲がいいの

は春からであんまり最近じゃないのに、変な友香ちゃん。

「おかげで二人きりの時間が激減したどころか毎日一番楽しみにしていたお弁当タイムまであんな男にかっさらわれる始末……」

そういえば最近は野田村くんとばかりお昼ご飯を食べてたっけ。

そして同じクラスだから必然的に椿ちゃんも私たちと一緒に食べた。ということは……友香ちゃんは毎日一人ぼっちでお昼ご飯を食べていたということに！

「ごめんね友香ちゃん、寂しかったね。よしよし」

「そうじゃないのよ花実ちゃん」

顔をほころばせつつ話を続ける友香ちゃん。

「私は怒ってるの。いつも私のもとまでお弁当箱を両手に来てたくせして、どうして今さら野田村くんなんかにくつつこうとするの」

「あう、だってお友達だし……」

「私はあなたの親友よ。私たちは幼稚園時代に唇同士のキッスだってやったこともあるのよ！」

初耳だ。

あうう、まさか私のファーストキスは既に奪われた後だったなんて……ま、まあ侍を志す身としてファーストとかセカンドなんか全然気にしないからいいもんねつ。

「私もつと花実ちゃんと一緒にいたい。二人だけでいたい。でも花実ちゃんはそんなこと思っなくて、だんだん離れてくようになって、だから私は……」

顔をうつむかせ前髪で表情を隠す友香ちゃん。まるで何かを堪えているかのように肩から髪の毛の先までをふるふると震えさせている。

どうして彼女はそれほどまでに私と一緒にいたいのだろう。

前に言っていた「結婚したい」という私に対する彼女の言葉が思ひ出される。

「花実ちゃんが一緒にいてくれないから、私はっ」

顔を上げて涙に潤んだ瞳を向けてくる友香ちゃんは、私にしっかりと目を合わせて叫ぶように言った。

「あなたのお兄さんのこと、好きになっちゃったじゃないのっ!」
今までなるべく考えないようにしてきたけど、やっぱり彼女は私のことが……ん?

「あうー?」

思わず首を大きく傾げてしまった。視界が右に九十度に傾く。

「お兄ちゃんが好きなの?」

「だってあんなにかっこよくて優しくて美味しいお料理ご馳走してくれてっ、そんな素敵の人に積極的に迫られたらいくら花実ちゃんラブな私だって惚れずにいられないわっ!」

めでたきかな両想い。友香ちゃんとお兄ちゃんはこれから仲良くやっつていくでしょう。

二人が結婚したら友香ちゃんは私のお義姉ちゃんかあ……えへへ、楽しみっ。

「でも私はこんなんじゃだめなの。私は花実ちゃんのファーストキスを奪ったから、責任を取らなきゃならないの」

私が未来にわくわくしている間も友香ちゃんの言葉は続いていた。何やらいろいろ背負い込んでいるらしい。

「だから、あなたを想う気持ちを思い出すためにも……」

そして彼女の顔が徐々に至近距離まで近づいてくる。

「あなたの唇、もう一度奪わせてもらっわ」

まさかそのためにこんな密室まで……どうしよう、さすがに今となつては女の子とのキスにも抵抗を感じるよお。

でも、男性との恋愛に目覚めた友香ちゃんなら思い直して寸前で唇を止めてくれるはず。だって友香ちゃんは感情に流されるようなタイプじゃ

「んむむ」

止めてくれなかった。そのために私たちの唇はちゃんと触れ合い、大したことはなくとも女の子同士のキスを成立させてしまう。

私と言えば思っていたよりも思うところがなく、別にキスくらいしてあげてもいいかなという気持ちになっていた。思えば幼稚園

の頃はパパやママに兄ちゃん、そしていろんな親戚にもキスしたことがあったつけ。

「花実ちゃん……」

数秒経って唇を離れた時、後悔の色で濃く染められた表情が目に映る。

「……ごめんなさい」

目のふちに溜まっていた涙がこぼれ落ち、その瞬間からぼろぼろと泣き始める友香ちゃん。

「私ったらあなたの気持ちを見殺して、本当に最低だわ……」

膝をがくりと落とし、両手の平で顔を隠しつつ震えた声で呟く彼女の姿は、いつもの毅然とした幼馴染のものとは全く異なっていた。彼女が心底悲しんでいる時にこんなことを思うのは不謹慎かもしれないけど、友香ちゃんがこんなに弱まっているところ、見れて少し嬉しいかも。

「よしよし、いい子ですねー」

私が泣いている時にいつもそうしてもらっているのと同様、私は彼女の頭をなでなでして落ち着かせてあげる。泣きじゃくる友香ちゃん可愛い。

「花実、ちゃん……」

「いい子いい子」

しばらくの間、私たちは二人きりの空間であやしあやされていた。

「落ち着いた？」

「うん。ありがとう、花実ちゃん」

床に腰を下ろし壁に背もたれる私。同じく隣に座っている友香ちゃんはようやく涙を止め、うつむいて何かを考えているようだった。えへへ、泣いている子を励ましてる私って何だかお姉さんみたい。

友香ちゃんのお姉さんになるのもいいかも。

「ねえ友香ちゃん、どうしてそんなに泣いてるの？」

沈黙を作ると気まずくなりそうなので、とりあえず適当なことを

尋ねてみる私。すると彼女はうつむかせていた顔を上げて私に視線を合わせ、重そうな口を必死に開いてくれた。

「私はあなたと結婚するって約束して、婚約破棄は許さないって言っというて……あなた以外の人を好きになってしまったのよ。酷いでしょ、嫌いになっちゃうでしょ、こんな私……」

なんだ、そんなことで思いつめていたのか。幼稚園の頃の婚約なんて物心ついた瞬間から破棄されるものなのに、友香ちゃんは律儀なんだね。

友香ちゃんのそういう約束に忠実なところ、待みたいで好きだ。

「気にしないで。私は何とも思っていないから、友香ちゃんは自分の恋に一生懸命になって。ね？」

「うん、ありがとう。私、頑張るわね」

これで一件落着。重荷を降ろした友香ちゃんはお兄ちゃんとラブラブになるべく今日から邁進していくのでした！

「ところで友香ちゃん、どうして私をこんなところまで連れてきたの？」

思えばキスするのが目的だったのなら私の部屋でも十分だったはずだ。

「ここは休日の校舎しかも普段から誰も寄り付かない倉庫の中。あなたがどれだけ暴れたって、ここなら誰も助けにこないもの」

本当は私が暴れたくなるようなことをするつもりだったんだね…

…。

「ふむ……恋、か」

ずっと私たちを眺めるだけだった新三郎様がぼつりと呟く。

「恋、かあ」

私も思わず呟いていた。

三十四、友香ちゃん決着！（後書き）

突然ですが、「侍の心得！」は次回の三十五話で一区切りさせていただきます。

最近どうもスランプですので、このお話をより良くするためにも自分を見つめ直す時間が欲しいのです。

ですので、5週間ほどお休みさせてもらいます！

再開は12月5日の日曜日です。

少人数とは言え、いつも楽しみにしていただいている方には本当に申し訳ありません。より面白い小説に仕上げられるよう、頑張っております！

三十五、椿ちゃんデート！（前書き）

「ボランティア部活動日誌」

先日何気なく公園の前を通ると、先日の女の子が一人で黙々とごみ拾いをしていました。その姿に感動を覚えた私は急ぎよ手伝うことにしたのでしたっ。

別れ際に見せてくれた彼女の笑顔が可愛かったです！

三十五、椿ちゃんデート！

ある日、生物部の人たちが飼っているうさぎさんがカラスにいじめられて大けがを負ったらしい。

その生物部員という私のクラスメイトが困った様子だったので、私はサムライ自警団団長兼ボランティア部部长として相談に乗ってあげたところ、どういうわけか椿ちゃんが筆箱からメスを取り出しつつ張り切りだした。

そして現在、

「うぶ……うさぎさんごめんなさい、見るに堪えないので私は退室させてもらいます」

理科室の一角にて、椿ちゃんによるうさぎさんの公開オペが行われていた。お腹を割かれ臓物が露となったうさぎさんを見ることに耐えられなくて一旦理科室を出ていった私は、廊下に足を踏み入れてから扉を閉めると同時にほっと溜め息を吐いた。

「花実、椿はあんなことをやってるから髪が白いのではないか？」

新三郎様が言う。

「そうかもですね……うぶ」

今日の夜は眠れそうにない。

数十分が経ち、椿ちゃんが手袋を取り外しつつ理科室から出てくる。

「花実、無事に終わりました。手術は成功です」

「ほんとー？ よかったー」

ようやく終わってくれたよー。

私は真つ赤になった手袋を洗いに水道まで向かう椿ちゃんについていき、そこで疑問に思ったことについていろいろ尋ねてみた。

「椿ちゃん、獣医さんになるのが夢なの？」

「いいえ。何故私が」

「だってうさぎさんの手術成功させちゃうし……」
すると椿ちゃんは少し考え込む様子を見せてから話し始める。

「私は昔から怒りを紛らわせるために本を見ながら動物を解剖して遊んでいたの、それなりの知識はいつの間にか身につけていました。小動物程度なら大体は扱いは慣れています」

「あう、そうなんだ。すごいね……」

新三郎様の言う通り、椿ちゃんの髪が白くなってしまった直接の原因はこっちにありそうだ。グロテスクなものを生で見続けるなんて、私なら発狂しそうだよお。

それにどうしてストレス解消法が動物の解剖なんだろう。もっと他に何か無かったのかな。

「よっぼど病んでいたのだな。平和な国の民であるはずなのに、不憫な少女よ……」

新三郎様が同情を始めた。

だけどそれが立派な特技へと昇華したわけだし、あまり悲観するようなことではない……のだけど、やっぱり椿ちゃんが心配だ。今もなお動物の解剖で楽しめているようなら、私がもっと他の楽しいことを教えてあげない！

「椿ちゃん、次の日曜日は一緒に遊びに行こう！」

「……私と、二人きりでですか」

「もちろん。二人だけで遊ぼう」

私は彼女の落ち着き払った瞳にじつと視線を向ける。すると彼女は白い頬を少しだけ朱に染めて、

「ありがとうございます。是非、お願いします……っ」

うつむきながらそう答えてくれた。

よーし、頑張るぞー！

今日は青空澄み渡るあつ晴れ日曜日。人のあふれる駅前の噴水付

近にて、私は椿ちゃんの登場を今か今かと待ち続けていた。ちなみに新三郎様は今日も私のそばにいて、ただ黙々と私の隣に浮かんでいる。話し相手にはなってくれない。

私は空を見上げて雲の形に気を配る。ソフトクリームが食べたくなった。

「おはようございます」

雲に夢中になっていると、いつの間にか隣には椿ちゃんがそっと立っていた。

「おはよー」

挨拶には挨拶を返す私。

「おお……」

思わず漏らしてしまう感嘆の声。

椿ちゃんの服装は誰に教わったのかとてもおしゃれにできていた。メイドさんが頑張ったのか本人のセンスの賜物か、清楚さがイメージの大部分を占めかねない素晴らしいファッションセンス。

「今日はよろしくおねがいます」

女の私が思わずきゅんときめいてしまった。

「お任せあれっ。じゃあ早速出発だよ。えいえいおーっ」

「お、おー……」

私に合わせて控えめに腕を上げる椿ちゃん。可愛いっ。

まずは例のアクセサリーショップへ向かう私たち。椿ちゃんからすれば初来店なので、私が案内して楽しませてあげないと。

「いらっしやませー」

いつもの店員さんが迎えてくれる。今日は日曜日だというのにがらんとしていて、店員さんもどことなく暇そうだった。

「花実、ここでは一体何を……」

アクセサリーショップに来たことがないであろう椿ちゃんはここで何をするのか想像もつかないらしい。アクセサリーに需要を感じていなさそうだし、ここはひとつ女の子を可愛くするアイテムの重

要件について教えてあげよう。

「椿ちゃん、アクセサリーは女の子の必需品なんだよ」

「そうだったのですか。ではこれらの装飾品は一体何の役に立つのですか？」

椿ちゃんが店内全域を指差しつつ尋ねてくる。

「役に立つとかじゃないんだけど、アクセサリーは女の子を可愛くしてくれるアイテムなんだよ」

椿ちゃんがぴくつと全身を揺らして反応する。

「か、可愛く……」

どうやらおしゃれには興味あるみたい。

ようし、こうなったらどんどん押しつけて椿ちゃんをおしゃれの世界に引きずり込んでやうよ！

「椿ちゃんにはこのリボン型の髪留めが似合いそう」

「可愛く、可愛く……花実を可愛く」

「でもこの赤いバラの髪留めも似合いそうだよね」

「ただでさえ愛くるしい花実を、さらに可愛く……」

「つけてみてよー」

「花実にはこのオレンジを模した飾りが似合いそう……グレープもいいかもしれません……」

「ねーねー椿ちゃん」

「いやしかしここはあえて大人びた路線を渡るのも……だけど花実の子供らしさは残しておきたいとこですし……」

「椿ちゃん？」

椿ちゃんが聞き取りづらい声でぶつぶつ呟いている。どうやら本格的におしゃれの楽しさを知ることができたみたいだ。でも一人だけの世界に入られるのは少し退屈だなー。

仕方ないので私は商品の物色を再開する。

「花実っ」

そして間もなく、椿ちゃんに頭をひつつかまれ髪の毛をゆっくりかき分けられ、最後は何やらピンみたいなものをカチンと留められ

た。

「ぴったりお似合いです、花実っ」

そしてそばに置かれてあった商品の綺麗な手鏡で私の顔を映してくれる。

「おおー」

額の傍らで、桜の花を模したピンク色のヘアピンが輝いていた。

「花実、可愛いです！」

「えへへ、ありがとー」

それからしばらくの間、私は椿ちゃんによってさまざまなアクセサリーを試され、最終的には二人でお揃いかつ色違いのものを購入した。

私は可愛らしい桜の花、椿ちゃんは優美さあふれる椿の花を模したヘアピンを髪に付けて街に戻る。

あれから特にすることも無くなった私はとりあえずお昼まで街をぶらぶらし、昼食を近くのファーストフード店で食事を取った。

「花実、単品だとハンバーガー一つで百円らしいです。とてつもない安価です。このお店は近い将来潰れます」

手元のハンバーガーに驚愕あふれる眼差しを送りつつハンバーガー店の行く末を案ずる椿ちゃん。近くのテーブルを拭いていた店員さんがこちらを見て苦笑いを浮かべている。

「最近だと普通だよ。何でも安いんだよっ」

「なんと……しかし見たところこれはかなりカロリーを張っているはずですよ。カロリーが高いのに値段が安いなんて信じられません。それにパンに肉に野菜にソースという数々の食材に調理に必要な光熱費、さらに包装紙代や人件費等もろもろを考えれば百円での販売はおそらく赤字。不況の世の中です、ここはきつと自棄になってこのような自殺行為に走っているのでしょうか。不憫でなりません……」

心配そうな顔をしつつハンバーガーにぱくりとかぶりつく椿ちゃん。近くで聞き耳を立てていた店員さんがついに「ぷっ、やだあ」と嘔き出してお店の奥へと逃げ込んでしまった。
恥ずかしいよお。

お腹を満たした私たちはハンバーガーショップを出て街に戻り、また午前のようにぶらぶらと歩いて回る。特に用事がないためウィンドウに飾られたお洋服を欲しがるくらいのことしかすることがないのだけど、資財豊かな椿ちゃんはことあるごとに「私を買ってさしあげます」と言い出すため用心が必要だ。

「むむむ」

椿ちゃんに新しい趣味を見つけてあげるのが今回最大の目的……しかし俗世に疎い彼女は興味惹かれるものが多過ぎるためかなかなか関心が持続してないらしい。

こうなったら的を一つに絞って攻めていくしかないね！

「そうだ椿ちゃん、カラオケ行こうっ」

「からおけ？」

「大きな声で歌わせてくれるとこだよ」

「……はあ」

どうやら大きな声で歌ってどうするのだろうと思っっているみたい。カラオケで歌うことの楽しさを知ってしまえば趣味の少ない椿ちゃんのことから熱中し過ぎて学校生活にも支障を来たす可能性があるけれど、今のままよりはそれぐらいの方がいいよね！

というわけでやって来ましたカラオケルーム、入室から既に一時間が経とうとしています。

「嗚ー呼ー愛のーどっきゅん伝書ばとおー」

椿ちゃんがマイクを離してくれませんか。さっきから歌いっぱなしで彼女の喉が心配です。

熱中し過ぎだよ椿ちゃんっ。

私たちがカラオケルームを出たのはそれから四時間後、綺麗な夕日が見え始めた時のことでした。

以上、現場からのレポートを終わります。

疲れた。ずっとジューズを飲んで椿ちゃんの歌声を聴いていただけなのに疲れた。新三郎様も途中からいなくなっちゃうし……。

「花実、とてもとてもとっても楽しかったです。また二人で来ましよう、カラオケにっ」

彼女はと言えばすぐく活き活きしてる。

「う、うん。そうだね……」

次からは私にももつと歌わせてもらえるようにと懇願しなきゃ。

「ところで花実」

「なあに？」

急にその瞳をきりつと険しい形に変える椿ちゃん。どこか真剣な面持ちになった。

「カラオケに入る寸前に見かけた怪しい男性数人が私たちの後をつけているようです」

「あう、怖いねー」

ストーカーかな。椿ちゃんは美人さんだし、私はかつて友香ちゃんに求婚されたことがあるくらい可愛い女の子だし、その可能性は十分あり得る。

「早く帰ろうよっ」

私は椿ちゃんの手をぎゅつとつかみ、早歩きを促すためにぐいと引っ張ってみる。彼女は私に合わせて歩くペースを速めつつ、そしてどこか落ち着いた態度を取っていた。

「大丈夫です。あそこの公衆電話で迎えを呼びますから」

言いながら椿ちゃんは電話ボックスに人差し指を向ける。

「車が来るまでボックスの中に身を潜ませていればいいのです」

「なるほどっ」

善は急げとばかりに私たちは電話ボックスへ向かおうと駆け出し

た。

「おっ逃げたぞ」

「追いかけるーっ」

同時に彼らも電話をさせまいと私たちを追いかけてくる。彼らの脚はかなり速く、もたもたしているとすぐに追いつかれてしまいそうだ。

「花実、もう少し速く走りましょう」

椿ちゃんが囁いた直後に繋いでいた手をぐいっと引っ張られる。

「あうっ！」

急がなきゃいけないのに、後ろに気を取られていた私は思わずまずういてしまった。

「花実、大丈夫ですか!？」

「いたいよお」

どうやら膝をすりむいてしまったみたいで、軽く血が滲み出ている。痛そう……ていうか痛い。

「おっとお嬢さんたち、怪我しちゃったあ？」

「大変だねえ、お兄さんたちに見せてごらん？ んん？」

しまった、もたもたしているうちにストーカーさんに追いつかれてしまったみたいだ。

「どれどれ、ありゃあ血が出ちゃってるねえ」

「ひっ」

近づいてきたと思えばしゃがんで私の膝をさすってくる一人のストーカーさん。それから痛くも痒くもない太ももまで触ってきた。

「やつやめてください、大丈夫ですから……」

「いやいや、遠慮しないでいいよお。ふひ」

「そっちの白い髪の美人さんは大丈夫だったかい？」

別のストーカーさんは椿ちゃんに手を出そうとしている。ストーカーさんにつかまれた腕を振り回そうと身をよじらせるも、あまり効果がないみたいで力づくでは抜け出せそうにない。

どうしよう、捕まってしまうた。

「そつだ、俺たちの部屋に運んであげようか。治療してあげるよお」
肩をに腕を回される。恐怖を感じて全身が震えあがり、目の辺りがじんとなった。

「ごめんね椿ちゃん、私のへまのせいでこんなことになっちゃって。私はせめて涙だけは見せまいと必死にまぶたを閉じる。」

その矢先、

「さて茶番もここまでだよ君たち。彼岸を拝みたくなければ早く拙者らの前から失せるんだ」

心強い聞きなれた声を感じ。

「んあ？ 何この武士。馬鹿じゃねえのぐえっ」

「コスプレきめえ、ひひひぎゃっ」

「拙者だつてよ、マジきもびひえぐおっ」

そして人を殴打するかのような近い鈍い音の後、ストーカーさんたちの微かな悲鳴が聞こえてはどさりと重いものを落としたかのような音が聞こえてくる。

……拙者？

「花実に椿、大丈夫だったかい？」

私はゆっくりとまぶたを開き、西日の強い世界を視界に入れた。

「侍マン様っ」

草履に袴、刀に総髪姿の現代を生きるお侍様が目の前に立っていて、優しい眼差しで私を見下ろしていた。

「侍マン様、どうしてここに……」

「えっと、君たちが危ない目に遭ってそうな心配がしたからね」

新三郎様が野田村くんを呼んできてくれたのだろうか。ストーカーさんたちはカラオケルームに入る前から私と椿ちゃんを追いかけてきてたらしいから、新三郎様が気を利かせてくれて……いや、そんなことよりもまずお礼を言わないと。

「侍マン様、ありがとうございますっ」

「ありがとうございます」

私は彼の手を借りてゆっくり立ち上がりつつ頭を下げる。それに

続いて椿ちゃんもお礼を言った。

「どういたしまして。それじゃあ拙者はもう帰るから、君たちは気をつけて帰るんだよ。さらば！」

それだけ言い残すと、侍マン様はジャンプしたかと思えば一瞬で目の前から姿を消してしまふ。やっぱり幽霊と合体すれば超人的身体能力が身につくみたいだ。アカネさえ成仏してなければ私だつて！

「……花実、お怪我のこともありますから迎えの者を呼びます。あそこのベンチで安静にしてください」

「うん、分かったー」

こうして私と椿ちゃんの一日は終わっていく。ストーカーさんたちのせいで最後は楽しかった気分を台無しにされてしまったけど、「花実、またいつかカラオケ行きましようね。今度は今日より楽しくです」

「うんっ」

今日は椿ちゃんの新しい趣味を見つけられた記念すべき日でもあることだし、嫌なことはさっさと忘れてしまおう。それがいいよねっ。

三十五、椿ちゃんデート！（後書き）

では先週申し上げた通り五週間のお暇をいただきます！
再開は12月5日です！

三十六、ぐだぐだ警備委員（前書き）

「ボランティア部活動日誌」

朝、登校途中でランドセルを背負った例の女の子に会いました。彼女は大量のごみが入れたスーパールのレジ袋を手を持っていました。どうやら道端に落ちていたごみを拾って集めていたらしいのです。

まだ小さいのにとってもいい子です。私も見習わなきゃ！

三十六、ぐだぐだ警備委員

「では文化祭の出し物について何か提案をお願いします」

午後の教室にて教壇に立った委員長さんが私たちにお願ひした。あと数週間もすれば文化祭が始まる。うきうきわくわくのお祭りだ。

さて私は何を提案しよう。中学生の頃は喫茶店に演劇にお化け屋敷と定番をやったから、今年もつと斬新な何かがいい。侍喫茶とか。

「はい、何か屋台出したいです！」

クラスメイトの誰それくんが身を乗り出して提案した。思えば屋台を出したことは一度もない。焼きそばとかお好み焼きとかたこ焼きとか食べたいなあ。

「はいはい、お化け屋敷！ これに限る！」

またクラスメイトの誰それくんが身を乗り出して提案した。思えば中学生の頃、クラスメイトの作るお化けが本格的過ぎて恐怖のあまり気絶し保健室に運ばれたのは今となってはいい思い出である。

「はいはいはい、喫茶店！ しかもコスプレ！」

確か中学生の頃はウエイトレスをやって大失敗したっけ。お茶をお客さんの頭に落としてしまったのだ。あの時はいっぱい怒られたっけなあ。

トラウマはあるけど、侍喫茶にするのなら参加したい。

「はいはいはいはい、占いの館とかいいと思います！」

占いかあ。そういえば小学生の頃に占いをすることになった時、私が適当に占ったら結構当たったっけ。占いもいいかもつ。

「えーでは案も出揃ったところで多数決を取りたいと思います」

どうしよう、どれも楽しそうで迷ってしまう。屋台かお化け屋敷か侍喫茶か占いの館か、悩むよう。

「屋台に賛成の人！」

あ、野田村くんが手を挙げてる。そう思った頃には私の右手も上空を目指して拳がっていた。

それから順に人数を数えていき、結果屋台を出すことになった。

「では次にどの料理で屋台を出すか話し合って」

お好み焼きになった。

「文化祭楽しみだよねー」

お昼休み、野田村くんと向かい合ってお弁当をつまむ私は再来週の学校行事を思い胸を躍らせていた。

「そうだね。ところでボランティア部は何か活動しないの？」

そういえば部活動ごとにも出し物を出すことができるんだっけ。

何しようかな。

「ボランティア部だから、ごみ拾いとかなさるの？」

野田村くんの質問に私は首を傾けて思案する。

私たちはボランティア部でありサムライ自警団なのだ。ごみ拾いとかの慈善事業はもちろんだけど、

「やっぱり文化祭の安全のため、自警団の総力をあげて警備をして回らなきゃ！」

もつともつと人の役に立たなきゃねっ。

「あ、それなら生徒会の人や警備委員つてのを募ってたよ。うちの文化祭は規模が大きいから警備の人が必要なんだって」

「本当っ？ よーしご飯食べたなら生徒会室に言ってお願いしようっ」
「頑張つてね」

「副部长兼副团长さんも来てよ」

「いつの間に僕は副部长兼副团长になったんだい？」

そして数分後、お弁当の中身を空っぽにした私たちはさっそく生徒会室へ向かうために教室を出ていった。

「生徒会長さーん」

「あら、いらっしやい桜田ちゃん」

ここは生徒会室。そして森下生徒会長は背筋をピンと伸ばして何かの書類の整理に勤しんでいた。髪の毛が乱れているところを見ると、私が扉をノックする寸前まで机に突っ伏していたに違いない。

「今日はどんなご用なのかしら」

私は早速会長さんに用件を伝えた。

「なるほど、警備委員になりたいのですか……まあいいでしょう。

あなた方が警備委員に適正かどうか審査して合格すれば認めます」

「審査？」

それから会長さんは何かを考え込むように指を顎に当ててうんうん唸ると、何かが閃いたかのようにはっと笑顔を咲かせた。

「ボランティア部なのでから、今日一日ワタクシにご奉仕してくださいませ」

「ええーっ」

……とここまでが二時間くらい前の出来事で、今現在の私はと言うつと、

「会長様、お紅茶を淹れましたー」

「ありがとうございますですわぁ」

だからだする会長さんのお世話を頑張っていた。ちなみに野田村くんは冬美ちゃんのお迎えに幼稚園へ行ってしまうてここにはいない。

「会長様、お肩お揉みしましよーかー？」

「お願いしますわぁ……ふぁぁ」

会長さんが言うには私たちがどれだけ人のために尽くすことができるのかテストしているらしい。ただこき使われているだけなのではとも思っけど、ここで下手なことを言えば警備委員にしてもらえなくなるかもしれない。

今だけ、今だけ我慢すればいいのだっ。

「お肩もみもみー」

「もっと強くしてくださいませえ」

「もみもみー！」

「ただ放課後になってからというもの、書類仕事をやらされたりお茶を淹れさせられたりと頑張ったおかげでとても疲れている。もうくたくただよお。」

「会長様、いつになったら認めてくれるんですか」
肩揉みしながら尋ねてみる。

「今日一日私の奉仕ですから、深夜の零時まで頑張ってくださいればよいですわあ」

「えーっ」

「それだと今夜は会長さんのお家にお泊りだろうか。それはそれでうきつきするけど、私はそんな夜中まで起きていられないからきつと失格になってしまう。」

「どうすれば、一体どうすれば……。」

「いい加減にしなさい」

「あいたっ」

私が頭を抱えそうになっていたところで、いつからそこにいたのか忽然と姿を現した友香ちゃんが会長さんの頭にその拳を叩きつけていた。

「私の花実ちゃんをこれ以上こき使わないで」

「会計ちゃん、まるで容赦ないですわね」

「花実ちゃんは警備委員になりたいのよね。私が承認させておくから、早く一緒に帰りましょ」

「無視されましたわ……」

「何だかよく分からないうちに話が進められ、私は友香ちゃんに優しく手を引つ張られて生徒会室を後にする。」

「どうやらもうこき使われなくていいみたい。よかったー。」

「友香ちゃん、ありがとうー」

生徒会室の扉がぱたんと閉められた時、私は深々と頭を下げた彼女にお礼を言った。

「ふふ、どうってことないのよ。さてものは相談なのだけど……」
顔を上げた瞬間、いつになく邪悪な色に染まった友香ちゃんの笑

顔が目飛び込んでくる。

「お礼として、今度は私にご奉仕してくれないかしらあ？」
「はっつ！」

私の喉元に指を滑り込ませつつ悪魔の笑みをたたえる友香ちゃん。
久しぶりにとても怖い。

「ねえ、いいでしょ？ ねえねえ」

「やんっあうお願いやめひゃあっ」

「うふ、うふふふ……」

昨日は酷い目に遭ってしまった。結局友香ちゃんのお家に引きずり込まれ真夜中まで一緒に遊ぶ羽目に……おかげで今日は寝不足である。

「ふあー」

「おはよう桜田さん、寝不足かい？」

朝の教室で大きなあくびをしていると、今しがた登校してきた野田村くんが私の顔を覗き込みつつ声を掛けてくれる。

「おはよー。昨日大変なことがあってね、疲れちゃったよー」

「そっか、昨日は警備委員になるための試験を受けてたんだっけ……」

「ごめんね、僕だけ先に帰っちゃって」

「いいよいよ。途中から試験は無くなっちゃったし」

私は昨日あったことをそのまま彼に伝えた。

「はは、それは災難だったね」

「本当だよーっ」

おかげで警備のためにいろいろ計画を練っておこうと思ったのに何も考えられなかった。

文化祭にはいろんな人がやってくる。聞いた話では他校の不良生徒もよくやって来るそうだ。起きた問題を確実に解決できるよう、いろいろ万全を尽くしておかないといけないのに！

「こつなつたら野田村くん、あなただけが頼りだよ」

私は立ち上がったって彼の手と手を取りつつ、懇願の念を込めた視線でじーっと見つめる。

「一緒に警備の準備をしよう！」

とその時、

「野田村春平だけ……つまり、私は頼りにならないと……」

背後から椿ちゃんの泣きそうな声が聞こえてきた。

「私、花実のためなら何だってしますから……切り捨てないで……ぐすっ」

「あわわ違っただよ椿ちゃん、そういう意味じゃなくってあのその、まだ椿ちゃんが登校してなかったから失念していただけであつてっ！」

とうとう泣き始めてしまった繊細な彼女を落ち着かせるために死力を尽くして言い訳した結果、ホームルームの時間に間に合わずクラスメイトの白い目を集めてしまった。

椿ちゃん、最近はずっかり傷つきやすくなっちゃったなあ。

お昼休み、ボランティア部の部室に海原くんと西木と後藤を除く部員を招集した私は、緊急の議題として警備を確実なものとするにはどうすればいいかを掲げた。

「私は花実ちゃんのためなら何だってできるわ」

「私だって花実のためなら何だってします。友香なんかと違ってこちらには財力があるので、文字通り何だってできるのです」

「あー言うわね。まあ実力が財力に負けているのならお金使っしかないのだからけど」

「友香のくせに生意気な！」

「椿のくせに生意気ね！」

二人は例によって口げんかを始めたところで、私は野田村くんにどうすればいいのか訊いてみる。

「野田村くん、何か必要なものとか心得とかあるのかな？」

「とりあえず、いつでも連絡し合えるように携帯電話とか必要かな」
「確かにもし何かあった時すぐに集まるためには必要かもしれない」
「でも私、携帯電話持ってないよー」

「今から買うにしてもお金がないし、どうしよう。」

「花実、私が人数分のトランシーバーを用意しておきます。操作性の問題から携帯電話より便利かと」

「本当っ？ 椿ちゃんありがとーっ」

「私はお手柄な椿ちゃんの頭をなでなでしてあげる。すると彼女はにやりと笑い、友香ちゃんに視線を向けた。」

「なっお金がなきゃ何もできないくせして偉そうに！」

「私は何も言ってますが、何か？」

「むかつくむかつくむかつく……」

「ふふふ」

例によつてまた二人が口げんかを始めたところで、私は再度野田村くんに他に何か必要か訊いてみる。

「あとは何か必要かなー」

「連絡さえ取れればどうにでもなると思うよ」

「そっか。じゃあ今日は解散だね」

「よーし、これで警備の準備は万端だ。」

あとは当日までに文化祭の準備に励むのみ。頑張るよ！

「大体あんたは後出しじゃんけんのくせに花実ちゃんにくつつき過ぎなのよー！」

「付き合いの長さは関係ありません。私は花実の親友だから花実にくつつくだけです！」

例の二人はまだけんかしていた。

こんな危ないチームワークで本当に大丈夫かなあ。

三十六、ぐだぐだ警備委員（後書き）

復活！

しかし、スランプ克服ならず！

だが私は行く！ 我が道を！

三十七、文化祭前日のこと（前書き）

「ボランティア部活動日誌」

例の女の子が私の腰に抱きついてきました。よく見るとつぶらな瞳に涙が滲んでいます。

私に密着する女の子を相手に、隣を歩いていた友香ちゃんが恨めしそうな視線を送っていました。

三十七、文化祭前日のこと

そんなこんなでとうとう文化祭まで残り一日となってしまうた今現在、調理室でお好み焼き作りの練習をしているクラスメイトたちをよそに、私は「警備委員」の文字が記された腕章を友香ちゃんから受け取っていた。

「これなあに？」

「警備委員の証になるものよ。当日はちゃんと身につけておいてね」「はい」

この腕章を付けるだけで警備委員の証明になるのかあ……何だかカッコいいかも。

「花実ちゃん、悪いんだけど一つお願い聞いてくれる？」

私が腕章を眺めていると、友香ちゃんは私の持っているものと全く同じ腕章五つを手渡してきた。

予備には多い。

「椿、裕樹、野田村くん、西木さん、後藤さんに渡しておいて。私は文化祭の実行委員やらされてて時間がないの」

体育祭に続いて文化祭の実行委員も頼まれるなんて、友香ちゃんって実はいろんな人から頼りにされているんだね。

「じゃあまたね、花実ちゃん。文化祭は一緒に回りますよ」

「うんっ」

忙しそうに小走りで調理室から駆けていく友香ちゃん。

私も頑張らないと！

まずは本でお好み焼きの作り方の研究をしているエプロン姿の野田村くんに腕章を渡すことにした。

「野田村くん、はいっ」

しかし腕章を差し出しても彼は「うん」と頷くだけでほとんど無反応。お料理の世界に没頭しているみたい。

「のーだむーらくーん」

「……うん」

夢中のところを邪魔するのも悪いし、腕章は彼のそばに置いていこうかな。

「野田村くん、ここ置いとくよ?」

「……うん」

だけど腕章の存在に気づかずそのまま放置される可能性もあるから、やっぱり直接渡さないといけないね。

「野田村くん、野田村くんっ」

「……うん」

「あのね、この腕章をね、文化祭の日に付けなきゃいけないんだよ!」

「……うん」

「だからこれ、受け取ってっ」

「なるほど、水分量の調整が狂ったのは具に含まれている水分のことを失念していたせいか……」

「のーだむーらくんっ」

「よし分かったぞ、これでもう形が崩れたりしないはず!」

「ひゃわっ」

いきなり立ち上がって大声を出し意気込む野田村くに驚いて思わず尻もちをついてしまう私。

「あいたたた……」

「あれ、どうしたの桜田さん。大丈夫かい?」

ようやく私の存在に気づいてくれた野田村くん。ここまで長かった。

「あのね野田村くん、これをね」

私は彼の手を借りて立ち上がりつつようやく腕章を渡すことに成功する。

野田村くにだってこんなにも手こずったんだ。海原くんを相手にする時は一体どうすればいいのやら、幸先悪くて溜め息が出てし

まう。

「あうー」

そして椿ちゃんも材料の買い出しに出てるから、次は海原くんを説得しなきゃいけないのか……どうしよう。

「その腕章付けてりや何やっても警備で言い訳できるってこったな。ラッキー」

海原くんは案外簡単に腕章を受け取ってくれた。どうやら文化祭で何かするつもりらしい。

悪いことしなきゃいいんだけど。

あとは椿ちゃんに西木と後藤だけだね。西木と後藤は文化祭当日に渡すとすれば、今日は椿ちゃんに腕章を渡せば任務遂行になる。

早く帰ってこないかな。私は調理室にて野田村くんの作ってくれた試作品お好み焼きに舌鼓を打ちつつ彼女のことを待ち続ける。

それにしても遅いなあ。椿ちゃんとクラスメイトの女の子が学校を出てから既に一時間も経ったというのに帰って来る気配も感じない。

まさか誘拐されちゃったなんてことは……あつはは、まさか親友が誘拐されるなんてことが身近に起こるわけないよねー。

「みんな聞いて、大変よ！ 山城さんが怪しく敵つい黒服な男の人たちに連れ去られたわっ」

突然がらりと扉を開いて調理室に飛び込んできたクラスメイトの女の子が切迫感たっぷりな面持ちで室内に向け大声を響かせる。

思えばここ最近、私の周りではいろいろと非現実的な出来事が起こり続けていたことをすっかり忘れていた。そもそも椿ちゃんはお金持ちのお嬢様なのだから悪い人に狙われていたっておかしくない！

私は急いで椿ちゃんの後を追おうと立ち上がる。だけど彼女がどこに連れて行かれたのか分からないことに気づいて足が止まった。

どうしようと頭を抱えたその時、野田村くんが廊下の向こうに駆

けていく姿を見つける。

「野田村くん、どこ行くのー？」

「頭痛と腹痛で早退！」

そんな人が走れるわけない。

「待って、私も行くーっ！」

彼の後を追い、私も調理室を飛び出した。

野田村くんきつと侍マン様に変身して椿ちゃんを助けに行く気なんだ。私も連れて行ってもらわないと！

「どうして君はついてくるんだ！」

追いかけてきた私を見てさらに全力で走り出す野田村くん。そんなに逃げなくなっていていいじゃない……ああそういえば野田村くんは自分が侍マン様の正体であることを隠したがってるんだっけ。

椿ちゃんがかどわかされた緊急事態の今、追いかけて続ければ諦めて何もかも白状してくれるはずだ。

「待ってーっ！」

そして二分後、体力尽きた私は廊下の上で四つん這いになって息を切らしていた。

「ぜえはあぜえはあ」

せめて人並みに体力があれば野田村くんを追いかけて続けられただろうけど、鬼ごっこは私には向いていない。

仕方ない、調理室に戻ろう。新三郎様と合体すれば野田村くんは無敵だし、誘拐された椿ちゃんの一人や二人簡単に助けられるだろう。

調理室に戻った時、どういうわけか我らがクラスメイトの間には笑顔で満ちあふれていた。

「んだよー、本当に誘拐事件なのかと思っただろー」

「あははーごめんねっ。でも黒服の人に連れて行かれたのは本当だよ？ 山城さんの執事さんで、今日はもう帰らなきゃいけないんだっけ」

「執事!? 山城つてもしかしてすげー金持ちかつ」
ああ、どうやら誘拐犯の正体は嵯峨さんだったみたいだ。
……野田村くんが嵯峨さんに攻撃したりしませんように。

「情報に踊らされたよ……」

数分後に野田村くんが帰ってきた。さすが仕事が速い。

「早退するんじゃないの？」

少しいじわるなことを訊いてみた。ひよつとしたら侍マン様について口を滑らせるかもしれない。

「ああっえーとその、治ったんだよ頭痛も腹痛も腰痛も」

「腰痛なんかあったっけ……」

まあこの程度のことですっかり喋っちゃうくらいならとつくには
れるのだろうけど。

私はふうと小さく溜め息を吐きながらふと壁に掛けられた時計へと目を向ける。

既に午後六時が過ぎていた。今日は文化祭の準備で遅くなるかもしれないと家族に伝えてあるから大丈夫だけど、普段ならとつくと
門限の時間。

椿ちゃんち、門限にうるさいのかな。

「あっそうだ、私桜田さんをお願いごとがあつたんだっ」

少し離れたところから聞こえてくるその言葉。私は思わず振り向いて声の主に視線を合わせた。

「桜っちー、ちょっと頼まれてくれないかな!」

近づいてきた彼女はクラスメイトの真柴ましばちゃん。ちよくちよくお話ししたりしている子だ。

「頼みごと?」

「うんうん。あなたを警備委員と見込んでお願いがあるのっ」

警備委員と見込んで……。

「他のところがどんな出し物用意してるか見てきてくれない？」

そういえばライバル店が文化祭で何をしようとしているのか全く知らないや。もし警備委員と見込まれて道を尋ねられた時、ちゃんと答えられなきゃ我らがボランティア部そしてサムライ自警団の恥だよ……。

これを機会に、どこが何をするのかちゃんと把握しておかなきゃ！

「任せて！ 野田村くん、行くよっ」

「お好み焼きで改良したいところがあるんだけど……」

「そんなの後々っ。警備委員が頼まれてるんだよ、行かなきゃだめだよー！」

「うーんどうしようってうわあ腕引っ張ったら危ないって桜田さん！」

よし、とりあえず冒険の旅に出発だー！

まずは一番のライバルクラス、海原くん学級の捜査を始めよう。

かの一年五組は占いの館を開くらしい。今は少人数の生徒が飾りつけを頑張っているだけで、ほとんどの人は帰っちゃったみたい。

あの海原くんが占いの館作りに参加してるわけないよね。

「あのー……」

私と野田村くんが五組の中を凝視していると、視線に気づいたおとなしそうな女の子一名がこちらまで歩み寄ってきた。逃げも隠れもしないサムライ自警団は堂々と応対する。

「なあに？」

「お二人とも、試しに占っていきませんか？」

占ってもらうことになった。

私たちが連れて行かれたのは黒いカーテンに覆われた館の一室。

その中には椅子と机があり、机上には綺麗な水晶玉が鎮座していた。

「練習に付き合っていたいただきまことに感謝です。では早速占います」

私と野田村くんは用意されている椅子に並んで座る。

「何を占ってくれるんですか？」

野田村くんが尋ねた。

「カップル占いですっ」

「……おおー。」

「では先に水晶をご覧ください」

照れつつ言われるがままに水晶を見つめる私と野田村くん。水晶の向こう側が曲がって見えてとても面白い。

しばらく夢中になって見つめてみると、女の子は「もう結構です、結果が出ました」とくすくす笑みを含みつつ言った。

どんな結果になったんだろ……うふふ、ラブラブって出たらどうしよっかなーっ。

「お二人の相性は最悪です」

最悪だった。

「お互いがお互いを恋愛対象として見ていません。友人としてならともかく、カップルとしてそれは最も最悪で悪い状態です」

重複させてまで言われるほどよくないらしい。

「……もしかして、お二人はカップルではないと？」

「正解です……」

最初から分かったたのではないだろうか。

それから女の子にぺこぺこ頭を下げられ、何とかなだめつつ我らがお好み焼き店の宣伝をした私たちは足早に一年五組の教室を出ていく。

「野田村くん、相性最悪だっ」

「カップルとしては、ただどね」

「友達としては最高ののかなあ」

「それは占ってくれなかったね」

少しだけ気まずい。

「……あ」

私は先ほどの占いで大きく外れてしまっている点があることに気がついた。

「野田村くん」

「うん、何だい？」

彼の笑みが輝いて見える。

「早く次見に行こっ」

「うん、そうだね」

恋心なら少しだけ芽生えている。占いでは見破ることのできない心の奥底で、ひっそりと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3563k/>

侍の心得！

2010年12月12日00時11分発行